

水上(2)遺跡Ⅲ

－ 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

【第1分冊 竪穴住居跡編】

二〇一七・三

青森県教育委員会

2017年3月

青森県教育委員会

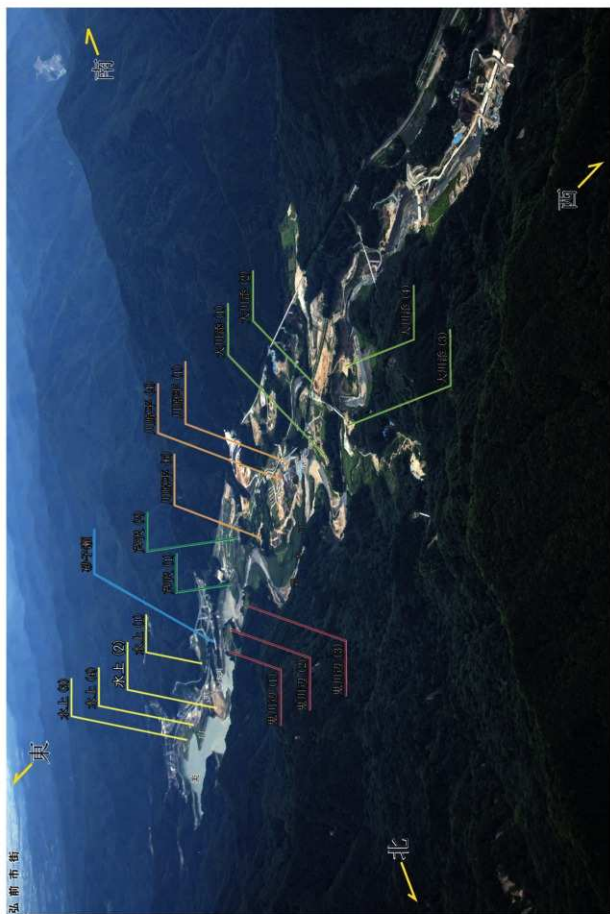
水上(2)遺跡Ⅲ

－ 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

【第1分冊 竪穴住居跡編】

2017年3月

青森県教育委員会



水上(2)遺跡と周辺の遺跡



縄文時代前期末葉の竪穴住居跡 (SI110)



縄文時代中期後葉の大型竪穴住居跡 (SI4040)



円形柱穴列 (SI 5073b)



掘立柱建物 (SB 5001)



土器埋設遺構 (SR 4056)



小型土器に納められたヒスイ大珠 (SR 109)



盛土遺構



沢2作業状況 (SW→)



整然と並ぶ石棺墓群 (E→)



石棺墓A群全景 (SW→)



石棺墓A群の配列状況 (SW→)



多数の配石遺構を伴う石棺墓 (NW→)



北側斜面の捨て場



土層堆積状況



遺物出土状況



遺物出土状況



捨て場出土土器



捨て場出土の円筒下層式土器



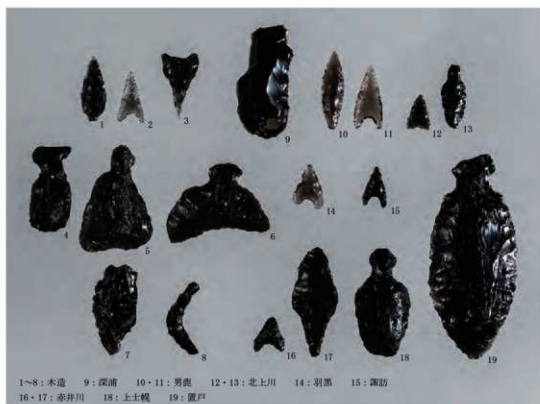
捨て場出土の円筒上層式土器



捨て場出土の中期後葉土器



縄文時代前・中期の異系統土器



黒曜石を素材とする石器



扁平礫を素材とする石器群



磨製石斧



台石・石皿・砥石



土偶と岩偶



四脚を持つ特異な土偶



土器片加工土製品類



土製品類・石製品類



石冠とその類品



石棒・石刀類

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から27年度まで津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。本報告書は、その内の水上(2)遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

調査の結果、縄文時代前期末葉から後期前葉に至るまでの遺構、遺物が大量に検出され、水上(2)遺跡は長期にわたる大規模な集落跡であったことがわかりました。特に、集落前半期に斜面に形成された捨て場や、後半期に構築された石棺墓群が注目されます。

これらの成果が今後、埋蔵文化財の保護等に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成29年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 田村博美

例 言

- 1 本書は、国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した西目屋村水上(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 水上(2)遺跡の所在地は青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上で、遺跡番号は343025である。
- 3 水上(2)遺跡の発掘調査は平成18～26年度(第1～8次調査)まで実施しており、すでに以下の2冊の報告書を刊行している。

『水上(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第514集(2012年3月刊行、以下「第514集」)

『水上(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第528集(2013年3月刊行、以下「第528集」)

それぞれの報告範囲は、第514集が発掘範囲の南東部、第528集はその北側に隣接した遺跡南半部である。また出土遺物の一部については、下記の報告書にも掲載している。

『砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第466集(2009年3月刊行)

- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所が負担した。
- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。既刊の報告書や現地見学会、発掘調査報告会等において公表された内容と異なる場合、本書がこれらに優先する。
- 6 報告書の編集業務は、第1・4分冊を加藤隆則文化財保護主事、第2分冊を秦光次郎文化財保護主幹、第3・6・8分冊を荒谷伸郎文化財保護主事、第5・7分冊を茅野嘉雄文化財保護主幹が担当した。
- 7 出土品の整理および原稿執筆の担当は以下のとおりである。

土器(秦光次郎、永瀬史人文化財保護主事(現さいたま市教育委員会)、剥片石器(荒谷伸郎)、礫石器(加藤隆則)、土製品(茅野嘉雄、佐藤智生文化財保護主査、成田滋彦文化財保護主幹)、石製品(茅野嘉雄、齋藤正文文化財保護主幹、藤田祐文化財保護主事)	
--	--
- 8 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

遺構測量の一部	株式会社 ラング
遺構の写真撮影の一部	シルバーフォト
空中写真撮影	株式会社 シン技術コンサル
石棺墓堆積土内の微細遺物検出	第一合成株式会社
出土遺物の実測・トレースの一部	株式会社アルカ、株式会社シン技術コンサル、株式会社ラング
出土遺物のトレースの一部	株式会社 バスコ
出土遺物の写真撮影	シルバーフォト、フォトショップいなみ、(株)無限
竪穴住居跡堆積土および石棺墓堆積土の土壌分析	バリノ・サーヴェイ株式会社
放射性炭素年代測定	株式会社 パレオ・ラボ、株式会社 加速器分析研究所
遺構出土種実の同定分析、骨同定分析、黒曜石産地推定、土器の胎土分析、土器付着圧痕分析、土器付着黒色物質の成分分析	株式会社 パレオ・ラボ

- 9 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の分析・鑑定は調査員等に依頼した。

石器の残存デンプン粒分析	国立大学法人 弘前大学大学院人文学部社会科学科准教授 上條信彦
巨石の自然科学分析	国立大学法人 弘前大学大学院理工学部理工学科教授 柴 正敏
石質鑑定	国立大学法人 弘前大学大学院理工学部理工学科教授 柴 正敏 青森県立郷土館学芸主幹 島口 天 日本地質学会会員 松山 力

- 10 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

- 11 計測原点の座標値は、世界測地系に基づく、平面直角座標第X系による。

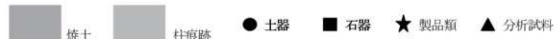
- 12 遺構については、その種類を示すアルファベットの略号と算用数字を組み合わせた番号を付した。遺構に使用した略号は、以下の通りである。

SI=竪穴住居跡 SB=掘立柱建物跡 SN=焼土遺構 SR=土器埋設遺構 SK・SP=土坑・ピット

- 13 遺構実測図の縮尺については60分の1、拡大図については30分の1を基本とし、版面に応じて適宜変更した。挿図にはすべてスケールを示した。

- 14 遺構平面図の方位は原則として上方を北とし、これ以外については挿図中にマークで方位を示した。

- 15 遺構平面図に使用した網掛の指示は、以下の通りである。

 焼土 柱痕跡 ● 土器 ■ 石器 ★ 製品類 ▲ 分析試料

- 16 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記には、『新版標準土色帖 2006 年度版』（小山正忠、竹原秀雄）を用い、基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。

- 17 遺物実測図の縮尺は、縄文土器・礫石器は3分の1、剥片石器は2分の1を基本としたが、遺物の大きさによって適宜変更し、挿図毎にスケール等を示した。

- 18 縄文原体の基本的な分類は『日本先史土器の縄紋』（山内清男 1979）に準拠した。

- 19 引用・参考文献は巻末に一括したが、依頼原稿等についてはそれぞれの文末に付した。

- 20 図版番号は分冊毎に図1から振っている。このため他の分冊の図を示す際は「2-図○（第2分冊の図○）」、「4-図□-△（第4分冊の図□-△の遺物）」のようにし、分冊番号を示さない場合は同分冊中の図番号を指すこととする。

- 21 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。縮尺は統一していない。

- 22 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関から協力・ご指導を得た（敬称略・順不同）。

相沢淳一、阿部昭典、安富正人、井部一徳、今福利恵、市川健夫、稲野裕介、宇部則保、江戸邦之、大島直行、岡村道雄、長田友也、加藤渉、上條信彦、小杉康、児玉大成、小林謙一、小林達雄、小林克、小山修三、さかゝひろこ、穴戸信悟、設楽博己、鈴木克彦、鈴木保彦、関根達人、大工原豊、富樫秀之、戸田哲也、富田真衛、中田書矢、中村大、中村耕作、中島将太、名久井文明、根岸洋、野坂知広、羽生淳子、濱田宏、原充広、播磨芳紀、平山尚言、福田友之、船場昌子、宮内信雄、宮尾享、村木淳、安井健一、山田康弘、山本暁久、横山寛剛、西日屋村教育委員会
弘前市教育委員会

目 次

(第1分冊 竪穴住居跡編)

序

例言

目次

挿図目次

写真目次

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第1項 発掘調査の方法と経過	1
第2項 整理・報告書作成作業の方法と経過	5
第3項 発掘調査と整理・報告書作成の体制	6

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	8
第1項 遺跡の位置	8
第2項 周辺の遺跡	8
第2節 水上(2)遺跡の概要	14
第3節 周辺の地形・地質	25
第1項 段丘面及び構成層	25
第2項 石材の石質	25
第4節 基本層序	27
第5節 出土遺物の分類	32
第1項 縄文土器	32
第2項 剥片石器	35
第3項 礫石器	38
第4項 土製品	44
第5項 石製品	48

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡	53
報告書抄録	

(第2分冊 竪穴住居跡出土遺物編)

第2節 竪穴住居跡出土遺物

(第3分冊 掘立柱建物跡・焼土遺構・土器埋設遺構・土坑・ピット・盛土遺構・遺構外出土遺物編)

第3節 掘立柱建物跡

第4節 焼土遺構

第5節 土器埋設遺構

第6節 土坑

- 第7節 ビット
- 第8節 盛土遺構
- 第9節 沢1・沢2・沢3・北斜面・西斜面・遺構外出土遺物

(第4分冊 石棺墓・配石遺構編)

- 第10節 石棺墓
- 第11節 配石遺構

(第5分冊 捨て場編)

- 第12節 捨て場

(第6分冊 自然科学分析・総括編)

第4章 自然科学分析

- 第1節 遺構出土及び土器附着炭化物の放射性炭素年代測定
- 第2節 土器種実・昆虫圧痕と敷物圧痕、織物圧痕付炭化物の観察および植物種の同定
- 第3節 56号配石出土炭化種実の同定分析
- 第4節 骨同定分析
- 第5節 竪穴住居跡堆積土の自然科学分析
- 第6節 石棺墓堆積土の土壌分析
- 第7節 土器の胎土材料
- 第8節 黒曜石の産地推定分析
- 第9節 土器附着物質の成分分析
- 第10節 水上(2)遺跡検出礫石器の残存デンプン粒分析
- 第11節 遺跡周辺に分布する巨石と基盤岩の関係について

第5章 総括

- 第1節 遺構
- 第2節 遺物
- 第3節 集落
- 第4節 まとめ
- 引用・参考文献
- 報告書抄録

(第7分冊 遺構写真図版編)

(第8分冊 遺物写真図版編)

- 付図1 遺構配置図(1/300)
- 付図2 石棺墓A群蓋石検出状況(1/50)
- 付図3 石棺墓A群埋葬主体部完掘状況(1/50)

挿図目次

図 1	発掘調査の経過と調査区名称	2	図 51	竪穴住居跡30 (SI1066・1097)	206
図 2	遺跡の位置	10	図 52	竪穴住居跡31 (SI1067・1069)	207
図 3	調査区域図と周辺の地形	11	図 53	竪穴住居跡32 (SI1068)	208
図 4	周辺の遺跡	12	図 54	竪穴住居跡33 (SI1075+SN1013)	209
図 5	遺跡の地形	15	図 55	竪穴住居跡34 (SI1076・1077・1091)	210
図 6	遺構分布と時期・数量	17	図 56	竪穴住居跡35 (SI1076・1077・1091)	211
図 7	基本層序図	29	図 57	竪穴住居跡36 (SI1078・1082)	212
図 8	基本層序図位置図	31	図 58	竪穴住居跡37 (SI1080・1095)	213
図 9	土器の凡例(1)	33	図 59	竪穴住居跡38 (SI1083・1086・1088)	214
図 10	土器の凡例(2)	34	図 60	竪穴住居跡39 (SI1085)	215
図 11	剥片石器分類図と実測図の凡例	37	図 61	竪穴住居跡40 (SI1087・1096)	216
図 12	礫石器の凡例(1)	39	図 62	竪穴住居跡41 (SI1089・1090)	217
図 13	礫石器の凡例(2)	41	図 63	竪穴住居跡42 (SI1092・1201)	218
図 14	礫石器の分類(1)	42	図 64	竪穴住居跡43 (SI1093・1094)	219
図 15	礫石器の分類(2)	43	図 65	竪穴住居跡44 (SI1099)	220
図 16	土製品の種類(1)	46	図 66	竪穴住居跡45 (SI1100)	221
図 17	土製品の分類(2)	47	図 67	竪穴住居跡46 (SI1104+SI5066)	222
図 18	石製品の分類(1)	50	図 68	竪穴住居跡47 (SI1105～1107)	223
図 19	石製品の分類(2)	51	図 69	竪穴住居跡48 (SI1105～1108)	224
図 20	竪穴住居跡重複概念図(1)	55	図 70	竪穴住居跡49 (SI1109)	225
図 21	竪穴住居跡重複概念図(2)	56	図 71	竪穴住居跡50 (SI1110・1111)	226
図 22	竪穴住居跡1 (⑥SI1・SI6)	177	図 72	竪穴住居跡51 (SI1112・1119)	227
図 23	竪穴住居跡2 (SI3・⑥SI5)	178	図 73	竪穴住居跡52 (SI1113・1114・1122)	228
図 24	竪穴住居跡3 (⑥SI7+SI8)	179	図 74	竪穴住居跡53 (SI1115・1127・1137)	229
図 25	竪穴住居跡4 (SI12・⑥SI17・SI18)	180	図 75	竪穴住居跡54 (SI1116・1121・1126)	230
図 26	竪穴住居跡5 (SI38～40)	181	図 76	竪穴住居跡55 (SI1118・1123)	231
図 27	竪穴住居跡6 (SI38)	182	図 77	竪穴住居跡56 (SI1120)	232
図 28	竪穴住居跡7 (SI49・52)	183	図 78	竪穴住居跡57 (SI1124・1125・1130・1133)	233
図 29	竪穴住居跡8 (SI50・51・53)	184	図 79	竪穴住居跡58 (SI1124・1125・1130・1133・1501)	234
図 30	竪穴住居跡9 (SI55・57)	185	図 80	竪穴住居跡59 (SI1129・1134)	235
図 31	竪穴住居跡10 (SI56・59・66)	186	図 81	竪穴住居跡60 (SI1136)	236
図 32	竪穴住居跡11 (SI62)	187	図 82	竪穴住居跡61 (SI3001～3003)	237
図 33	竪穴住居跡12 (SI63・64)	188	図 83	竪穴住居跡62 (SI3004・3005・3007・3015)	238
図 34	竪穴住居跡13 (SI65・67・71・77)	189	図 84	竪穴住居跡63 (SI3006・3008・3012)	239
図 35	竪穴住居跡14 (SI65・69・71・74・76・77)	190	図 85	竪穴住居跡64 (SI3009～3011・3016)	240
図 36	竪穴住居跡15 (SI38)	191	図 86	竪穴住居跡65 (SI3013・3014)	241
図 37	竪穴住居跡16 (SI101・102)	192	図 87	竪穴住居跡66 (SI4002・4003・4007・4021)	242
図 38	竪穴住居跡17 (SI82・101・102)	193	図 88	竪穴住居跡67 (SI4004～4006)	243
図 39	竪穴住居跡18 (SI103)	194	図 89	竪穴住居跡68 (SI4009)	244
図 40	竪穴住居跡19 (SI109・111・116)	195	図 90	竪穴住居跡69 (SI4009・4010・4020)	245
図 41	竪穴住居跡20 (SI110)	196	図 91	竪穴住居跡70 (SI4010・4020)	246
図 42	竪穴住居跡21 (SI115・120)	197	図 92	竪穴住居跡71 (SI4011～4013)	247
図 43	竪穴住居跡22 (SI1061・1062)	198	図 93	竪穴住居跡72 (SI4014～4016)	248
図 44	竪穴住居跡23 (SI1063・1064)	199	図 94	竪穴住居跡73 (SI4017・4019・4022・4026・4028・4045)	249
図 45	竪穴住居跡24 (SI1065・1070・1071・1073)	200	図 95	竪穴住居跡74 (SI4018)	250
図 46	竪穴住居跡25 (SI1072・1074・1081)	201	図 96	竪穴住居跡75 (SI4040)	251
図 47	竪穴住居跡26 (SI1065・1070～1074・1079・1081・1084)	202	図 97	竪穴住居跡76 (SI4040)	252
図 48	竪穴住居跡27 (SI1065・1070～1074・1079・1081・1084)	203	図 98	竪穴住居跡77 (SI4040)	253
図 49	竪穴住居跡28 (SI1065・1070～1074・1079・1081・1084)	204	図 99	竪穴住居跡78 (SI4043・4044)	254
図 50	竪穴住居跡29 (SI1066・1097)	205	図 100	竪穴住居跡79 (SI4047)	255

図 101	竪穴住居跡80 (S14049・4055・4057・4058)	256	図 123	竪穴住居跡102 (S11103・5043・5048)	278
図 102	竪穴住居跡81 (S15001・5005・5006)	257	図 124	竪穴住居跡103 (S15043・5045・5064)	279
図 103	竪穴住居跡82 (S15002・5003)	258	図 125	竪穴住居跡104 (S15047)	280
図 104	竪穴住居跡83 (S15003・5004)	259	図 126	竪穴住居跡105 (S15047)	281
図 105	竪穴住居跡84 (S15007・5008)	260	図 127	竪穴住居跡106 (S15047)	282
図 106	竪穴住居跡85 (S15009・5010・5012・5026)	261	図 128	竪穴住居跡107 (S15047・5046)	283
図 107	竪穴住居跡86 (S15011・5016)	262	図 129	竪穴住居跡108 (S15050・5053)	284
図 108	竪穴住居跡87 (S15016関連ピット)	263	図 130	竪穴住居跡109 (S15056・5072)	285
図 109	竪穴住居跡88 (S15016)	264	図 131	竪穴住居跡110 (S15056・5072)	286
図 110	竪穴住居跡89 (S15014・5015・5036・5058)	265	図 132	竪穴住居跡111 (S15056・5072)	287
図 111	竪穴住居跡90 (S15017・5018・5049)	266	図 133	竪穴住居跡112 (S15057・5059)	288
図 112	竪穴住居跡91 (S15017・5018・5049)	267	図 134	竪穴住居跡113 (S15063・5065・5071)	289
図 113	竪穴住居跡92 (S15019・5020・5037・5040)	268	図 135	竪穴住居跡114 (S15501・5502)	290
図 114	竪穴住居跡93 (S15021・5028・5029・5051・5052)	269	図 136	竪穴住居跡115 (S15501・5502)	291
図 115	竪穴住居跡94 (S15024・5054・5055・5062・5067・5069)	270	図 137	竪穴住居跡116 (S15503～5506)	292
図 116	竪穴住居跡95 (S15030・5031・5041)	271	図 138	竪穴住居跡117 (S15507・5508)	293
図 117	竪穴住居跡96 (S15034・5035)	272	図 139	竪穴住居跡118 (S110001～10003・10006・10008)	294
図 118	竪穴住居跡97 (S15038・5068・5073)	273	図 140	竪穴住居跡119 (S110001～10003・10006・10008)	295
図 119	竪穴住居跡98 (S15038・5068・5073各施設の構成図)	274	図 141	竪穴住居跡120 (S110004・10016)	296
図 120	竪穴住居跡99 (S15038・5068・5073・5039・5044)	275	図 142	竪穴住居跡121 (S110009～10011・10017)	297
図 121	竪穴住居跡100 (S15039・5042・5044)	276	図 143	竪穴住居跡122 (S110007・10009～10011・10017)	298
図 122	竪穴住居跡101 (S11103・5043・5048)	277	図 144	竪穴住居跡123 (S110013・10018)	299

表目次

表 1	遺構別使用番号一覧	3	表 3	周辺の遺跡一覧表	13
表 2	調査・整理体制	7	表 4	竪穴住居跡諸施設の時期別数量	54

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成14年に、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所（以下「津軽ダム工事事務所」）から青森県教育庁文化財保護課（以下「県文化財保護課」）に、津軽ダム建設予定地内に所存する埋蔵文化財の取扱いに関する協議の依頼があり、関係機関の協議の結果、平成15年度から発掘調査を行うこととなった。

以後、関係機関による協議が断続的にもたれ、県文化財保護課の調整のもと、青森県埋蔵文化財調査センター（以下「県埋蔵文化財調査センター」）では、平成15年度から27年度までの間に津軽ダム建設予定地内の17遺跡の発掘調査を実施した。

県埋蔵文化財調査センターでは、複数遺跡の調査を並行して進め、水上(2)遺跡については、平成18年度に着手し、平成20年度から26年度までは継続的に発掘調査を実施した。調査の進展とともに、遺構、遺物が膨大な量となることが見込まれたため、随時関係機関と協議、調整を行い、年ごとに調査体制を増強して発掘調査にあたった。遺構、遺物の重複が激しい区域については複数年をかけて対応することとし、平成26年度までに全ての発掘調査を終了した。

なお、発掘調査報告書については、遺構、遺物の重複が比較的小さい区域の整理を先行させ、平成23・24年度にそれぞれ1冊刊行している（青森県埋蔵文化財調査報告書第514集・528集）。

第2節 調査の経過

第1項 発掘調査の方法と経過

平成23年度までの発掘調査の経過については報告済み（第514集・528集）であるため、ここでは発掘調査の方法と平成24年度以降の経過について記す。

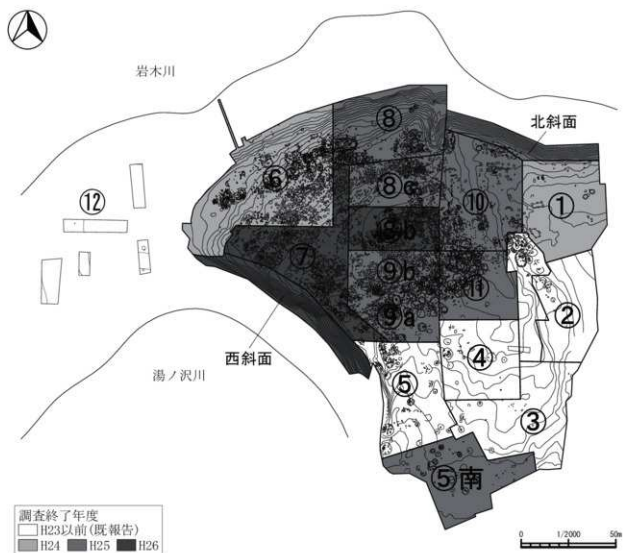
(1) 発掘調査の方法

[測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定]

平成24年度以降の測量基準点は、前年度までの基準杭を踏襲し、調査区内に4m×4mのグリッドを設置している。各グリッドは南から北に、ローマ数字とアルファベット（A～Y）を組み合わせた記号を、西から東に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。測量原点には、測量業者のGPS測量機による3級基準点No1-1（世界測地系で $X=59,447.727 \cdot Y=-49,822.025 \cdot Z=182.168$ ）、4級基準点No1-2（ $X=59,328.712 \cdot Y=-49,782.409 \cdot Z=190.539$ ）、これを基準に設置したメッシュ杭M2（ $X=59,520.000 \cdot Y=-49,840.000 \cdot Z=180.928$ ）、M3（ $X=59,520.000 \cdot Y=-49,820.000 \cdot Z=180.424$ ）、M4（ $X=59,520.000 \cdot Y=-49,780.000 \cdot Z=181.054$ ）を使用した。レベル原点も3級基準No1-1、メッシュM2、M3、M4を基準とし、その他のグリッド杭は必要に応じ実測基準点から原点移動して設置した。

[基本土層]

遺跡の基本土層については、表土から順にローマ数字を付けて呼称した。また、大別層で細別が可能な場合は枝番を採用した。



エリア	位置	主な遺構				H24						H25						H26							
		SI	SP	石垣	SR	5	6	7	8	9	10	11	5	6	7	8	9	10	11	7	8	9	10	11	
②・③	南東部	○	○																						
④・⑤	南側	●	●																						
⑥	北西部	●	●		●																				
①	北東部	○	○																						
④	中央部	●	●																						
⑤南	南端部	●	●																						
③	北側斜面部	○	○		●																				
⑫	西側の池・緑丘				●																				
⑩a・⑩b	中央部	●	●																						
⑤b	中央部	●	●		●																				
⑧	北東部	●	●		●																				
⑤c	北側	●	●		●																				
北斜面	北東斜面																								
⑦	西部	●	●																						
西斜面	西側斜面部																								

主な遺構○□検出している ●多く検出している

図1 発掘調査の経過と調査区名称

[調査区の設定]

調査面積が広いので、図1のように遺跡を便宜的に①～⑬エリアの調査区に分け、調査を進めた。エリア別の調査経過は同図下表の通りである。調査はトレンチを先行させて状況を把握しながら進め、遺構・遺物の広がりや確認された範囲は面的な調査を行ったが、水位低下時のみ露出する標高170.5 m以下の範囲については、一部で遺構が確認されたものの遺存状態は悪く、全体として開田時に大きく削平されていることを確認したことからトレンチ調査に留めた。

[表土等の調査]

これまでの調査により表土中は遺物が希薄な状況が確認されていることから、状況に応じて重機を併用して掘削を実施した。出土した遺物は適宜グリッドと層位を基準に取り上げた。

[遺構の調査]

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。遺構別の使用番号は表1の通りである。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて基本土層とは区別した。

遺構の平面図は、主に「遺構実測支援システム」(株式会社CUBIC)を用いてトータルステーションに

表1 遺構別使用番号一覧

エリア	型穴住居跡 (SI)	竪立住居跡 (SB)	焼土遺構 (SN)	土器埋設遺構 (SR)	土坑 (SK)	ピット (SP)	石棺墓	配石遺構
⑥エリア	1～40、 49～120		1～22、 50～71、 101～112、 120～124	1～33、 51～93、 101～125	1～9、 50～ 53、101 ～104	10～22、30～44、 50～1000、 2001～2539、 12301～12310、 12332～12335、 12339～12349、 12353～12355		
①・②・⑩ エリア	1061～ 1137、 1201	1001 1002	1001～1030	1006～ 1025	1059～ 1119、 1501～ 1528	1323～2000、 9501～9674 9686～9701、 12330、12331、 12336、12359	23・24号墓	
⑩エリア	1501						17～22・25・ 26号墓	1001～ 1008号配石
④南・⑤南 エリア	3001～ 3016				3001～ 3012	3001～3053		
⑧・⑧c エリア	4001～ 4058		4001～4026	4001～ 4063、 4501、 4502	4001～ 4031、 4501～ 4525	4001～4681、4698、 4801～4859、 4901～4923、 7500～8000、 8500～8698、 8901～8909、 12311～12326、 12337、12338、 12356～12358、12360		
⑨aエリア	5001～ 5074	5001	5001～5018	5001～ 5011	5001～ 5076	5001～5499、8001～ 8086、9001～9494		
⑧bエリア	5501～ 5508		5501～5505	5501～ 5503、 12001～ 12003	5501～ 5593、 5601	5501～5862、 5870～6000、 12001～12263	1～9号墓、 11～16号墓	3～63号配石
⑨bエリア			6001～6004	6001	6001～ 6075	6001～6148、 6165～6256、 6290～6294		
⑦エリア	10001～ 10018	10001 ～ 10003	10001～ 10008	10001～ 10004	10001～ 10052	10001～11156、 11201～11373、11666 12327～12329、 12350～12352		
⑬エリア			73		10101～ 10103			

よる測量で作成したが、石棺墓付近はレーザー測量を実施した。遺構の堆積土層断面図、遺構に伴う付属施設等の平面図、出土遺物の形状実測図などは、簡易遣り方測量等で縮尺10分の1・20分の1の実測図を作成した。

出土遺物は、遺構単位で層位を基準に取り上げることの基本とし、必要に応じてトータルステーションや簡易遣り方測量により、縮尺10分の1・20分の1のドットマップ・形状実測図等を作成した。

[写真撮影]

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及びデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、一部の写真及び空中写真は委託により撮影した。

(2)発掘調査の経過

水上(2)遺跡は降水量と目屋ダムの放流量の影響を受けることから、同ダムの水位を考慮しながら発掘調査を進めた。

平成22年度 主な調査地点：②・③エリア(第514集参照)

平成23年度 主な調査地点：②・④・⑤エリア(第528集参照)

平成24年度 主な調査地点：①・⑤南・⑥・⑩・エリア

5月8日～ 調査開始。調査器材搬入、調査事務所・器材庫整備および調査区周辺の環境整備の実施の後、この時期に水位の影響を受けない、遺跡内でもっとも標高の高い①エリアの調査に着手。

6月中旬～ ①エリアの調査終了後、⑩エリアへ移行。

7月上旬～ 目屋ダムの水位低下に合わせ作業員を増員。昨年度から継続の⑥エリア(捨て場)の調査開始。

8月中旬～ 飛び地となっていた⑤南エリアの調査に着手。

9月末～ ⑥エリアの調査終了。捨て場のおおよそ半分の調査を終える。随時捨て場の東域にあたる⑧エリアに移行。

10月中旬～ ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影実施。

10月中旬 ⑤南エリアの調査を終了し、⑧エリアに合流する。遺跡南東部(①～⑤エリア)の調査はすべて終了する。

11月上旬 度重なる降雨により調査区北側から徐々に水没し始める。

11月中旬 水位が低下しないため本年度の調査を終了する。出土遺物は段ボール箱で2480箱分。

平成25年度 主な調査地点：地点⑧・⑧b・⑧c・⑨a・⑨b・⑩・⑩・⑬エリア、北斜面、西斜面

5月9日～ 調査開始。調査器材搬入、調査事務所・器材庫整備および調査区周辺の環境整備の実施。

5月中旬 目屋ダムの水位上昇により調査が難航。

未調査部の中でもっとも標高の高い⑨aエリアに着手。

6月上旬～ 水位低下に伴い⑩エリア(昨年度からの継続)ならびに⑧bエリア(石棺墓A群)の調査開始。

6月中旬～ ⑩エリアの調査の調査終了次第、随時北側の⑩エリアへ移行。

7月上旬～ 職員、作業員を大幅に増員し、⑧エリア(捨て場)の調査開始。

7月中旬 石棺墓A群の三次元測量を委託により実施。

ラジコンヘリによる石棺墓A群検出状況の空中写真撮影を実施。

8月中旬 調査員(地質学)による石棺墓石材の石質鑑定を実施。

8月下旬～ 北斜面の調査に着手。

ラジコンヘリコプターにより石棺墓A群の完掘(蓋石除去)状況の空中写真撮影を実施。

9月 8日	現地見学会開催。参加者は200名以上。
9月中旬	石棺墓群石材の石質鑑定を実施。
9月中旬	石棺墓A群の東側(㊸エリア)で、新たな石棺墓のまとまり(石棺墓B群)を確認する。調査区域全体の空中写真撮影を実施。
9月下旬	石棺墓石材の石質鑑定。
10月上旬	石棺墓B・C群の三次元測量を委託により実施。
10月中旬	降雨による目屋ダムの水位上昇に伴い調査を中断(16～22日まで)。
10月下旬	石棺墓群石材の石質鑑定を実施。
11月15日	本年度の調査終了。捨て場地区のすべての調査を完了する。また段丘平坦部では石棺墓A群を除く、遺跡中央から北部(㊸～㊿エリア)のすべての調査を終了する。出土遺物は段ボール箱で2360箱。
平成26年度	主な調査地点：㊿・㊽bエリア、西斜面
7月 1日	調査開始。調査器材搬入、調査事務所・器材庫整備および調査区周辺の環境整備の後、昨年度から継続の㊽bエリアならびに段丘平坦部の未調査部である㊿エリアの調査に着手。
7月中旬～	西斜面の調査開始。斜面地における安全上の都合により、人力による調査は土層の堆積状況の確認・記録に留め、包含層の掘削は重機を用い、掘削土中の遺物を回収する方法を探る。
8月31日	現地見学会実施。参加者は200名以上。
9月下旬	ラジコンヘリコプターにより調査区全景の空中写真撮影を実施。 ㊿エリア、西斜面の調査終了。㊽bエリアを除くすべての調査終了。
11月上旬	㊽bエリアの調査終了。
11月14日	本年度の調査終了。出土遺物は段ボール箱で576箱。これにより水上(2)遺跡におけるすべての調査を終了した。

第2項 整理・報告書作成作業の方法と経過

整理・報告書作成作業は、平成24年度までについては報告済み(第514集・528集)であるため、ここでは平成25年度以降の4カ年分について作業工程別に記す。

(1) 整理・報告書作成作業の方法

[報告書掲載遺物の選別]

遺物全体の分類を適切に行った上で、使用・遺棄・廃棄の過程を提示できる資料、遺構の構築・廃絶時期等を提示できる資料、遺存状態が良好で同類の中で代表的な資料、所属時代(時期)・型式・器種・遺跡の普遍性や変異等を提示できる資料等を主に抽出した。

[出土遺物の整理]

洗浄・注記 平成24年度の調査では600㎡程度の調査区(捨て場)から約900箱の遺物が出土したことから、次年度以降の出土遺物は膨大な数に上ることが予想された。同等以上の出土量であった場合、当センターで洗浄・注記可能な数量を大幅に上回るため、平成25年度からは委託も併用した。洗浄・注記は遺物の種類や出土地点の優先順位をつけて着手することとし、計画上もっとも早期に調査が終了する捨て場を最優先とした。また委託は土器を優先し、石器類および製品類はセンターで洗浄を行った。

遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区、遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石

器等、直接注記できないものについては、収納したポリ袋に注記した。

仕分け・基礎分類 発掘調査が複数年にまたがり、比較的長期間、発掘調査と整理作業が並行することとなったため手戻りとならないよう、確実に調査終了したエリアや地区を先行させた。発掘調査(遺物の出土)→遺物の洗浄・注記→仕分けの工程がスムーズに行えるよう留意し、洗浄(・注記)後の遺物は、出土地点、出土層位ごとに仕分けた。

遺物出土量からすれば非掲載率が高くなることが予想されたため、土器については接合・復元前の本段階に遺存状況の良い資料と特殊な土器等を抜き出した。またその他の遺物については、代表的、定型的なものを類型化した上でバリエーションを示せるように選定し、また特殊なものを抜き出した。

接合・復元 前段階で抜き出した土器は、接合する前に平箱内に広げ相互比較してさらに絞り込み、掲載資料を主体に接合・復元を実施した。

遺物の観察・図化 対象資料を充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。土器や礫石器については一部資料を、また剥片石器についてはすべてを委託により図化した。各種遺物の図化の方法については次節「出土遺物の分類」に譲る。

遺物の写真撮影・切り抜き 掲載遺物の写真撮影については、委託によりデジタル一眼レフカメラを用いて撮影した。また成果品の切り抜きも委託により行った。

遺物の石質鑑定 石器および石製品類については掲載遺物を中心に地質学調査員による石質鑑定を実施した。石質鑑定の方法は肉眼観察より、当センター所有の石材標本を参照し同定した。

[検出遺構の整理]

図面類の整理 遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成した。整理作業ではこのデータを打ち出し、遺り方測量で作成した堆積土層断面図や炉跡の実測図等と縮尺を合わせ、図面調整を行った。また遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

遺構の検討・分類・整理 遺構単位に規模、構造的特徴、出土遺物、他遺構との新旧関係に関する情報を整理し、構築時期や遺構間の同時性、機能的性格、変遷過程等について検討を加えた。

調査結果の検討 遺構・遺物の検討結果を踏まえて、集落の構造や変遷過程について検討・整理した。

[遺構図・遺物図のトレース・版下作成]

遺構・遺物の実測図やその他の挿入のトレースは株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」及び「トレースくん」を用いた。実測図版・写真図版等の版下作成は、アドビシステムズ製「Illustrator」、Photoshopをそれぞれ使用した。また割付作業はアドビシステムズ製「InDesign」を使用した。

[写真類の整理]

35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺物の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

第3項 発掘調査と整理・報告書作成の体制

平成24年度以降の発掘調査と整理・報告書作成の体制については表2のとおりである。

表2 調査・整理体制

	平成24年度 (第6次調査)	平成25年度 (第7次調査)	平成26年度 (第8次調査)	平成27年度 (整理のみ)	平成28年度 (整理・報告書刊行)
調査期間	5月8日～11月16日	5月9日～11月20日	7月1日～11月14日		
調査主体	青森県国史文化財調査センター	青森県国史文化財調査センター	青森県国史文化財調査センター	青森県国史文化財調査センター	青森県国史文化財調査センター
所長	柿崎 隆司	柿崎 隆司	三上 盛一	三上 盛一	田村 博美
次長	高橋 雅人	高橋 雅人	高橋 雅人	川上 彰雄	川上 彰雄
総務GM	高橋 雅人	高橋 雅人	高橋 雅人	川上 彰雄	川上 彰雄
調査GM	川口 潤	川口 潤	川口 潤	川口 潤	川口 潤
免担調査 担当者	神 康夫 佐々木雅裕 工藤 忍 葛城和徳 高橋 哲 水瀬史人 荒谷伸郎 加藤隆則	総括主幹 笹森一朗 新山隆男 鈴木和子 工藤 忍 水瀬史人 荒谷伸郎 加藤隆則	能代谷征則 佐々木雅裕 成田滋彦 佐藤純子 葛城和徳 水瀬史人 加藤隆則	葛城和徳 水瀬史人 加藤隆則	
調査員	考古学 考古学 地質学 地質学	考古学 考古学 地質学 地質学	考古学 考古学 地質学 地質学	考古学 考古学 地質学 地質学	
整理期間	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日	平成25年4月1日～平成26年3月31日	平成26年4月1日～平成27年3月31日	平成27年4月1日～ 平成28年3月31日	平成28年4月1日～ 平成29年3月31日
整理・報告書 作成担当者	総括主幹 小田川哲彦 佐々木雅裕 水瀬史人 加藤隆則	佐々木雅裕 水瀬史人 加藤隆則	成田滋彦 新山隆男 葛城和徳 工藤 忍 佐藤純子 水瀬史人 加藤隆則	成田滋彦 新山隆男 葛城和徳 佐々木雅裕 水瀬史人 荒谷伸郎 加藤隆則	成田滋彦 新山隆男 佐藤純子 水瀬史人 荒谷伸郎 加藤隆則

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1項 遺跡の位置

遺跡が所在する中津軽郡西目屋村は県の南西部に位置し、東側で弘前市、西側で鯉ヶ沢町、南側で県境を挟んで秋田県大館市、藤里町と接している(図2)。周囲を山林に囲まれ、面積246.58km²、人口1,415人(平成27年国勢調査結果速報)、就業人口の3割以上が就労する1次産業が盛んな村である。また、昭和56年には、暗門の滝周辺が赤石溪流暗門の滝県立自然公園の指定を受け、さらに平成5年には村の西側を含む白神山地16,971haが世界自然遺産に登録されたことでもわかるように、豊かな自然を残している。

遺跡は村の中央、砂子瀬字水上に所在する。岩木川(調査時は目屋ダムの美山湖)の右岸、岩木川の支流である湯ノ沢川との合流点の東側、標高約180mの河成段丘上に位置する(図3)。ここは昭和35(1960)年に完成した目屋ダムの建設に伴い移転した砂子瀬集落のあった場所でもある。調査が終わった現在、遺跡は平成28年10月に竣工した津軽ダムの湛水範囲(津軽白神湖)に沈んでいる。

第2項 周辺の遺跡

目屋ダム建設以前の発掘調査

津軽ダム水没範囲内における発掘調査は、目屋ダム完成前の昭和34(1959)年、村越深氏による村元遺跡の調査にはじまる。遺跡は現在の水上(2)遺跡の北、標高約170mの当時の岩木川右岸に位置し、目屋ダムによる水没範囲内にあることから、調査がおこなわれたとされる(今井2005)。その成果について村越氏は、『円筒土器文化』(村越1974)の中で、「三段に分れる段丘の第二段にあり」、「上層c式」が出土したことなどを記している(なお、村越氏は同書で調査を「1960年初冬」としている)。その後、福田友之氏によって出土遺物が図示されると共に、遺跡名については、当時すでに県遺跡台帳に登録されていた村内の同名別遺跡と区別するために「砂子瀬村元遺跡」(福田1984)とする変更が提起された。この仮称はその後、県遺跡台帳に登録される際にも用いられ、現在に至る。

村越氏の調査から間もない、昭和34(1959)年12月『目屋ダム建設記念 砂子瀬部落誌』(成田編1959)が刊行される。巻頭写真で「砂子瀬出土土器片」の拓影図6点と「校地発掘(ママ)土石器」写真5点が掲載されており、前者は縄文時代晩期の土器片で、後者もおそらく晩期と考えられる片口土器が目を引く。本文中では同誌編集委員長の成田末五郎氏が「縄文文化時代遺蹟」として、(イ)「砂子瀬村警鐘台遺蹟」、(ロ)「砂子瀬小学校々地」、(ハ)「砂子瀬村芦薈の城址」、(ニ)「川原平村西端大沢の降り口」、(ホ)「川原平村ハタフク遺蹟」、(ヘ)「川原平村焼山」をあげる。その後、(ロ)が「砂子瀬遺跡」、(ニ)が「川原平(1)遺跡」、(ホ)が「川原平(2)遺跡」、(ヘ)が「焼山遺跡」として県遺跡台帳に登録されることとなる。また、(イ)「砂子瀬村警鐘台遺蹟」は「湯ノ沢と、本流との合流点の東にある台地で村の中心地である。ここに警鐘台を作った時、沢山の土器破片や矢ノ根が出たという。この西斜面から、破片を拾って見ると、縄文後期及晩期のものと推定される。」とある。警鐘台の位置については明確にできなかったが、位置の記述からここが本遺跡の調査範囲内にあった可能性も指摘できる。な

お、同誌は「発掘古銭」として「西目屋村砂子瀬寺屋敷址」(1026枚)と「西目屋村田代字稲元」(11275枚)における埋納銭の出土も記している。

ここまで目屋ダム完成前の調査について概観したが、出土遺物に限れば、これらに先立つ昭和26年刊行の『日本考古学概説』(小林1951)で「西目屋発見」の青竜刀形石器が図示されている。これはその後、江坂輝弥氏によって「川原平出土」(江坂1965)であるとされた。なお、青竜刀形石器については富樫泰時氏によっても「川原平暗門ノ滝付近」と「砂子瀬宮元」出土の2点の存在も示されている(富樫1983)。このうち「川原平暗門ノ滝付近」とされたものを福田氏は小林氏、江坂氏が示したものと同品としている(福田1984)。

津軽ダム建設事業に伴う発掘調査

目屋ダム完成前におこなわれた村越氏による村元遺跡の調査から44年、津軽ダム建設事業に係る発掘調査は平成15(2003)年の川原平(1)遺跡を皮切りに、平成27年度までに17遺跡でおこなわれた。ここでは簡単にはあるが、縄文時代の調査成果について確認しておきたい(図4・表3)。

本遺跡と同じ字名「水上」を遺跡名とするものは、水上(1)・(3)・(4)遺跡の3遺跡がある。水上(3)遺跡と水上(4)遺跡は本遺跡の東側の岩木川下流に、水上(1)遺跡は本遺跡の南東、本遺跡より20m以上高い標高205～210mの段丘平坦面に位置する。なお、水上(1)遺跡は、当初「水上遺跡」とされていたものを名称変更したものである(第466集第1章)。報告書も「水上遺跡」の旧称のまま2冊(第409・452集)が刊行されているので留意されたい。

水上(1)遺跡は、中期および後期末葉～晩期初頭を中心とした集落跡である。竪穴住居跡21軒、土坑97基などを確認した遺構群の中でも、後期末葉～晩期初頭とされる道路状遺構の存在が目を引く。水上(3)遺跡は確認した遺構数は少ないものの、円筒下層d式期のフラスコ状土坑5基の存在は本遺跡を理解する上でも重要である。

遺跡の南、湯ノ沢川の対岸には砂子瀬遺跡が位置する。後期前葉から後期後葉とされる集落跡では掘立柱建物跡41棟が確認されており、この内の一部は外径約60mの環状に配置されていた。

遺跡の南西、岩木川の左岸には鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡が位置する。

鬼川辺(1)遺跡では、遺物包含層から草創期前半とされる隆起線文土器が4点出土した。この土器出土地点周辺からは槍先型尖頭器と搔器も出土しており、土器との関連性が指摘されている。

鬼川辺(2)・(3)遺跡では竪穴住居跡が合わせて12軒確認されており、各時期にすると数軒だが時期は中期中葉から後期前葉までとされている。本遺跡から直線距離で約0.5～1kmと近く、関連がうかがえる。

本遺跡の南西、直線距離で約1.2km上流には芦沢(1)・(2)遺跡が位置する。

芦沢(2)遺跡は、中期中葉から後期後葉を中心とした集落跡である。ほぼ完形の土器が出土するフラスコ形土坑があり、この内2基では底面上3～10cmの覆土下層から倒立の状態で出土した。

本遺跡の南西、直線距離で約2km上流には川原平(1)・(4)・(6)遺跡が位置する。

川原平(1)遺跡と川原平(4)遺跡は北に旧岩木川を望む段丘上に隣接して位置する。

川原平(1)遺跡は、盛土遺構や配石遺構、石棺状配石を有する後期後葉～晩期後半の拠点的な集落である。大規模な捨場が形成されており、ここからは有機質遺物を含む多くの遺物が出土した。

川原平(4)遺跡では、晩期中葉～晩期後葉の土坑墓群を確認した。この内玉類が出土した土坑は4

水上(2)遺跡

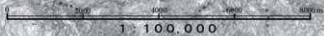


図2 遺跡の位置 (●が水上(2)遺跡)

(本図は、国土院発行の25,000分の地形画像「種里」・「十面沢」・「枯木平」・「岩木山」・「川原平」・「隆奥田代」・「冷水沼」・「尻大沼」を25%縮小・合成したものである。第564葉の図を基に作製。)

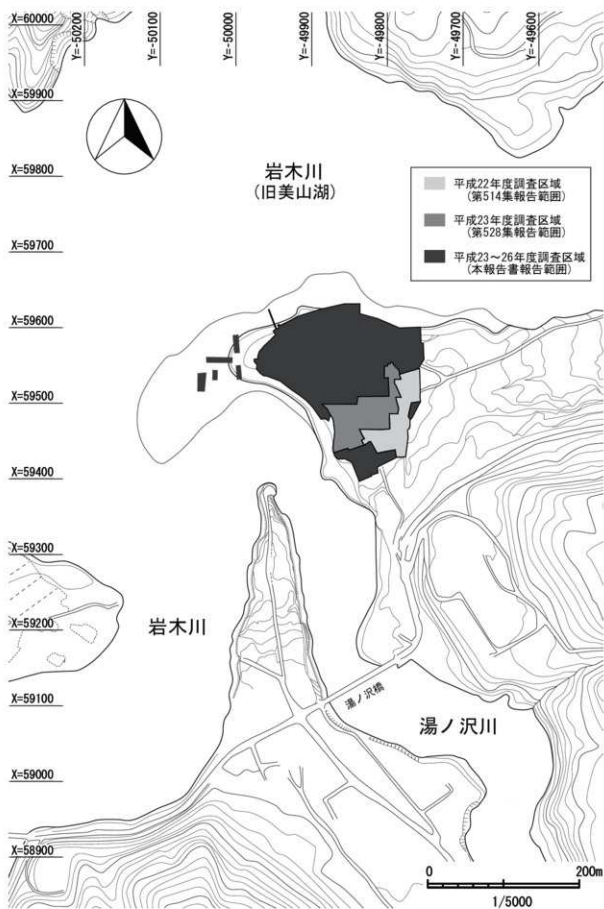


図3 調査区域図と周辺の地形

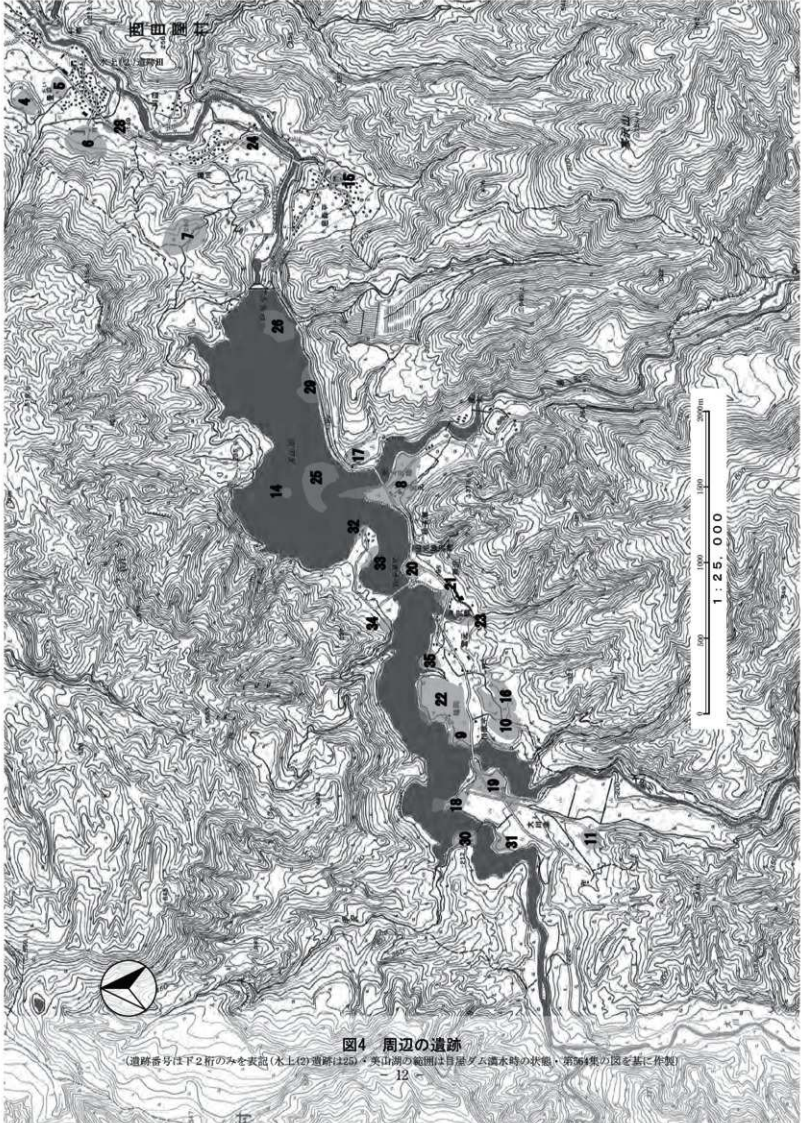


図4 周辺の遺跡

(遺跡番号は下2桁のみを表記(水上(2)遺跡は125)・奥山湖の範囲は目黒ダム満水時の状態、第564集の図を基に作製)

基あり、ヒスイ製の勾玉や玉類などが出土した。また、早期とされるトランシェ様石器47点の出土も特筆される。

川原平(6)遺跡は、中期末葉～後期初頭の大型住居を有する集落跡である。また、晩期前葉～晩期中葉のフラスコ状土坑群も確認し、この中には土器9個体がほぼ完形の状態でも出土したものがある。また、遺物では南斜面部から出土した狩猟文土器が注目される。

本遺跡の南西、直線距離で約2.5km上流には大川添(1)・(2)・(3)・(4)遺跡が位置する。

大川添(3)遺跡は、中期後葉から後期初頭を中心とした集落跡である。キノコ形土製品を蓋に用いた赤色顔料入り鳥形土器が出土した。また、縄文時代以降に目を向ければ、津軽ダム建設事業に係る発掘調査では唯一、平安時代の堅穴住居跡を確認した点が特筆される。

大川添(4)遺跡は、中期末葉から後期前葉と後期後葉を中心とした集落跡である。堅穴住居跡の床面から秋田県産アスファルトが入った後期前葉の鉢形土器が出土している。

表3 周辺の遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	縄文					弥生	古代	文献
			草創期	早期	前期	中期	後期			
3430 17	○ 水上(1)遺跡	砂子瀬字水上				■	■		○	409-452
3430 25	○ 水上(2)遺跡	砂子瀬字水上		■		■	■		○	514-528-575
3430 26	○ 水上(3)遺跡	砂子瀬字水上			■	■	■			406-528
3430 29	○ 水上(4)遺跡	砂子瀬字水上			■	■	■			466-500
3430 14	○ 砂子瀬村元	砂子瀬字村元			■	■	■			福田1984
3430 68	○ 砂子瀬遺跡	砂子瀬字宮元			■	■	■	○	○	466-482-513-543
3430 32	○ 鬼川辺(1)遺跡	砂子瀬字鬼川辺	■				■			541
3430 33	○ 鬼川辺(2)遺跡	砂子瀬字鬼川辺				■	■	○		541
3430 34	○ 鬼川辺(3)遺跡	砂子瀬字鬼川辺				■	■			541
3430 20	○ 芦沢(1)遺跡	砂子瀬字芦沢				■	■			500
3430 21	○ 芦沢(2)遺跡	砂子瀬字芦沢				■	■	○		540
3430 69	○ 川原平(1)遺跡	川原平字福岡		■	■	■	■	○	○	409-564-565-576-580
3430 10	○ 川原平(2)遺跡	川原平字福岡								遺跡地名表(散布地)
3430 16	○ 川原平(3)遺跡	川原平字福岡								遺跡地名表(散布地)
3430 22	○ 川原平(4)遺跡	川原平字福岡		■	■	■	■	○	○	409-527-539-566
3430 23	○ 川原平(5)遺跡	川原平字宮元								遺跡地名表(散布地)
3430 35	○ 川原平(6)遺跡	川原平字宮元				■	■			567
3430 18	○ 大川添(1)遺跡	川原平字大川添			■	■	■			500
3430 19	○ 大川添(2)遺跡	川原平字大川添				■	■	○?		409-482-515
3430 30	○ 大川添(3)遺跡	川原平字大川添		■	■	■	■	○		544
3430 31	○ 大川添(4)遺跡	川原平字大川添		■		■	■	○		542
3430 04	○ 村市遺跡	村市字稲葉								遺跡地名表(散布地)
3430 05	○ 稲葉(1)遺跡	村市字稲葉								遺跡地名表(散布地)
3430 06	○ 稲葉(2)遺跡	村市字稲葉								遺跡地名表(散布地)
3430 07	○ 芦荻遺跡	藤川字瀬の上								遺跡地名表(散布地)
3430 11	○ 焼山遺跡	川原平字大川添								遺跡地名表(散布地)
3430 15	○ 寒沢遺跡	辰森平字寒沢								遺跡地名表(散布地)
3430 24	○ 瀬の上遺跡	藤川字瀬の上								遺跡地名表(散布地)
3430 28	○ 稲葉(3)遺跡	村市字稲葉								遺跡地名表(散布地)

※遺跡の□は出土土器の時期を、■は遺構が構築される時期を示している。なお、遺跡の時期や時期区分は各報告書の記載を基に作製したため、不一致の部分もある。

※弥生・古代・中/近世は遺物の出土、もしくは遺構が確認されていることが記載されている場合とした。

※本表の遺跡番号・遺跡名・所在地は、青森県教育委員会ホームページ上で青森県遺跡地図と共に公開されている遺跡地名表を基に作製した。

第2節 水上(2)遺跡の概要

水上(2)遺跡は岩木川の最上流部(102kmの全長のうち原点までは約14km)の右岸、岩木川の支流である湯ノ沢川との合流点に位置する。調査時、両河川の合流点付近は昭和40年に完成した目屋ダムのダム湖(美山湖)となっており現在は、平成27年12月に完成した津軽ダムのダム湖(津軽白神湖)に遺跡全体が沈んでいる。

本遺跡は平成23年度までに、平成18年度より5次にわたる調査を実施しており、2冊の報告書が刊行されている。本報告書は主に平成24～26年度に実施した第6～8次調査の成果についてまとめたもので、一部についてはこれ以前の調査成果も含まれる。

遺跡の地形は、南北方向は南から北へ向かって緩やかに下がっている。遺跡の南側は平坦に近いが、中央付近からやや勾配を変えつつ、段丘先端部では急斜面となっている(図5A-B断面)。一方東西方向では、大きくは西側よりも東側が高く、ⅧF-100グリッド付近に端を発し北流する沢1を挟んで東西が微妙地状の高まりとなる(同C-D断面)。遺跡内での最高地点は遺跡南端部で約182.0m、その他の地点では、遺跡北東部のⅧP-110グリッド付近で約181.5m、また部分的に小高くなった石棺墓A群(ⅧP-83グリッド付近)で179.5mである。北側の斜面は沢2を挟んで東西で勾配が異なるが、捨て場堆積土が90グリッドライン以東ではほとんど確認できなかったことから、東側の地形は旧状を留めていない可能性が高い。同様に西側斜面部(以下「西斜面」)も相当に急勾配であるが、第528集でも触れられており遺構の遺存状況から、後世に崩落していることがわかっている。

捨て場包含層の形成された北側の段丘斜面はおおむね178m付近から斜面勾配を変え、斜面下では約170m付近で再び平坦面となる(図5A-B断面)。斜面の勾配は東側でよりきつく、西側では緩やかで、その比高差は73グリッド付近で約5m、85グリッド付近で8mである。斜面下の平坦面は、遺跡北西部において西方へ張り出す低い段丘面に移行し(写真1-1・2)、この段丘の南西端付近で湯ノ沢川と岩木川は合流する(写真1-3、2-1・2)。

調査時、低い段丘面も両河川の河床も目屋ダムの水位下にあり観察できる状態ではなかったが、ダム水位低下時には、わずかに5m程度の川幅となった岩木川が、目屋ダムの湖底堆積物(主に灰褐色の粘土)やそれ以前の岩木川河床の砂礫層を開析する様子が観察された(写真2-3)。正確には測量していないが、この時の河床面の標高はおおむね160m前後と見られ、縄文時代の居住域となった段丘平坦部との標高差は、15～20m程度である(写真2-4)。

縄文時代以前に形成された基本層序は、上位から第IV層(シルト層)、第V層(砂礫層)、第VI層(基盤岩、砂子瀬層)の層順が確認されており、土石流由来の第V層の砂礫層凹部に、第IV層のシルト土が堆積する様子が、深掘りしたトレンチ断面や、地表面の幾筋ものシルト層の帯状範囲として観察される(図5の薄いアミ部、写真3-2)。また石棺墓A群近辺や西側の斜面部付近のほか、沢1右岸やこれが岩木川方面へ流れ出る沢2付近などでも基盤岩が露出している(同図地点う・え、写真3-3・4)。これらのシルト層、砂礫層、基盤岩の地表付近での分布状況が、縄文時代の遺構分布の粗密に少なからず影響していた様子が遺跡内各所でうかがえる。例えば、遺跡範囲の東側、沢1右岸では数十軒の竪穴住居跡が南北50mの帯状に分布する(図5地点お、写真3-5)が、これは砂礫層を避けシルト層を狙った結果と見られる。また基盤岩が地表面に露出した石棺墓A群やその北側でも、遺構分布は極端に疎らで、少なくとも石棺墓A群付近では、墓域の形成される縄文時代中期末葉以前の積極的な土地利用

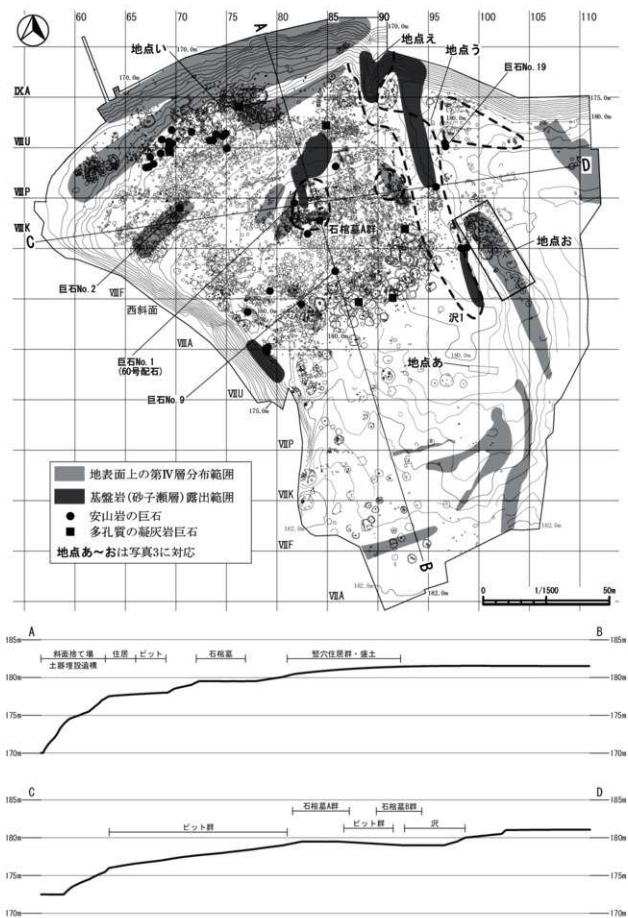


図5 遺跡の地形

は見られない。

遺跡の地表面での砂礫層の分布は、遺跡全体の7割以上の範囲に及び（図5の無色部）、遺跡内では多様な石材が確認される（写真3-6）。地表には大型の岩石（地表露出部において長径が100cmを超えるものを以下では「巨石」とする）も点在し、遺跡の基盤層内に約40点が観察される。石質は大きく二種に分けられ、多数の安山岩（図5●印）の他、少量の多孔質の凝灰岩（同図中■印）が見られる。前者はいずれも肉眼では良く似た石質と認識されたが、このうち4点（写真4-1～4）から試料を採取し偏光顕微鏡により観察したところ、基盤岩と同様の石材であるとの所見を得ている（第4章第11節参照）。

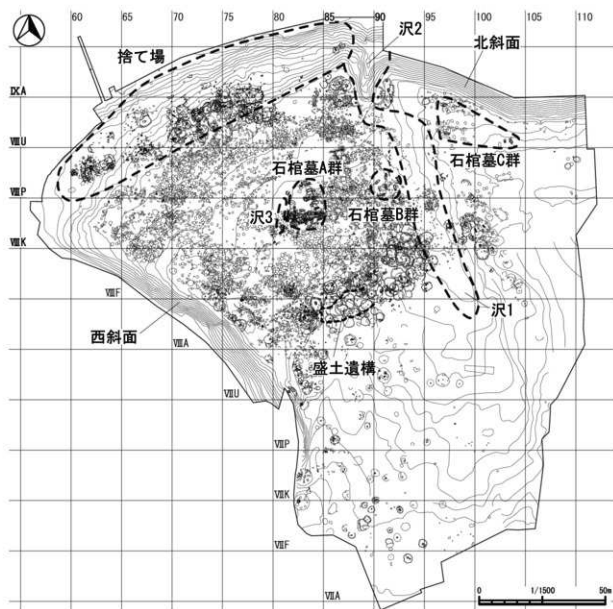
石棺墓や配石遺構の主要な石材に、板状摂理の安山岩、花崗閃緑岩、緑色凝灰岩等がある。このうち板状摂理の安山岩は鎌田・根本（2003）の「相馬安山岩類」のひとつと見られ、同書では遺跡近隣における分布を「西目屋村砂子瀬付近の岩木川北岸」とし、表層地質図では岩木川対岸の標高400m地点に東西の帯状に分布する。板状摂理の安山岩は、当遺跡では石棺墓石材のほか台石や打製石器（特にA4類と強い結びつきがある）の石材として用いられる。また周辺遺跡では、川原平（1）遺跡でも石製円盤の石材として多用される。その特徴的な外観と特定の石材として強い選択性を示すことから、調査時より他の安山岩から独立させて「相馬安山岩」と呼称してきた。こうした経緯から本書でも板状摂理の安山岩を「相馬安山岩」として報告する。なお既刊の津軽ダム関連発掘調査報告書では、本報告の「相馬安山岩」と同質の石材をデイスサイトとして報告しているものもある。

相馬安山岩は、直近の河床を観察することはできなかったが、調査時の観察では遺跡内の基本層中には含まれないようである。一方「相馬安山岩類」は岩木川下流の乳徳ヶ滝や鷹巣断崖などで観察されるが、板状摂理の発達した相馬安山岩となると、鷹巣断崖や地点ア（西目屋村長面の道路切り通し）など分布は極めて限られる。岩木川や湯ノ沢川上流の河床礫中에서도、相馬安山岩を見ることはほとんどない。

一方、花崗閃緑岩や緑色凝灰岩は遺跡内の第V層中や、岩木川や湯ノ沢川上流の河床にも多量に含まれており、相馬安山岩とは対照的である（写真5地点イや地点エ・オ）。第V層に含まれた花崗閃緑岩は多くの場合表面の風化が顕著で（写真3-6）、これらが直接石棺墓等の石材となり得たかは定かではなく、石棺墓の使用石材とは異なるように映る。また緑色凝灰岩は、本遺跡の対岸で露頭も観察され（同地点ウ）、岩木川や湯ノ沢川上流の河床では、もっとも多量に観察される石材のひとつである。このようにそれぞれの石材の分布と調達し易さは、遺跡内や近隣河川で調達容易な緑色凝灰岩、遺跡内での採取の実態は不明だが、近隣河川で調達可能な花崗閃緑岩、また遺跡内にはなく周辺でも分布の限られた相馬安山岩という違いがある。

図6には水上(2)遺跡で発見された遺構の種類・数量と主な時期を示した。枠囲みの数量が既報告を含めた検出遺構の総数である。以下では遺構の時期と分布状況、特記事項について略述する。

堅穴住居跡は縄文時代前期末葉から後期前葉（張沢式期）までのものを301軒検出した。もっとも古い前期末葉期（円筒下層d式期）のものは7軒見つかり、段丘平坦部と遺跡北西部の捨て場中の両地点に分布する。段丘平坦部はその後も居住域として堅穴住居が繰り返し建てられたため様相がはっきりしないが、他遺構との重複状況のない捨て場中の堅穴住居跡では、テラス状の屋内高床部をもつ隅丸長方形の住居（SI110）が廃絶後の堅穴窪地に、夥しい量の個体土器が廃棄された状況を確認している。以降、堅穴住居跡が、遺跡北側の段丘縁辺部と南側の段丘平坦部に繰り返し構築された結



分期	遺構	遺構数量			時期											
		今報告	514集	528集	前期		中期				後期		初期			
					後葉～末葉	前葉	中葉	後葉	末葉	初頭～前葉	後期					
					円筒 下層c	円筒 下層d	円筒 上層a	円筒 上層b	円筒 上層c	円筒 下層d	円筒 上層e	椀林	最花	末葉 木10 式部行	初頭～前葉 木10 式部行	後期 紙沢
1	竅穴住居跡	246軒	12軒	43軒	301軒											
3	掘立柱建物	6棟	-	-	6棟											
3	焼土遺構	112基	3基	4基	119基											
3	土器埋設遺構	174基	1基	2基	177基											
3	土坑	372基	8基	46基	426基											
3	ピット	6705基	8基	28基	6741基											
3	盛土遺構	1	-	-	1											
4	石棺墓	25基	-	-	25基											
4	配石遺構	60基	-	-	60基											
5	捨て場	1	-	-	1											

— 存在する — 多く存在する

図6 遺構分布と時期・数量

果、居住域は東西方向の二列の帯状となって見える。縄文時代中期後葉から末葉期になると、この集中範囲以外にも居住域を築く。遺跡西側の段丘縁辺部にも分布が偏り、後期初頭期には竪穴住居跡が石棺墓群に隣接し、集落変遷上大きな画期となる。10mを超える大型の竪穴住居跡は、既報告分も含めれば3軒(SI3106、SI4040、SI5047)検出しており、後二者は榎林期式期、前者が大木10式併行期に位置づけられる。

掘立柱建物は、縄文時代中期後葉から後期初頭期までのものを6棟検出した。平面形は1棟を除く5棟が長方形の6本柱で、SB1002は棟持柱をもつ六角形である。遺跡内では、先述の東西方向に延びる南北二列の帯状の居住域に挟まれた範囲に、数千を数えるピット群が分布するが、このうち調査段階でユニットを確認できのものを掘立柱建物として報告し、その後の整理作業の過程で、配列や柱穴規模、時期的検討からユニットを捉えられた34棟については第5章総括で別途検討する。

焼土遺構は112基検出した。竪穴住居跡の分布と概ね一致することから、その多くは竪穴住居跡の一部だったものと見られるが、捨て場堆積土中にはSN5やSN65など斜面傾斜に一致する現地性の焼土遺構も少なからず存在している。

土器埋設遺構は、縄文時代前期末葉(円筒下層d式期)から縄文時代後期前葉(蛭沢式期)までの174基を検出した。平面、時期ともに特異な分布状況を示し、平面的には全体の8割近い数が北側の段丘斜面部に位置する。また時期的には円筒下層d式から円筒上層a式期のものが全体の6割を占め、時期・分布ともに捨て場堆積土とは強い相関を見せている。

土坑とピットは、調査時には相対的な大きさにより両者を区分して登録したが、明瞭な区分とはなり得ておらず、SKよりも大きいSP、SPよりも小さいSKを相当に含んでいる。また当初その規模から土坑として調査したが、精査中に往痕跡が確認されるケースもあったが、略号、番号の振替は行っていない。また遺構の時期を特定できる出土状況に恵まれることもなく、観察表の時期は、特定のものを除き原則最新遺物の時期を示した。出土遺物による時期判定は、掘り込みが開いていたか速やかに埋め戻されたかによっても示す時期が異なるため、記載時期がそれぞれの遺構の確定時期ではない点も注意が必要である。

登録した数は、土坑が372基、ピットが6705基で、両者の分布域に大きな差はない。このうち出土遺物から時期を推定できたのは、土坑が約180基(約50%)、ピットが約2300基(約34%)である。時期はともに縄文時代前期末葉から後期初頭期のほぼ全時期にわたるが中期後葉以降が圧倒的に多く、時期を示した土坑とピットの7割以上が最花式から大木10式併行期と非常に高率である。フラスコ状土坑は数基検出したものの、数量が少なく群集しないことも本遺跡の特徴の一つである。

ピットは平面や断面で確認できた柱痕跡は図化した。調査時にすべての遺構でこの検出を徹底できたわけではない。確認できた範囲では、多量の大型礫で裏込めした事例も多数あり、湯ノ沢川対岸の砂子瀬遺跡(縄文時代後期・第543集ほか)と同様のあり方として注目される。

特記される土坑・ピットとしては、SK1067・1502の2基は石材の発見がなく積極的な評価は避けたが、規模や主軸方向のほか、壁石抜き取り穴に相当する土層の存在等から本来石棺墓であった可能性がある。また大型礫を伴うSK1115やSK1117、石を立て並べたSK5542A等は土坑として調査したものの配石遺構の可能性が高い遺構である。またSK5056やSP1407等土器埋設遺構との関わりで理解できるもの、SK6017のように墓の可能性を考えられるもの等、もつとも多様な内容を含む遺構群であり、こ

れらについては第5章総括で整理、検討する。

盛土遺構は、段丘平坦面の堅穴住居跡集中域に位置する。調査当初から不自然な地形の高まりとして認識されていたが、調査の結果、円筒上層e式期までの住居跡直上に形成された複林式期までの人為的な廃棄層の集合体であることが判明した。各層は地山由来の砂質シルト土、焼土の集積する土層、炭化物を多量に含む土層が互層となって堆積している。総体としては東西約25m、南北約10mの約200㎡の範囲におよび、当初は廃絶した堅穴住居跡窪地への小規模な廃棄行為が、埋まりきった後も引き続き継続され大規模化したものと見られる。

石棺墓は遺跡中央から北側の位置で、東西方向に3群にまとまる形で25基を検出した。西側のまとまりから順にA群(15基)、B群(6基)、C群(4基)と呼称する。A群・B群は沢1の西側、C群は東側の微高地に位置する。A群では15基が南北18m、東西16mの約300㎡の範囲に集中する。長軸方向を東西に揃え、南北では並列、東西では直列の関係に整然と並ぶ。石棺墓の構築に伴った配石遺構とも相俟って、その分布は密集といった状況に近いが、石棺墓の埋葬主体部どうしが重複する様子は一切見られない。蓋石が縄文時代の盛土で覆われた事例を確認できなかったことから、埋葬後も蓋石は地表に露出し、これが墓標の様な役割を果たしていたと見られる。埋葬主体部の重複こそないが、これより外側に広がる構築土(整地土や盛土)や関連石材(配石遺構を含む)の重複状況から、隣り合った遺構の新旧関係を押さえることができた。この結果、石棺墓A群ではこの15基が一度に造られたのではなく、その時期は縄文時代中期末葉から後期初頭期にわたること、また土器型式より狭い時期幅での石棺墓の構築方法や部材(構築土や石材)の変化、墓域の形成過程が明らかになった。

配石遺構は62基検出した。分布は少数を除いてその多くが石棺墓に隣接ないしは近接する。特に石棺墓A群に分布する配石遺構は、層的にも石棺墓構築に確実に伴うものが多数確認される。層的に同時性が保証されない場合でも、石棺墓を意識した分布や、周辺遺構との重複関係などから、同時期である可能性が極めて高い。その種類は①列石、②立石、③丸石(の集積)、④集石、⑤大型礫という、複数確認され類型化できる配石遺構と、このいずれにも該当しない独特の構造をもつものがある。石棺墓A群の西側に位置する60号配石とした立石(巨石)は、重量2350kgの超大型の凝灰岩である。出土遺物からは縄文時代中期中葉以降、また層的には後期初頭までにはこの地に存在していたと見られる。石材はその他の巨石と同様の安山岩であるが、周囲に地山と異なる土層が分布する状況、重心の不安定な状態で、長軸を天に向け立ったように見える巨石は他にない。自然か人為か確定的なことは言えないが、60号配石の巨石が他の巨石と較べて異質であること、また石棺墓A群構築の際に重要な意味合いを果たしていたことは推測される。

捨て場は岩木川に面する北側斜面のうち西側で確認した。規模は東西120mで平均の層厚は1.0m程度、厚い地点では1.5mにもなる。いくつかの地点で土層の堆積状況を確認したが、このうち4箇所(3・13・18・19ペルト)では細分層位ごとに遺物を取り上げている。

捨て場範囲と概ね一致するように、斜面の落ち際には堅穴住居跡が、また捨て場堆積土中には土器埋設遺構が東西方向に分布する。土器埋設遺構は全体の7割以上が捨て場中のもので、捨て場に廃棄された個体土器(遺存状況の良い完形、略完形の土器)とは時期的にも平面分布的にも相関している。捨て場出土の土器の総重量は13.8tにもなり、これは遺跡全体の5割に相当する。

北斜面および西斜面は、それぞれ遺跡北東部と西部の段丘斜面部を指す。ともに斜度30~35°にも

なる急勾配で、調査は安全上の配慮から土層の堆積状況の確認・記録のみに留め、人力による包含層の掘削から重機による掘削に切り替え、掘削土中の出土遺物を回収する方法を採った。北斜面はプライマリーな状態での遺物包含層が存在しておらず、遺物包含層が地山とは不整合で堆積する状況からも、後世の崩落を受け、旧状を留めていない可能性が高いものと見られる。一方西斜面もこれまでの調査で、縁辺部の遺構残存状況から後世の崩落を受け、旧状を保っていないことが指摘されている(第528集参照)。

出土遺物は土器、剥片石器、礫石器、土製品、石製品の5種に分けて報告する。平成18～26年度の第1～8次調査で出土した全遺物数量は段ボール箱換算で6724箱、このうち既報告の第514集で14箱、第528集で80箱分に相当する遺物の報告が済んでおり、本報告書はこれを除いた出土遺物を対象とする。出土遺物の時期は縄文時代早期から弥生時代初頭まで確認されるが、集落の時期としては縄文時代前期末葉から後期前葉頃と見られる。



1 北東方向上空から
※点線外側が低い段丘面



2 遺跡北西部の低い段丘面
(写真上が北)
※点線東側は斜面捨て場

写真1 目屋ダム水位低下時における低い段丘面



1 岩木川と湯ノ沢川の合流点①



2 岩木川と湯ノ沢川の合流点②

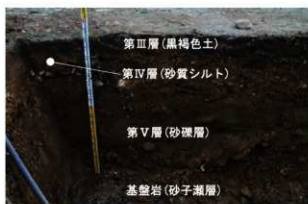


3 美山湖水位低下時の岩木川の河床
上部30～40cmの灰褐色土が1960年以降の
目屋ダムの湖底堆積物。以下はそれ以前
の河川堆積物。



4 目屋ダム水位低下時の岩木川の河床
左端が水上(2)遺跡の北側斜面部(捨て場)。

写真2 目屋ダム水位低下時における河川の様子



1 基本層序（地点あ）

基盤岩の安山岩（底面）上に砂礫層（第Ⅴ層）、シルト土（第Ⅳ層）が堆積し、その上に遺物を含む黒色土（第Ⅲ層）が形成される。



2 第Ⅳ・Ⅴ層の状況（地点い）

遺跡北西部、斜面捨て場付近。シルト土と砂礫層が東西方向の帯状となって見える。



3 第Ⅴ・Ⅵ層の状況（地点う）

遺跡北東部、北側斜面の手前付近。基盤岩が地表に露出し、上位には砂礫層が分布する。



4 第Ⅵ層の基盤岩（地点え）

遺跡北側中央の沢2の様子。基盤岩がV字の谷状地形を形成し、そこへ縄文時前期末葉以降の遺物包含層が堆積し、捨て場となる。



5 第Ⅳ層と遺構分布（地点お）

シルト質土（第Ⅳ層）を避けるように堅穴住居跡が分布する。



6 第Ⅴ層中包含礫

第Ⅴ層の礫層中に緑色凝灰岩、花崗閃緑岩、凝灰岩、粗粒玄武岩等が含まれている。このうち花崗閃緑岩は総じて風化が著しい。



1 巨石No.1 (60号配石)

石棺墓A群（縄文時代中期末葉から後期初頭期）に位置する巨岩。縄文時代中期末葉の土器片を含む黄褐色シルト土に固定され、重心の不安定な状態で埋まっている。



2 巨石No.2

シルト土に含まされた状況が巨石No.1と共通する。埋まり方を比較した結果、巨石No.2は重心の安定した状態で埋まっていた。

巨石No.1の石材とは同質である（第4章第11節参照）。



3 巨石No.9

巨石No.1とは同質の石材（第4章第11節参照）。

下位の調査は実施していないが、地表露出部では安定した状態で埋まっているように見える。



4 巨石No.19・20

砂礫層中の巨石。地表露出部では安定した状態で埋まっているように見える。

巨石No.19の石質は巨石No.1と同じで（第4章第11節参照）、No.20とも類似する。

写真4 遺跡の基盤層内の巨石



地点ア 相馬安山岩露頭(西目屋村長面)



地点アにおける板状拱理の発達した相馬安山岩



地点エ 湯ノ沢川上流の河床①



地点イ 岩木川下流の河床



地点オ 湯ノ沢川上流の河床②



地点ウ 緑色凝灰岩の露頭(遺跡対岸の段丘崖)

写真5 水上(2)遺跡周辺の石材分布状況

第3節 水上(2)遺跡の地形・地質

青森県立郷土館 島口 天

第1項 段丘面及び構成層

岩木川およびその支流沿いには砂礫台地「川原平台地」が分布し、この台地を構成する砂礫段丘は標高・現河床からの比高・段丘面の開析状態などから上位面と下位面に区分され(水野・堀田2003)、本遺跡は下位面上に立地する。山口(2014)が区分した河成段丘のⅡa面は、岩木川と各支流との合流点付近に展開する扇状地形をなし、下位面に相当する。この段丘面の標高は下流側ほど低くなり、本遺跡と湯ノ沢川を挟んだ対岸の砂子瀬遺跡では185~190m、本遺跡では180m前後となる。Ⅱa面前縁には一段低いⅡb面が小規模に分布し、大川添(4)・川原平(4)遺跡が立地している(山口2014)が、本遺跡内で西側に確認されている一段低い面がⅡb面に相当するかは不明である。

本遺跡における下位面は、基盤岩を土石流堆積物が覆って構成されている。弘前大学理工学部の柴正敏教授によると、基盤岩は単斜輝石-斜方輝石デイサイト~安山岩からなり(第4章第11節参照)、これらは砂子瀬層に属すると考えられる。基盤岩まで掘り下げたトレンチの調査から、基盤岩の上には一定の高さではなく起伏が見られた(写真1・2)。土石流堆積物は、全体として上方粗粒化・基質支持の組織を示し、垂円礫とその間を充填するシルトや砂からなる。土石流堆積物は何度も繰り返し発生・堆積したと考えられ、地層断面の観察から不明瞭であるが2~3層に区分できる場所もある。帯状に延びる土石流堆積物の間にできたとと思われる凹地や溝状地形には、シルト質の褐色土が堆積している。土石流によって運ばれてきたと思われる長径が1mを超えるような巨岩も見られ、このような巨岩は土石流の先端をきって流下するといわれているが、まともではなく散在している(前項図5の●印)。



写真1 起伏のある基盤岩上面を覆う
土石流堆積物



写真2 土石流堆積物に覆われずに
露出している基盤岩

第2項 石材の石質

土石流は、移動の過程で河床上の不安定な土砂を取り込み、流路沿いを激しく侵食しながら流れ下る。また、地滑り土塊や崩壊土砂が川を一旦堰き止め、それが決壊することで発生することもある。本遺跡内に分布する土石流堆積物は、湯ノ沢川で発生した土石流と考えられる(島口2012)ため、礫種は湯ノ沢川上流の地質を反映している。

角ほか(1962)によると、湯ノ沢川上流域には砂子瀬層の下位層に相当する地層を構成する安山岩、玄武岩、粗粒玄武岩、花崗閃緑岩、安山岩礫凝灰岩が分布している。鎌田・根本(2003)を参考にするると、湯ノ沢川と岩木川の合流点付近には砂子瀬層の下位層の一部を構成する「安山岩質火砕岩」が分布し、おもに緑～茶緑色の火山礫凝灰岩からなるほか、淡緑色の凝灰岩及び凝灰角礫岩を伴い、一部にデイサイト質溶結凝灰岩を挟む。また、異質礫を多量に含む特徴があり、花崗岩類、安山岩、流紋岩、黒色の頁岩等の角礫を含む。遺跡内に分布する土石流堆積物には、これらの礫種が含まれており、その大きさや円磨度はさまざまであると考えられる。

石器や石製品の石質が上記のものであれば、土石流堆積物内から石材を得ることができたと考えられるが、これ以外の石質の場合は岩木川流域から石材を得たことも考える必要がある。

たとえば、剥片石器のほとんどを占める珪質頁岩は砂子瀬層の上位層を構成しており、鎌田・根本(2003)からこの地層は本遺跡の対岸に分布している。よって、珪質頁岩は岩木川の河岸や河床で採取できたと考えられる。

石棺墓の主要石材である板状摂理が発達する安山岩は、その大きさから遺跡外の露頭から採取し運んできたと考えられる。この安山岩は相馬安山岩類に属するものと考えられ、相馬安山岩類は主に安山岩質火砕岩からなるとされている。しかし、乳穂ヶ滝で見られるように柱状摂理が発達する安山岩の溶岩も挟まれ、この周辺で行われた道路工事の際には板状摂理が発達する溶岩も見られた(前項写真5の地点ア)。ただ、相馬安山岩類は上述の珪質頁岩同様、本遺跡の対岸に分布しており、板状摂理が発達した溶岩を採取できる可能性はある。

このほかに、花崗岩類の石製品の場合、遺跡内の土石流堆積物に含まれる花崗閃緑岩のほとんどが風化して脆くなっていることから、大きな礫の風化した表面を取り除いて使用したか、湯ノ沢川や大沢川流域の露頭へ採取に行ったことが考えられる。

引用・参考文献

- 鎌田耕太郎・根本直樹(2003)5万分の1表層地質図「川原平」。土地分類基本調査、青森県農林水産部農村整備課、p.17-29。
 水野 裕・堀田輝誠(2003)5万分の1地形図「川原平」。土地分類基本調査、青森県農林水産部農村整備課、p.13-16。
 大沢 積(1962)5万分の1地質図幅「弘前」。工業技術院地質調査所、pp.52。
 大沢 積・土谷信之・角 清愛(1983)中浜地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1図幅)地質調査所、pp.62。
 島口 天(2012)水上(2)遺跡の地形・地質。青森県埋蔵文化財調査報告書 第514集「水上(2)遺跡」、青森県教育委員会、p.8-10。
 角 清愛・大沢 積・平山次郎(1962)5万分の1地質図幅「太良鉱山」。工業技術院地質調査所、pp.51。
 山口義伸(2014)芦沢(2)遺跡の地形と地質について。青森県埋蔵文化財調査報告書 第540集「芦沢(2)遺跡」、青森県教育委員会、p.7-13。

第4節 基本層序

基本層序の理解は第514・528集と大枠では共通しているが、調査の進展により新たに得られた知見もある。そこでここでは、本報告範囲で作製した基本層序図(図7)と基本層序位置図(図8)を示し、既報告分の内容も整理した上で、改めて遺跡全域の基本層序として提示したい。そのため以下では、既報告分の内容について認識を改めた部分もある。しかしこれは、あくまで既報告分の基本層序を広く遺跡全域に適合させるための措置であり、その内容を否定するものではない。既報告分に関しても、それぞれの報告範囲における基本層序の特質を記述したもとのして有用な指摘を多く含んでいる。

このように、調査では遺跡全域を共通の基本層序で理解することを試みた。それでも、30,000㎡以上に及ぶ調査範囲内においては、ここで示す基本層序の範疇で理解できなかった地点も存在する。これらはいずれも、堆積過程に人の関与の痕跡は薄いと判断し、遺物も遺構外出土遺物として扱うこととした。この各地点の様相については、第3章第9節で出土遺物と共に詳述する。

なお、基本層序に関わる項目の内、特に第IV層以下については、第2章第2・3節にも関連する記述がある。合わせてこちらも確認願いたい。

層順は第528集に倣い、表土及び第Ⅰ～Ⅵ層の計7層とし、これを細分した層もある。

表土は、目屋ダム稼働後の堆積層で、ダム湖水没時に堆積したものである。「美山湖の湖底堆積物(第528集)」もこれに含まれる。

第Ⅰ層は、目屋ダム稼働前の旧表土と考えられる。近世・近代・現代の遺物と共に、下位の包含層から混入したと考えられる縄文時代の遺物が出土する。

第Ⅱ層は、縄文時代の遺物包含層である。黒褐色～褐色土を主体とし、「明るみの強(第528集)」さで上下層と区別されたものである。この「明るみ」は、調査担当者間の印象では赤みを帯びた黒として認識されており、視覚的な識別は比較的容易であった。さらに第514集で、第Ⅱ層「上位に、白頭山火山灰(B-Tm)」と推定されたテフラの存在が指摘され、第528集の自然科学分析を経て確定した。これにより堆積時期も「縄文時代中期中葉以降から平安時代(第514集)」とされ、「火山灰混入層を第Ⅱa層」、下位を第Ⅱb層と細分した(第528集)。しかし、本報告書作成時に、第Ⅱ層中で前述のテフラを認識できるのは一部分に限られ、調査区全域で堆積時期の下限を特定できないこと、第Ⅱ層中からも中期中葉以前の遺物も一定数出土することから、本報告では堆積時期を限定しないこととし、『縄文時代以降』と広く捉え直すこととした。これを受け本報告範囲では第Ⅱa層・第Ⅱb層の細分も積極的には行わなかったが、火山灰の混入がうかがわれる地点でのみ、この細分を用いて火山灰が存在する可能性を指摘することとした。また、第Ⅱ層の再認識に合わせて、第Ⅰ層の堆積時期も「平安時代から現代(第514集)」と限定しないものとした。

第Ⅲ層は、縄文時代の遺物包含層である。全体的に第Ⅱ層に比べて暗く、黒褐色～暗褐色土を主体とする。土質は礫や炭化物の混入に多寡はあるものの、調査区全域で概ね似た土質を示す。堆積時期は「縄文時代中期中葉以前(第514集)」とされていたが、地点によっては中期中葉以降の遺物も一定量出土することから、本報告では堆積時期を限定しないこととし、『縄文時代以前』と広く捉え直すこととした。遺構は、本層中から掘り込まれているもの(基本層序図①中SI1099・1201ほか)と本層の下、第IV層上面で確認されるもの(基本層序図③中SI1061ほか)が存在するが、第Ⅱ・Ⅲ層の堆積時期を

共に広く縄文時代としたため、この差は(平面的に重複している場合を除き)明確な時期差を示していない。また、均質な土質は検出遺構の多さと相まって、本層中に構築された遺構の検出を困難にした。第Ⅲ層の掘削中に、遺物や炭化物などの混入物の濃淡で遺構の存在がうかがわれる地点に関しては、平面での遺構検出やサブトレンチによる遺構把握の作業をおこなった。これにより遺構として認識したのも多いが、調査には相当の時間も要した。また、比較的小形のピット等に関しては認識できなかったものも存在すると思われる。

第Ⅳ層以下はいわゆる地山で、無遺物層である。

第Ⅳ・Ⅴ層は、褐色が主体で上層とは大きく色調が異なる。そのため、前述の第Ⅲ層中に構築される遺構と異なり、第Ⅳ・Ⅴ層上面での遺構検出は比較的容易であった。なお、遺構の最終確認も第Ⅳ・Ⅴ層上面でおこなった。また、調査時に各遺構の記録を作成している段階では、第Ⅳ層と第Ⅴ層を明確に区分することが困難であった。そのため、本報告ではそのような場合に際しては、どちらかの層に断定してしまわない「第Ⅳ層もしくは第Ⅴ層」の意味で「Ⅳ・Ⅴ」と表記した部分がある。

第Ⅳ層は褐色を基本とするシルト層である。第Ⅴ層上の溝状地形に堆積したシルト土を主体とし、第Ⅴ層と比較すると、混入する礫は小さく量も少ない。シルト土も比較的均質であることから、第Ⅴ層に比べて遺構の掘削も容易であったと考えられる。

第Ⅴ層は褐色を基本とする砂礫層である。礫を多く含み、大きいものでは長径100cmを超えるものもある。礫間がシルトや砂によって充填される等の特徴から本層は「土石流堆積物(514集)」とされており、「湯ノ沢川で発生した土石流の堆積物(同)」である可能性が示されている。遺構は本層を掘削して構築されるものも多い。

なお、第Ⅳ層と第Ⅴ層は、第514集の「基本土層ⅦN-102~106(第Ⅳ層と第Ⅴ層の関係)」が示すように、上下の関係では無く、第Ⅳ層と第Ⅴ層の堆積が互層となっていた可能性がある。

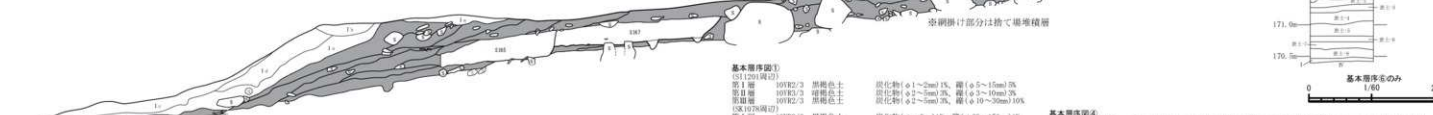
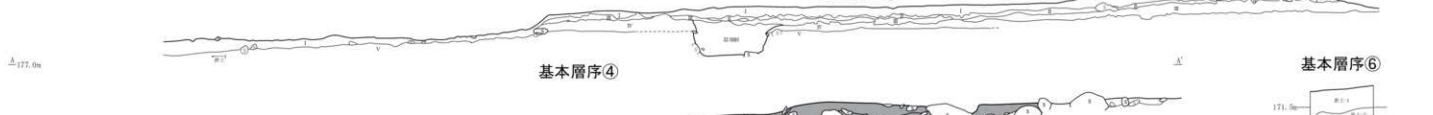
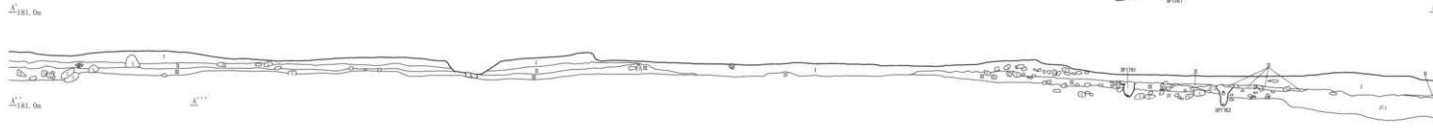
第Ⅵ層は、これまで「基盤岩(第514集)」としていたもので、第三紀の「砂子瀬層」に属する可能性が指摘されている(第514集)。

次に各基本層序図を概観する。

基本層序①は調査区中央の南北ベルトである。遺構が高い密度で構築される段丘平坦面の中央部に設定したもので、段丘先端に向かいわずかに下っていることがわかる。第Ⅱ層も削平を免れた南側を中心に広く確認でき、SI1201の上部では埋没後の回みに堆積している様子が捉えられる。北側では、第Ⅲ層が沢1に切られている。なお、沢1と第Ⅲ層の関係については、第3章第9節で詳述する。

基本層序②は調査区中央石棺墓A群南域の東西ベルトである。地表から石棺墓群検出面までを示したもので、グリッドライン86列以西(図中央から右側)のマウンド状に盛り上がる部分で石棺墓A群を確認した。一方、86列以東は相対的に低位部分となっている。加えて、図が及ばなかったが石棺墓が構築された第Ⅳ層の上面も丘状に高まっていたことも考え合わせると、石棺墓A群は周囲よりわずかながらも高い地点を選び、そこにさらに土を盛って(図中の「石棺墓構築土」)構築したものであることがわかる。なお、石棺墓A群の周囲では、この第Ⅱ層がSI5501やSI5502などを覆う状況が広く捉えられた。

基本層序③は調査区東側の南北ベルトである。北側の地表でみられる段差は、後世の大規模な削平によるものと考えられる。



基本層序①

第I層	101R2/3	赤褐色土	炭化物(φ1~2mm)1%, 糞(φ5~15mm)2%
第II層	101R3/3	暗褐色土	炭化物(φ2~5mm)3%, 糞(φ3~10mm)2%
第III層	101R2/3	暗褐色土	炭化物(φ2~5mm)3%, 糞(φ10~30mm)10%

基本層序②

第I層	101R2/2	赤褐色土	炭化物(φ~2mm)1%, 糞(φ20~150mm)1%
第II層	101R3/3	暗褐色土	炭化物(φ1~2mm)1%, 糞(φ5~90mm)1%
第III層	101R2/3	暗褐色土	炭化物(φ1~10mm)3%, 糞(φ5~150mm)3%
第IV層	101R2/3	暗褐色土	炭化物(φ1~5mm)2%
第V層	101R2/3	赤褐色土	炭化物(φ1~10mm)3%, 糞(φ10~180mm)10%
第VI層	101R2/2	暗褐色土	炭化物(φ1~10mm)3%, 糞(φ10~300mm)2%

基本層序③

第I層	101R2/4	暗褐色土	炭化物(φ1~20mm)3%, 糞(φ1~50mm)2%
第II層	101R4/4	褐色土	炭化物(φ1~5mm)2%, 糞(φ1~100mm)20%
第III層	101R4/4	褐色土	炭化物(φ2~5mm)1%, 糞(φ1~300mm)15%

基本層序④

第I層	101R2/2	暗褐色土	炭化物(φ1~20mm)12%
第II層	101R2/1	暗褐色土	糞(φ2~90mm)3%, 炭化物(φ2~2mm)1%
第III層	101R2/3	暗褐色土	糞(φ5~200mm)10%
第IV層	101R2/2	暗褐色土	糞(φ15~80mm)10%

基本層序⑤a

第I層	101R2/3	暗褐色土	腐植土(101R2/3)2%, 炭化物(φ1~2mm)2%, 糞(φ~20mm)1%
第II層	101R4/6	褐色土	腐植土(101R2/3)2%, 腐植土(101R2/4)3%, 炭化物(φ1~2mm)3%, 糞(φ10~50mm)2%
第III層	101R4/4	暗褐色土	腐植土(101R2/3)2%, 腐植土(101R2/2)2%, 炭化物(φ1~15mm)3%, 糞(φ10~210mm)2%
第IV層	101R5/6	黄褐色土	腐植土(101R2/4)5%, 炭化物(φ1~2mm)3%, 糞(φ5~130mm)10%

基本層序⑤b

第I層	101R2/3	暗褐色土	腐植土(101R2/3)2%, 炭化物(φ1~2mm)3%, 糞(φ1~4mm)1%
第II層	101R4/6	褐色土	腐植土(101R4/6)2%, 炭化物(φ1~6mm)5%, 糞(φ10~200mm)2%, 糞(φ1~5mm)1%
第III層	101R2/3	暗褐色土	腐植土(101R2/3)2%, 炭化物(φ1~1mm)3%, 糞(φ10~20mm)1%, 糞(φ1~5mm)1%
第IV層	101R2/2	暗褐色土	腐植土(101R2/2)2%, 炭化物(φ1~1mm)3%, 糞(φ10~20mm)1%, 糞(φ1~5mm)1%

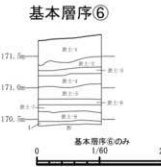


図7 基本層序図

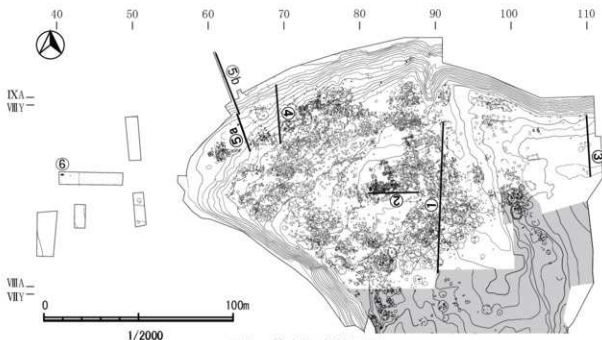


図8 基本層序位置図

基本層序④・⑤a・⑤bは捨て場に設定されたベルトで、いずれも北側に傾斜する等高線に直交する形で設定したものである。なお、基本層序⑤a・⑤bは同一のトレンチ断面の⑤aは西側、⑤bは東側を作図したもので、両者のA'はほぼ同地点となる。ここでは第Ⅰ層と捨て場堆積層と第Ⅳ層の関係が捉えられた。第Ⅱ・Ⅲ層は確認できず、変わって「捨て場堆積層(図7の網掛部分)」を確認した。基本層序④では第Ⅰa～e層からガラス瓶等の現代の遺物が、基本層序⑤aでは第Ⅰf層から近代以前の陶磁器が出土している。基本層序⑤bではA'付近で傾斜が大きく、中央部は平坦である。ここは調査区から突出したトレンチ部分であり、斜面に形成される捨て場の先にあった平坦面の存在がうかがえる。

基本層序⑥は今回調査した集落の西側に位置し、集落部分より約10m低いことから調査時に「低位段丘」と呼称していた範囲にある。この範囲では、トレンチ調査をおこない、図はその内の一ヶ所の土層を示したものである。ここでは表土が約1mに渡って堆積していた。表土の下で第Ⅰ層を確認したが、その直下はすぐに第Ⅳ層となり、この様相は各トレンチでも概ね共通していた。このことから、トレンチ内でわずかな遺構を調査できたものの、この範囲にあった遺物包含層と遺構の多くは削平により失われたものと考えた。

上記で示した各基本層序土層の概要は、以下の通りである。

- | | |
|-----|---|
| 表土 | 目屋ダム稼働後の堆積土(ダム湖底堆積物)。 |
| 第Ⅰ層 | 目屋ダム稼働前の旧表土。 |
| 第Ⅱ層 | 縄文時代の遺物包含層。縄文時代以降の堆積土。一部で白頭山火山灰を検出(火山灰の混入がうかがわれる地点でのみ、火山灰混入の可能性のある層を第Ⅱa層、これ以下を第Ⅱb層と細分した)。 |
| 第Ⅲ層 | 縄文時代の遺物包含層。縄文時代以前の堆積土。 |
| 第Ⅳ層 | 無遺物層。シルト層。 |
| 第Ⅴ層 | 無遺物層。砂礫層(土石流堆積物)。 |
| 第Ⅵ層 | 無遺物層。基盤岩(砂子瀬層)。 |

第5節 出土遺物の分類

第1項 縄文土器

時期による分類

本報告書においては土器の群別設定を採用せず、時期名称と土器型式名を用いた略称で本文・図中・観察表の記載を行っている。出土が認められた在地16型式、異系統7型式と、時期名称・型式名及び略称・型式判断に用いた基礎文献の対応関係は以下の通りである。

土器群・型式名	略称(～式)	時期表記	典拠	備考
円筒下層d1式	円下d1	前期後葉	村越, 1974	
円筒下層d2式	円下d2	前期末葉	村越, 1974	
円筒上層a式	円上a	中期初頭	村越, 1974	
円筒上層b・c式	円上b・c	中期前葉	村越, 1974	
円筒上層d・e式	円上d・e	中期中葉	村越, 1974	
椀林式	椀林	中期後葉	小保内, 2004・2008	
盞花式	盞花	中期後葉	小保内, 2004・2008	
大木10式併行	大木10	中期末葉	小保内, 2004・2008	
牛ヶ沢(3)遺跡第Ⅲ群土器	牛ヶ沢	後期初頭	青森県教, 1984	文中「牛ヶ沢式」と表記
張沢遺跡後期Ⅰ群土器	張沢	後期前葉	葛西, 1979	文中「張沢式」と表記
十勝内遺跡第Ⅰ～Ⅴ群土器	十勝内Ⅰ～Ⅴ	後期前葉～末葉	今井, 磯崎, 1968	
砂沢式	砂沢	弥生時代初頭	弘前市教, 1988・1994	

器種分類について

深鉢・浅鉢・鉢形・壺形の4器種と、深鉢・浅鉢・鉢形の台付、深鉢から分離した球胴深鉢、広口壺の9器種で大きく分類した。

文様の記述について

掲載土器については施文順の把握に可能な限り努めた。菱形文、胸骨文などモチーフ全体の名称は記述上不具合が生じたため、施文単位に分解し、各部に仮称を付けて扱うこととした(図10参照)。

表中の記載方式・略称について

観察表中では、把握し得た施文順を上記の文様単位名と(旧)→(新)記号によって表現した。新旧不明は「」で、重複上の並列関係は「・」で区切っている。同種文様中の各単位の施文順は、文様(A→B→C)と括弧で括って表現した。計測値は復元値を()で、残存値を< >で括って示した。

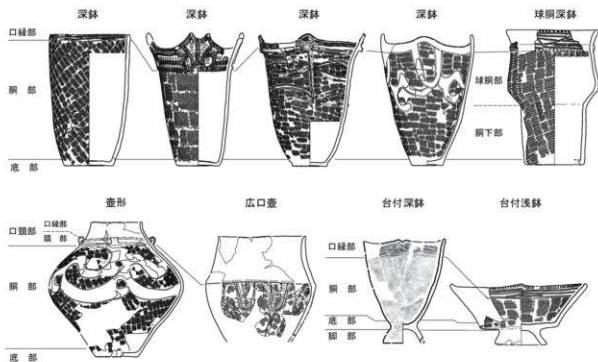
また、表中では以下の略称を用いている。

縄文原体の側面(燃糸)圧痕	→側圧
縄文原体の横位/縦位/斜位回転施文	→横/縦/斜回
0段多糸又は前々段多糸の縄文原体	→0多
aとbによる結束第1・2種	→結束1・2種(a+b)

縄文原体aを絡げた単軸絡糸体第n類	→a単軸n類
縄文原体aを絡げた多軸絡糸体	→a多軸
bで縄端を結縛(端部結束)された原体a	→a(b結縛付)
平截竹管様の工具を用いた刺突	→平竹刺突

土器用語凡例

【器種・部位名】



【口端突起】



【その他突起・把手類】

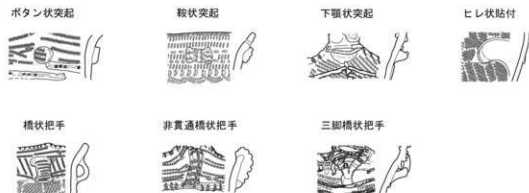


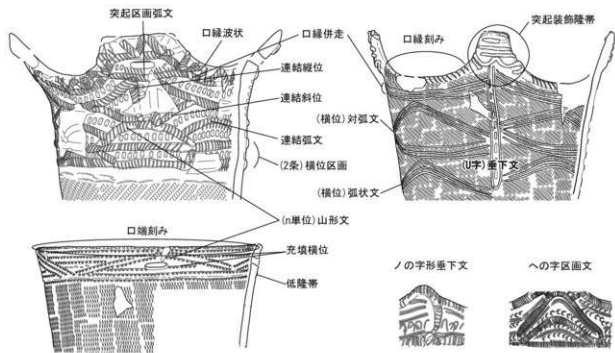
図9 土器の凡例(1)

土器用語凡例

【口縁断面形状】



【隆帯・燃系圧痕・沈線文の構成単位名(仮称)】



鋸歯文▼



▼馬蹄形側圧



翼状対弧文



渦巻つなぎ文(口縁)

渦巻・同心円つなぎ文(胴部)



◁形垂下文



Y字形垂下文▼



▼蛇行垂下文

ハの字文・カニ手状文



【付着物範囲】



図10 土器の凡例(2)

第2項 剥片石器

剥片を素材とした石器を総称した。便宜的に素材である剥片や原石・石核も含めた。

器種分類は、原則として前報告(第528集)を踏襲し、それに本報告で初出となる分類項目を加える形で行った。13器種に大別し、これからさらに細分した器種もある。

遺物観察表の「器種」の欄には以下のゴシックで示した分類を、「器種細分」の欄には以下の[]で示した細分類の略号を記載した。また、自然科学分析(第6分冊第4章第8節)で得られた黒曜石の産地については備考欄に記載した。

図中におけるアスファルトの可能性を含む黒色付着物及び光沢の範囲についてはトーンを用いて示した(図11)。なお、自然科学分析をおこなっていないため、アスファルトと断定できるものはない。

石鏃

尖頭形状をした小型の両面調整石器である。大半が長軸50mm未満のものであるが、これを超えるものでも形状や基部の作出、剥離の様相などが同様のものについては本器種に含めた。基部形態により、以下のように細分した。

- ・有茎石鏃—さらに形状により凸基[有凸]・平基[有平]・凹基[有凹]に分類した。
- ・無茎石鏃—さらに形状により尖基[無尖]・円基[無円]・平基[無平]・凹基[無凹]に分類した。
- ・基部欠損により上記の細分ができないもの[基部欠]

石槍

尖頭形状をした大型の両面調整石器である。形状により以下のように細分した。

- ・木葉形—長軸：短軸比が2：1程度のもの[木葉]
- ・柳葉形—長軸：短軸比が3：1程度のもの[柳葉]
- ・有茎状の基部を作出するもの[有茎基部]
- ・欠損により上記の細分ができないもの[基部欠]

石鏃

両面調整された石器の内、一端が直線状(直刃)あるいは弧状(円刃)となるもの。形状により以下のように細分した。

- ・短冊形のもの[短冊]
- ・撥形のもの[撥]
- ・欠損により上記の細分ができないもの[欠損]

石鏃

鏃状の先端を作出するもので石鏃、石槍を除いたもの、または尖頭状の端部が摩耗しているもの。形状により以下のように細分した。なお、摩耗が顕著なものは、矢印でその範囲を図示した。

- ・棒状のもの[棒]
- ・つまみ部をもつもの[つまみ]
- ・剥片端部を利用したもの[剥片端]
- ・石鏃を転用したもの[石鏃転用]
- ・欠損により上記の細分ができないもの[欠損]

石匙

素材剥片の一端につまみ部の作出される石器で、つまみ部に対する刃部の位置で以下のように細分した。なお、つまみ部の作出の程度が弱くても、位置から作出が読み取れるものも本器種に含めた。なお、刃部調整についても観察し、片面からのものを「片刃」、両面からのものを「両刃」、これを行わないものを「非調整」として遺物観察表の備考欄に記載した。

- ・縦形のもの〔縦〕
- ・横形のもの〔横〕
- ・斜軸形のもの〔斜〕
- ・欠損により上記の細分ができないもの〔欠損〕

スクレイパー

剥片の縁部に連続的な剥離により刃部を作出するものを基本とするが、二次加工が連続しないものでも使用痕が明瞭なものも本器種に含めた。従来の削器、搔器及び不定形石器とされるものも含む。また、三内丸山遺跡の報文中で、「四角形の短辺部分に抉りを有し長辺部分を刃部とする」(青森県教委2012ほか)石匙とされたものも「抉り入りの削器」(同)と理解して、ここに含めた。

両面調整石器

上記の石槍か石篋のどちらかと考えられるが、欠損のため分類ができないもの〔槍篋欠〕(今回、図示していない)及び「大型の剥片または原礫を両面調整剥離したもので、上記分類に含めることのできないもの」(青森県教委2011)〔用途不明《他》〕とした。これには、それ自体で機能したと考えられるもののほか、大形石器の素材剥片、失敗品を含む未製品、もしくは石核などとして使用されたものを含むと考えられる。

二次加工剥片

剥片の一部に加工が施された石器で、定形石器の未製品、欠損品のほか、器種の判断出来ない定形石器の破片を含む。なお、未製品と考えられるものについては、推定される器種を遺物観察表の備考に記載した。

楔形石器

両極剥離痕のあるもの。これまでに両極石器、ピエス・エスキュー等とされているものを含む。

微細剥離剥片

側縁部に微少な剥離が認められる剥片である。剥離は刃器としての使用により形成されたものと考えたが、その性格上、偶発剥離によるものを含む。

異形石器

剥片石器の中で、定形的ではなく特殊な形態となるもの。

剥片

二次加工がなく、微細剥離も見られない剥片・破片である。

石核

素材剥片を作出後の残核と考えられるもの。

原石

加工は認められないものの、石器素材等への使用を意図して遺跡内に持ち込まれたと考えられるもの。

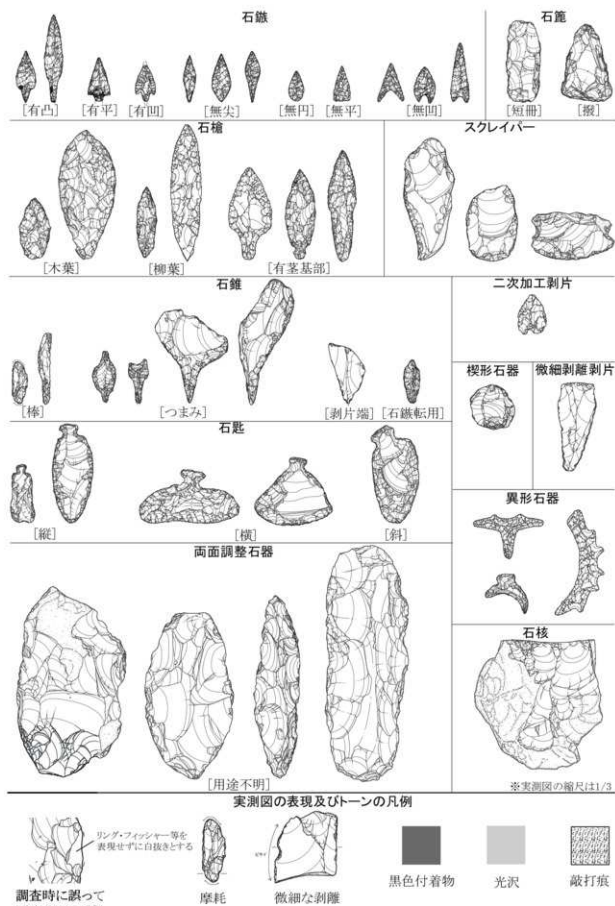


図11 剥片石器分類図と実測図の凡例

第3項 礫石器

礫石器の名称 礫を素材とした石器を総称した。

各部の名称(凡例①) 素材礫のもっとも長い軸を長軸(長さ)とし、これと直交する軸のうち距離のある方の最大値を短軸(幅)、距離のない方の最大値を厚さとした。寸法はこの三点「長さ・幅・厚さ」を計測している。また素材礫の長軸の両端を「端部」、短軸の両側を「側面」、厚さ側の両面を「表面」と呼ぶ。

石材の形状(凡例②) 石材形状は、平面形と厚みによって、4種6分類(A-球・丸石、B1-厚みのある円礫、B2-厚みのある長円礫、C1-偏平の円形礫、C2-偏平の長円形礫、D-棒状)し、いずれにもあてはまらないものをその他(E)とした。破損したもので旧状のわかるものは分類した。

使用痕の種類(凡例③)

磨痕 礫面に対し水平方向の運動により生じたと見られる使用痕で、以下の種類を観察した。

磨痕A ツルツルの平滑な表面になるもの。もっとも表面積の広い面に形成されることが多いが稀に側面にも形成される。後述の磨痕B・Cとも共存する。

磨痕B 線状の痕跡のうち幅や深さをもたない擦過痕で、単独で形成されるものもあるが磨痕Aと組み合う場合も多い。後述の磨痕C(線状痕)とも併伴する。「擦痕」とも表記する。

磨痕C 線状の痕跡のうち、1mm以上の幅と深さのある擦過痕で、単独で形成されるものはなく、ほぼすべての事例で磨痕B(線状痕)と組み合う。また磨痕Aとも共存する。「線状痕」とも表記する。

磨痕D ざらつきや荒れた表面をもつもの。多くの場合礫の側面に形成される。礫表面に対する運動方向は水平とは限らない。原則的に磨痕A～Cとは併伴せず、剥離を伴うことも多い。

敲打痕 礫面に対し垂直方向の運動により形成された使用痕。形成箇所により以下のように分類した。

凹痕 表裏面(もっとも表面積の広い面)に形成された敲打痕。ごく稀ではあるが、側面に形成されたものでも、表裏面に形成される痕跡と同様であればこれに含める(3-図283-5、5-図165-5等)。凡例④のように、凹みの位置(A～C)と深さ(1・2)の組み合わせによりA1～C2に6分類した。

敲痕 端部や側面に形成された敲打痕。器表面があばた状になり、磨痕Dとは器表面の凹凸の度合いで区別されるが、不明瞭なものもある。

なお、同一個体内に複数種の使用痕が観察されることを、同一個体内での「併伴」とし、同一面で併伴する状況を特に「共存」とした。

器種の分類

敲磨器類 礫を素材とする石器のうち上記使用痕が確認され、かつこれが手に保持した状態で残されたと判断しうるもの。よって同様の使用痕を残す礫でも、手に保持した状態で形成されるのが困難な大形のものについては台石等に分類される場合もあり、大きさによりこの判断が明瞭でない場合もある。単一の痕跡を残すものは3種(磨石、凹石、敲石)、複数種の痕跡を残す石器はその組み合わせから4種(磨凹石、磨敲石、凹敲石、磨凹敲石)の計7種よりなる。

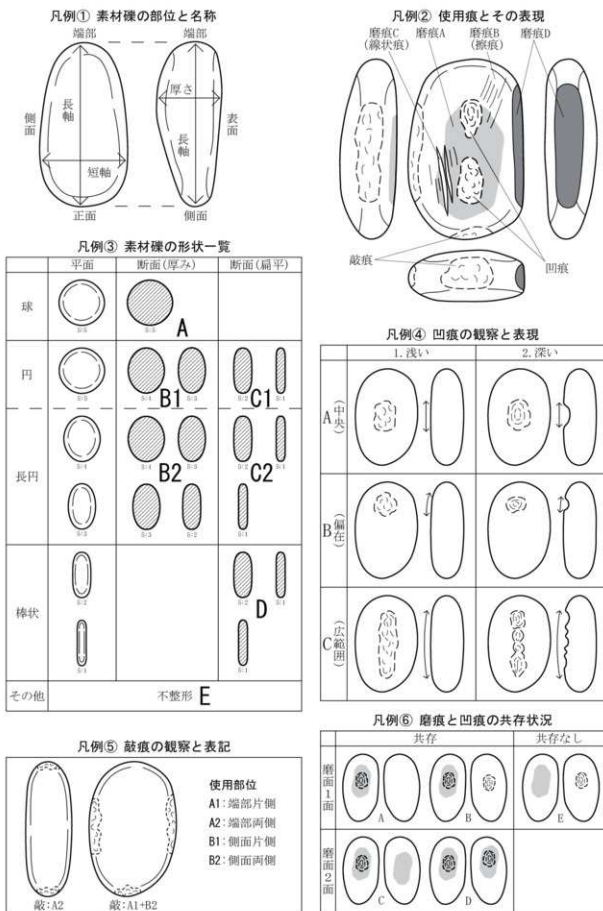


図12 礫石器の凡例(1)

磨石 素材礫に磨痕のみを残す石器。磨痕の種類により以下の2種に分けた。

I類 礫表面を機能面とした、磨痕A～C(ツルツルの平滑面、線状痕、擦痕)をもつ磨石。

II類 機能面を礫の側面とする磨石。多くの場合磨痕Dを伴う。

凹石 素材礫に凹痕のみを残す石器で、痕跡の位置と深さから下記のように分類した。

痕跡の位置 A-中央 B-偏在 C-広範囲(二箇所以上)

痕跡の深さ 1-浅い 2-深い

1と2の差は、おおむね断面実測の際、凹み表現ができるか否かを基準とした。また痕跡の位置が広範囲となるもので、深さが1～2におよぶ場合は「2-深い」に分類した。

敲石 素材礫に敲痕のみを残す石器で、素材礫の違いで大きく2種に分類した。

I類 珪質頁岩以外の転石利用のもの。使用痕の部位により以下のように観察した(凡例⑤)。

A-端部利用(片側はA1、両端はA2) B-側面利用(一側面をB1、両側面をB2)

C-側面・端部全体 D-礫全体

II類 珪質頁岩に敲打痕をもつものを一括した。素材は以下の5種を確認した。

A-原石を利用したもの B-石核を転用したもの C-剥片を転用したもの

D-剥片石器を利用したもの E-その他

磨凹石 素材礫に磨痕と凹痕を残す複合機能の石器。共存状況は、凡例⑥のように表す。

磨敲石 素材礫に磨痕と敲痕を残す複合機能の石器。

凹敲石 素材礫に凹痕と敲痕を残す複合機能の石器。

磨凹敲石 素材礫に磨痕と凹痕、敲痕を残す複合機能の石器。

打製石器類 素材礫に剥離を加えた石器を総称する。凡例⑦に示すように、扁平礫素材の石器群については様々なバリエーションがあるため、使用痕を3種(使用痕無しを含め4種、A～D類)、加工痕を4種(無加工を含め5種、1～5類)に分類し、この組み合わせにより「打製石器A1類」や「打製石器D3類」のように表記した。なお理論上は20種の組み合わせができるが、このうちD5類に相当するものは自然礫、C5類は磨石II類(既述)、D4類は石錘I類(後述)であり、これらを除く都合17分類が本類に属する。器種ごとの数量や関連性、既存の器種分類との対応関係については第5章の「総括」(第6分冊)で述べる。

使用痕 A類-磨面がない、またはほとんどなく剥離のみのもの

B類-磨面に剥離を伴うもの

C類-(剥離を伴わず)磨面のみのもの

D類-使用痕無し

加工痕 1類-機能面を除く三辺に剥離を加えることで全体として半円状となるもの

2類-機能面を除く1～2辺に部分的な剥離を加えるもの

3類-礫の両端部に挟入(打ち欠き)を、またその他にも剥離を加えるもの(挟入の程度は問わない)

4類-礫の両端部に挟入(打ち欠き)のみを施すもの(挟入の程度は問わない)

5類-機能面以外の加工もないもの

凡例⑦ 打製石器と周辺器種

加工痕 使用痕		1(全体加工)	2(部分加工)	3(挟入・部分加工)	4(挟入)	5(無加工)
		A 剥離のみ	A1	A2	A3	A4
B 剥離伴う磨痕	B1	B2	B3	B4	B5	
C 磨痕のみ	C1	C2	C3	C4	(磨石Ⅱ類)	
D 使用痕なし	D1	D2	D3	(石錘Ⅰ類)	(自然礫)	

図13 礫石器の凡例(2)

石錘 素材礫の対となる位置に、紐掛けを想起させる抉りを入れた石器で、下記のように挟入位置により2種(Ⅰ類・Ⅱ類)に分類した。Ⅱ類の挟入部はA-剥離、B-敲打、C-剥離+敲打の3種が確認される。

Ⅰ類 礫の両端部(長軸方向、短辺側)の対になる位置に抉りを入れた石器。

Ⅱ類 礫の両側縁(短軸方向、長辺側)の対になる位置に抉りを入れ、分銅型となる石器。

台石・石皿類 磨痕や敲打痕をもつ石器のうち、その痕跡が置いた状態で形成されたと判断しうるもの。素材礫を大きく加工することなく使用したものを台石、縁や脚を作出するものを石皿とした。

砥石 磨痕をもつ石器のうち、運動方向のわかる一定幅の浅い溝状の磨面(=溝状砥面)や、極端な平坦面や明瞭な稜を形成する磨面、凹レンズ状となる磨面を砥面と判断し、これをもつもの。

磨製石斧 研磨により整形し、端部側に刃部を作出する石器。

礫石器観察表の「備考」部分の表記凡例

磨3(A・C・B)、凹2(C2・A1)、敲(A2・B1)

→ 磨痕3面(ツルツルの磨面と線状痕の面と擦痕の面)

凹痕2面(広範囲で深い凹痕と中央の浅い凹痕)

敲痕(端部両側と側面片側)

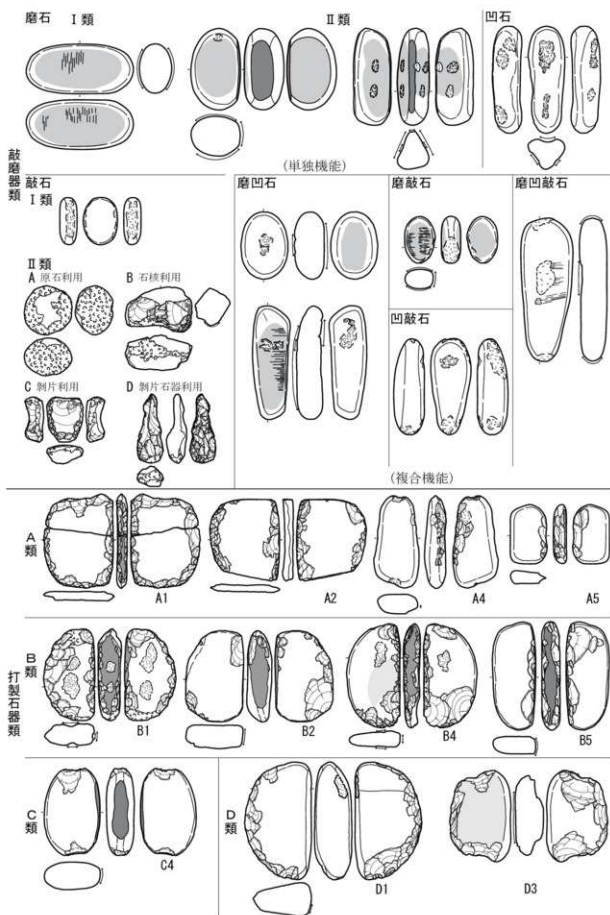


図14 礫石器の分類(1)

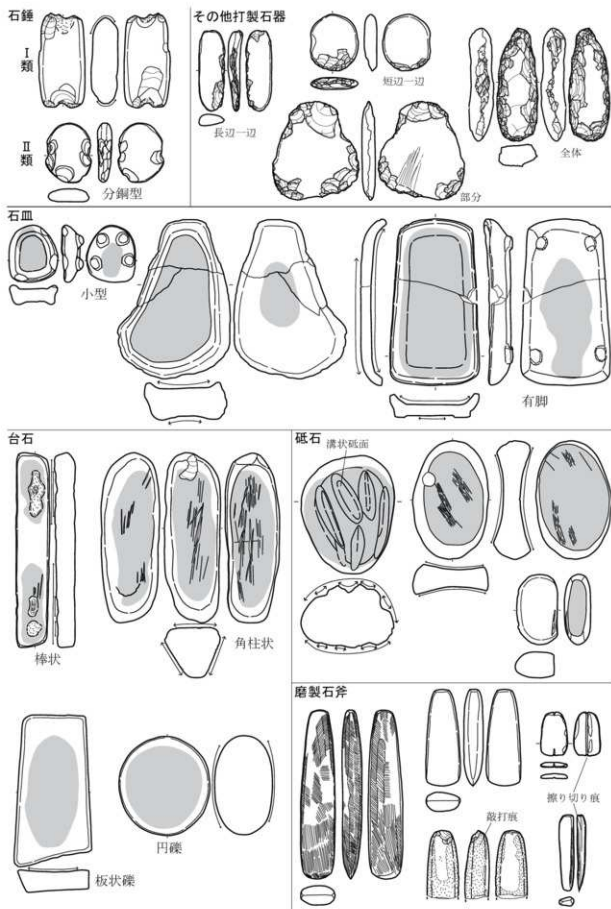


図15 礫石器の分類(2)

第4項 土製品

①土偶

A類：細沈線及び細刺突文が主文様に用いられるもの。

B類：縄の押捺が主文様に用いられるもの。

a：三本一束の縄押捺を使用するもの。

b：二本一对の縄押捺を使用するもの。

1：渦巻き状の縄圧痕が見られるもの。 2：全体に縄が疎なもの。

c：一本の縄で押圧するもの。

C類：縄の押捺と半月状の刺突文が主文様に用いられるもの。

D類：多裁竹管状工具による刺突文が主文様に用いられるもの。

a：二列一对の刺突列を使用するもの。 b：一列の刺突列を使用するもの。

c：大小の刺突が併用されるもの。

E類：沈線文が主文様に用いられるもの。

a：(仮)カニ手状文や蕨手文がみられるもの。 b：剣菱付渦巻き文がみられるもの。

c：枝分かれ状文様がみられるもの。 d：体貫通孔がみられるもの。

e：長いS字文が連結するもの。 f：破片類で上記に分類できないもの。

F類：縄の回転施文が地文に用いられるもの。

a：剣菱付渦巻き文がみられるもの。 b：枝分かれ状文様がみられるもの。

c：回転縄文地文で、縄の押捺と沈線が併用されるもの。

d：回転縄文地文で縄の押捺のみみられるもの。

G類：無文のもの。

a：胸部から下半身へ体貫通孔がみられるもの。 b：小型・十字形のもの。

c：破片類で上記に分類できないもの。

H類：楕円形又は菱形の小刺突が主文様に用いられるもの。

a：体前面腕部からの刺突列が臍部付近で合流するもの。

b：体部側縁の刺突列と、前面に細い沈線による正中線がみられるもの。

c：体部側縁の刺突列と、前面に太い正中線がみられるもの。

d：肩部から乳房を経由し腕部へ至る曲線状の刺突列がみられるもの。

e：破片類で上記に分類できないもの。

I類：頭部及び顔面のみなもの

a：A類の頭部の可能性があるもの。 b：B・D類の頭部の可能性があるもの。

c：G類の頭部の可能性があるもの。 d：E・F類の頭部の可能性があるもの。

e：H類の頭部の可能性があるもの。 f：脚部の破片。

J類：四脚を持つ特異なもの。

②ミニチュア土器

A類：深鉢形のもの。

- a：円筒形のもの。 b：口縁部がくびれるもの。 c：口縁部が内湾するもの。
d：その他の形状。

B類：鉢形・浅鉢形のもの。

- a：鉢形のもの。 b：浅鉢もしくは皿形のもの。 c：楕円形や方形のもの。

C類：高台や脚がつくもの。

- a：高台がつくもの。 b：脚がつくもの。 c：柱状の高台がつくもの。

D類：手づくねの小型品。

③土製装飾品

A類：環状のもの。

- a：罎状の突起が付くもの。 b：側面観が笠状のもの。 c：無文のもの。 d：土器片利用。

B類：側面観笠状で中心に貫通孔を持つもの。

C類：側面観笠状で中心に貫通孔を持つもの。

D類：その他の形状で中心に貫通孔を持つもの。

④土器片加工品

A類：円形基調のもの。

- a：無孔のもの（前期末～中期前葉のもの）。

- 1：口縁部破片を利用。 2：胴部破片を利用。 3：底部破片を利用。

- b：盲孔があるもの（前期末～中期前葉のもの）。

- 1：口縁部破片を利用。 2：胴部破片を利用。 3：底部破片を利用。

- c：有孔のもの（前期末～中期前葉のもの）。

- 1：口縁部破片を利用。 2：胴部破片を利用。 3：底部破片を利用。

- d：円形基調のもの（中期中葉以降）。

- e：六角形状のもの（中期中葉以降）。

- f：不整形のもの（中期中葉以降）。

B類：三角形その他の形状のもの。

- a：上辺が平坦なもの。

- b：上辺が膨らむもの。

- c：角が丸みを帯びる三角形のもの。

- d：半円形状あるいはハート形状のもの。

- e：方形のもの。

- f：端部に抉り入るもの。

C類：短冊形のもの及びその製作工程が看取されるもの。

- a：完成品又は完成品の破損品。

- 1：左右側縁がほぼ平行する短冊形。 2：下端に向かってすばまるもの。 3：破損品。

- b：擦切り痕が見られるが、整形が完了していないもの。

c : 擦り切れ残ったもの。または擦切途中のもの。

⑤その他の土製品

A類 : 三角形土製品

a : 前面及び背面が湾曲するもの。 b : 平坦なもの。

B類 : 鐮形土製品

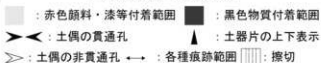
C類 : 器物模倣品

a : 石棒・石刀類の模倣品。 b : 石冠類の模倣品。 c : 石皿等模倣品。 d : 木器等模倣品。

D類 : その他

⑥焼成粘土塊

土製品の実際図版表示凡例



①土偶 (A類~D類)

A類 (細沈線・刺突)



B類 a (縄押捺三本)



B類 b1 (縄押捺二本・渦巻き状押捺)



B類 b2 (縄押捺 溝二本)



B類 c (縄押捺一本)



C類 (縄押捺・半月状刺突)



D類 a (多数竹管刺突二列一列)



D類 b (多数竹管刺突一列)



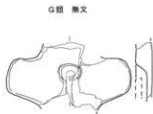
D類 c (大小刺突)



図16 土製品の分類(1)

①土偶 (E類～J類)

E類 (沈線主体)

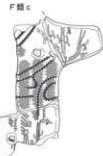


F類 (地文網文・沈線・網押線)

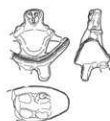


刺葉行渦巻文

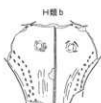
梳分かれ杖文



J類 四脚付



H類 (刺突文)



③土製裝飾品類

A類 (環状)



B類 (腰状)



C類 (笠状)



D類 (その他)



④土器片加工品

A類 (円形基調)

A類 a～c (前期末から中期前半)

a(無孔)



b(盲孔)



c(有孔)



A類d～f (中期中葉以降)



B類 (三角形その他)

a(上辺平直)



b(上辺凹らむ)



c(角丸)



e(六角形)



d(半円状)



d(方形状)



d(狭入り)



⑤その他の土製品

A類 (三角形)



b類 (平皿)



C類 (器物模倣品)

a(石棒模倣)



a(石刀模倣)



b(石冠模倣)



c(石皿等模倣)



d(木器等模倣)



図17 土製品の分類(2)

第5項 石製品

①岩偶

- A類：頭部が弱い突起状で腕部の突き出しが弱いもの。 B類：頭部と腕部が突出するもの。
C類：三角形のもの。 D類：半製品と考えられるもの。 E類：破片のため分類ができないもの。

②三角形岩版

- A類：全面が研磨されているもの。
a：上辺が平坦なもの。 b：上辺が膨らむもの。 c：半円状のもの。
B類：線刻等がみられるもの。
a：上辺左右の角から対頂点に向かう沈線がみられるもの。
b：線刻に規則性がみられないもの。 c：盲孔と線刻がみられるもの。
d：側面に線刻がみられるもの。

③円盤状石製品

- A類：周縁を剝離整形しているもの。
B類：全体を研磨整形しているもの。
a：直径3～5cm程度のもの。 b：直径6cm以上のもの。 c：楕円形のもの。

④石棒・石刀類

- A類：棒状の自然礫そのものか一部に敲打や擦りなどの加工痕跡が見られるもの。
a：一部に敲打や研磨等の加工がみられるもの
1：断面楕円形の礫使用。 2：断面形が角張る礫使用。
b：自然礫そのもの。
1：断面楕円形の礫使用。 2：断面形が角張る礫使用。
B類：両端または片端に敲打や研磨などの加工が施されるもの。
a：柱状で両端部が平坦に加工されるもの。
1：正面形が柱状で細長いもの。 2：正面中ほどが膨らむエンタシス柱状のもの。
b：柱状で両端部が凹むもの。
1：端部の凹み底面が平坦なもの。 2：端部の凹み底面が碗状のもの。
c：柱状で端部に同心円文がみられるもの。
d：正面上端部がすばまるもの。
C類：片端部にくびれや頭部の作出がみられるもの。
a：頭部作出は弱く、先端が傾斜するもの。
b：端部直下を帯状に敲打しくびれを作出するもの。
D類：石刀類
a：刃部が器体縁辺に長く作出されるもの。
1：刃部断面形が楔状のもの。 2：刃部の作出が不明瞭で、断面形が丸みを帯びるもの。
b：刃部が器体中央付近のみに作出されるもの。
1：刃部が強く突出するもの。 2：刃部の突出が弱いもの。
c：柄部を有頭石棒状に作出するもの。

d : 扁平な柔らかい石材を用いているもの。

e : その他のもの。

E類：青竜刀形石器に類するもの。

⑤石冠類

A類：斧刃状の頭頂部を持ち、正面形状が楕円形に近いもの。

B類：斧刃状の頭頂部の正面形状が上下対称のもの。

C類：斧刃状で傾斜した頭頂部を持つもの。

a : 底面と上下側面の平坦面が連続するもの。

1 : 底面に縁状の高まりがみられるもの。 2 : 底面に溝線などの装飾がみられるもの。

3 : 底面側縁がほぼ平行するもの。 4 : 底面側縁が上部に向かいすぼまるもの。

b : 底面と上下側面の境界が明瞭なもの。

1 : 底面が上部に向かいすぼまるもの。 2 : 底面側縁が平行するもの。

c : 断面が三角形に近く、底面が広いもの。

D類：斧状の傾斜した頭頂部を持ち、基底部が明瞭に張り出すもの。

E類：全体形状が三角柱状のもの。

F類：石冠の類品と認識されるもの。

a : 正面形状が二等辺三角形のもの。

1 : 正面が皿状に凹み、縁が全周するもの。

2 : 正面が皿状に凹み、左右側縁にのみ縁がみられるもの。

3 : 正面が平坦か極弱く湾曲するもの。 4 : 正面が敲打により広く凹むもの。

b : 正面形状が長楕円形に近いもの。

1 : 片端部がわずかにすぼまり、側面観が正面側に弱く湾曲するもの。

2 : 両端部が弱くすぼまるもの。 3 : 正面形が石鏡形に近いもの。

G類：北海道式石冠に類するもの。

a : 使用痕跡が底面側にのみ見られるもの。 b : 使用痕跡が左右両側面に見られるもの。

c : 使用痕跡があまり発達していないもの。

⑥容器状石製品

A類：底面が平坦な皿状の凹みが生じられるもの。 B類：すり鉢状の凹みが生じられるもの。

C類：碗状に凹みが生じられるもの。 D類：回転穿孔痕状に凹みが生じられるもの。

E類：全体形が舟状に生じられるもの。 F類：敲打のみで浅く広い凹みを生じられるもの。

G類：七輪状のもの。

⑦石製垂飾品類

A類：三角形片状耳飾

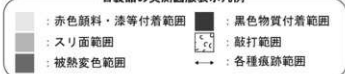
B類：端部に表裏を貫通する孔がみられるもの。

a : 素材形状をそのまま利用するもの。

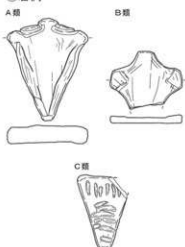
b : 意図的に整形しているもの。

1 : 石斧刃状。 2 : 水滴状。 3 : 菱形。 4 : 楕円・長楕円形。 5 : 勾玉状。 6 : 側縁に沈線。

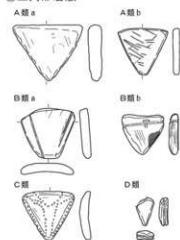
石製品の実測図版表示凡例



①岩偶



②三角形岩版



③円盤状石製品



④石棒・石刀類

B類（端部彫刻型石棒）の形態等属性

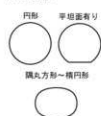
端部の裝飾



正面形の属性



横断面形



D類（石刀類）の各部呼称と形態等属性

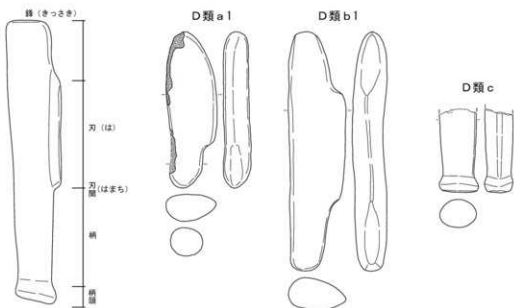


図18 石製品の分類(1)



図19 石製品の分類(2)

C類：表裏を貫通する孔が複数みられるもの。

a：対向する2箇所に孔がみられるもの。 b：3箇所に孔がみられるもの。

D類：長軸端部から表側に貫通する孔がみられるもの。

a：端部の穿孔以外加工がないもの。 b：表面に溝線がみられるもの。

⑧有孔石製品

A類：ヒスイ製で中央部に貫通孔があるもの。 B類：円形～楕円形のもの。

C類：側面視が笠状のもの。 D類：その他の形状。 E類：孔未貫通。

⑨環状石製品

A類：断面が細く円形に近いもの。

B類：側面に沈線が巡るもの。

a：表裏面が無文のもの。 b：表裏面に溝線がみられるもの。

C類：断面が扁平なもの。

a：薄く平坦に整形されているもの。 b：研磨加工が顕著でないもの。

D類：孔が円形でないもの。

⑩擦痕および線刻などがみられる石製品

A類：器体に研磨・擦痕が見られるもの。

a：棒状のもの。 b：その他の形状。 c：擦切痕がみられるもの。

B類：器体に線刻がみられるもの。

a：細い刻線の重ね描きがみられるもの。 b：刻線や孔による文様がみられるもの。

c：格子状の刻線がみられるもの。

C類：極細い線の刻線による文様や図形がみられるもの。

D類：穿孔・擦切・溝線などが複合するもの。

⑪その他の石製品

A類：石製模倣品

a：斧状。 b：槍状。 c：石匙状。 d：脚付石皿状。 e：石棒状。 f：陰部状。

B類：有孔自然礫

a：大珠状。 b：石冠状。

C類：特異な形状の自然礫

D類：瑪瑙や玉髓など半透明できれいな礫

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 堅穴住居跡

水上(2)遺跡で発見された堅穴住居跡の総数は301軒である。このうち55軒は第514集(12軒)、第528集(43軒)で既報告である(図6中の表参照)。本書ではこれを除いた246軒について報告するが、その記載については以下のように行った。

◆「第2節 堅穴住居跡出土遺物」との関係について、本書では頁数の都合から堅穴住居跡の報告を本節と第2節(堅穴住居跡出土遺物)に分割した。主に本節では堅穴住居跡の遺構の記載を中心とし、出土遺物については出土状況と特記事項に留め、遺物個々の説明については「第2節 堅穴住居跡出土遺物」(第2分冊)に譲る。また遺構ごとの出土遺物数量については、第2分冊巻末の「遺構別出土遺物数量表」に示し、特別な場合を除いてこの記載は省略した。また「堅穴住居跡観察表」も第2分冊巻末に示した。併せて参照願いたい。

◆遺構図版について、他遺構との重複関係を示す必要のあるものについては、同一図版にまとめて掲載した。図版の掲載は原則的に遺構番号順としたが、複数遺構を同一図版にまとめたものについては、掲載遺構中のもっとも若い遺構番号で順番となるように掲載している。なお遺構本文説明については、遺構順番とした。

◆遺構名について、既報告の遺構名との重複が生じた5軒(⑥SI1、⑥SI5、⑥SI7、⑥SI8、⑥SI17)については、遺構名の先頭に地点名を冠し、既存の遺構と区別した。

◆整理を経て、①調査時とは異なる遺構名となったもの(振り替え)、②複数の遺構が同一とみなされ、これをまとめたもの(統合)、③遺構として認定しなかったもの(抹消)については、第2分冊巻末の「振り替え・統合・抹消遺構一覧」に示した。

◆遺構の重複状況については、無数の土坑やピットと重複する遺構もあり逐一の記載は煩雑となるため、主要遺構との重複状況や新旧関係のみに留めたものもある。堅穴住居跡と重複する他遺構との新旧関係については、各分冊巻末の遺構観察表に記したので参照願いたい。

◆堅穴住居内のピットの深さは、図中に()括弧書きで記した。

以下では、堅穴住居跡246軒についての概要に触れた後、個別の遺構について記述する。

時期 出土遺物や他遺構との重複状況から推定される時期を示した。出土遺物も無く、かつ他遺構との重複も無い堅穴住居跡は無かったため、すべての住居において、時期が特定できない場合であっても○○以前や□□以降という時期幅で示している。堅穴住居跡の時期は縄文時代前期末葉期(円筒下層d2式)から後期前葉期(壺沢式)までが見られ、特定の土器型式に比定できたものは158軒(64%、表中「住居軒数①」)、土器型式にして二型式の時期幅にまで絞り込めたものは41軒(同「住居軒数②」)で、全体の約8割(199軒)の住居の時期を絞り込めたことになる(住居軒数①+②)。時間的な数量は、円筒下層d2～上層b式までは少なく、上層c～d式に増加する。上層e式ではやや少ないが複林式以降大木10式併行期までは20～30軒程度で推移し、後期初頭～前葉(牛ヶ沢～壺沢式期)には激減し10軒未満となる。もっとも古いのは円筒下層d2式期のもので、土器埋設遺構や斜面捨て場の個体土器

として出土している円筒下層d1式期のものは確認されていない。

分布 竪穴住居跡は遺跡全体に分布するが、地点により粗密がある。なかでも遺跡北側の斜面縁部と遺跡中央の段丘平坦部には特に竪穴住居跡が集中し、最終的な遺跡の景観は、東西方向の二列の帯状の居住域となる特徴がある。遺跡北側の斜面縁部は円筒下層d2～最花式期の竪穴住居跡群で、70軒以上の住居が検出された。捨て場堆積土の拡がりとは分布は概ね一致し、捨て場堆積土中に分布するものもある(第5分冊「第12節捨て場」で詳述)。一方遺跡中央では、東西長80m、南北幅20mの東西方向の列状に110軒以上の竪穴住居跡が集中する。ここでも時期的には北側斜面部とおおむね並行しながら円筒下層d2式～大木10式併行期までの竪穴住居跡が分布する。特にこの集中域では円筒上層d式期までを中心とした竪穴住居跡の上部に榎林式までの盛土遺構が形成された(第3分冊「第8節盛土遺構」参照)。縄文時代中期末葉頃には遺跡西側の段丘縁部に竪穴住居跡の分布が偏り、縄文時代後期初期頃までには遺跡中央の石棺墓群の隣接地に集中するようになる。集落形成以来保持された東西二列の居住域が崩れる大木10式併行期は、石棺墓群の形成と相俟って集落変遷上の大きな画期と言える。なお特定地点に集中して、繰り返し竪穴住居が造られた集落分布の特徴は、図20・21の竪穴住居群の重複概念図にも表れている。

平面形と規模 本遺跡では遺構どうしの重複状況が著しく、また新しい遺構は盛土された黒色土中に形成されることも多いことから、平面形や規模、柱穴配置が明瞭に捉えられた事例は多くはないが、特筆されるものとしては、長軸14mを超える榎林式期の長円形大型住居(SI4040とSI5047)がある。ともに壁周溝に沿って大型柱穴の配置される構造をもち、既報告でも同時期のもの(SI1057)や大木10式併行期(SI3101)の事例が検出されている(第528集)。また平面形が円形で、建て替えを繰り返した結果、最終的に直径9m前後の規模となったSI5073もある。

主軸方向のわかる住居では、向きが真北や真東西になるものより、これから10°前後振れたものが目立ち、長円形住居や炉の長軸方向(◎SI1・52・103・1112・3001・5034等いずれも榎林式以降)等の各所に現れている。痕跡として捉えにくい榎林式以前の様相は不明だが、少なくとも当該期までには主軸方向の10°前後の傾きが表れ、大木10式併行期以降の石棺墓群の配置にも反映されたものと考えられる(第4分冊「第9節石棺墓」参照)。

炉 全246軒のうち143軒の

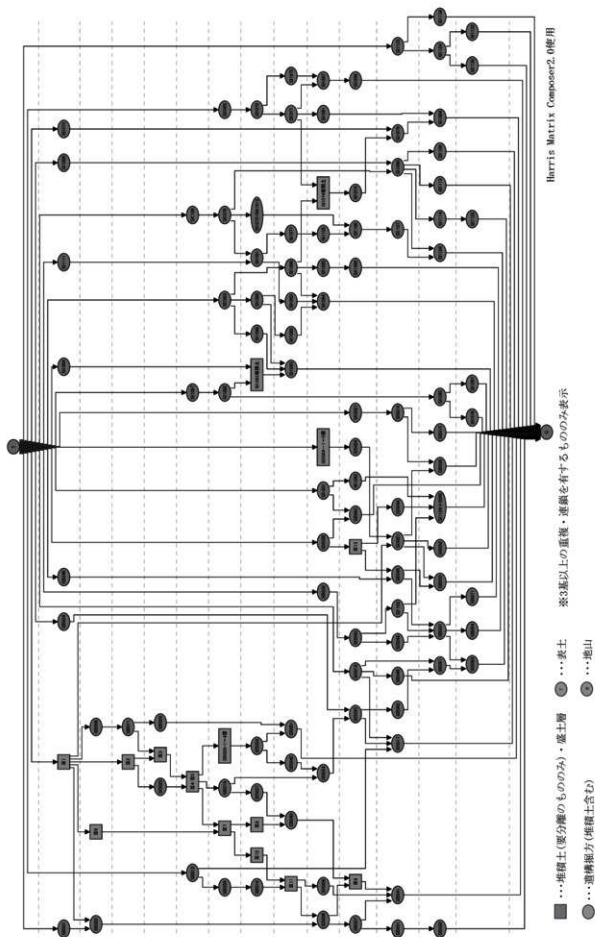
竪穴住居跡で、195基の炉を検出した。炉形態としては地床炉104基、土器埋設炉11基、石囲炉80基を検出し、単一の土器型式に特定できたものの数量(よって住居軒数①に対する数量)を表4に示した。

地床炉は全時期に見られる炉形態で、土器埋設炉は円筒上層b～e式期にほぼ

表4 竪穴住居跡諸施設の時期別数量

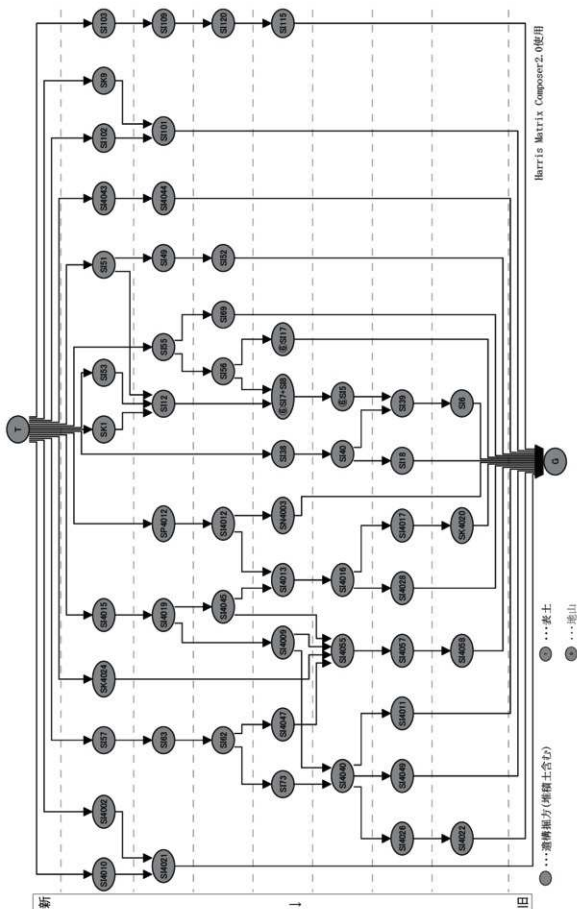
時期	中期前葉						中期中葉		中期後葉		不特定	計
	下層d	上層a	上層b	上層c	上層d	上層e	榎林最花		大木10	併行		
土器型式	6	2	4	15	30	15	27	26	26	5	2	158
住居軒数①												
住居軒数② (複数型式)				8		6		5		2		41
地床炉				6		12				2		
土器埋設炉	4	2	7	4	7	5	21	5	6	2	4	37
石囲炉			2	1	3	2						11
(小型方形)				1	1	1	2	3				3
(大形方形)							1	8	4	1		7
(長方形)						1	1	4	0			6
(複式炉系)								2	1			2
(楕円・隅丸)							3	1	3			1
(不整・小型類)										1	2	1
形態不明					2		2	3	3	1		8
配石								3	1			1
埋設土器(正・倒立)			2		3		1	2				1
埋設土器(横位)				1	3							3
特殊施設	1						1	1	1			1

※数量は単一の土器型式に特定できたもの



遺跡中央の住居群(S11063~1201、S15001~5071)の重複

図20 竖穴住居跡重複概念図(1)



遺跡北側の住居群(SI5~120、SI4002~4058)の重複

図21 竪穴住居跡重複概念図(2)

限定される。なお竪穴住居跡に伴うものではないが、北側斜面で縄文時代中期後葉の石囲土器埋設炉(SN55)を検出しており、本遺跡では唯一の事例である。石囲炉は円筒上層c～浜沢式期に見られる炉形態で、最花式期には増加を見せ、当該期の7割以上の住居で確認される炉形態となる。パリエーションも多様で、形態によって分布の時間的な傾向がある。一辺を1石とする小型方形タイプ(11基)は円筒上層c～最花式期まで見られ、これより大型の方形タイプ(21基)ないしは一辺を長くする長方形タイプ(12基)は、既存の小型方形タイプと一部並行しながら、榎林～最花式期を中心に分布する。またいわゆる複式炉は、焼土遺構や既報告分も含め、榎林～大木10式併行期までの13基を検出している。後期初頭～前葉に見られる「不整・小型礫」とした石囲炉(4基)は、楕円形タイプ(8基)との境界が不明瞭なものもあるが、長円礫や扁平礫を横向きには設置せず、小型の礫を明瞭な掘方を伴わず雑然と設置するもので、楕円形タイプよりも規模は小さい。時間的な連続性を見れば、大局的には方形タイプや楕円形タイプが崩れたものと見ることもできる。

その他の施設 住居内に埋設された土器のうち、被熱痕跡がなく土器埋設炉と見られないものを「埋設土器」とした。円筒上層b～最花式期までの竪穴住居跡12軒で16例(SI57・65・74・1085・1086・1099・1118・1129・5002・5003・5006・5007)を確認した。このうちSI57・5002・5003・5007では2基の埋設土器が検出されている。埋設状況は正立・倒立のほか横位があり、このうち横位は円筒上層c～d式期の6軒7例が確認される。屋外の土器埋設遺構の横位・斜位11例には当該時期のものではなく、時間的に、また空間的にも限定された土器埋設行為として特記しておく。なおSI4006に隣接したSP4226でも似た状況で土器が出土しており、これらと関連する可能性がある。

特殊施設は、床面上に半円の土堤状に土盛りした施設で、土盛の内側にピットを伴うものもある。円筒下層d2式～最花式期の竪穴住居跡5軒で5例を検出している。比較的古いものは竪穴内部に位置し、新しいものは竪穴壁際に位置する傾向がある。

配石は最花式～大木10式併行期の竪穴住居跡5軒で5例(⑥SI1・38・5016・10007・10008)を検出した。大型礫や柱状礫を立てた立石状のもの2例(SI1136、SI10008)、床面上で自然礫を「ニ」や「ハ」字状に並置するもの(既報告第528集で「屋内配石」としたもの)3例(⑥SI1・38・5016)があり、石囲炉と強い相関を見せる。また配石ではないが、竪穴壁の一部に地山の巨石を取り込む事例が複数確認される(SI40(榎林式期)、SI62(最花式期)等)。もともと遺跡の基本層中には多量の巨石が含まれており、壁や床の一部に巨石が崩れた住居はこれだけではないが、SI40では焼失時の炭化物集積層が床面から巨石へ連続し、また巨石はともに長軸方向の基点となる位置にあり、意図的あるいは偶然得たものを効果的に取り込むといったことがあったかもしれない。

⑥SI1(図22)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅧT・U-67グリッドにあり、捨て場堆積土中に位置している。上位は大幅に削平されたものと見られ、確認面付近で床面に相当する層を検出した。このため遺構の平面形は不明で、炉跡と壁周溝のほか、ピットの確認に留まる。当初SI1の遺構名で調査を進めたが、既報告第514集にて登録済みであったため、エリア名を冠した「⑥SI1」として報告する。

【重複】竪穴住居跡との重複関係はない。石囲炉の西側に隣接してSN2が見られる。また直接の重複ではないが本遺構の下層には、円筒下層d式期の埋設土器(SR15・17・107)が位置している。

【**形状・規模**】東側では壁周溝の一部が確認できたが、上部を大幅に削平されているため平面形および規模は不明である。

【**壁・床面**】床面は貼床を敷設することなく、直接捨て場堆積土を床面としている。硬化面は範囲を明示できなかったが、炉の西側周辺でやや硬化した場所がみられる。

【**柱穴・ピット**】堅穴掘り込みがなく、本遺構に確実に伴うピットは明確ではないが、Pit1～14までの13基を本遺構に伴うものと判断した。Pit9・12では柱痕を検出している。

【**炉**】石囲炉1基を検出した。石囲炉の一方に硬化面が付属したいわゆる複式炉系列の石囲炉と見られる。平面形は、南側に開口する逆U字状に配置した石組を、東西方向の石列により区画することで石囲部としている。石は15～40cm程度の円礫、長円礫20個程度を用いており、外側の石列は、東側は意識的に長軸方向を揃えて横向きに埋め込まれているが、北側、西側は扁平でやや小型の石が雑然と並べられている。東西に区画した南辺はやや小振りの石が用いられるが、横向きに整然と埋められている。北東部では石が二列配置された場所も見られる。石は石囲部よりやや大型の掘方を掘って配置されている。石囲部内は北側、南側の二箇所に分かれて被熱している。石囲部南側は一段高く、床面と同じ高さで明瞭に硬化面が見られる。

なお同一平面上の西側隣接地で検出したSN2は、本遺構との帰属が明らかにならなかったため、単独の焼土遺構として第3分冊で報告している。

【**その他の施設**】炉の西側に屋内配石(第518集)を検出した。長軸30cm程度の長円礫2個を、炉の長軸方向とおおむね一致する方位(N-27°-W)に向けて並置する。掘方範囲は明瞭でなかったが、床面を掘り込んで褐色土(図22C-C'第1層)により固定している。

【**堆積土**】検出面付近が床面あり堅穴堆積土は不明確であるが、図22A-A'では第2層が堅穴堆積土で、第3層が石囲炉の掘方(礫設置部)である。第1層と第4層ともに石囲炉関連土層で、上面が硬化し貼床状となっている。

【**出土遺物**】土器は、炉内及びPit1・3・4・7・10～12・14、堆積土全体から出土し、円筒下層d2～最花式の各型式が認められた。

【**小結**】複式炉系列の石囲炉と近接した位置に配石をもつ堅穴住居跡である。時期は炉内及びPit2内出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI3(図23)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北西、ⅧT・U-68グリッドにあり、捨て場堆積土中に位置している。周囲は円筒上層d～e式期までの捨て場堆積土が分布し、これを掘り込んでいる。また北側は攪乱により失われている。

【**重複**】他遺構との重複は見られない。

【**形状・規模**】北側は攪乱により失われているが、残存部からの推定では直径3.0m程度の小型の円形と見られる。床面までの深さは45cmである。

【**壁・床面**】壁は、東側はやや緩やかであるが、他は比較的急角度で立ち上がる。床面は貼床を敷設することなく、直接地山を床面としている。

【**柱穴・ピット**】堅穴西側でピットを2基検出した。

【**炉**】竪穴中央で地床炉を1基検出した。炉は東西に長い長円形で、長軸35cm、短軸20cmである。

【**堆積土**】堆積土は3層に分層した。いずれも竪穴堆積土で、第2・3層は床面直上に堆積した黒みの強い自然堆積土で、第1層とは明瞭に異なる。第1層は40cm近くの厚さのある褐色土で、分層はできず一括性の高い人為堆積土と見られる。

【**出土遺物**】炉内・Pit1から最花式の破片、堆積土では円筒上層d・e式の个体土器・破片が出土した。

【**小結**】竪穴堆積土出土遺物および周囲の捨て場堆積土との層位的関係より、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

⑥SI5 (図23)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北西、ⅧW-70・71グリッドにあり、竪穴の北側は捨て場堆積土を掘り込んでいる。調査段階では東半部を別個の竪穴住居跡(SI26)と捉えていたが、東西で床面標高に差が無いこと、平面や断面で両者の切り合い関係は確認されなかったことから同一の遺構と捉えた。またSI5は既報告第514集にて登録済みであったため、SI26も含めた本遺構を、エリア名を冠した「⑥SI5」として報告する。

【**重複**】南側で⑥SI7+SI8・39と重複し、新旧関係は⑥SI7+SI8よりも古く、SI39よりも新しい。

【**形状・規模**】規模は6.5×4.2mの東西方向に長い長楕円形である。深さは東側で15cm前後であるが、南側は立ち上がり不明瞭であった。

【**壁・床面**】床面は2面検出した。古い床面は図23A-A'第5層下面、新しいものは第2・3・5層を貼りこの上面を床面とする。ともに北側に向かってやや下がっているが、東西方向はおおむね水平である。古い床面は貼床を敷設することなく、南側は基盤層第V層を直接床面とし、北側は捨て場堆積土を床面とする。新しい床面では、炉1の北側が硬化している。

【**柱穴・ピット**】東側でピットを2基検出した。

【**炉**】炉は地床炉4基と、土器埋設炉1基を検出した。古い床面に伴うものは炉4・炉5で、新しい床面に伴う炉は炉1～3である。炉4は床面の基盤層を炉床とし、隣接する炉3は敷設した貼床面を炉床とする。炉1と炉2は同一床面で検出しているが、炉5は新しい段階の床面(図23B-B')を介した炉1の下面にある。炉5は土器埋設炉としたが、炉体土器の内部堆積土には被熱面がなく、周囲が顕著に被熱する。

【**堆積土**】堆積土はA-A'で5層に分層した。第1層が竪穴堆積土で、第2・3・5層が新段階の貼床である。第4層は同段階の炉1の炉床で、第2層は硬化した貼床である。

【**出土遺物**】堆積土から个体土器を含む円筒下層d2・上層e式土器が、炉1内から円筒上層b式土器が出土した。

【**小結**】炉1出土土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層b式期と考えられる。

SI6 (図22)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北西、ⅧV-70グリッドに位置する。

【**重複**】SI39・40と重複し、新旧関係は両遺構よりも古い。

【**形状・規模**】上部は他遺構より失われているが、平面形は2.0×2.0mの小型の円形住居と見られる。

【**壁・床面**】壁は東西の一部が失われている。床面は直接基本層第IV層を床面としている。

【柱穴・ピット】南側にピット1基(Pit2)を検出した。

【炉】竈穴中央やや北寄りで地床炉を1基検出した。25×20cm程度の範囲で被熱している。

【堆積土】堆積土は図22A-A'で2層に分層した。

【出土遺物】堆積土から円筒上層a式の個体土器、円筒下層d2・上層c・d式の破片が出土した。

【小結】堆積土出土土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層a式期と見られる。他遺構との重複状況からもSI39・40(最花式期)以前と見られ、矛盾はない。

⑥SI7+SI8(図24)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅧV・W-71・72グリッドを中心に位置する。調査当初、東側の輪郭をSI7と西側の輪郭をSI8とし、別遺構で調査を進めたが、重複部で新旧関係が追えなかったことから同一の遺構と捉えた。またSI7やSI8は既報告第514集にて登録済みであったため、エリア名を冠した「⑥SI7+SI8」として報告する。

【重複】北側でSI5・55・56、西側でSI39、東側でSI12・51と重複し、新旧関係はSI5・39よりも新しく、その他の遺構よりも古い。このほかSK1にも壊されている。

【形状・規模】他遺構との重複により各所を壊されている。重複が激しく把握できなかった箇所もある。残存部からの推定では、長軸7.0m、短軸は5.0m程度の、北東から南西方向に長軸をもつ長円形と見られる。

【壁・床面】上部が削平されており、床面付近で検出したため壁立ち上がりは不明である。床面は土層を敷設することなく、基本層第IV層を直接床面としている。

【柱穴・ピット】多数のピットと重複するが、本遺構に確実に伴うものは確認していない。堆積土を掘り込むピットはいずれもSP番号で登録している。

【炉】西側で3基(炉1~3)、東側で1基(炉4)の地床炉を検出した。

【堆積土】床面付近で竈穴住居跡を捉えたため、堆積土は不明である。

【出土遺物】堆積土から、円筒下層d2・上層b・c式の土器片が少量出土した。2-図1-17は台付浅鉢の底部~脚部である。円筒上層b~c式と考えられる。

【小結】出土遺物からの時期は不明だが、他遺構との重複状況から、時期は円筒上層c式以前と見られる。

SI12(図25)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅧV-72グリッドを中心に位置する。

【重複】SI51と重複し、遺構上部の東半を壊されるほか、SK1に北西部を壊される。また西側で⑥SI7+SI8と重複するが、新旧関係は本遺構の方が新しい。このほかSI53よりも古い。

【形状・規模】一部で他遺構の削平を受けるものの、遺構の全形はうかがえる。平面形は長軸4.3m、短軸3.0m程度の、北東から南西方向に長軸をもつ長円形の住居と見られる。深さは西側で30cmである。

【壁・床面】壁は一部で他遺構に壊されているが、残存部では外傾し緩やかに立ち上がる。床面は褐色土を全面に敷設し貼床とし、炉1北側では硬化面が見られる。

【柱穴・ピット】本遺構に伴うピットは13基検出した。いずれも貼床を掘り込んでいる。またPit5は

炉2を掘り込んでいる。

【炉】地床炉を2基検出した。炉1は竪穴中央に位置し、炉2は西側に偏る。炉2はPit5に切られている。

【堆積土】堆積土は図25A-A'で2層に分層した。第2層は貼床で、第1層は廃絶後の竪穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土から、円筒下層d2・上層c式の土器片が出土した。

【小結】堆積土より円筒上層c式の大形破片が出土している。これより新しい遺物は含まれず、時期は縄文時代中期前葉の円筒上層c式期と考えられる。

⑥ SI17 (図25)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、Ⅷ X-71・72グリッドにあたり、捨て場堆積土中に位置する。西側にははっきりと確認できず、東側のみ竪穴の輪郭を検出した。

【重複】SI55の壁周溝、SI56、SP332・544と重複し、いずれの遺構にも切られている。

【形状・規模】西半が捉えられず、形状および規模は不明である。残存部では南北方向3.2m程度の規模と見られ、深さ15cmである。

【壁・床面】壁は残存部では外傾する。床面は貼床ではなく、捨て場堆積土を直接床面とする。

【柱穴・ビット】東側の壁際でビットを2基検出した。

【炉】竪穴の東側で地床炉を検出した。被熱範囲は100×70cmと大きい。

【堆積土】堆積土は暗褐色土の単層で、この上部をSI56関連堆積土が覆っている。

【出土遺物】堆積土から、円筒下層d2・上層c式と認められる個体土器と破片が出土した。

【小結】本遺構に確実に伴う遺物はないが、堆積土中からは円筒上層c・d式期までの土器片が確認されており、この時期までには埋没したものと見られる。重複遺構との新旧関係でも、SI56(円筒上層d式期)以前でありこれと矛盾しない。

SI18 (図25)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、Ⅷ U-70・71グリッドを中心に位置する。SI40の南側で弧状の竪穴輪郭を確認し、同竪穴の床面下位を精査したところ土器埋設炉を検出し、これに伴うものと判断してSI18として報告する。

【重複】北側でSI40と重複し、新旧関係は本遺構の方が古い。土器埋設炉はSI40の床面下位で検出している。

【形状・規模】北側は他遺構との重複により失われており、平面形および規模は不明である。残存部での東西方向の規模は2.6m程度で、深さは20cmである。

【壁・床面】壁は南側のみ検出した。床面は基本層第IV層を直接床面としている箇所と炉周辺は範囲を記録できなかったが、やや黄色味の強いシルト土を貼って床面としている。

【柱穴・ビット】竪穴中央でPit1を検出した。床面から掘り込まれている。

【炉】竪穴北側で土器埋設炉を検出した。炉体土器は胴部下半のみの個体であるが、これが構築時の状況を留めたものか、上部の遺構に壊された結果であるのかは不明である。土器内部には炭化物が集積し、土器の周囲がわずかに被熱している。

【堆積土】堆積土は2層に分層した。第1層は竪穴堆積土で、第2層はPit1の堆積土である。

【出土遺物】炉体土器から、円筒上層c～最花式の幅で捉えられる土器が出土した。

【小結】土器埋設炉の時期より、縄文時代中期前葉～後葉の円筒上層c～最花式期と考えられる。

SI 38 (図26・27)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅤU-70グリッドを中心に位置する。同一箇所でも床面を貼り替えたほぼ同規模の堅穴住居跡2軒の重複を確認した。両住居の床面は10～15cm程度の標高差があるが、これを同一住居の新旧と捉えたのは、新段階に帰属する屋内配石が、旧段階の石囲炉を意識した位置に造られているためである。屋内配石S-2は、旧段階の石囲炉の南東辺に連ねるように設置し、これと併行させたS-1は新段階の石囲炉東辺に接続させている。標高差や床面の新旧は見られるが時間の断絶は感じさせず、旧段階の石囲炉を認識できている時間内の造り替えと捉え、両者を新旧段階の所産として報告する。なお出土遺物の取り上げは新旧で分離できなかったため、SI 38の一括遺物として新段階に記述する。

【重複】SI 18・39・40と重複し、いずれの遺構よりも新しい。

SI 38 (新)

【形状・規模】直径3.0m前後の小型の円形住居で、深さ20cmである。

【壁・床面】壁は全面で確認でき、比較的垂直に立ち上がる。床面は旧段階の堅穴を暗褐色土で埋め床面としている。硬化面等は見られない。

【柱穴・ビット】石囲炉に隣接する位置でビット2基、北東部で2基の計4基を検出した。

【炉】堅穴の西寄りでも石囲炉を検出した。規模は内寸で45×40cmの正方形に近い形状である。長軸20～30cm程度の長円礫を8個用い、一边に2個ずつ横に並べている。南西隅では南辺に連なって礫2個が接続する。またこのほか、南東隅では東辺に連なるようにして屋内配石(S-1)を接続させている。石囲炉に掘方はなく、床面敷設(旧段階の堅穴埋土)とともに設置したと見られる。

【堆積土】図27A-A'およびB-B'では、第1層が新段階の堅穴堆積土、第2層が貼床(旧段階の堅穴埋土)である。

【出土遺物】堆積土から、円筒上層a・d・榎林・最花式の土器片が出土した。

SI 38 (旧)

【形状・規模】直径2.5～2.6m前後の小型の円形住居で、新段階の住居よりもやや小型である。深さは15cm程度である。

【壁・床面】壁は全面で確認した。床面は暗褐色土を貼って床面としている。

【炉】堅穴中央でも石囲炉を検出した。炉石は完存していないものと見られ、北東辺および南東辺の一部が失われているが、平面形は内寸40cm程度の正方形と見られる。石囲炉の掘方はなく、貼床とともに礫を設置している。図中では本段階の炉との位置関係を示すため、配石を旧段階の平面図に図化しているが、同配石は新段階の住居に伴うものである。

【堆積土】本段階に関連する土層として、図27A-A'およびB-B'の第3層が炉内堆積土で、第4層が貼床である。

【その他の施設】石囲炉南東隅に接続する位置に、長円礫2個を並置させた配石が見られる。S-1は新段階の東辺に、S-2は旧段階の西辺に連なる位置にあり、新旧の関係性をうかがわせる。

【出土遺物】土器は出土しなかった。

【小結】造り替えのある新旧2段階の竪穴住居跡である。新段階の住居は旧段階の東側一部を拡張し、竪穴部には暗褐色土を貼って床面としている。この際石囲炉も造り直すか、配石は旧段階の石囲炉を意識した位置に設置されている。旧段階に伴う出土遺物はないが、新段階の堆積土では最花式までの土器が出土しており、新段階の時期は縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI 39 (図26)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅧV-70・71グリッドを中心に位置する。SI40の床面の下位で、半円状の落ち込みと地床炉、壁周溝、ピット群検出し、SI39として調査した。

【重複】SI40とは上下で重複するほか、南側でSI38と重複し、新旧関係は本遺構が古い。

【形状・規模】遺構の輪郭は東側しかわからず、西側は壁周溝やピットの分布からの推定である。

【壁・床面】東側はわずかに壁が立ち上がるもの、西側は他遺構の削平により失われている。床は直接基本層第IV層を床面としている。

【柱穴・ピット】本住居に伴うピットとして登録したものは15基である。このうちPit12・13は壁周溝に伴うピットと見られる。南西部に密集する一群はいずれも小規模なピットで、主柱穴を構成したかは不明である。

【炉】竪穴中央西寄りに小規模な地床炉を検出した。

【その他の施設】北側一部に壁周溝と見られる小溝が見られる。

【堆積土】床面付近で検出したため堆積土は不明である。

【出土遺物】堆積土から、円筒上層c・d・榎林・最花式の土器片が出土した。

【小結】堆積土がなく、本遺構に伴う遺物も不明である。他遺構との重複状況並びに出土土器の様相から時期はSI40(榎林式期)以前と考えられる。

SI 40 (図26)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅧU-V-70・71グリッドを中心に位置する。東端には基本層に潜り込んだ巨礫があり、住居はこれを取り込んだものと見られる。

【重複】SI18・38・39と重複し、新旧関係はSI38よりも古く、SI18・39よりも新しい。

【形状・規模】平面形は長軸7.5m、短軸5.6mの東西方向に長い長円形で、東側は深さ30cm程度の掘り込みが確認されるが、西側は削平により壁を検出していない。

【壁・床面】壁は、東側は掘り込みが残っているが、西側は床面付近まで削平され残っていない。一部を除き壁周溝がほぼ全周している。居住時はこの地山礫を取り除かず、竪穴住居に取り込んでいる。床面は、平面範囲は記録できなかったが、炉と東端の巨礫間は硬化面が発達している。

【柱穴・ピット】竪穴内に、本住居に伴うと見られるピットは見られなかったが、壁周溝内のピットは比較的規模が大きく深い。

【炉】竪穴やや西寄りに石囲炉を検出した。内寸90×70cmの大型の楕円形で、長軸20cm内外の礫11個を用いている。石囲炉の掘方はなく、貼床(図26E-E'第4層)敷設とともに炉石を設置している。炉内は顕著に被熱している。

【**その他の施設**】一部を除き壁周溝がほぼ全周する。壁周溝は幅30cm前後であるが、50cm近くなる箇所もある。周溝内には一定間隔でPitが見られる(Pit1~6等)。

【**堆積土**】堆積土は図26A-A'およびB-B'で7層に分層した。第1~4層が堅穴堆積土で、第3層は堅穴東半の床面を一面に覆う炭化物集積層で、焼失建物と見られる。同層は堅穴東端の地山巨礫を直接覆っており、巨礫が堅穴機能時に住居の一部として取り込まれていたことが理解される。

【**出土遺物**】遺構に確実に伴う遺物は出土していないが、堆積土から、円筒下層d2式、上層b~e式・榎林式の土器片が出土した。

【**小結**】東西方向に長い比較的大規模な堅穴住居で、これに伴う石囲炉の規模も大きい。壁周溝内には大型のピットを一定間隔に配置している。床面の炭化物集積層から焼失住居と見られる。堆積土出土遺物は榎林期までの遺物で占められ、この頃には埋没したものと見られる。SI38(最花式期)との重複関係とも矛盾はない。

SI49(図28)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北西、ⅧW-73グリッドを中心に位置する。堅穴落ち込みはなく、2条の壁周溝を検出し、住居の一部と認識した。北側のSI55の壁周溝と接続するようにも見えるが、両者の関係は不明である。

【**重複**】北側でSI55、西側でSI51、東側でSI52と重複し、新旧関係はSI51よりも古くSI52よりも新しい。前述のように北側のSI55の壁周溝に接続するようにも見えるが、両者の新旧関係は不明である。

【**形状・規模**】壁周溝のみの検出で、平面形は不明である。

【**炉**】検出していない。

【**その他の施設**】壁周溝を2条検出した。壁周溝内には小規模なピットが見られる。

【**出土遺物**】時期の特定できる遺物は出土していない。

【**小結**】壁周溝のみ検出した住居で詳細は不明であるが、他遺構との重複状況によりSI51(最花式期)よりも古く、SI52(最花式期)よりも新しいことから、縄文時代中期後葉の最花式期である。

SI50(図29)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北西、ⅧU-74グリッドを中心に位置する。

【**重複**】堅穴住居跡との重複はないが、多数のピットと重複する。床面で検出したピット以外はすべてSP番号を付している。

【**形状・規模**】3.6×3.3m、深さ30cmの円形住居である。

【**壁・床面**】壁は全体が残存し、緩やかに外傾して立ち上がる。床は主に堅穴北半部に褐色土を貼って床面としている。

【**柱穴・ピット**】住居に伴うピットは3基(Pit1~3)検出した。いずれも貼床を掘り込んでいる。

【**炉**】検出していない。

【**その他の施設**】床面を掘り込むピットよりやや大きな規模のものを住居内の土坑として調査した(SK1)。規模は70×60cmの楕円形で、深さは15cmである。

【**堆積土**】図29A-A'で3層に分層した。堅穴堆積土は褐色土の単層(第1層)で、第3層が貼床、第2層が

SK1の堆積土である。

【出土遺物】堆積土から、円筒上層c・d式、覆林式、大木10式併行の土器片が出土したほか、竪穴南東隅で石皿（非掲載）が出土した。

【結】堆積土出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI51（図29）

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅤV-72・73グリッドを中心に位置する。

【重複】SI12・49、SK50と重複し、本遺構が新しい。

【形状・規模】4.8×3.6mの東西に長い長方形で、深さは床面までが15cm、掘方底面までが25cmである。

【壁・床面】壁は全周し、全体的に緩やかに立ち上がる。床は全面に暗褐色土（第5層）を貼って床面とする。硬化面は壁際を除いた中央で発達している。

【柱穴・ビット】竪穴の北西寄りビットを7基検出した。柱穴配置は不明である。中央のやや大きい掘り込みはSK1として調査した。

【炉】検出していない。

【その他の施設】竪穴中央で土坑を1基検出した。75×60cmの楕円形で、深さは30cmである。堆積土は2層に分層した。

【堆積土】5層に分層した。第3・4層はSK1堆積土である。第5層は貼床、第1・2層は竪穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土から、覆林式・最花式を中心とした土器片が出土した。

【結】本遺構に確実に伴う遺物はないが、重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられ、SI12（円筒上層c式期）以降とする重複状況との矛盾もない。

SI52（図28）

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅤV-W-73・74グリッドを中心に位置する。当初北半（旧SI52）と南半（旧SI54）を別々の住居捉えていたが、重複部での新旧関係がなく床面が一致したことから同一の住居と捉え直し、調査を進めた。

【重複】東側でSI49・51と重複し、新旧関係は本遺構の方が古い。

【形状・規模】平面形は長軸6.6mの南北方向に長い卵形の住居である。西側の他遺構との重複部は明瞭に確認できず、短軸方向の規模は不明である。深さは25cmである。

【壁・床面】壁は西側を除いて確認した。比較的急角度で立ち上がる。床面は、南側の特に炉付近では一段低く掘り込み、褐色土（第5層）を貼って床面としている。炉周囲は硬化している。一方北側は捨て場堆積土を直接床面としている。

【柱穴・ビット】本住居に伴うビットは8基検出した。

【炉】竪穴南側で石囲炉を検出した。炉付近は一段深く掘り窪め、礫を多量に含んだ褐色土を貼りながらここへ炉石を設置している。石囲炉は内寸で50×40cmの南北方向にやや長い長方形で、20～30cm程度の長円礫を横に並べて配置している。炉石を固定した褐色土中にも大小の礫が含まれ、厳密にどこまでを炉石として意図的に配置したかはっきりしない部分もあるが、西側以外では礫が多重に並べられたようにも見える。特に南辺では同規模の礫を立てて設置している。炉石はいずれも顕著に被熱し

ている。

【**堆積土**】図28A-A'では7層に分層した。第1・2層および第6・7層は堅穴堆積土で、第3・4層は炉内堆積土である。第5層は一段深い掘り込み部に炉石を設置し褐色土を充填した貼床である。

【**出土遺物**】堆積土からは最花式を中心とした土器片が出土した。

【**小結**】石囲炉をもつ南北に長い卵形の住居である。重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI53 (図29)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北西、段丘斜面の落ち際に位置し、VIII・V-72・73グリッドを中心に分布する。北側は明瞭に捉えられなかった。

【**重複**】北側でSI12と重複し、本遺構の方が新しい。

【**形状・規模**】北側は明瞭に捉えられず不明であるが、残存部での規模は3.6×2.9mの南北方向に長い長円形と見られる。主軸は北西方向へ向いている。

【**壁・床面**】壁は北側を除いて残存し、全体的に緩やかに立ち上がる。床は暗褐色土(第2層)を全面に貼って床面としている。炉の北側で硬化面が見られる。

【**柱穴・ビット**】炉周囲の床面でビットを5基検出している。

【**炉**】地床炉を1基検出した。被熱の程度は極めて弱い。

【**堆積土**】2層に分層した。第2層は貼床で、第1層は堅穴堆積土である。

【**出土遺物**】堆積土から、円筒上層c・d・e各型式の土器片が出土した。

【**小結**】本遺構に確実に伴う遺物はないが、堆積土中から円筒上層d～e式の縄文土器片が多数出土し、SI12(円筒上層c式期)よりも新しいとする重複状況とも矛盾はない。よって時期は円筒上層c式期以降で、同d式期頃には埋没したものである。

SI55 (図30)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北西、VIII・X-72グリッドにあたり、捨て場堆積土中に位置する。堅穴掘り込みはないが、炉と周囲の壁周溝からなる。北側の円形の壁周溝とここから派生する南側の半円状の壁周溝からなる。両者の関係は押さえられなかったが、円形の壁周溝に半円形の壁周溝が取り付く平面状況から、一連の遺構と見なしSI55として調査した。

【**重複**】SI56・69と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。

【**形状・規模**】平面形は、住居範囲を円形の壁周溝までと捉えたとき、3.8×2.3mのやや東西に長い楕円形で、南側の半円形部までと捉えたとき、5.4×3.5mの南北方向に長い長円形となる。

【**壁・床面**】検出面付近で炉が見られたことから、これが床面付近であったものと思われる。床は敷設することなく、捨て場堆積土を直接床面としている。

【**柱穴・ビット**】住居範囲にビットは見られないが、壁周溝内を一定間隔にビットが見られる。

【**炉**】円形の壁周溝の範囲内に地床炉が見られる。南に大型竈が隣接するが、これは住居構築以前の捨て場堆積土中に包含されているものである。

【**出土遺物**】周溝内から円筒上層b・c式、貼床内から円筒上層d式、堆積土全体から円筒上層c・d式

の土器片が出土した。また床面付近で石皿2点が出土した。

【小結】地床炉と壁周溝からなる住居跡で、竪穴掘り込みは検出していない。遺構に明確に伴う時期決定資料を欠くが、捨て場堆積土形成後のものである。周囲では円筒上層e式期までの捨て場堆積土を確認しており、時期はこれ以後のものと見られる。

SI56 (図31)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅧW・X-72グリッドにあたり、捨て場堆積土上の遺構である。西側は明瞭に確認できなかった。

【重複】⑥SI7+SI8とSI55と重複し、SI55よりも古く、⑥SI7+SI8よりも新しい。

【形状・規模】西半は確認できなかったため形状は不明である。残存部では南北方向の規模が3.4mである。検出面が北へ向かって緩やかに下がっているため、南側では掘り込みがあるが、北側ではこれが見られない。

【壁・床面】南側は暗褐色土で床を貼っている(図31A-A'第7層)。

【柱穴・ビット】竪穴内のSP番号のビットは本遺構の堆積を掘り込んだ、新しい時代のビットで、本遺構に直接伴うビットは明らかにできなかった。

【炉】竪穴中央に地床炉を2基検出した。北側が炉1、南側が炉2で、一部重複し炉2の方が新しい。炉1は平坦な床面が直接被熱するが、炉2は火床面がすり鉢状になっている。

【堆積土】第7層は貼床、第1層は炉内堆積土である。

【出土遺物】堆積土から、円筒下層d2・上層e・dの各型式の土器片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI57 (図30)

【位置・確認】遺跡範囲の北西、ⅧX・Y-74グリッドにあたり。北側は捨て場堆積土と重複する。石囲炉を取り囲む壁周溝を検出し、それぞれの関係性は明らかにできなかったが、これらを一連の遺構とみなしSI57として調査した。

【重複】SI62・63と重複し、本遺構の方が新しい。

【形状・規模】石囲炉周囲に壁周溝が何重にも取り囲んでいる。このうちもっとも小規模なものは、3.3×1.9mの東西にやや長い楕円形である。壁周溝の最大範囲では、5.4×3.5mの南北方向に長い長円形である。

【壁・床面】検出面付近で炉が見られたことから、これが床面付近であったものと思われる。床は敷設することなく、捨て場堆積土を直接床面としているが、石囲炉には掘方が見られる。

【柱穴・ビット】壁周溝の範囲内にはビットが見られるが、このうちSP番号を付したものは重複状況から本遺構に伴わないと判断したものである。これ以外の本住居に伴うビットを石囲炉周辺で4基(Pit1~4)検出した。このうちPit4とPit2では土器が出土し、それぞれ第1号と第2号埋設土器として後述する。

【炉】最小の円形の壁周溝範囲内で、石囲炉を1基検出した。炉石の遺存状況が悪く、旧状を留めたものは北東部の4石程度である。残存部では長円の扁平礫を、長軸方向を横に向けて立て並べている。

石囲炉は掘方をもちこの中へ炉石が設置されている。炉内は北側に被熱部が見られる。

【**その他の施設**】石囲炉の西側隣接地で埋設土器を2基検出した。第1号埋設土器は、石囲炉の南西隅に位置し、Pit4を掘方にもつ。石囲炉のやや上位にあり、新しい遺構の可能性もある。土器はピット内に浮いた状態でやや斜位に据えられている。上部は削平のため遺存していない。第2号埋設土器は石囲炉の北側に隣接し、Pit2を掘方にもつ。土器は掘方底面に正位に据えている。

【**堆積土**】堅穴堆積土は見られなかった。

【**出土遺物**】貼床・床面・Pit3・12堆積土から榎林・最花式が、周溝内堆積土から円筒下層d2・上層c・dの各型式の土器片が出土した。2-図6-1他はPit1・2に埋設された最花式土器の胴～底部であるPit2とPit4は土器を埋設したPitで、時期はともに最花式である。

【**小結**】石囲炉と壁周溝からなる住居で、壁周溝の状態から数回の造り替えがあったと見られる。石囲炉に隣接した土器を埋設した2基のピット出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。なお壁周溝中の出土遺物の最新時期も最花式である。

SI59 (図31)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北西、ⅧX-73グリッドを中心に位置する。円形の壁周溝とこの北側の、北東方向に延びる溝をSI59として調査した。北側の溝はSP538付近から派生するように延びていたため、拡張等を想定しての遺構認識であったが、検出面は北側の溝がやや低く、単独の溝の可能性もある。壁周溝内に収まり、堆積土と同じくするピットは壁周溝内Pitとしたが、この条件に当てはまらないものはSPとして調査している。

【**重複**】多数のピットと重複する。炉や貼床を伴わない壁周溝のみの遺構であったため、これらのピットのSIへの帰属は不明である。

【**形状・規模**】壁周溝の平面形は、3.3×3.0mのやや東西方向に長い楕円形である。北側の溝は壁周溝内Pit1までで途切れ、北側は本来どのような形状であったか不明であるが、北側の壁周溝内Pit1と南側の壁周溝内Pit2までの距離は4.5mである。

【**壁・床面**】壁や床面は検出していない。

【**柱穴・ピット**】楕円形範囲の壁周溝の内側には9基のピット(SP)が見られるが、先述のとおり帰属関係は不明である。

【**炉**】検出していない。

【**出土遺物**】貼床・Pit2・周溝内からは円筒上層a～d式、床面から円筒上層a・e式の土器片が出土した。2-図6-12は本住居とSI57のいずれに伴うか不明であったが、土器型式からSI57に伴っていたと考えられる。

【**小結**】遺構に確実に伴う遺物はないが、壁周溝内では最花式の破片が出土しているため、時期はこれ以降である。

SI62 (図32)

【**位置・確認**】遺跡の北西部の段丘縁辺にあたりⅧX・Y-74・75グリッドに位置する。遺構の上部は削平されており、南側は検出面付近が床面である。

【重複】北側でSI63・73・4040・4047と重複し、新旧関係はSI73・4040・4047より新しく、SI63より古い。

【規模・形状】北半はSI63に壊され全容が不明であるが、南北に長い楕円形と考えられる。残存部での長軸は7.5mで、短軸は7.0mである。

【壁・床面】削平により壁の立ち上がりは検出できなかったが、壁周溝を検出している。残存部を除けば壁周溝は途切れず全周している。途中途中で大小のピットを伴っている。幅は平均で30cm前後であるが、南側では80cmの箇所もある。床面は炉付近で貼床を検出した。その他の部分では基本層第IV層を直接床面とし、北側へやや下がっている。

【炉】堅穴中央で石囲炉を1基検出した。北側はSI63に壊されている。残存部からの推定では、平面形状は方形を基調としていたものと思われ、20cm前後の細長い礫を主体にこれより小型の円礫、角礫を用いる。東西方向の内寸は91cmで、炉内には地山礫である大型の角礫が顔を出し、被熱赤変している。掘方は貼床敷設後、炉石部分のみを溝状に掘削している。

【柱穴・ピット】壁周溝底面と床面から27基検出した。壁周溝内にピットが並ぶほか、堅穴南側にピットが集中している。

【堆積土】亜角礫をやや多く含み、また炭化物を少量含む暗灰黄色土を主体とする。堆積原因は判断できなかった。

【出土遺物】床面直上を含む堆積土中から、最花式を中心とする土器片が出土した。

【小結】重複関係及び床面直上出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI63 (図33)

【位置】遺跡北西部の段丘縁辺にあたり、ⅧY-74・75グリッドに位置する。捨て場堆積土精査中、亜角礫を含む暗褐色土の落ち込みとして検出した。

【重複】SI62・73・4040より新しく、SI57よりも古い。

【規模・形状】北部が風倒木痕に壊され全形は不明であるが、東西5.7m、南北は推定で3.7mの東西にやや長い楕円形と見られる。深さは67cmである。

【壁・床面】壁は北側を除く全体で確認した。全体的に外傾しており、45度前後で立ち上がる。床は、堅穴中央部は基盤層第IV層を直接床面とするが、南半の壁際はテラス状の高まりがある(後述)。

【炉】堅穴中央やや北壁寄りです囲炉を1基検出した。平面形は南北に長い長方形で、規模は内寸で55×40cmである。20～30cm程度のやや大型の長円礫と10cm前後の礫を組み合わせている。礫は設置部だけをドーナツ状に掘り込んだ掘方内に設置し、北辺には最大の礫を、また東西辺にもこれに次ぐ大きさの礫を配置し、南辺は小型の礫をまとめている。炉内には炭化物がみられ、顕著に被熱する。被熱面の深さは6cm程度である。

【その他の施設】南半の壁際は、幅60cm前後、高さ20～30cm程度のテラス状の高まりがある。基盤層に亜角礫や円礫を集積し暗褐色土を盛る構造で、上面が堅く締まっている。

【堆積土】図33A-A'では11層に分層した。第1～5層は亜角礫を含む暗褐色土を主体とする堅穴堆積土で、第6層以下が堅穴構築に伴う土層である。第6層はPit6の堆積土、第7～11層はテラス状施設である。

【出土遺物】堆積土中から、最花式を中心とする個体土器、土器片が出土した。

【**小結**】堆積土出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI 64 (図33)

【**位置・確認**】遺跡北西部の段丘斜面中にあたり、ⅧY-70・71グリッドに位置する捨て場堆積土中の住居で、トレンチ調査中断面観察において、堅穴に相当する捨て場堆積土中の掘り込みと貼床に相当する第5層を捉え、平面的に検出した。斜面下方に相当する北側は土層が失われているほか、西側および東側の一部は土層を捉えられず、堅穴輪郭が不明である。

【**重複**】SP781が貼床を切っている。その他の重複遺構はないが、捨て場堆積土中の住居である。

【**形状・規模**】堅穴の輪郭を捉えられず、平面形・規模ともに不明である。貼床は南北3.0m程度の範囲で確認している。

【**壁・床面**】壁は南側の一部の検出に留まる。図33A-A'では急角度に立ち上がる堅穴壁が捉えられている。床は東側で半円状の貼床範囲を検出している。

【**柱穴・ビット**】本遺構に明確に伴うビットはない。

【**炉**】堅穴東側で地床炉を1基検出した。直径20cm程度の椀形範囲が被熱している。

【**堆積土**】捨て場堆積土中に掘り込まれた住居で、A-A'第1～4層が堅穴構築土、第5層が貼床である。同図中の第A～M層は捨て場堆積土で、第A～G層は堅穴が埋まりきった後、また第H層以前は堅穴構築以前の土層である。

【**出土遺物**】堆積土中から円筒下層d2・上層d・e式の個体土器と破片が出土した。2-図8-2は器形・口縁部文様に大木8a式の影響が顕著に認められる個体である。

【**小結**】堆積土出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期と考えられる。

SI 65 (図34)

【**位置・確認**】遺跡北西部の段丘斜面中にあたり、ⅧX-69グリッドに位置する捨て場堆積土中の住居である。当初平面的には確認できずいたが、南側に隣接するSI67の断面精査中に、同遺構と異なる立ち上がりを断面上で確認し、堅穴住居跡として認識した。なお西半は明確に捉えられなかった。

【**重複**】南側でSI67と隣接し、本遺構の方が新しい。

【**形状・規模**】西半が捉えられなかったため、形状および規模は不明である。残存部では南北3.1mの半円状で、深さ70cmである。

【**壁・床面**】図34A-A'断面では、壁は比較的急角度で立ち上がる。床面はやや北側に下がっており、炉と埋設土器周辺で硬化面が見られる。

【**柱穴・ビット**】床面で2基のビットを検出した。いずれも貼床を掘り込んでいる。

【**炉**】堅穴の東壁寄り地床炉を1基検出した。20×15cmの小規模範囲で被熱している。

【**その他の施設**】堅穴の中央付近で円筒上層b式の埋設土器を検出した。土器がそのまま取まる程度のビット状の掘方内に土器の胴部上半までを埋め、貼床設置とともに口縁部付近まで埋めて設置している。土器内は3層に分層されたが、被熱の痕跡はうかがえない。

【**堆積土**】A-A'では4層に分層した。いずれも堅穴堆積土で第3層は炭化物をやや多く含んでいる。

【**出土遺物**】埋設土器には円筒上層b式の深鉢が用いられていた。堆積土出土遺物では円筒上層c・d式

期の土器片が出土している。

【**小結**】埋設土器を伴う堅穴住居跡で、時期はこの土器から円筒上層b式期と見られ、同c・d式期にかけて埋没したものと見られる。

SI66(図31)

【**位置・確認**】遺跡北西部の段丘斜面中にあたり、IXB-73グリッドに位置する捨て場堆積土中の住居である。当初13ベルトの断面観察中には、本住居に相当する部分に堅穴住居の掘り込みを検出できなかったが、捨て場堆積土精査中、地床炉とこれに伴う貼床範囲を検出したこと、またここから周囲の捨て場堆積土より新しい時期の遺物が出土したことから、捨て場堆積土中に掘り込まれた堅穴住居跡の存在を想定した。再度断面観察を進めたところ、捨て場堆積土中に掘り込まれた堅穴住居を断面でも確認するに至った。なお斜面下方にあたる北側は土層が失われている。

【**重複**】他遺構との重複はないが、捨て場堆積土を掘り込んでいる。

【**形状・規模**】北側は失われており平面形は不明である。残存部での規模は東西3.7m、深さは図31A-A'断面で60cmである。

【**壁・床面**】壁は北側が失われているが、残存部では外傾して立ち上がる。床面は13トレンチ西側の炉付近を中心に貼床が見られる。A-A'断面には表れていないため、トレンチ内で収束したものと見られる。

【**柱穴・ピット**】本住居に伴うピットは検出していない。

【**炉**】西側で地床炉を1基検出した。30×20cmの範囲で被熱している。

【**堆積土**】A-A'断面で4層に分層した。第1層と下位の第2～4層の土質が明瞭に異なる。第2～4層は礫をあまり含まない比較的緻密な暗褐色シルト土であるが、第1層はしまりが弱く、大小の礫を多量に含んだ黒褐色土である。同断面のアミふせ部は捨て場堆積土で、第2a・b層（縄文時代中期中葉頃）を掘り込んでいる。

【**出土遺物**】掘方、床面直上を含む堆積土から、円筒上層e式を中心とする個体土器や破片が出土した。炉付近の床面直上から円盤状石製品が出土した。

【**小結**】縄文時代中期中葉頃までの捨て場堆積土を掘り込んだ、円筒上層e式期の堅穴住居跡と考えられる。

SI67(図34)

【**位置・確認**】遺跡北西部の段丘斜面中にあたり、VIIIW-69グリッドに位置する捨て場堆積土中の住居である。調査当初は平面的に確認できず、西半の記録はできなかったが、図34A-A'において、捨て場の斜面堆積とは異なる傾きで、周囲の捨て場堆積土よりも新しい時期の個体土器(2-図11-1・円筒上層e式)を検出したため、改めて断面を精査した結果、堅穴掘り込みを確認するに至った。

【**重複**】北側でSI65と重複し、同遺構に壊されている。

【**形状・規模**】西半は明確に捉えられず、東側のみしか検出できなかったため平面形および規模は不明である。堅穴の深さは60cmである。

【**壁・床面**】壁は外傾して立ち上がる。床は捨て場堆積土を直接床面としており、貼床等は見られない。

【炉】検出していない。

【堆積土】A-A'で5層に分層した。第1～3層は堅穴堆積土で、第4・5層は床面から掘り込んだビット状の落ち込みの堆積土である。

【出土遺物】第2層上面で円筒上層c式の个体土器(2-図11-1)が、斜面傾斜とは異なる傾きで出土している。また堆積土第3層から、円筒下層d2式の破片が出土した。

【小結】堅穴全形を捉えられず、また諸施設等も確認できなかったが、个体土器(2-図11-1)の出土状況は、捨て場中に堅穴が掘り込まれ、この窪地に土器が廃棄されたことを示している。時期は、同土器より円筒上層c式期以前と考えられる。

SI 69 (図35)

【位置・確認】遺跡北西部の段丘縁辺にあたり、Ⅷ X-72グリッドを中心に位置する捨て場堆積土中の住居である。斜面下方の北側は、図35A-A'断面の第2層(人頭大の自然礫集積層)が本住居の堅穴堆積土(第1層)を被覆した状態で、これを除去した下位ではすでに本遺構の堅穴失われていたことから、廃絶後の比較的早い段階で北側は失われ、大型の自然礫集積層により覆われたようである。

【重複】直接の重複関係はないが、上層にSI55が位置する。

【形状・規模】北側は失われているため、全形は不明であるが、残存部では東西3.0m程度の円形住居と見られる。

【壁・床面】壁は南半が残存し、15cm程度立ち上がる。床面は炉より北側では残っていない。基本層第IV層を直接床面としている。

【柱穴・ビット】本住居に伴うビットは見られない。

【炉】堅穴中央やや東寄りに石囲炉を1基検出した。小型の石囲炉で20cm前後の長円礫4個で方形に配置している。規模は内寸で25×18cmである。

【堆積土】堅穴堆積土は褐色土の単層である。層順が逆転するが、第2層は第1層を覆う、本住居廃絶後に堆積した自然礫集中層である。遺物をほとんど含んでおらず、基盤の砂礫層(第V層)を掘り返した掘削土のようなものと見られる。

【出土遺物】堆積土中より円筒上層d式の破片が出土している。

【小結】出土遺物およびSI55(円筒上層e式期以降)との新旧関係により、円筒上層d式期頃には廃絶したものと見られる。

SI 71 (図34・35)

【位置・確認】遺跡北西部の段丘斜面中にあたり、Ⅷ Y-71グリッドを中心に位置する捨て場堆積土中の堅穴住居跡である。当初、トレンチを先行させ土層堆積状況を確認したが、断面上では明確に堅穴住居の存在を確認できなかった。また平面的にも堅穴輪郭を明確に捉えられず捨て場堆積土を精査していたが、南側でSI77を掘り込む弧状の輪郭を検出し、この範囲内で地床炉2基と貼床を検出したため、堅穴住居跡と捉えた。

【重複】北側でSI77と重複し、本遺構の方が新しい。

【形状・規模】4.6×3.5mの東西にやや長い。

【壁・床面】床面付近で検出したため、壁は検出してない。床面は2基の炉周囲を中心に明瞭な貼床を検出している。

【柱穴・ピット】ピットは2基(Pit2・Pit3)を検出した。Pit2は竪穴南寄りに位置し貼床を掘り込んでいる。Pit3は東側壁寄りに位置し、褐色土で埋められたピットの検出面上では敲磨器(凹敲)1点と剥片が出土している。また傍らの床面直上では円筒上層b式の小型深鉢が倒立している(いずれも非掲載)。

【炉】竪穴西寄り(炉1)と東寄り(炉2)に地床炉を2基検出した。炉1は被熱面が北側に向かって下がっている。

【堆積土】D-D'で2層に分層した。第1層が竪穴堆積土で、第2層が貼床である。

【出土遺物】床面直上で円筒上層b式の土器が出土したほか、Pit3検出面で敲磨器(凹敲)が1点、剥片石器1点が出土している。

【小結】南側でSI77と重複する弧状のプラン内で地床炉2基と貼床を検出したことから竪穴住居跡と認定したが、壁が明瞭に立ち上がらない、貼床状の堆積土と炉1の被熱面が地山傾斜に沿った北向きに下がっているなど、これと断定できない状況も見られる。時期は出土土器より円筒上層b式期と考えられる。

SI73(図36)

【位置・確認】遺跡北西部の段丘縁辺、IXA-75グリッドを中心に位置する。半円状の壁周溝とこれに付随するピット12基からなる。斜面である北側は壁周溝が途切れている。

【重複】SI62・63・4040と重複し、SI4040よりも新しくSI62・63よりも古い。

【形状・規模】北側が失われているため平面形及び規模は不明であるが、残存部からの推定では、直径7.8m程度の円形であったと見られる。

【壁・床面】他遺構との重複により壁および床面は捉えられなかった。

【柱穴・ピット】壁周溝に関わる位置で12基検出した。Pit2・8が小規模であることを除けばピットはいずれも深い。

【炉】検出してない。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2式、榎林式の土器片が出土している。

【小結】壁周溝の出土遺物の最新時期は榎林式で、SI62・63(ともに最花式期)以前、SI4040(榎林式期)以降とする他遺構との重複状況とも矛盾しない。以上より時期は縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI74(図35)

【位置・確認】遺跡北西部の段丘斜面中にあたり、IXC-71グリッド中に位置する捨て場堆積土中の竪穴住居跡で、褐色土の落ち込みとして検出した。段丘斜面中でも比較的急勾配の地点にあたり、斜面下方の北側は失われている。

【重複】遺構との重複はないが、捨て場堆積土中に掘り込まれている。

【形状・規模】北側は失われているため全形は不明だが、残存部では東西1.8m程度の非常に小型の円

形住居だったものと見られる。

【壁・床面】壁は急斜面を切り込んだ南側は40cm程度立ち上がる。床は敷設することなく基本層第IV層を直接床面としている。

【柱穴・ピット】本遺構に伴うピットは見られない。

【炉】竪穴中央やや北寄り、埋設土器を検出した。被熱痕跡がなく、土器内堆積土に炭化物等も含まないことから、埋設土器として後述する。

【その他の施設】竪穴中央やや北寄り、埋設土器1基を検出した。床面に土器より一回り以上大きな掘方を掘り、この底面に完形の土器を設置し、黄褐色土で埋め固めている。土器内は黒褐色土の単層が堆積している。

【堆積土】断面図として記録していないが、褐色土である。

【出土遺物】円筒上層b式の埋設土器が出土した。

【小結】比較的急勾配の段丘斜面中に掘り込まれた小型の住居である。時期は埋設土器により円筒上層b式期である。

SI76 (図35)

【位置・確認】遺跡範囲の北西部の段丘斜面中にあたり、IXA-69グリッドを中心に位置する捨て場堆積土中の竪穴住居跡である。捨て場堆積土掘削中、弧状の褐色土範囲と硬化面を検出したため、炉やピットはないが竪穴住居跡として調査した。斜面地である北側は失われている。

【重複】遺構との重複関係はないが、捨て場堆積土を掘り込んでいる。

【形状・規模】北側は失われており平面形および規模は不明であるが、残存部での東西は約2.7mである。

【壁・床面】壁は南側のみ残存し、緩やかに立ち上がる。床は残存部の全面に褐色土や暗褐色土(第1～3層)を貼って床面としている。壁際を除く範囲で硬化が見られる。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】硬化面を検出した段階で竪穴住居跡として認識したので、堆積土は不明である。図35A-A'第1～3層はいずれも貼床と見られ、第1層上面が硬化している。

【出土遺物】西壁の第3層から、円筒上層c式の土器破片が出土した。

【小結】貼床内の最新遺物(円筒上層c式)ならびに第3層出土土器(円筒上層c式)から時期は円筒上層c式期と考えられる。

SI77 (図34・35)

【位置・確認】遺跡北西部の段丘斜面中にあたり、VIII-X-71グリッドを中心に位置する捨て場堆積土中の竪穴住居跡である。竪穴輪郭は明確に捉えられず、捨て場堆積土を精査中に地床炉とこの周囲に貼床を検出した。

【重複】南側でSI71と重複し、本遺構の方が古い。このほか北側でSP962・995と重複し、本遺構を掘り込んでいる。

【形状・規模】北側で弧状の堅穴輪郭を捉えられたが、ほかの平面範囲は不明である。

【壁・床面】床面付近で住居と認識したため、壁の立ち上がりは不明である。床は地床炉を中心に貼床が見られる。

【柱穴・ビット】本遺構に伴うビットは検出していない。

【炉】地床炉を1基検出した。浅い皿状の掘方を伴い、褐色土が堆積したこの上面が被熱面となり、30×20cmの範囲で被熱している。

【堆積土】床面付近で検出したため、堆積土等是不明である。

【出土遺物】床面より石槍1点(非掲載)、岩偶1点(2-図146-8)が出土したほか、堆積土下層から円筒上層a式の个体土器、堆積土から円筒下層d2～上層a式の破片が出土した。

【小結】堅穴掘り込みはなく、地床炉およびこの周囲の貼床から認定した住居跡である。時期は床面付近出土遺物から円筒上層a式期には廃絶したものと見られ、SI71(円筒上層b式期)との重複状況とも矛盾しない。

SI82(図38)

【位置・確認】遺跡北西部の段丘平坦部、ⅧP-71グリッドに位置する。明確な掘り込みは見られなかったが、褐色土の楕円形範囲(破線部)と焼土の存在から堅穴住居跡として調査を進めた。周囲は主に縄文時代中期後葉期以降のビット群が分布する地点で、SP627・703・704・752など一部に大木10式併行期以降のものも含まれる。本遺構の掘り込みが浅くこれらのビット群との新旧関係や住居への帰属関係は明らかにし得なかったものの、炉が掘り込まれた様子は無いことから、直接重複するSP683(中期後葉)以降と判断される。

【重複】大量のビット群と重複し、新旧関係は前述のとおりである。堅穴住居跡との重複関係はない。

【形状・規模】明確な掘り込みが確認されず平面形および規模は不明であるが、褐色土の円形落ち込み範囲の規模は、4.8×4.2m程度の楕円形である。

【壁・床面】壁および床面は明確にわからなかった。

【炉】褐色土の楕円形範囲の中央やや南寄りに地床炉を1基検出した。80×50cmの長円形、厚さ15cmの範囲で被熱する。

【堆積土】図38A-A'第1層は楕円形範囲の褐色土の残存である。

【出土遺物】堆積土から円筒上層d式の土器破片が1点出土した。

【小結】堆積土からは円筒上層d式の土器片が出土しているが、周囲のビット群との重複状況から時期は榎林式期以降と考えられる。

SI101(図37・38)

【位置・確認】遺跡北西部の段丘斜面中にあたり、ⅧW・X-66・67グリッドに位置する。地形的には斜面下位の、比較的傾斜が緩やかな地点にあたる。本遺構中央を東西に分断する位置に3ベルトが設定されているが、同ベルトの土層堆積状況観察時点では遺構の認識はできなかったが、平面的に掘り下げていく過程で、褐色土範囲とこの下位より焼土を確認したため、堅穴住居と認識して調査を実施した。

【重複】西側をSK9、南側をSI102(ともに円筒上層c式)に壊されている。このほか北側は後世の削平により遺構上部が失われている。

【形状・規模】他遺構との重複のため、南北方向の規模は不明である。残存する東西方向は長軸5.4mで、検出面からの深さは、床面までが15cm、掘方底面までが35cmである。

【壁・床面】壁は東西のみわずかに残存している。床は10～15cmの厚さで黄褐色土を全面に貼って床面としている。東半部では硬化面を確認した。

【柱穴・ピット】炉1の東側で小規模なピットを1基検出した。

【炉】竪穴中央と竪穴北側で地床炉を2基検出した。炉2は北側に偏するが炉1とは同一の貼床上に形成されており、本遺構の炉と判断した。炉1は炉2より規模が大きく、しっかりとした被熱面が形成されている。

【堆積土】図37C-C'で3層に分層した。第3層上面が床面で、第1層が竪穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土下層の床面からやや浮いた位置で縄文時代中期後葉の土器片(2-図12-4)が出土しているが、遺構の重複状況から時期を示す資料ではない。

【小結】捨て場中に掘り込まれた竪穴住居跡で、捨て場堆積土の最下層の、地山直上で検出した。縄文時代中期後葉の土器片を含むが、SI102やSK9(ともに円筒上層c式期)に掘り込まれることから、これ以前の住居である。

SI102(図37・38)

【位置・確認】遺跡北西部の段丘斜面にあたり、ⅧW-66・67グリッドに位置する。地形的には斜面と下位の段丘平坦面との地形変換점에立地した、捨て場堆積土中の竪穴住居跡である。3トレンチの斜面下で、基盤岩(砂子瀬層)を平坦に掘削した面を検出したため周囲を精査したところ楕円形状の落ち込みを確認した。北側の土坑状の落ち込み(SK9)との堆積土や出土遺物の類似から、当初は本遺構を土坑(SK8)として調査を進めたが、竪穴中央で炉を検出したことから、SI102として報告する。

【重複】北側でSI101、SK9と重複する。SK9とは堆積土が連続し、出土遺物の様相も大きく変わらないことから、構築の前後関係は不明だが同じ頃には廃絶していたものと見られる。SI101とは新旧関係があり、本住居が同遺構を掘り込み、壊している。

【形状・規模】東西5.4×南北3.8mの東西に長い長円形住居である

【壁・床面】捨て場堆積土中に掘り込まれ、廃絶後廃棄層によりバックされたことで後世の改変から免れたこと、またトレンチ調査で発見し、比較的上部で平面的に検出できたことにより、捨て場堆積土中に掘り込まれた竪穴住居の壁が良好に捉えられた。壁は全体的に40～60cm程度の高さで残存しているが、斜面部のため南高北低に残存し、図37B-B'断面では、床面から想定される掘り込み面までが1m近く立ち上がることがわかる。

【柱穴・ピット】本住居に伴うピットは8基検出した。Pit1は炉の東側に隣接し、小規模な柱痕が確認される。その他の7基は竪穴西壁面にまとまっている。

【炉】竪穴の中央で東西方向に長い長円形の浅い土坑状の掘り込みを検出した。被熱痕跡や灰、炭化物等は見られないが、構造や位置から炉と判断した。規模は100×70cmの東西に長い長円形で、深さ20cm程度の浅い皿状の掘り込みである。炉内堆積土は2層に分層した。被熱痕跡が見られず、機能面は

不明である。炉の東側の第1層上面では、長軸40cmの扁平礫が出土しているが、機能面が不明なため本施設に伴うか否かは不明である。

【堆積土】図37A-A'で8層、B-B'で7層に分層した。B-B'は捨て場3ベルト(第5分冊掲載)と同一であり、本遺構検出以前に設定されたものである。一方A-A'は遺構長軸に合わせてその後設定されたものである。観察の結果A-A'特有の土層が観察され、既存のB-B'土層に同定させることが困難であったことから、調査段階で層の同定はしなかったが、対応関係を整理すると次の通りである。B第2層(黄褐色土層)=A第1・2層、B第3~5層(黒色炭化物層)=A第4~6層、B第6層(壁から床面の褐色土)=A第7層。なお遺物の取り上げはB-B'の層番によっている。

B-B'では捨て場堆積土中に掘り込まれた堅穴住居の窪地に土砂や土器が大量に廃棄された結果窪地が完全に埋まり切り、再び捨て場として堆積土が形成されていく様子を捉えられた。B-B'では、堅穴窪地の堆積土にのみ本遺構名義の土層番号を付し、捨て場堆積土とは区別したが、本来は一体のものである。遺構内堆積土と捨て場3ベルトの土層番号の対応関係は図37中に示したので参照願いたい。B-B'断面では大きく、上層の黄褐色土、中層の炭化物集積層(黄褐色土との互層も部分的にみられる)、床面から壁際まで堆積した黄褐色土の3つに捉えられ、遺物は床面付近と中層の炭化物集積層での出土量が多く、個体土器も多数確認される。両層位では出土土器の型式差はほとんどなく、円筒上層c式期に埋没が始まり埋まっていたと見られる。

【出土遺物】堆積土下層(第5層)および上層(第1・2層)から50個体近い個体土器が出土している。両層ともに円筒上層c式の土器が出土しており、同一土器型式内に堅穴が埋没したと見られる。第5層では端部彫刻型石棒(2-図147-2)とヒスイ大珠(2-図147-3)が出土している。

【小結】斜面捨て場に掘り込まれた堅穴住居跡で、3ベルトでは本堅穴住居跡の堆積土と捨て場堆積土との関係が捉えられた。個体土器の出土量が多く、床面から堆積土中層まで円筒上層c式期というごく限られた時間の中で埋没が進行したことがわかる。隣接するSK9とは堆積土の共通性が見られ、同じ頃に埋まっていた遺構と見られる。石棒・ヒスイ大珠や刺突文の施される土偶が円筒上層c式の土器と供伴している。

SI 103 (図39)

【位置・確認】遺跡範囲の北西部の捨て場堆積土中にあたり、ⅧQ・R-61・62グリッドに位置する。明瞭な掘り込みは無く、壁周溝と炉(石囲炉1、地床炉3)、多数のピットからなる。ピットは堅穴住居の範囲内と思われる位置のものにPit番号を、帰属しないことが明らかなものについてはSP番号を付したが、検出面付近が床面だったため新旧関係や同時性について不明なものが含まれている。

西側の壁周溝は南側の弧状の輪郭をもつものと、Pit15を基点としてさらにそこから北側へ延伸するものがある。同様の事例がSI59やSI55、SI57等でも見られ造り替えと考えられたため、これも本遺構に伴うものと判断した。調査では北側の壁周溝が後に付属(拡張)したのか、Pit15-16間の壁周溝が後に付属(縮小)したのか、明らかにすることはできなかったが、以下では北側の壁周溝を含めた範囲をSI103A、Pit15-16間の壁周溝からPit1まで延びる輪郭をSI103Bとして記載する。

【重複】SI109と重複し本遺構の方が新しい。このほか多数のピットと重複している。

【形状・規模】SI103Aは南北方向に長く延びる長円形で、主軸は北西方向に傾く。推定長軸は南北6.6

m以上、東西4.2mである。一方SI103Bは南北にやや長い楕円形で、規模は5.1×4.2mである。

【壁・床面】検出面付近が廃絶時点での床面付近であったため、壁立ち上がりはほとんど確認できなかった。床面は第1層上面と第2・3層下面の2枚ある。第1層上面に伴うのが炉2、第2・3層下面に伴うのが炉1・3・4で新旧関係がある。

【柱穴・ビット】37基を本遺構に伴うビットとして調査した。断定できなかったがSPとして調査したビットについても本遺構に帰属するものも含まれている可能性がある。SI103Aは北西方向に向く、南北に長い長円形の住居であるが、SI1057(既報告)などの類例がありここから柱穴配置を推定した。柱穴は壁側に寄った位置に6対12本のビットが見られる。南北両端のビットの柱間距離が短く、北側のSP2020-2185が1.5m、南側のPit26-27が1.4mで、その他の柱間距離は3.0mである。

【炉】竪穴南側で石囲炉を1基、竪穴中央で地床炉を1基検出した。帰属する床面であり炉2のみが第1層上面に帰属し、その他のものよりも新しい。炉4は南側に配石と硬化面をもつ複式炉系列の石囲炉と見られる。

【堆積土】図39A-A'では8層に分層した。第1層は炉2、第4層は炉1の火床面である。第2・3層は炉2段階の貼床で、第5層以下は炉1段階の貼床と見られる。

【出土遺物】周溝、その他堆積土から榎林式の土器片が出土した。

【小結】拡張か縮小かは明らかでないが、南側の建物構造はほとんどそのままに、北側を変更した造り替えだったと見られる。時期はSI109(堆積土出土土器の最新が大木10式併行)よりも新しいとする重複状況から、時期は大木10式併行期以降と考えられる。

SI109(図40)

【位置・確認】遺跡の北西部、VMR-61グリッドに位置する捨て場堆積土中の遺構である。

【重複】SI103よりも古く、SI120よりも新しい。このほか多数のSPと重複する。

【形状・規模】平面形は南北方向に長い長円形で、規模は4.3×3.0m、検出面からの深さは25~30cmである。

【壁・床面】壁は全面残っており、比較的急角度で立ち上がる。床はおおむね平坦で、貼床を敷設することなく既存の竪穴住居跡の堆積土をそのまま床面としている。

【柱穴・ビット】14基のビットを本遺構に伴うものとした。南端部と北半部に集中しており、柱構造は不明である。竪穴中央のPit9の堆積土上面では円柱状(長軸34cm)の自然礫が出土している。

【炉】竪穴南端で地床炉を1基検出した。80×55cmの不整形範囲で被熱している。

【堆積土】図40A-A'・B-B'で4層に分層した。いずれも竪穴堆積土である。

【出土遺物】Pit12及びその他堆積土から、大木10式併行の土器片が出土した。Pit9検出面では、円柱状の自然礫(長さ34cm)が横たわった状態で出土した。

【小結】ビット出土遺物の最新時期から、時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI110(図41)

【位置・確認】遺跡の北西部、捨て場堆積土中の竪穴住居跡でVM S-63グリッドを中心に位置する。

【重複】本遺構の上位で多数のビットを検出しているが、本遺構との直接的な重複はない。遺構ではな

いが、捨て場の初期堆積土（おそらくは円筒下層d式期以前）を掘り込んでいる。

【**形状・規模**】北西側の一部が擾乱によって失われているほか、南西側の一部も壁を確認できなかったが、平面形は東西方向に長い隅丸長方形である。住居の長軸は北東方向を向くが、これは斜面傾斜に直交させたものと見られる。堅穴中央が長方形範囲で一段（10～15cm程度）下がっており、外側はやや高いテラス状となっている。規模は6.9×4.5m、検出面からの深さは88cmである。堅穴中央は5.0×2.4mの範囲で一段下がっている。

【**壁・床面**】壁は一部では失われているが、おおむね全体の様相がわかる。床は中央部、テラス部を問わずほぼ全面に黄褐色土が薄く貼られている。Pit2-8間には壁周溝が見られる。

【**柱穴・ピット**】堅穴内で14基検出した。一段下がった中央部の長方形範囲の四隅（Pit10・7・2・8または3）と桁方向の中心（Pit2-7間のPit11、Pit10-8間のPit5(4)）に配置される6本柱の柱穴配置と見られる。

【**炉**】床面中央やや北東寄り地床炉を検出した。床面よりわずかに窪んだ場所に被熱面は形成されている。28×10cmの不整形範囲で被熱し、火床面の厚さは3cmと薄い。床面中央やや南西側床面では焼土を検出している。

【**その他の施設**】床面中央やや北側で特殊施設を検出した。特殊施設はピットとこれを囲う周堤から成る。ピットは直径70cm、床面からの深さ30cmで、周堤は南西方向を開口する半円状にピットを囲っている。周堤は黄褐色土を貼り付けている。ピット堆積土からは焼土などは検出されず、用途は不明である。

【**堆積土**】16層に分層した。第14層は貼床、第13層は地床炉で、第15・16層は掘方埋土である。堅穴堆積土は大きく、1～9層までの大小礫や個体土器を大量に含んだ暗褐色土を主体とする土層と、10～12層の礫をほとんど含まない黄褐色土系の土層に分離でき、層相の違いはおそらくこの前後でまったく異なる堆積状況であったものと見られる。

【**出土遺物**】床面その他堆積土から円筒下層c～上層d式の各型式の縄文土器の個体・破片が多量に出土した。整理時に組み上がった個体数だけでも最低71個体を数え、時期の明らかなものの内訳は円筒下層c式1個体、円筒下層d2式11個体、円筒上層a式13個体、円筒上層b式10個体、円筒上層c式7個体、円筒上層d式2個体となり、縄文時代前期末葉以降長期にわたって堅穴窪地に土器が廃棄された様子がうかがえる。2-図22-4は床面出土から出土した円筒下層d2式の深鉢である。

【**小結**】テラスをもつ長方形の堅穴住居跡で本遺跡では他に類を見ない住居構造である。堆積土下層から上層まで、円筒下層c～上層c式までの完形、略完形の個体土器が多数出土し、長期にわたって堅穴窪地に土器が廃棄されている。第9層では円筒下層d2式期の個体土器が大量に出土しており、下層d1式はほとんど含まないことから、時期は縄文時代前期末葉の円筒下層d2式期と考えられる。

SI111 (図40)

【**位置・確認**】遺跡の北西部、ⅧV-63・64グリッドに位置する。第IV層上面で円形の落ち込みとして確認した。

【**形状・規模**】北西側が失われており平面形は不明であるが、残存部からの推定では、直径2.5m程度の小型の円形住居であったと思われる。検出面からの深さは33cmである。

【壁・床面】北西壁は確認できなかつたが、他の壁は外傾しながら立ち上がる。床面は北側に傾斜している。

【柱穴・ビット】床面南側からビットを4基検出したが、柱穴配置は不明である。

【炉】竪穴中央やや北寄りで石囲炉を1基検出した。北側は失われていると見られ、南側は扁平礫3個を衝立のように立てて炉石としている。東片では横倒しの礫が見えるが本来の石材であったか判別できなかった。火床面は見られない。

【堆積土】2層に分層した。第1層は炉掘方、第2層は竪穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土から、円筒上層c式と考えられる破片が出土した。

【小結】本遺構に確実に伴う遺物が出土しなかつたため詳細な時期は不明であるが、堆積土出土土器から縄文時代中期前葉の円筒上層c式期と考えられる。

SI115(図42)

【位置・確認】遺跡の北西部、捨て場堆積土中の竪穴住居跡で、ⅧS-61グリッドを中心に位置する。

【重複】南側でSI120と重複し、本遺構の方が古い。

【形状・規模】南側は他遺構との重複により壊されるが、長軸4.0m、短軸3.3m程度の南北にやや長い楕円形と見られる。

【壁・床面】壁は南側以外では残りが良く、全体的に垂直に近く立ち上がる。床は全面に褐色土(第5層)を貼って床面とする。

【柱穴・ビット】竪穴中央のSK1の底面でビットを1基検出した。

【炉】検出していない。

【その他の施設】竪穴北側で特殊施設を1基検出した。浅い円形の掘り込みとこれを囲う周堤部からなる構造である。

【堆積土】堆積土は5層に分層した。第5層が貼床、第1～4層は竪穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2式の破片が出土した。このほか特殊施設の掘り込み内堆積土から炭化物が出土し、放射性炭素年代測定を実施し、試料 I AAA-122401が3241 calBC-3104 calBC・3351 calBC-3308 calBC・3303 calBC-3264 calBCとの成果を得た(第4章第1節参照)。

【小結】出土土器では縄文時代前期末葉の円筒下層d2式が下限となるが、放射性炭素年代測定の結果から、所属時期は縄文時代中期前葉から中葉であったと考えられる。

SI116(図40)

【位置・確認】ⅧU-62グリッドを中心に位置する。攪乱を除去後に半円状の落ち込みとして確認した。重複遺構はないが、東側は攪乱により壊されている。

【重複】なし。

【形状・規模】東側が残存しないため全体形は不明であるが、長軸3.3m程度円形もしくは楕円形と見られる。検出面からの深さは40cmである。

【壁・床面】壁は全体的に緩やかに外傾して立ち上がる。床はおおむね平坦で褐色土を部分的に貼って床面としている。

【炉】検出していない。

【堆積土】堆積土は4層に分層した。第2・3層下面が機能時の床面で、第1層は堅穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2式・上層c式の破片が出土した。

【小結】柱穴及び炉が確認できなかったが、円形の落ち込み範囲と貼床の存在から堅穴住居跡とした。本遺構に確実に伴う遺物は出土していないため、時期は判然としませんが、堆積土中から円筒上層c式の土器片が出土しこれ以降のものを含まないため、上層c式期には埋没が完了したものと見られる。

SI 120 (図42)

【位置・確認】遺跡の北西部、捨て場堆積土中の堅穴住居跡で、VIII-61グリッドに位置する。

【重複】上部をSI 109に上部を削平されるほか、北側でSI 115と重複し、本遺構の方が新しい。

【形状・規模】南北3.0m、東西2.4mの南北にやや長い長円形である。

【壁・床面】壁は比較的垂直に立ち上がる。床は貼床を敷設することなく、地山を直接床面とする。

【炉】検出していない。

【堆積土】褐色土の単層である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】土器は出土しておらず時期は不明であるが、他遺構との重複状況並びに捨て場堆積土を掘り込む状況等から、時期はSI 115(縄文時代前期末葉～中期後葉)以降、SI 109(大木10式併行期)以前である。

SI 1061 (図43)

【位置・確認】VIII-S-109・110グリッドに位置している。第IV・V層上面で検出した。

【重複】なし。

【形状・規模】規模は2.9×2.3m、深さ96cmのやや不整な楕円形である。

【壁・床面】壁は全体が残存する。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は5層に分層した。底面に接する第4・5層のしまりが強い。

【出土遺物】床面及び堆積土から、円筒下層d2式・上層c式・榎林～最花式の破片が出土した。

【小結】調査時は住居の可能性を考慮して調査を行った。しかし、柱穴や炉を持たない点や堅穴部分の深さを勘案すると土坑の可能性も高いと考えられる。時期は堆積土出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI 1062 (図43)

【位置・確認】VIII-S-109グリッドに位置している。第IV・V層上面で検出した。

【重複】SK 1066と重複し、本遺構の方が新しい。

【形状・規模】規模は2.6×2.4m、深さ84cmのやや不整な円形である。

【壁・床面】壁は全体が残存する。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がるが東西両壁ともにややオーバーハングしているようにも見える。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は3層に分層した。

【出土遺物】堆積土から円筒上層e式と、榎林式を中心とする中期後葉～末葉の土器片が出土した。

【小結】調査時は住居の可能性を考慮して調査を行った。しかし、柱穴や炉を持たない点や堅穴部分の深さ、壁の形状を勘案すると土坑であった可能性も高い。時期は堆積土下位の出土土器から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 1063 (図44)

【位置・確認】ⅧH・I-94グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1068・1080・1086・1088・1095、SK1084と重複し、いずれの遺構よりも新しい。

【形状・規模】規模は5.2×4.7m、深さ47cmのやや不整な円形である。

【壁・床面】壁は全体が残存している。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる。

【柱穴・ピット】ピットは5基検出した。主柱穴を構成するものと見られる。

【炉】床面の中央で地床炉を2基検出した。形状はともに不整形で、規模は炉1が35×29cm、焼土の厚さ5cm、炉2が87×54cm、焼土の厚さ9cmで、炉2の方が大きい。ともに掘方は認められない。

【堆積土】土層は6層に分層した。いずれも堅穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土から、榎林式の個体土器を中心に円筒下層d2、上層c～e式土器が出土した。特に榎林式は一括廃棄された状態で出土している。2-図35-1は本住居の床面遺物として取り上げたが、同一個体が出土したSI1088に帰属していた可能性がある。

【小結】重複関係から、時期は縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 1064 (図44)

【位置・確認】ⅧG-95グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】なし。

【形状・規模】規模は4.2×3.1m、深さ22cmの東西に長い隅丸長方形である。

【壁・床面】壁は全体が残存している。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】床面の中央からやや北西寄り地床炉を1基検出した。形状は不整形で、規模は42×38cmである。焼土の厚さは3cmである。掘方は認められない。

【堆積土】土層は3層に分層した。

【出土遺物】堆積土から榎林式を中心に円筒上層c～e式土器が出土した。榎林式は一括廃棄の状態で出土している。第3層の床面から出土した2-図35-3は、大木8a式の影響が顕著に認められる個体である。

【小結】重複関係、住居形態、床面出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期に構築され、廃絶後の榎林式期に廃棄層が形成されたと考えられる。

SI 1065 (図45～49)

【位置・確認】ⅧF-92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1070・1072・1096と重複し、新しい。

【形状・規模】規模は4.4×4.2m、深さ30cmの、やや不整な円形である。

【壁・床面】壁は全周で検出した。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる

【柱穴・ピット】ピットは2基検出した。

【炉】床面の中央と東壁際で地床炉を2基検出した。形状はともに不整形で、規模は炉1が残存長軸29cm、焼土の厚さ3cm、炉2が64×23cm、焼土の厚さ3cmである。ともに掘方は認められない。

【堆積土】土層は3層に分層した。3層は炭化物を多く含むが特に床面直上で多く認められた。

【出土遺物】堆積土から榎林式を中心に円筒上層c～大木10式併行の土器が出土した。また床面から剥片が多く出土した。なお、2-図147-8は堆積土上位から出土した七輪様の石製品である。凝灰岩製で内面に被熱及び煤の付着がみられる。図下側にスリット状の切れ込みが作出されるが、金属製の刃物で削られた痕跡がみられるため、縄文時代に帰属する可能性は低い。

【結】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI 1066 (図50・51)

【位置・確認】ⅧJ・K-93・94グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。調査時は2基の炉をSN1001・1009として調査したが、整理段階でこの周囲で確認したピット及び貼床範囲を統合してSI 1066とした。

【重複】SI 1078と重複し、新しい。SI 1110他の遺構との新旧については、明確にできなかった。

【形状・規模】竅穴部分を確認できなかったため、規模、形状ともに不明である。

【壁・床面】壁は確認していない。貼床の厚さは約3cmで、床面は平坦に作出される。

【柱穴・ピット】ピットは7基検出した。Pit 1・3～6では大木10式併行期の土器が出土しており、本遺構には伴わない可能性が高い。

【炉】貼床の中央から北寄りで石囲炉1基と地床炉1基を検出した。炉1は扁平礫を方形に配置した石囲炉で、規模は98×95cmである。礫は二重に配置されており、外側のものは内側のものと比べて小振りなものが多い。方形を基調とするが、南東辺はやや屈曲し台形にもみえる。同辺には湾曲した(反った)石材を多用し、意図的に屈曲を作出している。内側の礫は被熱により割れているものが多い。炉2は炉1の南側に隣接した地床炉で、床面を浅く掘り込んだ底面を被熱面としている。被熱範囲の規模は62×47cmで、焼土の厚さは12cmである。炉1、炉2の周囲には貼床が分布する。はっきりとはわからなかったが、炉1に明確な掘方はなく、南西辺では貼床が礫を直接固定するようにも観察されることから、炉1は貼床と同時に構築された初期段階の炉とみられる。また炉2は貼床を浅く掘り込むことから構築自体は炉1よりも新しいが、炉1自体を改変するようなことはないため、機能自体は同時期とみられる。

【堆積土】壁を確認できなかったため、竅穴堆積土は不明である。

【出土遺物】床面から円筒上層e式の個体土器が、堆積土からは円筒下層d2～上層e式、Pit 1・3～6堆積土と炉の検出面から榎林式、大木10式併行の土器片が出土した。このほか、炉付近の床面では磨礫

器類や台石4点が出土し、このうち台石1点(2-図147-8)を掲載した。

【**小結**】重複関係及び床面出土の個体土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期以降と考えられる。榎林式と大木10式併行の破片が出土したPit1・3～6については本住居の構成施設ではない可能性がある。

SI 1067 (図52)

【**位置・確認**】ⅧJ-94・95グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【**重複**】SI1078・1082・1085と重複し、新しい。

【**形状・規模**】規模は4.1×2.5m、深さ35cmの、北西-南東に長い隅丸長方形である。

【**壁・床面**】壁は全周で検出した。床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【**柱穴・ビット**】検出していない。

【**炉**】床面の中央で地床炉を1基検出した。形状は不整形で、規模は67×57cmである。焼土の厚さは9cmである。掘方は認められない。

【**堆積土**】土層は2層に分層した。

【**出土遺物**】床下及び堆積土から、榎林式の個体を中心に上層b～e式の土器が出土した。

【**小結**】重複関係及び出土土器から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 1068 (図53)

【**位置・確認**】ⅧH-93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【**重複**】SI1063、SK1080と重複し、古い。SI1074・1084・1094・1095と重複し、新しい。

【**形状・規模**】規模は4.5×3.8m、深さ51cmの、北西-南東に長い楕円形である。

【**壁・床面**】壁は東側と南西側の一部を欠く。床は概ね平坦に作出されるが南西壁に向かってわずかに高くなり、これに合わせるように南西壁も緩やかに立ち上がる。これ以外の壁は、急角度で立ち上がる。また北西壁際と中央やや東側の床面で硬化面を確認した。

【**柱穴・ビット**】ビットは7基検出した。

【**炉**】床面の中央から、やや西寄り地床炉を1基検出した。形状は楕円形で、規模は66×49cmである。焼土の厚さは6cmである。掘方は認められない。

【**堆積土**】土層は2層に分層した。

【**出土遺物**】Pit1・2及び炉から円筒上層e～榎林式、その他堆積土からは榎林式を中心とした土器集中廃棄層が確認され、下層d2～上層e式の土器が含まれている。また、北側壁際の堆積土中では、台石が出土している。このほか床面から端部彫刻形石棒が割れて散乱したような状態で出土した。

【**小結**】堆積土に榎林式期の土器集中廃棄層が確認され、個体土器が潰れた状況が観察される。重複関係及び炉内出土土器から、時期は縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 1069 (図52)

【**位置・確認**】ⅧI・J-95・96グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【**重複**】SI1083、SN1023と重複し、新しい。

【**形状・規模**】規模は3.8×3.2m、深さ48cmの、北西-南東に長い楕円形である。

【**壁・床面**】壁は全周で検出した。床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がるが、南西壁のみ、やや緩やかに立ち上がる。

【**柱穴・ピット**】ピットは4基検出した。

【**炉**】床面の中央からやや北西寄りて地床炉を1基検出した。形状は楕円形で、規模は42×38cmである。焼土の厚さは15cmである。掘方は認められない。

【**堆積土**】土層は5層に分層した。

【**出土遺物**】堆積土から円筒上層e式を中心とし上層c・d式、榎林式の個体を含む土器が出土した。

【**小結**】重複関係、住居形態及び出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期に構築され、廃絶後の榎林式期に上部の廃棄層が形成されたと考えられる。

SI 1070 (図45～49)

【**位置・確認**】ⅧG-92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【**重複**】SI1065と重複し、本遺構が古い。SI1071・1072・1074・1084・1096と重複し、本遺構が新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【**形状・規模**】南側を欠くが、規模は4.8×4.2m、深さ35cm、形状は壁周溝の存在から南北に長い楕円形と考えられる。

【**壁・床面**】壁はSI1065と重複する南側を除く北半で検出した。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる。この壁際を、壁周溝が途切れながらも全周を巡る。壁周溝の床面からの深さは5～11cmである。

【**柱穴・ピット**】ピットは4基検出した。

【**炉**】床面の中央から、やや北西寄りて地床炉を1基検出した。形状は不整形で、規模は88×85cmである。焼土の厚さは9cmである。掘方は認められない。

【**堆積土**】土層は8層に分層した。

【**出土遺物**】炉、Pit1、壁周溝他堆積土から、榎林式を中心として円筒下層d2式、上層a・c～e式、大木10式併行の各型式の土器が出土した。床面からは有孔垂飾品(2-図148-4)出土している。炉の西脇床面では板状礫がまとめて出土しており、このうちS-2は台石である(非掲載)。

【**小結**】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI 1071 (図45～49)

【**位置・確認**】ⅧH-92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【**重複**】SI1070よりも古く、SI1074・1081・1084・1087、SK1080よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。また遺物の出土状態から、堆積土中にPit1・2、SP1394・1395を主柱とする未検出の住居が掘り込まれていた可能性がある。

【**形状・規模**】南側を欠くが、規模は5.4×3.6m、深さ14cm、形状は北西-南東に長い楕円形と考えられる。

【**壁・床面**】壁はSI1070と重複する南側を除く北半で検出した。床はおおむね平坦に作出され、壁は

なだらかに立ち上がる。床面中央には第IV層由来の黄褐色土粒を含む暗褐色土で貼床が施される。

【柱穴・ビット】ビットは4基検出した。

【炉】床面の中央で石囲炉を1基検出した。炉は扁平礫を方形に配置し、規模は内寸で69×66cmである。東片では礫が二重に配置されている。炉は掘方をもっており周囲の貼床を掘り込んで石を設置している。石囲炉北辺の石材には台石(2-図128-5)を転用している。炉内は東半で焼土が形成され、厚さは6cmである。また石囲炉の東側隣接地に被熱面が見られるが、旧段階または未検出住居の炉の可能性もある。被熱範囲の規模は42×24cmで焼土の厚さは2cmである。

【堆積土】土層は2層に分層した。1層が廃絶後の堆積土で、2層が貼床である。

【出土遺物】Pit 2、床面直上の1層から大木10式併行、Pit 1から円筒上層a・c・d式、Pit 3・4から上層a・c・榎林式、堆積土第3層から榎林式、その他堆積土から上層a～e、榎林、大木10式併行の破片が出土した。有孔垂飾品(2-図148-5)が出土している。石囲炉の石材に台石を転用している。

【小結】床面直上出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられ、SI1070とは同一型式での重複が見られる。炉石が一部二重となる構造、石囲炉の東側に隣接して被熱面を形成する点はSI1066と共通する。

SI 1072 (図45～49)

【位置・確認】ⅧF・G-91グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1065・1070よりも古く、SI1087・1096よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】形状・規模は重複が著しく不明である。

【壁・床面】壁は西側の一部を検出した。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる。

【柱穴・ビット】検出していない。

【炉】西壁に近接して地床炉を1基検出した。形状は不整形で、規模は81×60cmである。焼土の厚さは9cmである。掘方は認められない。

【堆積土】土層は単層である。

【出土遺物】炉から榎林式、他堆積土からは榎林式を中心に円筒下層d2、上層a・c・d式の土器片が出土した。2-図42-1は炉に隣接した床面で出土した榎林式土器の口頸部である。

【小結】重複関係及び炉付近の床面出土土器から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 1073 (図45～49)

【位置・確認】ⅧF-93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1079と重複し、新しい。

【形状・規模】規模は3.6×3.1m、深さ68cmの、やや不整な円形である。

【壁・床面】壁は全周で検出した。床はおおむね平坦に作出されるが、中央部がやや深く湾曲している。壁はなだらかに立ち上がる。

【柱穴・ビット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は7層に分層した。

【出土遺物】第1・6層に接する床面及び第5～7層から個体を含む榎林式と円筒上層d・e式、堆積土全体では円筒下層d2、上層c・d、榎林式の土器が出土した。

【小結】竪穴住居跡として調査を行ったが、炉や貼床、ビットといった構成要素を欠き、床面も湾曲することから土坑の可能性もある。時期は本遺構に直接伴う出土遺物はないが、床面からやや浮いた位置で榎林式期の土器が潰れた状態で出土しており、この頃には廃絶したものと見られる。したがって時期は榎林式期以前と考えられる。

SI 1074 (図45～49)

【位置・確認】ⅧG・H-92・93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1068・1070・1071、SK1080よりも古く、SI 1079・1084よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は5.4×4.4m、深さ16cmで、形状は楕円形と考えられる。

【壁・床面】壁は東側と西側の一部を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる。

【柱穴・ビット】ビットは4基検出した。

【炉】東壁に近接して地床炉を1基検出した。形状は不整形で、規模は66×62cmである。焼土の厚さは11cmである。掘方は認められない。

【堆積土】土層は4層に分層した。

【出土遺物】炉及びPit1～3から円筒上層e式が、その他堆積土からは榎林式を中心に円筒上層a・c・e式の土器片が出土した。また端部彫刻型石棒(2-図148-9)が炉の周囲から破損した状態で出土した。

【小結】重複関係及び炉、ビット内出土土器から、本住居は縄文時代中期中葉の円筒上層e式期に帰属し、堆積土の大部分は榎林式期の廃棄によって形成されたものと考えられる。

SI 1075+SN1013 (図54)

【位置・確認】ⅧK-91・92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。調査時はSI 1066とSN 1013として調査したが、整理段階で両者を同一遺構に統合して住居と認定した。

【重複】SI 1106～1108よりも新しい。これ以外の遺構との重複については明確にできなかったが、SI 1076とは帰属時期から本遺構の方が古い可能性が高い。

【形状・規模】竪穴部分を確認できなかったため、規模、形状ともに不明である。

【壁・床面】壁は確認していない。ビットの内側、SN1013を含む約3.6m×2.8mの範囲で硬化面を確認した。

【柱穴・ビット】ビットは12基検出した。

【炉】硬化面の北東側で地床炉を1基検出した。形状は楕円で、規模は54×52cmである。焼土の厚さは9cmである。掘方があり、断面の観察では掘方が重複する造り替えがうかがえる。

【堆積土】なし。

【出土遺物】床面、Pit1～3・5・11・13から円筒上層e式、炉から上層e式と最花式、Pit6・7・12・

15からは円筒上層a・c・d・e式と榎林式・大木10式併行の土器が出土した。

【小結】床面及びPit1～3・5・11・13出土土器から縄文時代中期前葉の円筒上層c式期と考えられる。

SI 1076 (図55・56)

【位置・確認】ⅧJ・K-92・93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1109よりも古く、SI 1075+SN 1013・1090・1091・1106・1108よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は4.4×3.6m、深さ38cmで、形状は南北に長い隅丸長方形である。

【壁・床面】壁は北西側の一部を欠く。床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。炉の北西側には、黄橙色土で貼床が施される。

【柱穴・ビット】ビットは7基検出した。

【炉】床面の中央から、やや北寄りで地床炉を1基検出した。南側はSI 1109の石囲炉が隣接する(写真図版40)。形状は不整形で、規模は54×52cmである。焼土の厚さは10cmである。掘方は認められない。

【堆積土】土層は3層に分層した。第1・2層が廃絶後の堆積土で、第3層が貼床である。

【出土遺物】床面から円筒上層c～榎林式、第1層から円筒上層d式、第2層から円筒下層d2と上層c・d、榎林式、大木10式併行の破片が、Pit1～7から円筒上層期の範囲で小片が出土した。炉の焼土上から凝灰岩製の台石(非掲載)、堅穴北側の貼床上から緑色凝灰岩製の棒状の台石(非掲載)が出土した。

【小結】時期はSI 1091(牛ヶ沢式期)よりも新しく、SI 1109(牛ヶ沢式期)よりも古いとする重複関係から、牛ヶ沢式期と考えられる。

SI 1077 (図55・56)

【位置・確認】ⅧI-91・92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1091、SR1019よりも古く、SI 1105・1106よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸5.9m、深さ64cmで、形状は楕円形と考えられる。

【壁・床面】壁は北半と東側の一部を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。炉の周囲では、暗褐色土で貼床が施される。

【柱穴・ビット】ビットは6基検出した。

【炉】確認した床面のほぼ中央から、石囲炉を1基検出した。炉は扁平礫を方形に配置し、規模は96×69cmである。炉の周囲には貼床が施されているが、炉の掘方はこの貼床を切っている。掘方の規模は105×102cmである。炉石内部では、中央部に不整形に焼土が形成され、厚さは12cmである。

【堆積土】土層は2層に分層した。

【出土遺物】Pit1～3から円筒上層c式、Pit4～7から上層e式、榎林式、大木10式併行、炉からは円筒上層c式と大木10式併行、第1・2層からは円筒下層d2式・上層c～榎林式の破片が出土した。堆積土中の円筒上層e～大木10式併行の土器片は、トレンチ掘削時の混入と思われる。このほか第2層から

端部彫刻型石棒(2-図148-10)が出土したが、上記円筒上層c～榎林式に伴うものと考えられる。

【**小結**】**炉**、Pit4～7出土土器及び重複関係から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI 1078 (図57)

【**位置・確認**】VIII-94グリッドに位置している。第III層中で検出した。

【**重複**】SI 1066・1067・1082・1085よりも古い。

【**形状・規模**】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸4.8m、深さ38cmで、形状は不明である。

【**壁・床面**】壁は重複により、北西側を除く大半を欠く。床は概ね平坦に作出されるが、壁際でわずかに凹む部分もある。壁は急角度で立ち上がる。床面中央には、貼床が施される。

【**柱穴・ピット**】ピットは3基検出した。

【**炉**】検出していない。

【**堆積土**】土層は6層に分層した。第3層が貼床である。

【**出土遺物**】床面からは、円筒上層d式を中心として下層d2、上層e・e式、Pit1～3から上層d・e式、堆積土全体からは上層c～榎林式が出土した。また貼床内から土偶の顔部分(2-図141-12)が出土している。このほか、床面直上より相馬安山岩製の台石(非掲載)が出土している。

【**小結**】重複や層序関係ならびに床面やPit1～3出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1079 (図45～49)

【**位置・確認**】VIII-93グリッドに位置している。第III層中で検出した。

【**重複**】SI 1073・1074よりも古く、SI 1084よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【**形状・規模**】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は4.4×4.3m、深さ22cmで、形状はやや不整形な円形である。

【**壁・床面**】壁は南側の一部を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる。

【**柱穴・ピット**】検出していない。

【**炉**】検出していない。

【**堆積土**】土層は6層に分層した。第3層は焼土粒を多く含む。

【**出土遺物**】第4層床面から円筒上層d式の個体土器が、その他堆積土からは円筒上層e～榎林式の土器が出土した。

【**小結**】床面出土の個体土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1080 (図58)

【**位置・確認**】VIII-94グリッドに位置している。第III層中で検出した。

【**重複**】SI 1063・1088、SK1079・1084よりも古く、SI 1094よりも新しい。

【**形状・規模**】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸5.0m、深さ62cmで、形状は不

明である。

【壁・床面】壁は南東側を欠く。床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。床面中央から北東壁には、貼床が施される。

【柱穴・ビット】ビットは2基検出した。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は6層に分層した。

【出土遺物】床面及び床面直上から円筒上層c・e式、第1～6層からは円筒上層c～榎林式の土器片が出土した。

【小結】重複関係及び床面・床面直上出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期と考えられる。

SI 1081 (図45～49)

【位置・確認】ⅧH-91・92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1071、SK1080よりも古く、SI1084よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は5.4×3.9m、深さ32cmで、形状は不整形と考えられる。

【壁・床面】壁は南東側の一部を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる。

【柱穴・ビット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は2層に分層した。

【出土遺物】堆積土から円筒上層e式を中心として円筒下層d2式、上層b式～榎林式の土器片が出土した。第2層からはこれらに伴って石刀(2-図149-2)が被熱しひび割れた状態で出土した。

【小結】堆積土出土の個体土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1082 (図57)

【位置・確認】ⅧJ-94・95グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1067よりも古く、SI1078・1083・1085よりも新しい。

【形状・規模】規模は3.7×3.4m、深さ47cmの、円形である。

【壁・床面】壁は全周で検出した。床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。炉の周囲には、貼床が施されていた。

【柱穴・ビット】ビットは1基検出し、柱痕も確認した。

【炉】床面の中央で地床炉を1基検出した。形状は不整形で、規模は81×66cmである。焼土の厚さは9cmである。掘方の有無は不明である。

【堆積土】堆積土は2層に分層した。

【出土遺物】炉、床面、Pit1から榎林式、床下と堆積土全体からは円筒下層d2、上層c～榎林式の土器が出土した。床面直上からは環状石製品(2-図149-4)や擦痕のある石製品(非掲載)が出土している。また、貼床内からは榎林式の大形破片が出土している。

【小結】床面出土の個体土器から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 1083 (図59)

【位置・確認】ⅧI-95グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1067・1069・1082・1086・1088、SK1079よりも古い。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸3.2m、深さ38cmで、形状は不明である。

【壁・床面】壁は重複によりほとんど残存していなかったが、SI1069と重複する東側でわずかに立ち上がりをつえられた。床は概ね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる。床面中央には、貼床が施される。

【柱穴・ピット】ピットは3基検出した。Pit2が一番古く、Pit2→1→3順に重複している。

【炉】貼床内で地床炉を1基検出した。形状は不整形で、規模は48×41cmである。焼土の厚さは12cmである。掘方は認められない。

【堆積土】土層は2層に分層した。

【出土遺物】炉・床下から円筒上層d式、床面・貼床・床面直上からは上層d・e式の土器が出土した。貼床出土の2-図47-4は円筒上層d式の破片で、SI5004第5層出土の2-図76-2と酷似しており、同一個体である可能性が高い。

【小結】重複関係及び炉内出土土器から、本住居は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期に帰属し、堆積土の大部分は円筒上層e式期の廃棄によって形成されたものと考えられる。

SI 1084 (図45～49)

【位置・確認】ⅧG・H-92・93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1068・1070・1071・1074・1079・1081、SK1080よりも古い。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は4.6×3.9m、深さ23cmで、形状は不整形である。

【壁・床面】壁は北西側の一部を欠く。床はおおむね平坦に作出されるが、わずかに西方向に下っている、壁はなだらかに立ち上がる。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は3層に分層した。

【出土遺物】土器は円筒上層e式を中心に、床面から榎林式、堆積土から円筒下層d2、上層c～榎林式、蛭沢式の各型式の土器片が出土した。

【小結】堆積土からは各時期の遺物が出土するが、重複関係から、所屬時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期かそれ以前と考えられる。

SI 1085 (図60)

【位置・確認】ⅧK-94・95グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1082、SR1014と重複し、古い。SI1078・1097と重複し、新しい。

【形状・規模】規模は4.0×3.9m、深さ45cmの、円形である。

【壁・床面】壁は全周で検出した。床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。また、平面でその範囲を捉えることはできなかったが、炉の周囲には、貼床が施されていた。

【柱穴・ビット】ビットは7基検出した。Pit6・7は炉の焼土下で確認したことから、旧段階のPit、もしくは本住居以前の可能性もある。

【炉】床面の中央で地床炉を1基検出した。形状は不整形で、規模は135×79cmである。焼土の厚さは9cmである。掘方は認められない。

【その他の施設】地床炉の西寄りで埋設土器を確認し、住居との関連を意図して住居内埋設土器として調査をおこなった。埋設土器は器高約12cmの小型の深鉢で、円筒上層c～d式と見られる。一回り大きい掘方に逆位で埋設されており、貼床掘削時に発見した。土器は居住時には露出していなかったものと思われる。

【堆積土】土層は7層に分層した。第4・6層が貼床である。

【出土遺物】床面・床下から円筒上層c・d式、堆積土全体からは、円筒上層d式を主体として円筒下層d2～榎林式の個体を含む土器が出土した。

【小結】出土遺物の様相としては、埋設土器の時期は円筒上層c～d式期であるが、床面・床下で円筒上層d式期の個体土器も出土することから、本遺構の時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1086 (図59)

【位置・確認】VIII・I-95グリッドに位置している。第III層中で検出した。

【重複】SI1083よりも新しく、SI1063より古い。

【形状・規模】規模は3.5×3.0m、深さ53cmの、楕円形である。

【壁・床面】壁は全周で検出した。床は概ね平坦に作出され、壁は比較的緩やかに、開きながら立ち上がる。

【柱穴・ビット】ビットは2基検出した。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は単層である。

【出土遺物】竪穴南側の壁際床面で円筒上層d式の個体土器(2-図49-1)が出土した。掘方は明確ではないが、内部に土が充満した状態で上部の礫に潰された出土状況を示しており、住居内における横位の埋設土器の可能性もある。このほか、堆積土からは榎林と蛭沢式の土器片が出土した。

【小結】2-図49-1は出土位置、出土状況や時期の類似性から、住居内の横位埋設土器の事例のひとつと見られる。時期はこの土器から縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1087 (図61)

【位置・確認】VIII 6-91グリッドに位置している。第III層中で検出した。

【重複】SI1070～1072、SN1002、SK1073よりも古く、SK1077、SI1096よりも新しい。

【形状・規模】規模は5.3×5.0m、深さ24cmの、やや不整な方形である。

【壁・床面】壁は遺構に切られている部分を除く全周で検出した。床はおおむね平坦に作出されるが、わずかに北西方向に下っている、壁はなだらかに立ち上がる。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】床面の中央から西寄りで地床炉を2基検出した。形状はともに不整形で、規模は炉1が68×45cm、焼土の厚さ6cm、炉2が41×38cm、焼土の厚さ4cmである。ともに掘方は認められない。

【堆積土】土層は4層に分層した。

【出土遺物】床面及び堆積土から円筒上層e式を中心として円筒下層d2～榎林式の土器片が出土した。

【小結】堆積土出土土器から、縄文時代中期中葉～後葉の円筒上層e～榎林式期と考えられる。

SI 1088 (図59)

【位置・確認】ⅧI-94グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1063・1080・1083・1086と重複し、SI 1063より古く、SI 1080・1083より新しい。SI 1086との新旧は不明である。

【形状・規模】規模は3.5×3.0m、深さ53cmの、楕円形である。

【壁・床面】壁はSI 1086と重複する東側を除く西半で検出した。床は概ね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる。床面中央には、貼床が施される。

【柱穴・ピット】ピットは2基検出した。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は単層である。

【出土遺物】床面から円筒上層e式(2-図49-7)、堆積土から円筒上層d・e式の土器片が出土した。

【小結】床面出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期と考えられる。

SI 1089 (図62)

【位置・確認】ⅧK・L-92・93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1090・1114と重複し、新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】規模は4.7×4.0m、深さ47cmの、やや不整な円形である。

【壁・床面】壁は全周で検出した。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ピット】ピットは4基検出した。

【炉】床面の中央からやや北西寄りで地床炉を1基検出した。攪乱、トレンチにより形状は捉えられない。規模は残存長軸33cmである。焼土の厚さは6cmである。掘方は認められない。

【堆積土】土層は単層である。

【出土遺物】床面から円筒上層d式の個体、堆積土からは円筒下層d2・上層e～e式、大木10式併行の破片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI 1090 (図62)

【位置・確認】ⅧK・L-92・93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1076・1089と重複し、古い。SI1110・1108・1113・1114と重複し、新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】規模は6.6×4.2m、深さ47cmの、やや不整な円形である。

【壁・床面】床はおおむね平坦に作出されるが、壁際は中央部よりやや高くなる。壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ビット】ビットは5基検出した。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は2層に分層した。

【出土遺物】Pit5・21・22から円筒上層c式、堆積土全体からは円筒下層d2・上層c～e式の土器片が出土した。Pit4からは榎林式、Pit1・2からは大木10式併行の破片が出土している。

【小結】重複関係及びPit1・2他堆積土出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI 1091 (図55・56)

【位置・確認】ⅧI・J-92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1076・1111と重複し、古い。SI1077・1093・1106と重複し、新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は4.7以上×4.7m、深さ42cmで、形状は南北に長い楕円形と考えられる。

【壁・床面】壁は北側の一部を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ビット】ビットは6基検出した。Pit3では柱痕を確認した。

【炉】床面の中央からやや北西寄りで地床炉を1基検出した。形状は不整形で、規模は91×60cmである。焼土の厚さは6cmである。掘方は認められない。

【堆積土】土層は2層に分層した。

【出土遺物】床面からは円筒上層b～d、牛ヶ沢式、またPit2・3・5や堆積土全体からは円筒上層d式を中心に上層c・e式、榎林式、大木10式併行～牛ヶ沢式の各時期の破片が出土した。このほか第2層から自然礫をそのまま利用した石棒(2-図149-9)と軽石製品(2-図150-1)が出土した。

【小結】重複関係及び出土土器から、時期は縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期と考えられる。

SI 1092 (図63)

【位置・確認】ⅧF・G-90グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1201、SK1073、SN1003、SP1343・1344・5206よりも古く、SI1104+SI5066、SP9626よりも新しい。SP1345との新旧は明確にできなかった。

【形状・規模】形状・規模は重複が著しく不明である。SI1201(旧SK1075)を挟んだ南西側に位置するSI5063は床面標高等が近く、これを同一遺構と仮定した場合の残存長軸は7.1mである。

【壁・床面】壁は重複により北東側を除く大半を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる。

【柱穴・ビット】ビットは2基検出した。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は3層に分層した。

【出土遺物】床面から円筒上層d式、第3層から円筒下層d2・上層c～d式、第2層とPit3では榎林式の破片も出土した。

【小結】重複関係及び床面出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1093 (図64)

【位置・確認】ⅧI-93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1091よりも古く、SI1094よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸4.2m、深さ68cmで、形状は不明である。

【壁・床面】壁は西半を欠く。床は壁際から西へ緩やかに下っている。壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ビット】ビットは2基検出した。

【炉】確認した床面の西側、本住居を切っているSI1091に隣接する位置で石囲炉を1基検出した。炉はこのSI1091により西半を欠き、形状は不明である。掘方に長さ20cm前後の扁平礫を並べて構築しており、規模は残存長軸57cmである。掘方の規模は残存長軸66cmである。炉石内部では南半中央部でわずかに焼土が形成され、厚さは3cmである。

【堆積土】土層は4層に分層した。第4層はPit1の堆積土である。

【出土遺物】堆積土から、円筒上層d式を中心に、上層c～e式、榎林式の土器片が出土した。

【小結】SI1091やSI1094と同一土器型式での重複関係がある。この重複状況から時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1094 (図64)

【位置・確認】ⅧI-93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1068・1080・1093、SK1084よりも古い。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸5.4m、深さ85cmで、形状は北東-南西に長い楕円形と考えられる。

【壁・床面】壁は西半を欠く。床は壁際から西へ緩やかに下っている。壁は、床から40cmほどは急角度で立ち上がる。これより上では傾斜を緩やかに変え、開くように立ち上がる。

【柱穴・ビット】ビットは5基検出した。

【炉】確認した床面中央部のやや南西寄りでは石囲炉を1基検出した。炉石は炉の北側で3点を確認したが、焼土の位置、掘方の形状から、これ以外にも炉石が存在した可能性は高い。掘方の規模は残存長軸93

cmである。北側の炉石から約10cm離れたところでわずかに焼土が形成され、厚さは2cmである。

【堆積土】土層は3層に分層した。第2層中で炭化物の薄層を挟む。

【出土遺物】第3層から円筒上層d・e式、Pit1～5及び堆積土全体からは円筒下層d2・上層c式～大木10式併行の土器片が出土した。

【小結】他遺構との重複状況から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1095 (図58)

【位置・確認】ⅧH-94グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1063・1068、SK1072よりも古く、SK1082よりも新しい。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸4.7m、深さ27cmで、形状は不明である。

【壁・床面】壁は北半と南側の一部を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ビット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は2層に分層した。

【出土遺物】床面及び堆積土全体から、円筒上層e～榎林式の個体を含む土器片が出土した。

【小結】重複関係及び第2層出土土器から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 1096 (図61)

【位置・確認】ⅧF-91・92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1065・1070・1072・1087よりも古い。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸6.0m、深さ20cmで、形状は不明である。

【壁・床面】壁は重複により北西側を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる

【柱穴・ビット】ビットは1基検出した。

【炉】検出していない。

【その他の施設】ビットに隣接して土坑を1基検出した。

【堆積土】土層は4層に分層した。

【出土遺物】床下からは円筒上層e式を下限として、床面及び堆積土全体からは榎林式を下限とする個体を含む土器が出土した。

【小結】他遺構との重複状況及び床面出土土器から、縄文時代中期中葉～後葉の円筒上層e～榎林式期と考えられる。

SI 1097 (図50・51)

【位置・確認】ⅧK-L-94・95グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1085と重複し、古い。SI1110とは新旧不明である。

【形状・規模】規模は5.7×4.7m、深さ50cmの、北東-南西に長い楕円形である。

【壁・床面】壁は全周で検出した。床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ビット】ビットは3基検出した。

【炉】床面の中央から北寄りで地床炉を1基検出した。形状は円形で、規模は55×52cmである。焼土の厚さは6cmである。掘方は認められない。

【堆積土】土層は5層に分層した。

【出土遺物】床面から円筒上層d式が出土したほか、床面・床面直上からは円筒下層d2～上層e式、堆積土全体からは複林式を下限とする個体を含む土器が出土した。

【小結】他遺構との重複状況並びに床面・床面直上出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1099 (図65)

【位置・確認】ⅧD-90グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 5065、SK 1078よりも古い。SP 1448との新旧は明確にできなかった。

【形状・規模】規模は3.4×3.2m、深さ48cmの、やや不整な方形である。

【壁・床面】壁は全周で検出した。床はおおむね平坦に作出され、壁はなだらかに立ち上がる

【柱穴・ビット】ビットは2基検出した。2基は東側の壁際に構築されている。Pit1では円筒上層c式の深鉢が横位で出土した。残存率が高く口径を保ったまま出土していることから意図的に埋置された可能性がある。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は2層に分層した。

【出土遺物】床面、堆積土2層、Pit1からは円筒上層c式を下限とする土器が、炉の掘方上からは円筒上層d式の土器片が出土した。2-図54-1はPit1出土の個体で、床面出土の破片と接合している。

【小結】Pit1出土土器は、本遺構に帰属する屋内の横位の埋設土器と見られ、この土器から時期は縄文時代中期前葉の円筒上層c式期と考えられる。

SI 1100 (図66)

【位置・確認】ⅧJ-93グリッドに位置している。土層観察用のベルトで堆積土と貼床の存在を確認したが、周囲は遺構の重複が著しく、このベルト部分以外で本遺構の痕跡を捉えることができなかった。そのため、堅穴部分については確認できず、これに伴うであろう柱穴・ビットについても明確にできなかった。

【重複】SI 1076・1090と重複し、古い。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】堅穴部分が確認されておらず規模、形状ともに不明である。

【壁・床面】壁は急角度で立ち上がる。貼床を確認したが、平面的な広がりについては捉えられなかった。

【柱穴・ビット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】2層に分層した。

【出土遺物】堆積土から円筒上層b～d式の土器片が出土した。

【小結】他遺構との重複状況から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 1103 (図122・123)

【位置・確認】ⅦG-89・90グリッドに位置する。2012年度調査において土層観察用壁面で確認された。北東側は2013年調査で別遺構と判明したため、SI5047として分離・登録されている。

【重複】SI 5043・5047 (SK 5021・5025含む)・5048、SP 5063・5074・5110と重複し、SI 5047・5064、SP 5063・5074・5110より新しく、SI 5043より古い。SI 5048とは新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複によって南東側以外の壁を失っているため不明であるが、残存部から長5mを超える長楕円形の平面形と推測される。確認面から床面までの深さは48cmである。

【壁・床面】残存する南東壁は高さ42cmで、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁周溝は南壁・南東壁際で確認され、幅20～38cm、深さ17～22cmである。床面は第V層の砂礫層中に形成されるが、比較的平坦である。

【柱穴・ピット】南東側壁周溝に隣接して、Pit 1とPit 2の2基を確認した。ともに柱痕は認められなかった。

【炉】検出していない。

【堆積土】4層に分層した。床面直上と壁周溝内に暗褐色土が堆積する。第1層ではV層由来と思われる砂礫が、壁周溝内の一部では焼土粒が多く混入する。ともに人為堆積と考えられる。

【出土遺物】壁周溝内・他堆積土からは大木10式併行を下限とする土器片が、Pit 1からは榎林式を下限とする土器片が出土した。

【小結】壁周溝内出土土器及び重複関係から、縄文時代中期後葉～末葉の最花式～大木10式併行期と考えられる。

SI 1104+SI 5066 (図67)

【位置・確認】調査時に別番号を付して調査を行ったが、整理作業の過程で同一遺構と判断した。ⅦG-90グリッドに位置し、第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1092・SI 1103・5039・5044、Ⅲ(廃棄層)13と重複し本遺構の方が古い。またSR 1017よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】南東壁の一部のみの検出であるため平面形は不明である。検出面から床面までの深さは39cmである。

【壁・床面】壁は重複により東側を除く大半を欠くが、外傾しながら立ち上がる。床はおおむね平坦で、第Ⅳ・Ⅴ層を直接床面とする。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層はSI 1104で3層、SI 5066で3層の計6層に分層した。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2・上層c～d式の土器片が出土した。

【小結】SI 1092(円筒上層d式期)以前、SR 1017(円筒上層c式期)以降とする重複関係から、時期は縄

文時代中期前葉～中葉の円筒上層c～d式期と考えられる。

SI 1105 (図68)

【位置・確認】ⅧI・J-90・91グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1077と重複し、古い。SI 1106、SR1018と重複し、新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】規模は3.6×3.5m、深さ35cmの、やや不整な円形である。

【壁・床面】壁は全周で検出した。床はほぼ全面が貼床により平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ピット】ピットは6基検出した。

【炉】床面の中央からやや南寄りで地床炉を1基検出した。形状は不整な楕円形で、規模は60×30cmである。焼土の厚さは6cmである。掘方は認められない。

【堆積土】土層は7層に分層した。

【出土遺物】貼床内からは円筒下層d2・上層d式、堆積土全体からは円筒上層c～e式までの土器片が出土した。

【小結】重複関係から、時期は縄文時代中期後葉～末葉の榎林式～大木10式併行期の何れかと考えられる。

SI 1106 (図68)

【位置・確認】ⅧI・J-91・92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1075+SN1013、SI 1076・1077・1105、SK1076よりも古く、SI 1107・1108よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、規模は6.9×3.9m、深さ35cmの、南北に長い楕円形である。

【壁・床面】壁は南西側の一部を欠く。床はほぼ全面が貼床により平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ピット】ピットは5基検出した。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は6層に分層した。

【出土遺物】貼床、床面、Pit1・5からは円筒上層c式を下限とする土器片が、堆積土全体からは円筒上層b～e式の土器片が出土した。Pit4からのみ、大木10式併行の小片が出土した。

【小結】SI 1107・1108(円筒上層c式期)以降、SI 1075+SN1013(円筒上層c式期)以前とする重複関係より、時期は縄文時代中期前葉の円筒上層c式期と考えられ、同一土器型式での重複が認められる。

SI 1107 (図68)

【位置・確認】ⅧK-91・92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1075+SN1013、SI 1106よりも古く、SI 1108よりも新しい。これ以外の遺構については新旧

を明確にできなかった。

【**形状・規模**】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸2.4m、深さ21cmで、形状は不明である。

【**壁・床面**】壁は南半と西側の一部を欠く。床の一部は貼床で作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【**柱穴・ピット**】検出していない。

【**炉**】検出していない。

【**堆積土**】土層は単層である。

【**出土遺物**】貼床からは円筒上層c式、堆積土全体からは円筒下層d2・上層c・d式の土器片が出土した。

【**小結**】SI1108(円筒上層c式期)以降、SI1075+SN1013、SI1106(円筒上層c式期)以前とする重複関係及び貼床出土土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層c式期と考えられる。

SI1108(図69)

【**位置・確認**】ⅧK-91・92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【**重複**】SI1075・1090・1106・1107よりも古く、これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【**形状・規模**】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は5.5×4.5m、深さ23cmで、形状は不明である。

【**壁・床面**】壁は北東側と南西側の一部を欠く。床は残存するほぼ全面が貼床により平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【**柱穴・ピット**】検出していない。

【**炉**】検出していない。

【**堆積土**】土層は4層に分層した。

【**出土遺物**】貼床・床面・Pit1・3からは円筒上層c式、堆積土全体からは円筒上層c～d式の個体を含む土器片が出土した。Pit2からのみ、最花式の土器片が出土した。

【**小結**】SI1075+SN1013・1106・1107(いずれも円筒上層c式期)以前とする重複関係並びに床面出土土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層c式期と考えられる。

SI1109(図70)

【**位置・確認**】ⅧJ・K-92グリッドに位置している。SI1076の床面とほぼ同じ高さで石囲炉を1基確認した。調査時はSI1076より古いと考えたが、出土遺物がこれらの重複遺構より総じて新しい傾向にあることから、重複関係の認識を改めた。炉の周囲で確認した貼床と考えられる範囲とともに報告するが、堅穴部分については確認できず、これに伴うであろう柱穴・ピットについても明確にできなかった。

【**重複**】炉はSI1076と、また貼床範囲はSI1090・1106・1107と重複し、本遺構の方が新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【**形状・規模**】堅穴部分が確認されておらず規模、形状ともに不明である。

【**壁・床面**】貼床の厚さは最大で15cmで、床面は平坦に作出される。

【柱穴・ピット】伴うであろう柱穴・ピットについても明確にできなかった。

【炉】石囲炉の構築に用いられる礫は形状、大きさともに様々なものが用いられる。これを1辺1m前後の方形となるように掘方内に配している。用いられる礫が不揃いなこともあってか、やや粗雑な印象も受ける。規模は147×141cm、掘方の規模は156×150cmである。炉石内部では全面で焼土が形成され、厚さは6cmである。

【堆積土】なし。

【出土遺物】炉の掘方・炉内堆積土から円筒上層b～d・複林・大木10式併行の破片が出土した。

【小結】出土遺物は、大木10式併行期までの土器群で占められるが、重複関係から時期は縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期と考えられる。

SI1110(図71)

【位置・確認】ⅧK-94グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1066他と重複するが、新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸2.6m、深さ36cmで、形状は不明である。

【壁・床面】壁は東半を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】確認した床面中央部のやや東寄りで石囲炉を1基検出した。炉を形成する礫は最大で長さ30cmほどの扁平な礫を掘方内に方形に配置している。石囲炉の規模は39×33cm、掘方の規模は48×42cmである。炉石内部では中央で焼土が形成され、厚さは3cmである。

【堆積土】なし。

【出土遺物】炉の西側近くの床面から石棒(2-図150-2)が出土している。土器は出土しなかった。

【小結】重複関係から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期以前の何れかの時期と考えられる。

SI1111(図71)

【位置・確認】ⅧJ-92・93グリッドに位置している。SI1091の床面とほぼ同じ高さで石囲炉を1基確認した。調査時はSI1091より古いと考えたが、出土遺物がこれらの重複遺構より総じて新しい傾向にあることから、重複関係の認識を改めた。竪穴部分については確認できず、これに伴うであろう柱穴・ピットについても明確にできなかった。

【重複】SI1091と重複し、新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】竪穴部分が確認されておらず規模、形状ともに不明である。

【壁・床面】検出していない。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】石囲炉の構築に用いられる礫は炉の北辺と南辺のみ確認したが、掘方をみると各辺に礫を配置したような痕跡がうかがわれ、現在は失われた礫が本来は方形基調に配されていたと考えられる。また、掘方からは炉の1辺が1m前後であったと考えられる。規模は残存長軸114cm、掘方の規模は123

×114cmである。炉石内部では全面で焼土が形成され、厚さは9cmである。

【堆積土】なし。

【出土遺物】炉内から大木10式併行の土器片が出土した。

【小結】重複関係から、縄文時代後期初頭牛ヶ沢式以降と考えられる。

SI1112(図72)

【位置・確認】ⅧL・M-98・99グリッドに位置する。第Ⅲ層精査中に褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】SI1119、SK1099より新しく、SP1500・1545より古い。

【形状・規模】規模は5.6×4.0mの南北にやや長い楕円形である。検出面から床面までの深さは65cmである。

【壁・床面】壁はSI1119、SK1099の堆積土、第Ⅲ層を第Ⅳ・Ⅴ層上面までほぼ垂直に掘り込んで形成される。床は第Ⅴ層中の礫がわずかに残存するものの、比較的平坦に形成される。貼床は炉周辺を中心に、3.2×1.7mの範囲で構築される。

【柱穴・ピット】ピットを15基検出した。壁際に並ぶPit2～8・12は壁柱穴を構成するものと思われる。Pit1・10・13～15の5基は大型であること、壁外に食い込んで掘り込まれることなどの共通点があり、五角形配置の主柱穴を構成する可能性がある。

【炉】床面中央部で石囲炉を1基検出した。炉石には長6～34cmの扁平礫・円礫が用いられ、90×79cmの楕円形に配置される。掘方は礫に位置のみに構築され、炉面直下は掘り込まれない。配石内部には74×46cmの範囲で、厚さ9cmの焼土が形成される。

【堆積土】6層に分層した。第4層は第Ⅳ層土粒・ブロックが多く含まれ、人為堆積の様相を呈している。

【出土遺物】土器は床面、炉掘方、堆積土から円筒上層c式～最花式・大木10式併行の各型式が出土した。炉からPit10にかけての貼床上では炭化木片が集中しており、炭化部材が含まれていた可能性がある。

【小結】重複関係及び床面出土土器から、大木10式併行期と考えられる。

SI1113(図73)

【位置・確認】ⅧL・M-92グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1090よりも古く、これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸3.5m、深さ29cmで、形状は南北に長い不整な楕円形と考えられる。

【壁・床面】床はおおむね平坦に作出されるが、東側に向かってわずかに下る。壁は緩やかに立ち上がる。

【柱穴・ピット】ピットは2基検出した。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は2層に分層した。

【出土遺物】円筒上層c式を中心として、下層d2～上層e式の土器片が出土した。

【小結】重複関係及び出土土器から、時期は縄文時代中期前葉の円筒上層c式期またはそれ以前と考え

られる。

SI 1114 (図73)

【位置・確認】ⅧL・M-93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI 1089・1090よりも古く、SI 1122よりも新しい。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸4.9m、深さ65cmで、形状は北西-南東に長い隅丸方形と考えられる。

【壁・床面】床はおおむね平坦に作出されるが、中央部が壁際よりやや低い。壁は緩やかに立ち上がる。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は4層に分層した。また、住居の北及び西側の一部堆積土上で沢1層の堆積を確認した。

【出土遺物】堆積土全体から、円筒上層e式を中心として下層d2～上層e・榎林・最花・大木10式併行の個体を含む各型式の土器が出土した。またこのほか東壁際の床面から端部彫刻型石棒(2-図150-3)が被熱しび割れた状態で出土している。

【小結】SI 1122(円筒上層e式期)以降とする重複関係並びに出土土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層e式期と考えられる。

SI 1115 (図74)

【位置・確認】ⅧK・L-99グリッドに位置する。第Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】SI 1059(第528集)よりも新しい。

【形状・規模】重複により北東部を失っているが、長軸3.3mの楕円形であったと考えられる。検出面から床面までの深さは25cmである。

【壁・床面】壁は第Ⅲ～Ⅳ層を床面から50°前後の角度で掘り込み、床は第Ⅳ層中の砂質シルト上に平坦に形成される。壁周溝は、南壁から南東壁際と、西壁・北壁際で確認した。幅5～11cm、深さ10～27cmである。貼床は確認されなかったが、炉の周囲及び西側・南東側の壁周溝にかけての範囲には硬化面が認められた。

【柱穴・ピット】ピットを11基検出した。主柱配置は不明であるがPit1～5・7・10・11は環状配置の一部と考えられ、上屋を構築する柱穴であった可能性が考えられる。

【炉】床面中央部で、石囲炉が1基検出された。掘方は72×60cm、床面から炉面までの深さ11cm、炉石直下の深さ18cmで掘り込まれる。炉石には長軸15～42cmの扁平礫7個が用いられ、掘方壁面に沿って67×59cmの六角形に配置される。内部に焼土は検出されなかったが、西側の炉石の中央に面した部分に被熱痕が認められた。

【堆積土】4層に分層した。暗褐色土主体で、第1層で礫の混入が目立つ以外は、総じて均質な土層である。

【出土遺物】炉・Pit1・11から、榎林式を下限とする土器片が出土した。

【小結】SI 1059(榎林式期)との重複関係から、時期は縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 1116 (図75)

【位置・確認】ⅧK・L-98・99グリッドに位置する。第Ⅲ層精査中に褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】SI 1121より新しく、SP1531より古い。また炉に隣接してSR1022を検出したが、本遺構の時期とは異なる円筒上層期の土器であるため、これより古い土器埋設遺構と判断した。

【形状・規模】規模は残存長2.9×2.7mの楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは46cmである。

【壁・床面】壁は、SI 1121堆積土、第Ⅲ層～Ⅴ層中まで掘り込まれ、床から約20cmの高さまでは50°前後に傾斜したのち、垂直に立ち上がる。床は長46cmまでの地山礫が残存するものの平坦に形成される。貼床にはぶい黄褐色シルトからなり、焼土を中心に北東から南西に160×80cmの範囲で構築される。

【柱穴・ピット】ピットを8基検出した。配置に規則性が見出せず、支柱穴は不明である。

【炉】床面の中央部で地床炉を検出した。この南側には土器埋設遺構が隣接しているが、前述のように古い遺構が露出したものと見られる。被熱部の規模は38×28cmである。

【堆積土】5層に分層した。第4・5層は貼床構築土で、第1～3層は堅穴堆積土である。

【出土遺物】床面、炉、Pit6・11及び堆積土から円筒上層e・d式、榎林式、最花式の各型式が出土した。

【小結】重複関係及び床面、炉、Pit6出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI 1118 (図76)

【位置・確認】ⅧM-100グリッドに位置している。第Ⅳ・Ⅴ層上面で検出した。

【重複】SI 1051 (第528集) よりも古い。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸3.0m、深さ39cmで、形状は不明である。

【壁・床面】壁は南東側を欠く。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。床面中央部には、黄褐色土で貼床が施される。

【柱穴・ピット】ピットは3基検出した。

【炉】検出していない。

【その他の施設】確認した床面のほぼ中央で埋設土器を1基確認した。埋設土器は貼床を切って掘方を構築している。掘方の規模は32×24cmで、ここに土器底部を埋設する。焼土及び被熱痕跡は認められなかった。

【堆積土】土層は3層に分層した。

【出土遺物】埋設土器のほか、第3層、Pit1～3から円筒上層e～榎林式の土器が出土した

【小結】重複関係及び埋設土器から、時期は縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 1119 (図72)

【位置・確認】ⅧM・N-99グリッドに位置する。第Ⅲ層及び第Ⅳ層のぶい黄褐色シルト層上面において暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】SP1563よりも新しく、SI 1112、SP1539・1544・1549・1565・1566よりも古い。

【形状・規模】重複によって南西側を失っているが、やや不整な楕円形と推測される。残存長規模は4.5

m、検出面から床面までの深さは27cmである。

【壁・床面】壁は、第Ⅲ～Ⅴ層を緩やかに外傾させて掘り込まれる。床は、第Ⅳ・Ⅴ層中にやや起伏を持って形成され、直上に貼床が構築される。貼床は暗褐色土が用いられ、住居北東寄り2.7×2.2mの範囲で構築される。

【柱穴・ピット】ピットを15基検出した。Pit5・12～19は壁柱穴を構成するが、主柱穴とみなせるピットは確認されなかった。

【堆積土】貼床直上土を2層に分層した。

【出土遺物】堆積土から円筒上層d・e式の土器片が出土した。

【小結】重複関係及び出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層d～e式期と考えられる。

SI1120(図77)

【位置・確認】ⅧL・M-97グリッドに位置している。西側は沢1層中、東側は第Ⅲ層中で検出した。炬に切り合い関係が認められ、新旧2時期が想定される。

【重複】SK1098よりも新しく、これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】南西側は調査できなかったが、規模は4.5×3.0m、深さ84cmの、南北に長い隅丸方形である。

【壁・床面】壁は南西側を欠き、西壁の一部で壁周溝を伴う。床はおおむね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【柱穴・ピット】ピットは11基検出した。Pit10とPit11は旧段階に伴う可能性がある。また、Pit8の堆積土中には鏝が「コ」の字上に、3点配置されていた。

【炉】床面中央部のやや西寄りで石囲炉を1基検出したが、断面の観察から切り合い関係が認められ、2時期が想定される。東側のものが新段階で、西側のものが旧段階である。旧段階の炉は東側を切られるもののこれ以外の部分の炉石は残存している。この大きさは大小様々なものを掘方内に配置している。鏝間が離れるところもある。新段階の炉は細長い鏝を主に用い、掘方内に南北にやや長い楕円形に配置している。規模は66×57cm、掘方の規模は69×77cmである。炉石内部では北側に主に焼土が形成されており、厚さは3cmである。

【堆積土】土層は5層に分層した。

【出土遺物】Pit1～8・11、壁周溝、第1～3・5層からは最花式を下限とする縄文時代中期後葉の土器片が、また第3層からは牛ヶ沢式の深鉢頸部片1点(2-図57-5)が出土した。

【小結】重複関係及び出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式から後期初頭の牛ヶ沢式期間の何れかの時期と考えられる。

SI1121(図75)

【位置・確認】ⅧL-98・99グリッドに位置する。第Ⅲ層精査中に褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】SI1116、SK1097より古い。

【形状・規模】壁の多くを失っているためは不明であるが、残存部から長軸2.4mの楕円形であったと推測される。検出面から床面までの深さは25cmである。

【壁・床面】壁は、第Ⅲ～Ⅴ層の漸移層を緩やかに掘り込み、床は漸移層中に起伏を持って形成される。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【柱穴・ピット】ピットを5基検出した。

【堆積土】褐色土の単層として認識した。礫の混入が少なく、比較的均質な土層である。

【出土遺物】図示しなかったが、堆積土出土土器は円筒上層c式である。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、円筒上層c式期と考えられる。

SI1122(図73)

【位置・確認】ⅧM-93グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SI1114と重複し、古い。これ以外の遺構については新旧を明確にできなかった。

【形状・規模】重複により全形は捉えられないが、残存する規模は長軸3.2m、深さ56cmで、形状は不明である。

【壁・床面】床はおおむね平坦に作出されるが、中央部が壁際よりやや低い。壁は緩やかに立ち上がる。

【柱穴・ピット】検出していない。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は4層に分層した。

【出土遺物】堆積土から、円筒上層c式の個体を中心とした土器が出土したほか、北壁際の床面で端部彫刻型石棒(2-図150-4)が出土している。

【小結】重複関係及び出土土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層c式期と考えられる。

SI1123(図76)

【位置・確認】IXB-91グリッドに位置する。沢1北端部の先行トレンチ壁面において、壁の立ち上がりを確認した。

【重複】SI1130(榎林式期)が隣接するが、新旧関係は不明である。また、東側は沢1の堆積土を掘り込んでいる。

【形状・規模】西側及び南側の壁を失っており、平面形・規模は不明である。検出面から床面までの深さは40cmである。

【壁・床面】東壁は沢1の堆積土を掘り込んで形成される。床は、沢1の堆積土中に比較的平坦に形成される。

【炉】北壁際において石囲炉を1基検出した。掘方は径110cm、深さ17cmの円形を呈し、長軸10～34cmの扁平礫11個を82×53cmの長方形に配置する。炉内の焼土形成は明瞭でなかった。

【堆積土】2層に分層した。暗褐色土主体の土層である。

【出土遺物】土器は、床面直上では円筒上層d式、堆積土では円筒上層c・d・榎林・最花式の各型式の破片が出土した。

【小結】重複関係及び床面直上出土土器から、円筒上層d式期と考えられる。

SI1124 (図78)

【位置・確認】ⅧY・IXA-91グリッドに位置する。沢1北端部の先行トレンチ壁面において壁の立ち上がりを確認した。

【重複】SI1130・1133よりも新しく、SI1125よりも古い。

【形状・規模】重複により北・西壁を失っているが、推定長6～7mの楕円形であったと推測される。壁の残存長6.5m、検出面から床面までの深さは31cmである。

【壁・床面】壁は、SI1130・1133堆積土、沢1堆積土及び第Ⅲ層を、緩やかに掘り込んで形成される。床は、構築層の礫が多く露出するもの、沢1堆積土中に比較的平坦に形成される。

【柱穴・ピット】ピットを10基検出した。主柱穴は不明であるが、Pit1・3・9とSI1125Pit6とで主柱穴を構成していた可能性がある。

【炉】南側の床面上で、石囲炉を1基確認した。掘方は84×62cm、深さ6cmの楕円形で、18～27cmの炉石4個が壁に配置される。焼土は掘方底面の南側と、掘方東壁付近で確認された。焼土形成が不均一である点、炉石が不揃いな点から、炉石の抜き取りが行われた可能性がある。

【堆積土】2層に分層した。暗褐色～黒褐色の礫を多く含む土層である。

【出土遺物】土器は、床面直上、Pit1・10及び堆積土から最花式を中心に下層d2・円筒上層c式が出土している。

【小結】重複関係及び床面直上・堆積土出土土器から、最花式期と考えられる。

SI1125 (図78)

【位置・確認】ⅧY・IXA-90グリッドに位置する。沢1北端部の先行トレンチ壁面において壁の立ち上がりを確認した。

【重複】SI1124より新しく、SP12310よりも古い。

【形状・規模】規模は長7.1mの楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは57cmである。

【壁・床面】壁はSI1124堆積土、沢1堆積土をほぼ垂直に掘り込んで構築される。床は、沢1堆積土中に比較的なだらかな面として形成されるが平坦ではなく、炉周囲から南壁にかけては他より約20cm低くなっている。また、北壁際では幅100cmの壁周溝を確認した。

【柱穴・ピット】東壁に沿って9基のピットを確認した。これらは壁柱穴列をなしていた可能性がある。

【炉】床面中央部で石囲炉を1基、その南側に地床炉を1基確認した。炉1とした石囲炉は、89×71cm、深さ18cmの隅丸方形の掘方を伴う。炉石には長8～37cmの円礫・扁平礫が用いられ、掘方壁面に沿って概略方形に配置される。石囲内部では焼土の形成が認められない。炉2とした地床炉は、96×81cmの楕円形に形成された焼土である。北側で炉1の掘方堆積土と重複するが、炉1・2で一体のものであった可能性がある。

【堆積土】4層に分層した。第2層は暗褐色土のブロックを多く混入し、人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】土器は円筒上層c式～大木10式併行の各型式が出土し、床面、床面直上、ピット内、第2層では最花式が主体となる。

【小結】重複関係及び炉、床面、ピット出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI1124とは同一土器型式での重複である。

SI 1126 (図75)

【位置・確認】Ⅷ0-99・100グリッドに位置する。第Ⅲ～Ⅴ層の漸移層精査中に石囲炉を確認した。SI 1126として調査したのは石囲炉のみだが、関連する可能性の高い周辺のピットとともに報告する。

【重複】周囲には多数の土坑やピットが分布する。層的には確認できなかったが、石囲炉はSP9571(縄文時代中期後葉以降)に壊されているような位置関係にある。

【形状・規模】炉のみの検出のため、住居形状・規模は不明である。

【柱穴・ピット】本遺構に伴うと考えられるピットは確認できなかったが、炉の中心から径2.5mの範囲で分布するSP1552・1547・1560・1741～1744・1747・1749・1750・1757・1764・1765・9559・9570・9571・9572のピット群には、住居に属するピットが混在しているものと思われる。

【炉】炉は深さ10cmの掘方壁面に、17～36cmの扁平礫を炉石に用いて70×64mのコの字形に配列した石囲炉である。

【堆積土】炉内堆積土は黒褐色土の単層である。

【出土遺物】土器は出土しなかった。

【小結】炉のみが残存した住居である。他遺構との重複状況から、SP9571(縄文時代中期後葉以降)以前である。

SI 1127 (図74)

【位置・確認】ⅧQ-98・99グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面において褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】攪乱以外の重複は認められなかった。

【形状・規模】攪乱によって南西側を失っているが、長軸4.0mの楕円形であったと推測される。検出面から床面までの深さは25cmである。

【壁・床面】壁は、第Ⅳ・Ⅴ層を緩やかに掘り込み、第Ⅳ・Ⅴ層中の礫が残存するものの比較的平坦な床が形成される。壁から40～70cm離れた中央部では貼床が確認された。厚6cmまでで、礫の混入の少ない暗褐色土が構築土となっている。

【柱穴・ピット】北東壁際でピットを1基検出した。

【その他の施設】Pit1が特殊施設として該当する可能性がある。

【堆積土】2層に分層した。構築層と比較した場合、礫混入の少なさが目立つ。

【出土遺物】土器は、床面及び堆積土から円筒上層c式が出土した。

【小結】出土土器から、時期は円筒上層c式期以降と考えられる。

SI 1129 (図80)

【位置・確認】Ⅷ0・P-99グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【重複】SP1784・1785・9572・9559と重複し、新しい。

【形状・規模】竪穴部分が南側の一部しか確認されておらず規模、形状ともに不明である。

【壁・床面】貼床の厚さは最大で3cmで、床面は平坦に作出される。

【柱穴・ピット】ピットは2基検出した。Pit2では円筒上層d式の深鉢(2-図60-3)が横位に埋設され

た状態で出土した。土器の内部は土で充填し、旧状を保ったまま潰れずに出土しており、意図的な埋設の可能性が高い。貼床との先後関係は不明である。

【炉】検出していない。

【堆積土】土層は単層である。

【出土遺物】Pit1・2及び堆積土から、円筒上層d式の個体を含む土器が出土した。2-図60-3はPit2から出土した円筒上層d式の深鉢である。

【小結】床面に掘方(Pit2)を掘り、横位に土器を埋設した竪穴住居跡で、SI1199やSI1129等と同様の事例と見られる。埋設土器は本遺構に直接ともなうものと見られ、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI1130(図78)

【位置・確認】IXA・B-91グリッドに位置する。第Ⅲ～Ⅴ層の漸移層精査中に石囲炉を確認した。

【重複】南側でSI1124と重複し、新旧関係は本遺構の方が古い。SI1123との新旧関係は不明である。

【形状・規模】炉のみの検出のため、形状及び規模は不明である。

【壁・床面】壁は東半のみ検出した。

【炉】石囲炉を1基検出した。146×112cm深さ12cmの掘方壁面に、長軸11～36cmの扁平礫を100×70cmのD字形に配列した石囲炉である。炉内第2層の上面には68×53cmの範囲で焼土が形成される。

【堆積土】炉内堆積土は暗褐色土の単層である。

【出土遺物】炉内から榎林式を中心とした縄文時代中期後葉の土器が出土した。

【小結】他遺構との重複状況並びに炉の形状、出土土器から、所属時期は縄文時代中期後葉の榎林式新段階と思われる。

SI1133(図78)

【位置・確認】ⅧY-91グリッドに位置する。沢1堆積土を精査中に石囲炉を確認した。

【重複】SI1124より古い。

【形状・規模】壁を失っており、形状・規模は不明である。

【壁・床面】沢1堆積土及び第Ⅲ層中に形成されたと考えられるが、貼床・硬化面ともに検出されなかった。

【炉】石囲炉を1基検出した。72×76cm、深さ11cmの掘方を伴い、長軸7～18cmの扁平礫が不整な楕円形に配列される。内部に焼土の形成は認められなかった。

【堆積土】堆積土は暗褐色土の単層で、炉内堆積土は単層、褐色土の単層である。

【出土遺物】土器は、炉内、床面直上及び第1層から円筒上層c・d式、最花式の各型式が出土した。床面直上では最花式が主体的であった。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は最花式期と考えられる。

SI1134(図80)

【位置・確認】IXA-90グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面において平面プランを確認した。

【重複】SI1125の下面に位置する。

【形状・規模】西側を失っており、平面形状・規模は不明である。

【壁・床面】壁は沢I堆積土を緩やかに掘り込み、同層中に比較的平坦な床面が形成される。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【柱穴・ビット】本遺構に伴うと考えられるビットを1基検出した。

【炉】確認範囲の中央部で地床炉を1基確認した。発色の微弱的な焼土で、25×22cmの不整形を呈する。

【堆積土】重複によりほぼすべてを失っている。

【出土遺物】土器は、堆積土1層から円筒上層c式及び最花式が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、最花式期と考えられる。

SI1136(図81)

【位置・確認】Ⅷ0・P-92グリッドに位置している。第Ⅳ・Ⅴ層上面で検出した。石囲炉を確認したことで住居として認識できた。そのため堆積土の記録を取れず、堅穴部分も西壁の一部でしか確認できなかった。下記の他遺構については、貼床との新旧関係は捉えられたものの、これが本住居に伴うか否かを明らかにすることはできなかった。

【重複】SR1025、SP1861・9532・9533・9549・9550・9581・9582と重複し、貼床を掘り込んでいる。また大型礫が直立したSK1115は貼床下で検出しており、同遺構の堆積土上に石囲炉が形成されているため、貼床形成以前のものである。

【形状・規模】堅穴部分が西側の一部しか確認されておらず平面規模、形状ともに不明である。深さは西壁で39cmである。

【壁・床面】貼床の厚さは最大で9cmで、床面は平坦に作出される。なお、貼床は断面でのみ認識できたもので平面では確認できなかった。地山内の自然礫を除去することなく、そのまま壁面として堅穴に取り込んでいる。

【柱穴・ビット】本住居に伴うビットを明確にできなかった。

【炉】石囲炉を1基検出した。SK1115の堆積土上に位置する。同土層が被熱している。炉は扁平礫を方形に配置し、規模は54×42cmである。掘方の規模は63×45cmである。炉石内部では楕円形に焼土が形成され、厚さは6cmである。

【その他の施設】別遺構として調査したが、本住居より古いと考えたSK1115は大型の礫が2点埋置されており、上位の1点は住居床面から40cmほど突出していたと考えられる。

【堆積土】堆積土は確認できなかった。

【出土遺物】土器は、貼床内から時期不詳の細片が出土したのみである。

【小結】重複関係から時期の明確なSR1025(蛭沢式)以前で、貼床構築以前のSK1115(縄文時代中期後葉)以降と見られ、時期は縄文時代中期後葉から後期初頭間の何れかの時期としておきたい。

SI1137(図74)

【位置・確認】ⅧN・0-95グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】堅穴住居跡や土坑との重複はないが、多数のビットと重複する。

【**形状・規模**】規模は2.9×2.7mの隅丸方形を呈する。検出面から床面までの深さは22cmである。

【**壁・床面**】壁は第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、比較的平坦な床面が形成される。貼床は住居の中央に156×150cmの不整形に構築される。

【**柱穴・ピット**】本遺構に伴うと考えられるピットは確認されなかったが、住居範囲で確認されたSP1815・1827・1829・1836・1845・1846・1879・9575・9577・9612・9613・9614のうち幾つかは本遺構に伴う可能性がある。

【**炉**】床面中央からやや南東寄り、土器埋設炉を1基確認した。長36cm、深さ20cmの掘方に深鉢土器の下半部が埋設される。焼土は土器内の第1層に形成される。

【**堆積土**】9層に分層した。第1・9層は炉内堆積土、第6層は掘方堆積土である。

【**出土遺物**】土器は、炉体土器のほか、床面や堆積土から円筒上層c～e式の破片が出土している。

【**小結**】炉体土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI1201(図63)

【**位置・確認**】ⅧE・F-90グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。

【**重複**】SI1092・5063と重複し、新しい。SP1434との新旧は明確にできなかった。

【**形状・規模**】規模は3.3×2.5m、深さ45cmの、楕円形である。

【**壁・床面**】壁は全周で検出した。床は、中央部が径1.2mの円形に約10cm低く掘り窪められており段差を有する。石囲炉はこの中に構築される。基本層序を含むベルトの土層観察では、壁はなだらかに立ち上がる。

【**柱穴・ピット**】検出していない。

【**炉**】床面中央部のやや南東寄り、石囲炉を1基検出した。石材は長軸20～30cm程度の礫4個を掘方内に方形に配置している。石囲炉の規模は内寸で34×33cmである。炉石内部の全面で焼土が形成され、厚さは6cmである。石囲炉の北西辺の石材に台石を転用している(非掲載)。

【**堆積土**】竪穴堆積土は3層(第1'・1・2層)に分層した。第2層は炭化物を多く含む層で、遺物が多く出土する。また石囲炉関連の堆積土も3層に分層し、第2・3層は掘方埋土である。

【**出土遺物**】榎林式の土器の他、第2層からは多量の炭化物とともに板状礫が水平状態で出土した。大半は使用痕のない自然礫であったが、S-6は相馬安山岩製の台石の破片である。

【**小結**】出土遺物から時期は榎林式期と考えられる。

SI1501(図79)

【**位置・確認**】ⅧY-94・95グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面において褐色土の落ち込みとして確認した。

【**重複**】SK1509と重複し、本遺構の方が新しい。

【**形状・規模**】3.2×2.8mの不整形を呈する。検出面から床面までの深さは55cmである。

【**壁・床面**】壁は第Ⅳ・Ⅴ層を、床から65°前後の角度で掘り込んで構築される。床は第Ⅳ・Ⅴ層中に平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【**堆積土**】4層に分層した。暗褐色主体の土層で、第3・4層は壁際堆積土である。

【出土遺物】土器は、堆積土から円筒上層b～最花式の破片が出土した。

【小結】堆積土出土土器から、時期は榎林式期または最花式期と考えられる。

SI3001 (図82)

【位置・確認】VII・J-92グリッドに位置する。第V層上面において暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【形状・規模】規模は3.1×2.4mの楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは19cmである。

【壁・床面】壁は第V層を掘り込み、東壁は床面からは65°前後の角度で立ち上がる。床は第V層中の礫が残存するものの比較的平坦に形成される。貼床は、北側を除いた炉の周囲106×94cmの範囲に構築される。西側の貼床上面から炉の掘方底面にかけては硬化面が認められた。

【炉】床面ほぼ中央で石囲炉が1基検出された。掘方は69×56cm、深さ10cmの楕円形で、壁面に沿って長軸4～20cmの楕円礫9個が配列される。焼土は配石内部全体に及ぶが、発色は微弱である。

【その他の施設】北壁でSK1とした張り出し部と周堤からなる特殊施設を確認した。SK1は長50cm、検出面からの深さ14cmで、南側縁辺に幅32cm、床との高低差8cmの周堤が構築される。

【堆積土】3層に分層した。黒褐色土主体の土層である。

【出土遺物】炉の直上および床面上から炭化材が出土しており、焼失住居と見られる。焼失時に伴うと見られる炭化材の放射性炭素年代測定の結果、2778calBC-2620calBC・2868calBC-2803calBCとの成果を得た(第4章第1節参照)。

土器は炉直上、床面、第1・2層から最花式が主体的に出土した。礫石器では、竪穴北側の特殊施設上位の検出面付近で磨製石斧2点(2-図133-3・4)が出土した。またこのほか竪穴北側の床面上で長軸15～30cmの三角柱状の礫が出土した。このうち1点は台石(2-図133-5)で、残り2点は自然礫である。類似した礫形状や長軸方向を揃えた状況から、意図的に設置した可能性がある。

【小結】出土炭化材より焼失住居と見られる。焼失に伴う炭化材の年代測定では、縄文時代中期中葉から後葉に相当する年代値を得た。出土土器からの時期は最花式期と考えられ、年代測定の成果とも調和的である。

SI3002 (図82)

【位置・確認】VII・K-89・90グリッドに位置する。第V層上面において黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

【形状・規模】規模は2.8×2.7mで、北東部が隅丸方形形状となる不正円形を呈する。検出面から床面までの深さは28cmである。

【壁・床面】壁は第V層を掘り込み、床面からは60°前後の角度で立ち上がる。床は基本層中に大型礫が突き出ており、若干の凹凸がある。北半部では貼床を確認した。硬化面はなくA-A'南側では確認できなかったが、本来的にはやや深めに掘りこんだ炉周囲のみ貼床を敷設したものと見られる。

【炉】土器埋設炉を1基検出した。34×30cm、深さ27cmの掘方に、口縁を欠いた深鉢形土器(2-図61-9・10は同一個体)が埋設されている。土器内堆積土第1層の上面と、土器東側の床面上には、19×10cm、厚さ3cmの範囲で被熱している。

【**堆積土**】8層に分層した。第7層は貼床構築土で、第1～6層が堅穴堆積土である。第5層は炭化木片が多く認められ、第4層は基本層第V層由来の土粒・土塊から構成される。

【**出土遺物**】西・南側の第5層からは、焼失時の部材と思われる炭化木片が出土している。土器は堆積土から円筒上層d式及びe式が認められ、土器埋設炉には円筒上層d式の深鉢形土器が用いられている。2-図61-9と10は同一個体で、調査時点では接合するひとつの土器であったが、整理の過程で損耗し直接接合できないため個別に図化した。

【**小結**】焼失住居の可能性がある。時期は炉体土器から円筒上層d式期と考えられる。

SI3003 (図82)

【**位置・確認**】VII・J-89グリッドに位置する。暗褐色土の楕円形プランとして確認した。

【**形状・規模**】南壁を失っているが、長軸2.9mの東西にやや長い卵形であったと推測される。検出面から床面までの深さは41cmである。

【**壁・床面**】壁は第V層を緩やかに掘り込み、第V層中に若干起伏のある床面が形成される。貼床・硬化面ともに検出されなかったが、第1層の下部は土器埋設炉のレベル差から貼床が存在した可能性がある。

【**炉**】床面中央からやや北寄り、土器埋設炉を1基検出した。46×43cm、深さ10cmの掘方に深鉢土器の胴部を埋設している。土器内は第2層上面が被熱している。

【**堆積土**】堅穴堆積土は2層に分層した。暗褐色土基調の堆積土である。

【**出土遺物**】堆積土からは榎林式、最花式が出土している。炉体土器は榎林式又は最花式の深鉢胴部である。

【**小結**】時期は炉体土器より榎林～最花式期と考えられる。

SI3004 (図83)

【**位置・確認**】VII J-88・89グリッドに位置する。第V層上面において暗褐色土の円形プランとして確認した。

【**形状・規模**】規模は2.4×2.3mの卵形を呈する。検出面から床面までの深さは29cmである。

【**壁・床面**】壁は第V層を緩やかに掘り込み、第V層中に比較的平坦な床面が形成される。床面全面に貼床が認められるが、硬化面は検出されなかった。堅穴北側では地山内に巨礫があり、これを撤去すること無くそのまま壁や床面としている。

【**炉**】地床炉を1基検出した。64×51cm、深さ8cmの浅い土坑状の掘り込みを伴い、上面(第1層)に炭化物が堆積する。被熱面は認められなかったものの、炉第1層は堆積土第3層と同一層であることから、機能面は第2層上面であったと考えられる。

【**堆積土**】7層に分層した。第7層は貼床で第1～6層は堅穴堆積土である。堅穴中央部の第1～3層は黒みの強い暗褐色土で、第4・5層はより明るい壁際堆積土である。

【**出土遺物**】貼床及び堆積土から榎林式の土器が出土している。このほか堆積土上層(第1層)で大型の珪質頁岩原石を利用した台石(2-図133-6)が出土した。風化殻部には顕著な磨痕が見られる。

【**小結**】時期は出土土器から榎林式期と考えられる。

SI 3005 (図83)

【位置・確認】VII・I-89グリッドに位置する。SI 3006・3008、SK3002精査中に黒褐色土の円形プランを確認した。

【重複】SI3008より新しい。

【形状・規模】東壁を失っているが、推定長2.9×2.6mの楕円形であったと考えられる。検出面から床面までの深さは41cmである。

【壁・床面】壁はSI3008堆積土、第V層を掘り込み、床面からは60°～90°の角度で立ち上がる。床は第V層中の礫が突き出ているものの比較的平坦に形成される。南東部を除く床には、長240cm、最大厚39cmの貼床が認められた。硬化面は検出されなかった。

【柱穴・ピット】壁際に7基のピットを確認した。深さは4～26cmまでのものがあり、Pit3・4・5・7は深い。壁際に柱穴の配される構造と見られる。

【炉】床面中央部で地床炉を1基検出した。80×70cm、焼成厚5cmの範囲で被熱する。

【堆積土】9層に分層した。図83A-A'第6～9層及びB-B'第2・3層が貼床である。床面から第4層中にかけては炭化材が出土している。炭化材は焼土を伴い、放射状に分布する状況から焼失住居と見られる。なお第5層は焼失以前に堆積している。第1・2層は焼失後の自然堆積土である。

【出土遺物】土器は貼床と堆積土第7層で榎林式が、またその他堆積土で榎林式と最花式の各型式が出土している。

【小結】時期は重複関係及び貼床、第7層出土土器から榎林式期と考えられる。

SI 3006 (図84)

【位置・確認】VIIH-88グリッドに位置する。SI 3005・3008、SK3002精査中に炉と見られる3箇所の被熱面とこの下層で貼床を確認した。

【重複】SI3008より新しい。

【形状・規模】壁の大半を失っているため、平面形・規模は不明である。検出面から掘方底面までの深さは36cmである。

【壁・床面】上部が削平されており壁は残存していない。床は第V層中の礫が残存し、若干の起伏をもって形成される。貼床は410×100cmの範囲で認められたが、上面での硬化はない。

【炉】地床炉を3基検出した。南北方向で直線状に並び、北から炉1・炉2・炉3とした。規模は炉1が48×39cm、焼成厚8cm、炉2が63×36cm、焼成厚10cm、炉3が49×44cm、焼成厚10cmである。いずれも極めて良く被熱しており、赤化が著しい。それぞれの新旧関係は不明である。

【堆積土】6層に分層した。すべて床面以下の貼床構築土で、第1・2・4層は炉の焼土層である。

【出土遺物】土器は、貼床から縄文時代前期末葉、中期後葉の土器片が出土している。

【小結】重複関係及び出土土器から、時期は縄文時代中期後葉と考えられる。

SI 3007 (図83)

【位置・確認】VII E-91グリッドに位置する。第V層上面において暗褐色土の落ち込みを確認した。検出面で炉を検出したことから、この落ち込みは貼床と見られる。

【**形状・規模**】壁は失われており平面形及び規模は不明である。検出面から掘方底面までの深さは24cmである。

【**壁・床面**】床は第V層を緩やかに掘り窪め、暗褐色土を貼っている。貼床の規模は2.5×2.3mで、硬化面は検出されなかった。

【**炉**】貼床の中央部で地床炉を1基検出した。規模は80×69cmの楕円形である。

【**堆積土**】2層に分層した。いずれも貼床である。

【**出土遺物**】床面および掘方から少量の榎林式と最花式が出土している。

【**小結**】床面出土土器から時期は最花式期と考えられる。

SI 3008 (図84)

【**位置・確認**】VIIH-88・89グリッドに位置する。SI 3005・3006、SK3002精査中に暗褐色や黒褐色土の円形プランを確認した。後述する理由により第3・4層上面を貼床と捉えたが、炉の検出されない状況から、いずれも炉より下面の貼床の可能性もある。

【**重複**】SI3005・SK3002より古く、SI 3006より新しい

【**形状・規模**】規模は4.5×3.4mの不整長円形を呈する。検出面から掘方底面までの深さは38cmである。

【**壁・床面**】壁はSI 3006の堆積土、第V層を緩やかに掘り込んでいる。掘方底面は凹凸があり、第V層包含礫が突き出るあり方から同面が床面とは考えにくく、水平に堆積する第3・4層上面を床面、同層を貼床と捉えた。硬化面は検出していない。

【**堆積土**】4層に分層した。第3・4層は褐色土、黄褐色土で炭化物を含んだ貼床、第2層は堅穴堆積土と考えられる。出土遺物から、第1層は本遺構に伴わない攪乱層の可能性もある。

【**出土遺物**】土器は、第1層から大木10式併行の縄文土器片が出土した。

【**小結**】第3・4層上面は貼床で、同層上面を床面と捉えたが、炉を検出しておらず第2層以下が全て貼床の可能性もある。重複関係から、時期は榎林式期以降と考えられる。

SI 3009 (図85)

【**位置・確認**】VII G-92グリッドに位置する。第V層上面において、黒褐色土の楕円形プランを確認した。検出面で炉を検出したことから、下層の黒褐色土のプランは貼床と見られる。

【**形状・規模**】壁面はすべて失われており、堅穴形状・規模は不明である。貼床と見られる楕円形のプランの規模は3.4×2.7mである。検出面から掘方底面までの深さは15cmである。

【**壁・床面**】堅穴掘方は第V層を若干の起伏をもって掘り込み、内部には貼床が構築される。貼床は石囲炉周囲で緩やかに凹む。硬化面は検出していない。

【**炉**】貼床中央部で石囲炉を1基検出した。掘方は直径55cm、深さ15cm程度の楕円形で、炉石には15～20cm程度の扁平礫7個を、西側が開くコの字状に配置している。配石内部の南寄りて被熱面を確認している。礫抜き取り痕は確認していない。

【**堆積土**】5層に分層した。第5層は貼床構築土で、第1～4層は廃絶後の堅穴堆積土である。

【**出土遺物**】土器は、堆積土から円筒上層e式及び榎林式が出土した。

【**小結**】出土土器から時期は榎林式期と考えられる。

SI 3010 (図85)

【位置・確認】VII G-87・88グリッドに位置する。第V層上面において遺物の出土と暗褐色土の円形プランを確認した。北側は試掘トレンチに壊されているが、この時は輪郭を明瞭に確認できなかった。

【形状・規模】規模及び平面形状は、残存する東西方向で2.9mの円形である。検出面から床面までの深さは23cm、掘方底面までは30cmである。

【壁・床面】壁は第V層を緩やかに掘り込み、第V層中に比較的平坦な堅穴底面が形成され、ほぼ全面に貼床が認められる。石囲炉周囲は他より床面の沈み込みがある。硬化面は検出していない。

【柱穴・ビット】堅穴西側に1基検出した。柱痕は検出しておらず柱穴か不明である。

【炉】床面中央で埋設土器を1基検出した。土器内部は被熱していないものの、炉の北側隣接地が顕著に被熱しており、これを併せて土器埋設炉として報告する。炉体土器は直径30cm、深さ17cm程度の円形の掘方に深鉢胴部を埋設している。被熱面は層位的には土器埋設後であり、炉体土器と同時の可能性のほか、これ以降の重複した地床炉の可能性もある。

【堆積土】7層に分層した。第7層は貼床構築土、第6層が炉の掘方埋土で、第1～5層は自然堆積の堅穴堆積土である。

【出土遺物】土器は、炉体土器と堆積土の各層で円筒上層e式が出土している。

【小結】重複関係及び炉体等の出土土器から、時期は円筒上層e式期と考えられる。

SI 3011 (図85)

【位置・確認】VII F・G-91グリッドに位置する。第V層上面において黒褐色の楕円形プランを確認した。規模の大きさから堅穴住居跡として調査したが、後述する理由より土坑状の落ち込みの可能性が高い。

【重複】南側でSK3007と重複し、新旧関係はこれより古い。

【形状・規模】南側はSK3007に壊されているため全体形状は不明であるが、東西方向の規模は約2.8mである。検出面から掘方床面までの深さは41cmである。

【壁・床面】壁は第V層を皿状に掘り込んでいる。掘方底面は砂礫に富んだ第V層が起伏をもっており、その他の堅穴住居跡と比較しても同面を床面と見なすことは困難かもしれない。

【堆積土】4層に分層した。各層ともにレンズ状堆積が見られ、自然堆積の可能性が高い。

【出土遺物】堆積土下層で円筒上層e式が、堆積土上位で円筒上層d式から覆林式の各型式が認められる。中央部西寄りの底面付近では、機能面を上面に向けた台石が出土している。

【小結】堅穴住居跡として調査を進めたが、炉を伴わないこと、最下面が平坦でなく床面とするには困難なこと、堆積土は自然堆積と見られ貼床とも思われないこと等から、堅穴住居ではなく、土坑状の掘り込みであった可能性がある。重複関係及び貼床出土土器から、時期は円筒上層e式期と考えられる。

SI 3012 (図84)

【位置・確認】VII D・E-93グリッドに位置する。第V層上面において黒褐色土の円形プランを確認した。

【形状・規模】規模は3.8×3.6mの不整形円形で、検出面から床面までの深さは35cmである。

【壁・床面】壁は第V層を緩やかに掘り込んで構築され、第V層の礫層中に起伏のある掘方底面が形成される。貼床は掘方全面に構築されるが、硬化面は確認していない。

【炉】石囲炉を2基検出した。中央の石囲炉を炉1、東側を炉2とした。炉1は楕円形の掘方内に長軸20cm程度の長円礫8個を南北方向に長い長方形に配置する。被熱面は検出していない。炉2は掘方内に長軸20cm前後の礫5～6個が散在する。礫配置は全体的に乱れがあるが、北・東側の2辺の礫は炉石としての原位置を保っている可能性が高い。内部は顕著に被熱する。

【堆積土】堆積土は3層に分層した。第3層は貼床構築土、第1・2層は堅穴堆積土である。

【出土遺物】土器は、堆積土から最花式の破片が出土した。

【小結】堆積土出土土器から時期は最花式期と考えられる。

SI3013(図86)

【位置・確認】VII G・H-91グリッドに位置する。第V層上面において、暗褐色土の円形プランを確認した。

【形状・規模】北壁が失われているため平面形及び規模は不明である。検出面から床面までの深さは33cmである。

【壁・床面】壁は第V層を緩やかに掘り込む。壁は全体的に外側に開き、約60°の傾斜で立ち上がる。底面は第V層の礫層中に若干の起伏を持って形成される。貼床はほぼ全面に構築されるが、硬化面は検出していない。

【炉】堅穴中央で石囲炉を1基検出した。長軸20～30cmの扁平礫5個を小型の方形に配置する。掘方は礫の設置部分のみ掘り込んでいる。炉内堆積土第1層上面が機能面と思われるが、被熱痕は確認していない。

【堆積土】5層に分層した。第4・5層は貼床構築土で、第1～3層が堅穴堆積土である

【出土遺物】堆積土から、円筒上層e～榎林式の破片が出土した。

【小結】堆積土出土土器から、時期は榎林式期以降と考えられる。

SI3014(図86)

【位置・確認】VII F・G-94・95グリッドに位置する。第V層上面において暗褐色の円形プランを確認した。

【形状・規模】規模は3.9×3.4mの円形である。検出面から床面までの深さは57cmである。

【壁・床面】壁は第V層を概ね垂直に掘り込み、第V層の礫層中に若干起伏のある掘方底面が形成される。貼床は褐色土を10cm程度の厚さに、堅穴内のほぼ全面に敷設する。硬化面は検出していない。

【炉】堅穴中央やや南東寄りで石囲炉を1基検出した。石囲炉よりも大型の楕円形範囲を25cm程度掘り込み、この東寄りに15～30cmの楕円礫と長円礫5個を方形に配置する。石囲炉は内寸で25×20cmの非常に小規模なものである。内部は顕著に被熱し、図86C-C'第1層が被熱面である。石囲炉の東辺の石材に台石の破片を用いている。

【その他の施設】南北軸線上に、張り出しを伴う特殊施設を確認した。特殊施設は土手状の盛土とピットから成る。盛土は南壁に取り付けるように暗褐色土を40×40cm、厚さ10cm程度に盛り上げている。

ビットは40×30cm、深さ10cmの浅いビットが、石囲炉長軸の南側延長線上にあり、堅穴壁からは15cm程度の半円状に張り出している。

【**堆積土**】7層に分層した。第7層は貼床構築土で、第1～6層が堅穴堆積土である。第3～6層は炭化材や焼土を多く含んでおり焼失住居と見られる。

【**出土遺物**】床面からは炭化材と焼土が出土している。炭化材は東西・南北方向の材があり、一部では重なりが認められる。これらの資料で放射性炭素年代測定を行った結果、4290±20yr、2909ca1BC-2982ca1BC(68.2%)・2917ca1BC-2886ca1BC(95.4%)の成果を得た(第4章第1節)。

出土土器は炉掘方で円筒上層e式が、堆積土で円筒上層d～最花式の各型式が認められる。石囲炉の東辺の石材に凝灰岩製の台石の破片が転用されている。

【**小結**】焼失住居と考えられる。焼失に伴う炭化材の年代測定の結果、縄文時代中期中葉に相当する年代値を得た。出土土器からの時期は円筒上層e式期と考えられ、年代測定の成果とも調和的である。

SI 3015 (図83)

【**位置・確認**】VII G・H-85グリッドに位置する。第V層において暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【**形状・規模**】壁は削平され、全体形状・規模は不明である。検出面から掘方底面までの深さは28cmである。

【**壁・床面**】掘方底面は第V層中の礫が露出し凹凸が著しい。この上に暗褐色土からなる貼床が構築される。炉穴硬化面は見られず、検出面より上位に床面があった可能性もある。

【**堆積土**】単層の貼床のみ残存する。暗褐色土主体で、礫の混入が目立って少ない。

【**出土遺物**】貼床から円筒上層式期の土器片が出土している。

【**小結**】本遺構は堅穴住居跡の貼床のみ残存した遺構とみられる。貼床出土土器から、円筒上層式期と考えられる。

SI 3016 (図85)

【**位置・確認**】VII J-93・94グリッドに位置する。第V層上面において暗褐色の不整円形プランを確認した。炉は検出しておらず堅穴住居跡とする根拠に乏しいが、周囲の同規模・形状の遺構からの類推で堅穴住居跡と判断し調査した。暗褐色土の不整円形プランは貼床と見られる。

【**形状・規模**】貼床は3.2×2.7mの不整円形を呈する。検出面から掘方底面までの深さは57cmである。

【**壁・床面**】壁は失われており不明である。掘方は第V層中に起伏のある底面が形成され、暗褐色土で貼床が構築される。硬化面は検出されなかった。

【**堆積土**】2層に分層した。ともに貼床構築土である。

【**出土遺物**】貼床及び確認面から大木10式併行期の土器片が出土している。

【**小結**】本遺構は炉以下の貼床の残存したものと見られ、貼床出土土器から時期は大木10式併行期と考えられる。

SI 4002 (図87)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるIX B・C-85グリッドに位置している。捨て

場第2層上面にて暗褐色土の円形プランとして検出した。

【重複】南側でSI4021と重複し、本遺構が新しい。

【形状・規模】斜面地である北側は削平されており全体形は不明であるが、円形ないしは楕円形であったと考えられる。検出面における東西軸の長さは2.8mである。検出面からの深さは、最も深い南側で約30cmである。

【壁・床面】床面は基本層序IV・V層相当を掘り込み、貼床を敷設せず直接同層を床面としている。図示していないが炉周辺に硬化面が広がっている。

【柱穴・ピット】なし。

【炉】竪穴中央やや北寄りで石囲炉を1基検出した。平面形は南北方向にやや長い長方形で長軸は真北よりやや西へ向く。長軸15～30cmの扁平礫5個を用い、東辺を除いた三辺に礫1個を配す小型の石囲炉である。炉より一回り大きく掘った掘方に礫長軸を横に渡し、立てるようにして設置する。炉の規模は内寸で25×16cmである。炉内及び炉石には顕著な被熱痕跡は確認できなかった。

【堆積土】暗褐色土を主体として2層に分層した。第1層は炉内堆積土である。

【出土遺物】炉及び堆積土全体から、円筒上層c～e、榎林、最花式の土器片が出土した。

【小結】重複関係及び出土土器から、時期は縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI4003 (図87)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるIXE-86グリッドに位置している。19ベルトの東側、捨て場2a層の掘り下げ時に暗褐色土の円形プランとして検出した。ベルトを残して調査を進めており、捨て場堆積土と竪穴構築の関係が捉えられた。図87A-A'断面の2a層は19ベルトの細分層と対応できた土層である。

【重複】遺構との重複はないが、捨て場堆積土を掘り込んでいる。

【形状・規模】平面形は円形で、規模は2.6×2.5mである。検出面からの深さは最も深い南側で約80cmである。

【壁・床面】床面は基本層第IV・V層相当を掘り込み、貼床を敷設することなく直接同層を床面としている。硬化面は検出していない。

【炉】竪穴北寄りに石囲炉を1基検出した。平面形は方形を基調とするが、東西辺は直線上にはならずやや膨らむ。炉より一回り大きく掘り込んだ浅い掘方に長軸20～30cm程度の円礫、長円礫6個を、南北辺は1個、東西辺は2個配置し、結果として南北方向にやや長い方形となっている。規模は内寸で40×25cmである。炉内は明瞭な被熱を見せないが、炉石は内面が被熱し赤変している。

【柱穴・ピット】炉の北側でピットを1基検出した。図87C-C'第1・2層は柱痕である。

【堆積土】竪穴内堆積土は6層に分層した。暗褐色土を主体とし、第2層では礫がやや多い。捨て場堆積土との関係では、19ベルト第2a層(最花式期)が本遺構を覆っており、これ以下の捨て場堆積土を掘り込んでいる。

【出土遺物】土器は床面と堆積土全体から出土し、全て最花式である。

【小結】捨て場に掘り込まれた急斜面に位置する竪穴住居跡で、捨て場堆積土と竪穴住居構築の関係が捉えられた。榎林式から最花式期の捨て場堆積土を掘り込んで竪穴住居を構築し、最花式期には埋没

している。捨て場堆積土との層位的な状況並びに堆積土出土土器より、時期は縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI 4004 (図88)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるIXE・F-86グリッドに位置している。捨て場第2層掘り下げ時に黒褐色土の不整形プランとして検出した。

【重複】他遺構との重複はないが、捨て場堆積土を掘り込んでいる。

【形状・規模】斜面地の北側は壁や床面が失われており形状は不明である。残存部での平面形は小型の不整形円形であり、東西軸の長さは約2.6mである。検出面からの深さは、最も深い南側で約37cmである。

【壁・床面】床面は基本層第IV層を掘り込み、これを直接床面としている。硬化面は検出していない。

【柱穴・ビット】ビットは9基検出した。柱痕は確認しておらず、主柱配置は不明である。

【炉】なし。

【堆積土】堅穴堆積土は黒褐色土を主体とし、2層に分層した。19ベルト第2層に相当する層を掘り込んでいる。

【出土遺物】堆積土から最花式を下限とする土器片が出土した。

【小結】出土土器から、時期は縄文時代中期後葉の最花式期以降と考えられる。

SI 4005 (図88)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるVIIIY-84グリッドに位置している。石囲炉を検出したため周囲を精査したところ、これに伴う貼床を検出したため堅穴住居跡として認定した。堅穴の輪郭は捉えられなかった。

【重複】炉の周囲で多数のビットが重複する。明瞭な新旧関係は捉えられなかったが、炉石下位に位置するSP4118～4120よりも新しい。石囲炉検出時に下位のビットの輪郭が捉えられ、貼床を掘り込んでいるように見える。また、炉石は南側が残存していない等の状況から、SP4121・8568は石囲炉よりも新しい可能性はあるが、新旧関係は明らかにできなかった。

【形状・規模】全体的に遺存状況が悪く、形状および規模は不明である。

【壁・床面】炉周辺に貼床を検出した。

【柱穴・ビット】本遺構に確実に伴うビットはない。

【炉】石囲炉を1基検出した。北側の炉石3個のみが残存する。南側はビットとの重複により壊されたものか、抜き取られたものか明らかでない。掘方は下位のビットと重複しており確認できなかった。また炉内及び炉石には顕著な被熱痕跡も確認できなかった。

【堆積土】確認できなかった。

【出土遺物】炉内から円筒上層c、最花式の破片が出土した。

【小結】出土土器から、時期は縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI 4006 (図88)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるIXA-84グリッドに位置している。基本層

第IV層上面で暗褐色土の不整円形プランとして検出した。

【重複】SK4026と重複するが新旧関係は不明である。円筒上層d式の完形個体が出土したSP4226よりも古く、本遺構の年代観とも符合する。

【形状・規模】西側の一部が削平されているが、平面形は不整円形と考えられる。検出面での南北軸の長さは約2.6mである。検出面からの深さは約40cmである。

【壁・床面】床面は基本層第IV・V層を掘り込み、主に堅穴東半に貼床を敷設して床面としている。

【柱穴・ピット】なし。

【炉】堅穴中央やや南寄りで土器埋設炉を1基検出した。土器内は被熱せず、土器外面の床面が被熱し赤変している。

【堆積土】暗褐色土を主体として3層に分層した。第1・2層中には礫が大量に含まれている。

【出土遺物】炉体土器(2-図64-11)のほか、床面から円筒上層e式の個体土器(2-図65-1)、堆積土全体から円筒下層d2・上層e式の破片が出土した。

【小結】堅穴壁際に隣接するSP4226の横位出土土器(円筒上層d式期)は、土器の時期は本遺構よりもやや新しいが、位置関係や時期的な連続性からこれも他例で見るような堅穴住居内の横位埋設土器の可能性はある。炉体土器および床面出土土器より時期は円筒上層e式期である。

SI4007(図87)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるIXB-84・85グリッドに位置している。基本層第IV層上面で暗褐色土の不整円形プランとして検出した。

【重複】なし。

【形状・規模】平面形は不整円形で、検出面での上端規模は2.7×2.6mである。検出面からの深さは約15cmである。

【壁・床面】床面は基本層第IV・V層を掘り込み、貼床を敷設することなく直接同層を床面としている。

【柱穴・ピット】なし。

【炉】堅穴中央で地床炉を1基検出した。規模は50×30cm、厚さ3cmで被熱している。

【堆積土】5層に分層した。第5層は炉の火床面で、第1~4層は暗褐色土を主体とする堅穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土全体から円筒下層d2・上層e・e・榎林式の破片が出土した。

【小結】出土土器から、時期は縄文時代中期後葉の榎林式期以降と考えられる。

SI4009(図89・90)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘縁辺にあたるVIII X・Y-76・77グリッドに位置している。多数の遺構と重複しており、遺構の輪郭を捉えられなかった。

【重複】SI4019よりも古く、SI4011・4055・4057・4058よりも新しい。調査時、北側に隣接するSI4040よりも古い遺構と捉えたが、整理時の出土土器の検討の結果、本住居が新しいと推測される。

【形状・規模】新しい遺構に壊されているほか、重複が著しく調査で捉え切れなかった箇所もあり、形状は不明瞭である。図89中の破線部は壁周溝およびピット群の分布からの推定である。壁周溝および石囲炉の軸方向から見れば、おそらくは北西方向へやや長い長円形と見られる。

【壁・床面】壁は北東の一部で立ち上がりを確認できたのみである。床面は堅穴中央付近ににぶい黄褐色土を敷設し貼床としている。堅穴内には部分的に壁周溝が見られる。北から東側にかけて多重となる箇所があり、後述する炉の所見からも建て替えや認識できない堅穴住居跡の重複があったと見られる。壁周溝の新旧関係は明らかにできず、拡張、縮小の関係は不明である。

【柱穴・ピット】Pitとして調査したものは30基であるが、壁周溝とも関連、重複し複雑な様相を呈する。Pit2・4・13のようにやや大きいピットもあるが大半は直径30cm未満のもので占められる。炉5と重複するPit32は、褐色土の円形の落ち込みとして確認したが、炉5の火床面は掘削後のPit32底面に沿う状況から、Pitの重複の可能性もあるが、火床面を浅く掘りくぼめた地床炉とこれに堆積した土層と見ることもできる。

【炉】炉は5基検出した。炉1・2は石囲炉、炉3～5が地床炉である。炉1と炉2は重複しており、炉1の方が新しい。住居廃絶時まで機能していたのは炉1とみられる。炉1は北側一方にハの字状の石組みが取り付く「只形」の石囲炉で、既報告の調査事例でも数例見られる（青埋報第528集）。長軸方向は北西方向を向いており、これまでの事例とも同じである。石囲部の平面形は正方形に近く、長軸20～40cm程度の棒状礫、長円礫10個を長軸方向に並べている。掘方は礫設置部のみを掘削する。石囲部に接続した石組部は、東辺を延長する形で礫を北側に接続させている。西側は礫が見られないが、確認された掘方からその存在がうかがえる。一方、北側には掘方はなく、石囲部のような閉じた構造ではなく、開いた構造だったと推測される。

炉2は炉1の東側に隣接し、同炉と東側で重複している。火床面と掘方のみが確認でき、その痕跡からおそらくは炉1同様、石組部の取り付く「只形」の石囲炉だったと見られる。方位は炉1よりも西側へ向く。

炉3～5は地床炉である。炉3・4は堅穴西側で隣接し、炉5は炉2の南側に隣接する。炉3・4は地面が直接被熱し、炉5は浅く掘り窪めた底面に被熱面をもつ。炉5の被熱面は炉2の掘方にも及ぶことから、炉2→炉5の新旧関係が成り立つ。

【その他の施設】壁周溝以外の施設はない。

【堆積土】堆積土はほとんど確認できず、堅穴中央で貼床と見られる土層を確認したのみである。

【出土遺物】炉1の1層・周溝2・床面・Pit11・第2層から最花式を下限とする土器片が、その他Pitと堆積土全体から榎林式を下限とする土器片が出土した。

【小結】周溝2・Pit11・床面等の構築・使用時期を示す層位の出土土器から、時期は縄文時代中期後葉の榎林～最花式期と考えられる。調査時は北側に隣接するSI4040よりも古い遺構と捉えたが、出土土器の検討の結果、本遺構の方が新しいことが明らかとなった。

SI4010 (図90)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘縁辺にあたるIXB-85～87グリッドに位置している。基本層第IV・V層上面で暗褐色土の楕円形プランとして検出した。後述する理由により炉2をもつ堅穴住居跡と炉1A・炉1Bをもつ堅穴住居跡の重複の可能性もある。

【重複】南側でSI4018、北側でSI4021、東側でSI4020と重複する。新旧関係はSI4021よりも新しく、その他の遺構との新旧関係は不明である。東側に隣接するSI4020に貼床が壊された状況はうかがえ

ないが、床面が本遺構よりも低いため新旧関係の判断ができなかった。また同遺構との重複部の Pit 21・36・45も貼床を明瞭に切り込んでいる様子も無く、ここからの判断もできなかった。

【形状・規模】東側のSI 4020との重複部では壁の輪郭が捉えられず、全体形状は不詳であるが、残存状況から推せば東西方向に長い長円形と見られる。規模は長軸7.2m以上で、短軸は5.2m、検出面からの深さは約27cmである。

【壁・床面】床面は基本層第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、堅穴のほぼ全面に5cm程度の褐色土を貼って床面としている。硬化面は検出していない。

【柱穴・ピット】ピットは44基に本遺構名義の番号を付したが、隣接するSI 4020に伴うものも含んでいるものと思われる (Pit 37～40等)。また本遺構に伴うものでも、壁周溝の一部と考えられるものも含んでいる。炉2の東西でピットの分布状況が異なる。

【炉】堅穴中央で2基(炉1Aと炉1B)、西寄り1基(炉2)の石囲炉を検出した。炉1Aは炉1Bと重複し、炉1Bの炉石抜き取り後の掘方を炉1Aの火床面とする状況から、炉1B→炉1Aの新旧関係が成り立つ。炉1Aの南辺に相当する炉石は、他に候補も見られないことから炉1Bの南辺をそのまま利用している可能性が高い。炉1B南側には浅い皿状の土坑が取り付く。層位的には古い炉1B構築時に伴うもので、使用状況的には炉1A使用時に機能的に利用していたと見られる。以下では個別に記載する。

炉1Bは炉1A以前の石囲炉で、東辺及び南辺の炉石が残存する。北側は炉石掘方が見られるが、西辺については不明である。これらの痕跡から推せば、炉1Bの規模は内寸で45×30cm程度の小規模なものと思われる。炉内、炉石ともに顕著に被熱するが、前述のように炉石は炉1A段階でも共有されており、どちらの段階での被熱か不明である。南側には120×85cmの円形状の落ち込みが取り付く。複式炉の前庭部の可能性も考えられるが、硬化面や被熱面は検出していない。

炉1Aは炉1Bの北辺の炉石を抜き取り、北側へ拡張させた石囲炉である。南辺は古い炉1Bと共有し、北側は長軸20cm前後の長円礫5個をL字に配する。結果として石囲炉は内寸で100×50cm程度の南北に長い長方形であったと見られる。なお東西辺は一部炉石が見られない。炉内は顕著に被熱し、南北に長い楕円状に、10cm程度の厚さに焼土が形成される。火床面は古い炉1Bのものより10cm程度高い位置にある。

炉2は堅穴西側に位置する石囲炉である。東辺の炉石が見られず、東側に開いたコの字状の平面形を確認した。東辺は失われている可能性が高い。石囲炉よりやや大きい掘方に、15～20cm程度の長円礫5個を配する。東側に棒状礫が見られるが本施設と関連するものかは不明である。なお全体的に炉石は被熱が顕著であるが、棒状礫に被熱は見られない。

【堆積土】暗褐色土を主体として3層に分層した。前述のようにSI 4020との重複部では、明確な土層の違いを確認できなかった。図90A-A'では調査時のままに表記している。第2層は炭化物を多量に含む土層で、最花式の土器集中廃棄層である。

【出土遺物】貼床、炉1、周溝、Pit 1・5・12・15・23・29、堆積土全体から、最花式を中心とした縄文時代中期後葉の個体土器・破片が出土した。第2層の壁際で完形の土器を多く含む集中廃棄層があるほか、炉2を境に東西で土器の出土状況が異なる(写真図版70)。また有孔土製品(2-図142-19)も同層出土で、最花式との共存関係がある。

【小結】炉1Bから炉1Aへの作り替え(炉の拡大)が見られ、以下の状況からも、炉2をもつ堅穴住居跡

と炉1A・炉1Bをもつ竪穴住居跡の重複の可能性がある。炉2を境に東西で、土器の出土状況やピットの分布状況、床面の高さが異なること、この炉2の東辺の炉石が失われていること、炉2が竪穴西側に偏在すること、炉1Aの長軸方向と竪穴住居跡の長軸方向が一致しないこと等である。重複であった場合、堆積土中の土器分布状況からより東側の炉1に伴う住居が新しく、この時期は縄文時代中期後葉の最花式期である。

SI 4011 (図92)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘縁辺にあたるⅤX・Y-77・78グリッドに位置している。

【重複】北側はSI 4040、南側はSI 4009と重複し、いずれの遺構にも壊される。また西側は攪乱に壊される。

【形状・規模】他遺構や攪乱により西半は失われており形状および規模は不明であるが、残存部からは、長軸2m程度の小型の住居と推測される。深さは東側で15cmである。

【壁・床面】壁は東側のみを検出した。床面は敷設することなく、基本層Ⅳ・Ⅴ層をそのまま床面としている。炉の西側に硬化面が見られる。

【柱穴・ピット】竪穴中央と西側でピットを3基検出した。柱穴配置は不明である。

【炉】竪穴中央で小型の地床炉を検出した。硬化面を伴っている。

【堆積土】2層に分層した。第1・2層ともに竪穴内の堆積土である。

【出土遺物】床面から円筒上層d式の個体土器が、堆積土全体からは、円筒下層d2式、上層c～e式、榎林式の破片が出土した。

【小結】重複関係及び床面出土土器(2-図67-3)から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 4012 (図92)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘縁辺にあたるⅤX-78グリッドに位置する。

【重複】南側でSI 4013・4016、北側でSN4003と重複し、これらの遺構よりも新しい。西側ではSP4012に一部壊されている。

【形状・規模】規模は2.5×2.0mの東西方向にやや長い円形である。

【壁・床面】壁は一部をSP4012に壊されるが全体を確認した。検出面がやや北に下がっており、深さは南側で35cmである。

【柱穴・ピット】竪穴内の壁寄りではピットを8基検出した。Pit1の堆積土上面には炉が見られることから、これ以外のいずれかが柱穴になるものと思われる。

【炉】西側の壁際で被熱範囲を検出し、これを炉と捉えた。Pit1と重複しこの堆積土上面が被熱している(図92B-B')。

【堆積土】堆積土は図92A-A'で3層に分層した。第1～3層はいずれも竪穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土全体から、円筒上層c・d・榎林式の破片が出土した。

【小結】遺構に確実に伴う遺物はないが、堆積土出土遺物は榎林式が見られる。またその他の遺構の重複状況からはSI 4013・4016(榎林式期)以降と見られる。

SI4013 (図92)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘縁辺にあたるⅧW・X-78グリッドに位置する。

【重複】北側ではSI4012、また西側でSI4019・4045、東側でSI4016等と重複する。新旧関係はSI4016よりも新しく、その他の遺構よりも古い。

【形状・規模】北西部が明らかにできなかったが、残存部より南北方向に長い長円形と見られる。規模は5.5×3.5m、深さ25cmである。

【壁・床面】南側から東側にかけて壁が残存している。床は基本層第Ⅳ・Ⅴ層まで掘り込み、貼床を敷設することなく直接同層を床面としている。炉を中心に堅穴中央は硬化している。

【柱穴・ピット】堅穴床面で検出した、本遺構に伴うピットは26基である。明確ではないが北西部のSP4010～4012の3基もこの可能性があり図示した。ピットは壁際に巡るもの、堅穴内側のものがあるが柱穴配置は不明である。

【炉】堅穴中央で石囲炉を検出した。平面形は南北にやや長い長方形だが、東西辺(S-1・2の接点、S-4・5の接点)をやや張らせることで隅丸形状となる。長軸15～25cm程度の棒状ないしは長円の礫7個からなり、礫設置部のみを掘り下げて配置している。火床面はSP12357に壊されているが、残存部で被熱面を確認している。

【堆積土】図92A-A'で3層に分層した。第1～3層はいずれも堅穴堆積土である。

【出土遺物】床面及び堆積土全体から、円筒下層d2式、上層a・c・e式、椀形式、最花式、大木10式併行の各型式の土器が出土した。また堅穴南西部のPit11付近の床面より土偶(2-図143-1)が、堆積土中より端部彫刻型石棒(2-図151-4)が出土した。

【小結】遺構に確実に伴う遺物はないが、堆積土からは椀形式の破片が多数出土する。他遺構との重複状況を見ると、SI4016(椀形式期)以降で、SI4012(椀形式期以降)以降やSI4019(椀～最花式期)以前となる。周辺住居では椀形式期が多く、比較的短期間で重複を繰り返す状況にやや不自然さを残すが、当遺跡の炉形態の時間的な傾向性とも矛盾はなく、時期は椀林～最花式期としておきたい。

SI4014 (図93)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘縁辺にあたるⅧW・X-80グリッドに位置する。

【重複】その他の堅穴住居跡からは独立し、住居どうしの重複関係はない。SP4085・4087・4099・4124・4152・4151・7799等と重複し、SP4151以外のピットよりも古い。

【形状・規模】2.7×2.2mの円形である。深さは残存状況の良い西側で30cmである。

【壁・床面】壁は全周しており、北側以外はおおむね垂直に立ち上がる。床面は貼床を敷設することなく、基本層第Ⅳ層を直接床面とする。

【柱穴・ピット】本住居に伴うものと判断したピットはPit1～6の6基である。

【炉】検出していない。

【堆積土】堆積土は3層に分層した。第1～3層はいずれも堅穴堆積土である。

【出土遺物】Pit3・4及び堆積土全体から円筒下層d2、上層a・c・e、椀形式の土器片が出土した。

【小結】堆積土出土土器の下限の時期は縄文時代中期後葉の椀形式であるが、遺構に確実に伴う遺物はない。他遺構との重複状況では、SP4151(出土土器の最新時期が上層e式)よりも新しいことから、

時期は円筒上層e式期以降で、榎林式期には埋設が完了していたものと考えられる。

SI 4015 (図93)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘縁辺にあたるⅧW・X-77グリッドに位置する。

【重複】SI 4009・4013・4019・4045と重複し、新旧関係はSI 4019・4045よりも新しい。SI 4019とはほとんど同一の場所で重複し、南側の輪郭もおおむね一致している。またSI 4009・4013との新旧関係は明らかにできなかった。

【形状・規模】北側はSI 4009・4013と重複しており、調査の過程で輪郭を捉えられず形状は不明である。残存部からは直径3.0m前後の小型の竪穴住居と推測される。

【壁・床面】床面は、炉付近に床を敷設し貼床とする。またこれ以外の場所では古い住居(SI 4019)の堆積土を直接床面とする。炉を中心に竪穴南西部が硬化している。

【炉】竪穴中央に地床炉を1基検出した。

【堆積土】堆積土は4層に分層した。第1・2層は竪穴堆積土、第3層は貼床、第4層は炉の被熱面である。

【出土遺物】堆積土全体から円筒上層b～e式の破片、榎林～最花式と見られる土器の下半部が出土した。

【小結】堆積土出土遺物から、時期は縄文時代中期後葉の榎林式又は最花式期である。

SI 4016 (図93)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘縁辺にあたるⅧW・X-79グリッドに位置する。

【重複】西側でSI 4012・4013、北側でSI 4017、南側でSI 4028と重複し、SI 4017・4028よりも新しく、SI 4012・4013よりも古い。西側は新しい遺構により壊されている。

【形状・規模】他遺構との重複により形状および規模は不明である。なお残存部では直径5.0mの円形で、深さは25cmである。

【壁・床面】壁は東側から南側にかけて残っている。北側以外は比較的急角度で立ち上がる。床面はおおむね平坦で、基本層Ⅳ・Ⅴ層を直接床面としている。炉を中心に竪穴中央は硬化している。

【柱穴・ピット】ピットは主に南側の壁際を巡る一群と竪穴中央の硬化範囲付近に分布するものが見られる。柱穴配置は不明である。

【炉】竪穴西側に位置し、隣接するSI 4013に壊されるほか、SP12358にも壊される。蹴抜き取り痕が見られることから、石囲炉だったと推測される。床面より10cm程度掘り窪められた面を火床面としている。

【堆積土】堆積土は3層に分層した。第1～3層はいずれも竪穴堆積土である。

【出土遺物】床面から円筒上層e式、堆積土から円筒下層d2式・上層c～e式、榎林式の破片が出土した。このほか竪穴南東隅で石冠(2-図151-2)が出土した。

【小結】炉は石囲炉と見られ、床面より一段掘り下げて火床面としている。他遺構に壊されはつきりとしなが、同様の構築状況は本遺跡では複式炉系列の炉に特有のものである。竪穴中央からやや西寄りの位置関係も踏まえ、複式炉系列の炉であった可能性もある。本遺構に伴うPitの最新時期は榎林式で、他遺構との重複状況では榎林式期の遺構に壊されていることから、時期は縄文時代中期後葉の

榎林式期と考えられる。

SI 4017

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘縁辺にあたるⅧX-79・80グリッドに位置する。

【重複】南西部でSI 4016・SK 4004と重複し、これらのいずれよりも古い。また床面下のSK 4020よりも新しい。

【形状・規模】多数の遺構に壊されているため、平面形および規模は不明である。残存部での深さは10cmである。

【壁・床面】壁は南東部の一部しか残存していない。床面はおおむね平坦で基本層第Ⅳ・Ⅴ層を床面としている。炉の周囲が狭い範囲で硬化している。

【柱穴・ピット】ピットはPit 1～3の3基を検出した。柱穴配置は不明である。

【炉】竪穴内の中央付近に地床炉を1基検出した。25×20cmの狭い範囲で被熱している。

【堆積土】堆積土は2層に分層した。第1・2層ともに竪穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土全体から円筒下層d2式に限定される破片が出土した。

【結】重複関係及び出土土器から、縄文時代前期末葉の円筒下層d2式期と考えられる。

SI 4018 (図95)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるⅧY・ⅨA-86グリッドに位置している。基本層第Ⅳ層上面にて黒褐色土の長円形プランとして検出した。このような状況から遺構が数基重複している可能性を想定して複数のベルトを設定して掘り進めた。

【重複】北側のSI 4010とは部分的な重複のため、新旧関係の把握には至らなかった。検出状況及びSI 4010の堆積状況から本遺構の方が古い可能性がある。

【形状・規模】平面形は南北に長い長円形であり、主軸は真北よりやや西へ振れる。規模は7.1×4.9mである。床面積は約21㎡で、検出面からの深さは約27cmである。

【壁・床面】床面は基本層第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、全面に厚さ3～5cm程度の土を貼って床面としている。硬化面は検出していない。南側を除き壁際には幅20～50cm、深さ30～40cm程度の壁周溝が巡る。壁周溝内にはPit 12～14のように相対的に大きく、深いピットを等間隔に配しており、壁周溝より外面に張り出す特徴がある。

【柱穴・ピット】ピットとして47基を調査した。壁周溝や周溝内のピットも含んでいる。床面には炭化物が集積し、ピットはこの直下で検出しているため、いずれも本遺構に関連するものと見られる。数量が多いため建て替え等の可能性がある。

【炉】竪穴の南寄りで石囲炉を1基検出した。長軸20～40cmの長円礫10個を、南側に広い台形状に配している。北辺には最も大きな礫を配置する。規模は内寸で80×60cmである。炉内は良く焼け、炉石も西側を中心に顕著に被熱赤変している。一部炉の外周まで被熱範囲が及ぶことから焼失時にも被熱した可能性もある。

【堆積土】黒褐色土を主体として6層に分層した。第4層は床面に堆積した炭化物集積層で床面全体を覆っており、焼失住居と見られる。第6層は周溝堆積土である。

【**出土遺物**】炉内、壁溝、Pit1・10・17～19・21・22・24・25・28・29、第4層から、最花式を下限とする縄文時代中期後葉の土器片が、堆積土全体からは円筒下層d2、上層b～大木10式併行までの各型式の破片が出土した。

【**小結**】焼失住居である。南北に長い長円形の住居で壁周溝と内部に大型のピットを配する柱穴構造で、柱穴が壁周溝の外部に張り出す特徴がある。炉・壁溝・Pit及び第4層出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI 4019 (図94)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるⅧW・X-77グリッドに位置する。

【**重複**】SI 4009・4015・4045・4055と重複する。新旧関係はSI 4015よりも古く、その他の遺構よりも新しい。SI 4015とはほぼ同じ位置の上下で重複している。

【**形状・規模**】規模は3.0×2.7mの円形で、深さ30cmである。

【**壁・床面**】壁は西側の一部が明らかにできなかった以外は、ほぼ全体を検出している。床は古い時期のSI 4045やSI 4055を掘り込んでいる。東側は基本層第Ⅳ・Ⅴ層を直接床面とするが、西側はSI 4055の堅穴堆積土を床面としており、貼床の敷設は見られない。

【**柱穴・ピット**】ピットは5基検出した。

【**炉**】検出していない。

【**堆積土**】図94A-A'では、重複するSI 4015・4045を含め5層に分層したが、本住居関連土層は第2層のみである。第1層は本遺構上部のSI 4015堆積土で、第3・4層はSI 4045関連の土層である。

【**出土遺物**】床面及び堆積土から、最花式を下限とする縄文時代中期後葉の土器片が出土した。

【**小結**】SI 4015とはほぼ同じ位置で、上下に重複する堅穴住居跡である。重複関係及び出土土器から、時期は縄文時代中期後葉の榎林～最花式期と考えられる。

SI 4020 (図90・91)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるⅨA・B-87グリッドに位置する。基本層第Ⅳ層上面でSI 4010とともに検出した。

【**重複**】SI 4010と重複するが、遺構重複部の堆積土が類似しており新旧関係を捉えられなかった。床面はSI 4010よりもやや低く、同遺構下位に貼床が残存している。

【**形状・規模**】床面付近で検出したため壁はほとんど確認できないが、SI 4010よりも床面が低く、重複部でも遺構の輪郭を捉えられた。貼床範囲から推定する規模は、南北4.5×東西3.4mのやや南北に長い楕円形と見られる。

【**壁・床面**】床は基本層第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、褐色土を10～20cm程度貼って床面としている。

【**炉**】貼床の中央で石囲炉を1基検出した。炉は長軸20cm前後の円礫や長円礫十数個を用い、南側は方形、北側は円形基調のD字状に配する。炉は内寸で95×80cmでやや南北方向に長い。東西辺は北西方向を向いている。炉内は厚い箇所9cm程度被熱している。

【**堆積土**】堆積土は2層に分層した。第1層は堅穴堆積土で、SI 4010の堆積土と類似している。第2層は貼床である。

【出土遺物】貼床・炉・Pit4から最花式を上限とする土器片が、堆積土全体からは最花式を中心に円筒下層d2・上層c～e・榎林式の破片が出土した。

【小結】SI4010と重複するが新旧関係は不明である。時期は出土遺物から縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI4021 (図87)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるIXB-85グリッドに位置している。基本層第IV層上面で暗褐色土の不整形プランとして検出した。

【重複】南北でSI4002・SI4010と重複し、いずれの遺構よりも古い。このほか斜面地の北側は失われている。

【形状・規模】他遺構との重複により北側、南側は壊されているが、残存状況より小型の円形であったと見られる。残存部での規模は1.8mである。検出面からの深さは約13cmである。

【柱穴・ビット】なし。

【壁・床面】床面は基本層第IV・V層を掘り込み、貼床を敷設することなく直接同層を床面としている。硬化面は検出していない。

【炉】地床炉を1基検出した。直径30cm、厚さ3cmの範囲に被熱している。

【堆積土】5層に分層した。第5層は炉の火床面で、第1～4層は暗褐色土の堅穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土から、円筒上層c・d式と榎林式の破片が出土した。

【小結】重複関係及び出土土器から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI4022 (図94)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面部にあたるVIII・IXA-76グリッドに位置している。捨て場堆積土中の大型住居(SI4040)の床面で円形の輪郭を確認し、炉を伴うことから堅穴住居跡として調査した。

【重複】南側はSI4026、西側はSI73と重複し、同遺構に壊されている。また上部はSI4040により大幅に削平されている。

【形状・規模】他遺構に壊されているため平面形は不明で、残存部での深さは10cmである。

【壁・床面】壁は東側の一部しか遺存しない。床面は炉の近辺のみ貼床(図94B-B'第2層)を貼り、その他の部分では基本層第IV・V層を直接床面としている。

【柱穴・ビット】検出していない。

【炉】北側の壁際に地床炉を検出した。南側はSI4026に壊されているため機能時の規模は不明である。

【堆積土】SI4022関連土は図94A-A'およびB-B'で3層確認した。B-B'第1層は炉の被熱面、第2層は貼床、A-A'第3層は堅穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d1・d2式、円筒上層c式と榎林式の破片が出土した。

【小結】堆積土中の最新出土遺物は榎林式である。他遺構との重複状況では、本遺構を西側で壊すSI73、上部を大幅に削平するSI4040も榎林式期であることから、時期は縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 4026 (図94)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面部にあたるⅧY-76グリッドに位置している。捨て場堆積土中の大型住居(SI 4040)の床面で円形の輪郭を確認した。炉こそ伴わないが、規模や底面を平坦に造り出す状況から竪穴住居跡として調査した。

【重複】西側はSI 73と重複し壊されるほか、上部はSI 4040により大幅に削平されている。北側はSI 4022と重複し、本遺構の方が新しい。

【形状・規模】西側および上部は大幅に削平されており、平面形や規模は不明である。遺存部での深さは20cmである。

【壁・床面】壁は東側の一部しか残存しない。床面は平坦で、敷設することなく基本層第Ⅳ・Ⅴ層をそのまま床面とする。

【柱穴・ピット】本遺構に伴うピットは見られない。

【炉】炉は検出していない。

【堆積土】図94A-A'で2層に分層した。第1・2層はともに竪穴堆積土で、第1層上面にはSI 4040の炉11が形成されている。

【出土遺物】床面から円筒上層b・d式と榎林、堆積土全体から円筒下層d2・上層c～最花式の破片が出土した。

【小結】他遺構との重複関係及び床面出土土器から、構築時期は縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 4028 (図94)

【位置・確認】ⅧW-79グリッドに位置する。上部は全体的に削平が進み、南半は壁が残存していない。このほか北側はSI 4016に壊され失われている。

【重複】SI 4016と重複し本遺構の方が古い。このほかSP 4234・4242・7699・7700・7793・7796と重複し、いずれのピットにも切られている。

【形状・規模】遺存状況が悪く形状及び規模は不明である。残存部での深さは10cm未満である。

【壁・床面】壁は北東部のみが残存している。床面は中央から南側にかけて暗褐色土の貼床が見られる。

【柱穴・ピット】北半部でピット7基を検出した。柱穴配置は不明であるがPit5は他に較べてやや深い。いずれのピットでも柱痕は検出していないが、Pit5で一部先行して掘削を進めた部分は掘方より黒みの強い柱痕部だったものと見られる。

【炉】検出していない。

【堆積土】図94A-A'で2層に分層した。いずれも暗褐色土の貼床構築土である。

【出土遺物】床面から円筒下層d1～上層a式、Pit3・4から円筒上層c式と中期後葉と考えられる破片が出土した。堆積土全体からは最花式を下限とする中期後葉の破片が出土した。

【小結】時期決定遺物がいないためはっきりとしないが、重複状況より時期はSI 4016(榎林式期)以前である。

SI4040 (図96)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面部にあたるVII・IXA-76~78グリッドに位置している。斜面の捨て場堆積土を掘り込んでいる。住居廃絶後の堅穴窪地には再び土砂が捨てられ、捨て場堆積土が形成されていく様子が捉えられた。出土遺物は堅穴窪地内に捨てられたものを遺構出土物とし、図97A-A'で埋まりきった堅穴上部を覆う「捨1層」出土遺物は捨て場堆積土(第5分冊)の対象とした。

【重複】多数の遺構と重複関係がある。西側で重複するSI63・73・4009より古く、SI4011・4022・4026・4049よりも新しい。また、Pit10に関しては出土遺物から重複する別遺構であった可能性がある。

【形状・規模】西側は他遺構との重複が著しくはっきりと捉えられなかったが、柱穴配置等よりおおむね長軸15.0×短軸7.0mの東西に長い長円形の大型住居と見られる。北面する斜面地のため壁は北側より南側での残りが良く、深さは南壁で約70cmである。

【壁・床面】壁は西側が他遺構の重複により壊されている。また前述のように北面する斜面地の住居のため、南側は壁を深く掘り込むが北壁はほとんど立ち上がりず壁周溝のみを検出している。壁周溝は北側で一部途切れるが、残存部ではほぼ全周する。平均的な規模は幅40~50cm、深さは20cm程度であるが、ところどころピット状に深くなる。また壁周溝と重複するように、主柱穴と見られる大型のピットが配置されている。床面は、南側は直接基本層第IV・V層を、また北側は堅穴以前の捨て場堆積土を床面とし、貼床は見られない。また古い堅穴住居跡との重複箇所では、この堆積土を床面としている。

【柱穴・ピット】大小のピットを51基検出したが、規模の大小により柱穴配置が明瞭である。主柱穴は、東西の主軸線上に1対(Pit4とPit61)、また長軸方向の南北壁際に5対10本(Pit5-Pit3、Pit6-Pit2、Pit7-Pit1、Pit8-Pit9、SP822-Pit62)が並ぶ柱構造である。平面範囲は記録できていないが、Pit2・3・5・6・7・9では断面や底面のアタリとして柱痕跡を確認している。これによれば柱材の推定規模は直径30cm前後と見られる。

【炉】堅穴西側に大型の石囲炉(炉1)と、長軸方向に沿って南壁に7基(東から炉2・炉10・炉3・炉4・炉5・炉12・炉11)、北壁に4基(炉6・炉7・炉8・炉9)が直線上に並んでいる。このうち炉12のみが石囲炉で、他は地床炉である。炉11は炉12と重複し、炉12の方が新しい。

炉11は堅穴西側の主軸線上に位置した炉で、礫は一切残っていないがこれを設置した掘方が見られる。平面形状は東西にやや長い長円形と見られ、礫抜き取り痕からの推定規模は内寸で130×90cm程度でとりわけ規模が大きい。掘方は礫設置部のみドーナツ状に布掘りしている。火床面は良く被熱している。炉12は六角形に近く、礫長軸を横に向けて並べている。規模は内寸で40×35cmで小型で、内面は被熱する。

炉1と炉12以外はいずれも地床炉である。以下に被熱範囲の規模を示す。炉2=55×42cm、炉3=68×45cm、炉4=49×35cm、炉5=67×51cm、炉6=34×27cm、炉7=35×30cm、炉8=50×33cm、炉9=54×37cm。

【堆積土】堆積土は図97A-A'で7層、同図97B-B'で2層に分層した。A-A'では、「捨2a~2c層」とした捨て場堆積土を堅穴が掘り込んでいるのがわかる。最上層の「捨1層」は、堅穴窪地が埋まりきった後に形成された土層で、堅穴北側までオーバフローする捨て場堆積土である。これより下層の第1~3層が堅穴堆積土、第4~7層は柱穴堆積土である。B-B'では第1・2層が堅穴堆積土である。

【出土遺物】円筒下層d1~大木10式併行までの、各型式の個体を含む多くの土器が出土した。出土土

器の多くを占める円筒下層d1・d2式は捨て場堆積土を掘り込んだため、榎林式を下限とする床面下、床面、壁溝出土土器が本住居の時期を示すと考えられる。この他、炉の一部とPit18、堆積土2層からは最花式が、Pit10からは大木10式併行の破片が出土した。

【**小結**】捨て場堆積土中の住居で、西側は明確に検出できなかったが、SI5047と並び本遺跡において規模が最大級の竪穴住居跡である。主軸線上に1対の柱穴、長辺壁際には5対10本の大型の柱穴列が配置される。屋内には大型の石囲炉と長軸の壁際に沿って南壁では7基、北壁では4基の計11基の炉をもっている。重複関係及び床面出土個体から、時期は縄文時代中期後葉の榎林式期と見られる。これより新しい土器が混入する炉の一部と、Pit10、Pit18に関しては、本住居を構成しない、以降の別遺構である可能性がある。

SI4043 (図99)

【**位置・確認**】遺跡範囲の北側中央、遺跡中央を北流する沢2が開析した段丘斜面の西側肩部にあたり、ⅤY-87・88グリッドに位置する。当初は本遺構の東側付近が沢の西側肩部であったが、その後埋められ、この上に本遺構が作られている(図99B-B')。東側は沢へ向かって地形が下がっており、失われたためか全形を捉えられていない。竪穴の東側で石囲炉を2基検出した。検出面レベルはわずかな差でしかなかったが、礫設置面(掘方掘り込み面)では炉1よりも炉2の方が新しい(同時の可能性もある)。本遺構の下面では弧状の竪穴輪郭(SI4044)を検出しており、相対的に古い炉がそちらに帰属する可能性はあるが、明確にはできなかったため、石囲炉2基を本遺構に伴うものとして記述し、より古い可能性のある炉1についてはSI4044にも図示した。

【**重複**】沢2と重複し、本遺構の方が新しい。

【**形状・規模**】遺構上端のラインを認識できず全体形は不明である。

【**壁・床面**】検出範囲全面に厚さ5cm程度の貼床が施されている。また西側の溝は壁周溝とみられる。規模は幅25cm程度、深さは40～60cmで、南北に4m以上延びている

【**炉**】竪穴南東部で石囲炉を2基検出した。炉1は長軸15～30cm程度の長円礫9個を用い、礫設置部のみを掘り下げた掘方に、平面方形に配置している。規模は内寸で50×50cmで、火床面は良く被熱し、礫も一部被熱している。炉2は、礫上面の標高に炉1との大きな差はないが、礫設置面(掘方掘り込み面)では、わずかであるが炉2の方が高く(図99C-C'炉1の第1層上面付近に相当するものと思われる)、相対的に新しい可能性がある。長軸10～15cm程度の礫5個が残存しているが、平面形は不明である。内部は顕著に被熱している。

【**堆積土**】土層図A・Bラインともに2層に分層した。第1層は竪穴堆積土で、第2層は貼床である。

【**出土遺物**】炉から円筒上層e式、堆積土全体からは円筒下層d2式、上層b～e式、榎林式、最花式の破片が出土した。

【**小結**】本遺構に確実に伴う遺物はなく、出土土器からの時期推定は困難である。重複状況ではSI4044(最花式期)よりも新しいことから、時期は最花式期以降と見られる。2基の石囲炉は同時併存の可能性もあるが、層位的に炉2が相対的に新しいものと見られ、新旧の造り替えの可能性のほか、古い炉1は下面のSI4044に伴う可能性もある。

SI 4044 (図99)

【位置・確認】遺跡範囲の北側中央、遺跡中央を北流する沢2が開析した段丘斜面の西側肩部にあたり、ⅧY-88グリッドに位置する。SI 4043の下面を精査中、弧状の輪郭をもつ、わずかな立ち上がりを確認した。断面でもSI 4043との重複を捉えられており、堅穴住居跡として調査した。

【重複】SI 4043、沢2と重複し、SI 4043よりも古く、沢2よりも新しい。

【形状・規模】東側は斜面地のため残存せず、全体形は不明である。

【壁・床面】厚さ4～26cmの貼床が全面に施されている。

【炉】SI 4043の炉1としたものが本遺構の炉であった可能性はあるが、明らかではない。

【堆積土】図99B-B'断面では、沢2の堆積後に本遺構が構築された層位的な関係が捉えられている。堆積土は第1～4層に分層し、第2～4層は貼床(掘方埋土)とみられる。

【出土遺物】炉から円筒上層c・榎林・最花式、堆積土全体からは上層c～榎林式の破片が出土した。

【小結】円筒下層d式期には埋没した沢2の堆積土上の住居跡である。時期は炉で出土した最新出土土器より最花式期である。

SI 4045 (図94)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるⅧW-77・78グリッドに位置する。

【重複】SI 4013・4015・4019・4055と重複する。SI 4013・4055よりも新しく、その他の堅穴住居跡よりも古い。北側は重複するSI 4019により大きく壊されている。

【形状・規模】北側は壊されているため形状、規模ともに不明であるが、残存部からの推定値では直径3.5m前後の円形と見られ、深さは最深部で15cmである。

【壁・床面】壁は南半のみ残存している。床面は残存部の全面に貼床が見られる。

【柱穴・ピット】ピットは壁際を中心に5基検出した。

【炉】検出していない。

【堆積土】本住居に伴う堆積土は図94A-A'で2層に分層した。第3・4層はともに堅穴堆積土である。

【出土遺物】堆積土全体からは円筒上層c・d式と、縄文時代中期後葉と思われる破片が出土した。

【小結】遺構に確実に伴う遺物は出土しておらず時期は不明である。他遺構との重複状況では、SI 4009(榎林～最花式期)以前である。

SI 4047 (図100)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるⅧW・X-75・76に位置する。調査時、住居の存在に気づかず西半を先行して調査している。東側を調査した時点で堅穴住居の掘り込みを検出し住居として調査した。このため西半のピット群は単体のピットとして調査したが、本住居に伴うものも含まれている。

【重複】北側でSI 62、東側でSI 4055・4057と重複し、新旧関係はSI 4055・4057よりも新しく、SI 62よりも古い。

【形状・規模】北西部はSI 62に壊されているが、全体形状は南北方向にやや長い楕円形で、北西方向に主軸をもつものと思われる。規模は7.0×6.0m、深さは20cmである。

【壁・床面】壁は南側で残りが良く、比較的垂直に立ち上がる。床面は基本層第Ⅳ・Ⅴ層をそのまま床面とし、貼床等の敷設はない。

【柱穴・ピット】本遺構のピットとして調査したものは22基である。前述の事情により、西側のピット(SP)群にも、本住居跡に帰属するものも含まれているものと思われる。

【炉】竪穴の中央北寄りで石囲炉(炉1)を1基、竪穴の北側で土器埋設炉(炉2)を1基検出した。炉1は南北に長い長方形で、長辺を北西方向に向けている。規模は内寸で80×55cmである。竪は主に長軸20cm程度の長円礫や扁平礫を竪設置部のみ掘り窪めた掘方に設置する。抜き取られたためか炉石は一部残存していない。炉内は床面よりやや掘り窪め、ここを火床面としている。

炉2は炉1の北側の主軸線上に位置する土器埋設炉である。胴部下半を欠いた土器を、やや大きく掘った掘方に据え、貼床で固定している。土器内は堆積土上面が被熱している。

【その他の施設】竪穴南側で大型の落ち込みを検出し、SK1として調査した。規模は150×130cmの楕円形で、深さは38cmである。

【堆積土】堆積土は図100A-A'で5層に分層した。床面からやや浮いた状態で焼土層と炭化物層が検出されており、焼失住居の可能性が高い。

【出土遺物】堆積土の他、炉、SK1、Pit1～7・9・12の各施設内から円筒下層d2～大木10式併行の土器が出土した。Pit内では円筒上層d式、SK1では覆林式が下限となる。

【小結】竪穴床面付近の焼土層および炭化物層の存在から、焼失住居の可能性が高い。竪穴平面形は長軸を北西方向へ向ける長円形で、炉1の主軸方向と一致を見せる。なお炉2も主軸線上に位置している。時期は炉体土器(2-図73-1)より円筒上層e～覆林式期の可能性が高く、SI62(最花式期)より古い他遺構との新旧関係とも矛盾しない。

SI4049(図101)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるIXA-77グリッドに位置する。SI4040の床面下で弧状の輪郭と石囲炉を検出した。

【重複】SI4040と重複し壊されている。北側は斜面地で残存していない。

【形状・規模】南側しか残存しないため、平面形は不明である。壁立ち上がりから炉までの距離は1.2m程度である。

【壁・床面】壁は南側のみ検出した。床は残存部では黄褐色土の貼床が見られる。

【柱穴・ピット】ピットは壁際に4基検出したが柱穴配置は不明である。

【炉】石囲炉を1基検出した。SI4040Pit34に一部壊されているが、竪残存状況から小型の石囲炉と見られる。規模は40×15cm程度の、東西に長い長方形である。長円形の礫を横向きに置き、竪設置部のみ掘り窪めて掘方とする。完存していれば短辺に礫1個、長辺に礫2個を並べた、礫6個よりなる石囲炉だったと思われる。

【堆積土】SI4040により遺構上部は壊され、堆積土等は不明である。

【出土遺物】床面及び炉内から円筒上層c式を下限とする縄文時代中期前葉の破片が、堆積土からは最花式を下限とする破片が出土した。

【小結】重複関係及び炉・床面出土土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層c式期から中期後葉の覆林

式期の何れかの時期と考えられる。

SI 4055 (図101)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるⅧW・X-77グリッドに位置する。SI 4045下面を精査中、弧状の輪郭と地床炉を検出した。

【重複】SI 4009・4015・4019・4045・4047・4057、SK 4024と重複し、SI 4057を除くいずれの遺構よりも古い。

【形状・規模】南側は他遺構との重複により失われている。また遺構の上部も他遺構との重複により残存しないが、残存部の輪郭やPit 5・6などの配置等から、直径3.0m程度の小型の円形住居だったと見られる。

【壁・床面】壁は北側の一部で残存するのみで、残存部でもほとんど壁立ち上がりはない。床面は敷設することなく、基本層第Ⅳ・Ⅴ層を直接床面としている。

【柱穴・ピット】ピットは壁際に5基検出した。西側では壁周溝内にもピットが見られる。

【炉】壁から60cm内側に地床炉を検出した。ピット状の落ち込みの堆積土上部が36×30cmの範囲で被熱している。

【堆積土】壁穴堆積土は検出していない。図101A-A'は炉関係の堆積土で、第1層は被熱面で、第2・3層はこれと重複するピット堆積土である。

【出土遺物】床面・Pit 1・6から、円筒上層d式を下限とする土器片が出土した。

【小結】構築時を示す土層の最新出土遺物からは円筒上層d以降で、SI 4045(榎林～最花式期)以前とする他遺構との重複状況からの時期は、円筒上層d以降榎林式期以前である。

SI 4057 (図101)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるⅧX-76グリッドに位置する。比較的狭い範囲に被熱面が3箇所見られることから焼失住居の可能性も考えたが、断割調査の結果、被熱面が厚く短時間の燃焼とは思われないことから炉と判断した。

【重複】SI 4009・4047・4055・4058、SP 12312・12313・12318と重複し、SI 4058を除くいずれの遺構よりも古い。

【形状・規模】南側は他遺構との重複により失われているため、形状および規模は不明である。深さは15cmである。

【壁・床面】壁は北東部のみで残存しており、比較的外傾して立ち上がる。床面は平坦で基本層第Ⅳ・Ⅴ層を直接床面としている。

【柱穴・ピット】多数のピットが堆積土を掘り込んでいる。本住居に伴うピットはPit 1の1基である。

【炉】地床炉を3基検出した。炉1は壁穴内側に位置し、炉2・炉3は壁際に位置する。炉1と炉2は被熱面が厚い。炉3は床面を浅く掘り込み、黒褐色土(第2層)が堆積した上面が被熱している。

【堆積土】堆積土は図101A-A'で4層に分層した。第1～4層は壁穴堆積土である。

【出土遺物】土器は出土しなかった。

【小結】遺構に確実に伴う遺物は出土しておらず時期は不明である。他遺構との重複状況では、

SI 4009 (榎林～最花時期)以前である。

SI 4058 (図101)

【位置・確認】遺跡範囲の北側、段丘斜面の落ち際にあたるⅧX-77グリッドに位置する。SI 4057西側で半円形の暗褐色土範囲を検出した。炉やその他の施設も確認できなかったが、底面の平坦な比較的しっかりと掘り込みをもつことから堅穴住居跡と判断した。

【重複】SI 4009・4055・4057、SP12338と重複し、いずれの遺構よりも古い。

【形状・規模】南側は他遺構との重複により失われており、形状および規模は不明である。残存部からは直径4.0m程度の小型の円形住居だったものと思われる。

【壁・床面】壁は北側のみが残存し、外傾して立ち上がる。床面は平坦で、床を敷設することなく基本層IV層を直接床面としている。

【柱穴・ピット】本住居に伴うピットはPit2の1基である。

【炉】検出してない。

【堆積土】図101A-A'で2層に分層した。第5・6層はともに堅穴堆積土で、上層のSI 4009貼床直下に堆積し、SP12338に掘り込まれている。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2・上層b式の破片が出土した。

【小結】遺構に確実に伴う出土遺物はない。堆積土からは円筒上層b式期までの土器が出土していることから、当該期には埋没が完了していたと見られる。他遺構との重複状況では、SI 4009 (榎林～最花時期)よりも古く、出土土器の年代観とも矛盾しない。

SI 5001 (図102)

【位置・確認】遺跡の中央、ⅧB・C-85・86グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で円形の落ち込みを確認した。

【重複】SI 5005、SK5002より新しい。

【形状・規模】規模は3.0×2.2mの不整な楕円形である。検出面から床面までの深さはもっとも残りの良い地点で65cmである。

【壁・床面】壁は床面から約50°の傾きをもって立ち上がる。床は第Ⅳ・Ⅴ層の上面にやや起伏のある床面を形成する。貼床・硬化面等は検出してない。

【堆積土】3層に分層した。第1層は炭化粒の混入が目立つ暗褐色土で、第2層とともに人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】土器は、床面直上から円筒上層e式、その他堆積土では円筒上層a・c式、円筒上層e式～榎林式の破片が出土した。

【小結】重複関係及び床面直上の出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層e式期と考えられる。

SI 5002 (図103)

【位置・確認】遺跡の中央、ⅧA・B-87・88グリッドに位置する。第Ⅴ層上面で円形の落ち込みを確認

した。

【重複】SP5030より古い。

【形状・規模】平面規模は5.1×4.8mの不整な円形を呈する。検出面から床面までの深さは45cmである。床はにぶい黄褐色土を全面に貼って床面としている。掘方は中央が最も深く掘り窪められる。

【壁・床面】壁は全体的に外傾しながら立ち上がる。床は貼床を貼った結果おおむね平坦である。

【柱穴・ピット】本遺構に伴うと考えられるピットを4基検出した。いずれも主柱穴と考えられる。

【その他の施設】床面中央やや北東側から埋設土器を2基検出した。第1号埋設土器は堅穴中央やや東寄りに位置し、長軸79cm、短軸48cmの楕円形の掘方に深鉢が横位に埋設されている。土器内は土で充満し、潰れることなく埋められている。第2号埋設土器は第1号埋設土器の東側に隣接し、長軸40cm、短軸38cmの円形の掘方に、口縁部及び底部を欠く深鉢を正立させて埋設している。いずれも周囲及び内部での焼土は認められず、炉体土器としての用途は想定できない。

【堆積土】7層に分層した。層中には礫や炭化物が含まれることから人為堆積の可能性が高い。また、第5～7層は掘方の可能性が考えられる。

【出土遺物】土器は、埋設土器として2個体の円筒上層c・d式が出土した。なお第2号埋設土器については取り上げ時の不手際により図示することが出来なかった。

【小結】2基の埋設土器をもつ堅穴住居跡で、一方は正立(土器の胴部)、他方は横位(完形個体)である。横位の埋設土器はSI5003やSI5006にも同時期の類型を探することができる。時期は埋設土器から縄文時代中期中葉の円筒上層c～d式期のものと考えられる。

SI5003 (図103・104)

【位置・確認】ⅧY-84・85グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面において暗褐色土の円形プランを確認した。

【重複】SP5027より新しく、SP5024より古い。

【形状・規模】平面規模は4.5×4.2mの略円形を呈する。検出面から床面までの深さは31cmである。

【壁・床面】南壁は第Ⅳ層を緩やかに掘り込み、同層上面に比較的平坦な床面が形成される。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【柱穴・ピット】ピットは4基検出したが、Pit1は埋設土器掘方に相当する。Pit2～4では柱痕は検出していないが、位置関係から主柱穴の可能性もある。

【炉】北東壁寄りで地床炉を1基検出した。深さ16cmの鍋底状に掘り窪めた掘方を有し、埋土上位に81×54cm、厚7cmの焼土が形成される。火床面は平坦である(図104A-A')。

【その他の施設】西壁寄り、横位の埋設土器を1基検出した。64×59cmの円形の掘方(Pit1)に、底部を欠く円筒上層c式の深鉢が横位に埋設される。土器は潰れることなく、内部が土で充満している。また北側隣接地では完形の円筒上層d式の深鉢が床面直上に横たわっている。掘方は持たないが周囲を大型の礫で囲い、口縁部付近には特に礫が多い(写真図版80)。土器は潰れることなく内部は土が充満する。掘方は無いが、土器が横位に潰れることなく埋設された状況は、本住居の埋設土器やSI5002の事例と類似する。

【堆積土】6層に分層した。第3層は基本層第Ⅳ層類似土で、人為堆積と考えられる。

【**出土遺物**】埋設土器(2-図75-2)が円筒上層c式、また床面直上出土土器(2-図75-1)が円筒上層d式である。

【**小结**】埋設土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層c～d式期である。

SI5004(図104)

【**位置・確認**】ⅧE-88・89グリッドに位置する。基本層第Ⅲ層を精査中、楕円形に落ち込む黒褐色土として確認した。

【**重複**】SI5021・5050より新しい。SI5063との新旧は不明である。また、南側の壁・床面は近代のものと思われる井戸によって一部破壊されている。

【**形状・規模**】平面規模は4.8×3.7mで、平面形は東西方向に軸を持つ楕円形である。検出面から床面までの深さは77cmである。

【**壁・床面**】壁は北西側でSI5050堆積土を、南西側でSI5021堆積土をほぼ垂直に掘り込み、第Ⅳ・Ⅴ層中に床面を形成する。床面は大小の礫が残存するが総じて平坦である。床面中央に位置する長約80cmの巨礫(写真図版81)は、床との接地面の観察から第Ⅳ・Ⅴ層中の礫が削り出され残留したものと判断した。

【**柱穴・ピット**】ピットは4基検出した。いずれからも柱痕は確認されていないが、位置関係から主柱穴を構成するものと思われる。Pit1～4は西側に寄って台形に配置され、堅穴長軸とは異なる軸方向をとる。

【**堆積土**】9層に分層した。第1～3層は焼土粒・ブロックを多く混入する黒褐色で、第4層は炭化物と遺物を多く含む黒色土である。第5～9層は比較的均質な暗褐色～褐色土で第5層の遺物包含量が突出する。第1～3・4・5層はそれぞれ人為的堆積の様相を示し、廃棄層と見なした。

【**出土遺物**】土器は第1～4層から榎林式、第5層からは円筒上層d及びe式が主体となって出土している。

【**小结**】第5～9層出土の土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d～e式期と考えられる。第1～4層は本住居廃絶後の円筒上層e～榎林式期に形成された廃棄層(盛土遺構成層)と考えられる。

SI5005(図102)

【**位置・確認**】ⅧC-85・86グリッドに位置する。先行トレンチ壁面で壁の立ち上りを、Ⅲ(廃棄層)1を除去後に堆積土の落ち込みを確認した。

【**重複**】SI5006より新しく、SI5001、Ⅲ(廃棄層)1より古い。

【**形状・規模**】南壁の一部が失われているが、平面規模4.2×2.8mの不整な楕円形を呈していたと考えられる。検出面から床面までの深さは55cmである。

【**壁・床面**】壁は第Ⅲ層にあたる暗褐色土の包含層、SI5006堆積土を掘り込み、床面から約15cmの高さまでは傾斜させ、上部で垂直に掘り込んで形成される。床は第Ⅴ層の砂礫層上面に形成される。構築層中の礫が残存するものの、総じて起伏の少ない面をなしている。貼床・硬化面等は検出していない。

【**柱穴・ピット**】南西壁際で1基検出した。柱痕は認められず、堆積土上位では焼土の二次堆積が認め

られた。

【**炉**】床面中央からやや北西寄りに、地床炉を1基検出した。長軸49cmの不整形の掘方を持ち、堆積土中に発色の弱い焼土を形成する。

【**堆積土**】4層に分層した。第2層は特に炭化粒・遺物の包含量が多く、人為堆積によるものと考えられる。

【**出土遺物**】土器は、円筒下層d2・円筒上層b～椀林式の個体を含む土器が出土した。堆積土上位では3個体分の円筒上層d式土器が出土しており、うち1個体は倒立状態で出土している。

【**小結**】重複関係及び堆積土中の個体土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d～e式期と考えられる。

SI5006 (図102)

【**位置・確認**】ⅦC・D-85グリッドに位置する。トレンチ壁面で壁の立ち上りを、Ⅲ(廃棄層)11を除去後に堆積土の落ち込みを確認した。

【**重複**】SI5007・5030・5031・5041より新しく、SI5005、Ⅲ(廃棄層)11より古い。

【**形状・規模**】平面規模は3.5×3.1mの楕円形である。検出面から床面までの深さは58cmである。

【**壁・床面**】壁は、SI5030・5031・5041・第Ⅲ層を第Ⅳ・Ⅴ層上面まで垂直に掘り込み、床は第Ⅳ・Ⅴ層中の礫が残存するものの比較的平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出していない。

【**炉**】検出していない。

【**その他の施設**】埋設土器を2基検出した。第1号埋設土器は堅穴ほぼ中央に位置し、完形の深鉢(2-図78-2)を正立状態で埋めている。土器は器高35cmで、口縁から底部まで残存する。掘方の床面からの深さは13cmで、土器の下部約1/3のみを納めている。床面上に突き出した部分は、地山礫と裏込め礫により外面から固定・保持される形となっている。内部や周囲には焼土の形成が認められなかった。第2号埋設土器は堅穴の南側に位置し、完形の深鉢を横位に埋めている。土器は圧壊を免れて原形を保っており、内部に人為的な土壌の充填が認められる。土器は埋設された状態で、床面と考えた第Ⅴ層上面から少し頭を出すような格好であるが、第1号埋設土器の検出状況も勘案すると、床面がこれより上位の第4層上面であった可能性もある。

【**堆積土**】4層に分層された。暗褐色土主体で、第1・2層はレンズ状堆積を呈している。

【**出土遺物**】土器は、床面出土の埋設土器の他、堆積土から円筒下層d2・円筒上層c～eの各型式が出土した。上層e式の破片については、Ⅲ(廃棄層)11確認以前の混入と思われる。

【**小結**】重複関係及び床面出土の埋設土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層d式期である。

SI5007 (図105)

【**位置・確認**】ⅦC・D-86グリッドに位置する。トレンチ内で立ち上がりを確認、上層は椀林廃棄層(=Ⅲ(廃棄層)1)除去後、暗褐色土の落ち込みを確認した。

【**重複**】SI5030・5031・5041より新しく、SI5006・5008、盛土遺構の構成単位であるⅢ(廃棄層)1より古い。

【**形状・規模**】南東側の壁が失われているが、残存する平面規模は4.1mで、略円形を呈していたと思

われる。検出面から床面までの深さは51cmである。

【壁・床面】壁はSI5030・5031・5041堆積土と第Ⅲ層を約70°の角度で掘り込み、床は平坦に形成される。貼床は検出していないが、地床炉の周囲に若干の硬化面が検出された。

【柱穴・ピット】北西壁際の床面上でピットを1基検出した。長軸26cm、深さ12cmで、底面は第Ⅳ・Ⅴ層中の礫集中面上に形成される。柱痕は検出していない。

【炉】中央からやや北西よりで、地床炉を1基検出した。長軸37cmの楕円形で暗褐色土が落ち込み、上面に明褐色の焼土面が形成される。焼土周囲には弱い硬化面が認められ、直上に厚さ約1cmの炭化粒層が堆積していた。

【その他の施設】西側床面上で埋設土器を2基検出した。第1号埋設土器は長軸35cm、深さ14cmの不整形の掘方に、深鉢土器の胴下半部を倒立状態で埋設したもので、南側は小破片が割れて密集しており、部分的な破壊を受けたか、壊れた(壊した)部位を集積したと考えられる。第2号埋設土器は、深鉢の胴下半部を正立状態で埋設する。土器は掘方の壁の傾斜と一致するように北側へやや傾いている。第1・2号埋設土器ともに、内部・周囲での焼土形成は認められなかった。

【堆積土】2層に分層した。暗褐色土の1層は、上位から床面まで落ち込むレンズ状堆積を呈し、検出面においては長軸40cmを超える大礫を含んだ礫が集積していた。第2層は第Ⅴ層由来の砂礫を多く混入し、第1層とともに人為堆積の様相を呈している。

【出土土器】土器は、円筒下層d2・円筒上層a・c～e・覆林の各型式が出土した。うち、上層e～覆林式の土器は直上の盛土遺構の構成単位であるⅢ(廃棄層)1からの混入と思われる。2基の埋設土器はともに、円筒上層b～d式に帰属すると思われる胴部が使用されている。

【小結】重複関係から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式を中心とする時期と考えられる。

SI5008 (図105)

【位置・確認】ⅧC・D-87グリッドに位置する。第Ⅲ層中で褐色土の落ち込みを確認した。

【重複】SI5007・5011より新しい。また盛土遺構構成単位であるⅢ(廃棄層)1より古い。

【形状・規模】平面規模は4.7×4.4mの楕円形で、検出面から床面までの深さは45cmである。

【壁・床面】壁は、暗褐色土の第Ⅲ層、SI5007・5011堆積土を掘り込み、第Ⅳ・Ⅴ層上面からはほぼ垂直に立ち上がる。床面には長軸40cmを超える地山礫が残存するが、比較的平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【堆積土】褐色土の単層として認識された。構築層より多くの大型礫が混入しており、人為堆積の様相を呈している。

【出土土器】土器は、円筒下層d2・円筒上層c～覆林式の個体や破片が出土し、中でも覆林式の出土量が突出する。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期後葉の覆林式期と考えられる。

SI5009 (図106)

【位置・確認】ⅧE-85グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁の立ち上がり、Ⅲ(廃棄層)11の精査後に暗褐色土の落ち込みを確認した。

【重複】SI5041より新しく、SI5010、SK5019、Ⅲ（廃棄層）11より古い。

【形状・規模】南東側の壁以外が失われており、平面形・規模は不明である。検出面から床面までの深さは48cmである。

【壁・床面】壁はSI5041、第Ⅲ層を掘り込み、第Ⅳ・Ⅴ層上面の床面から約80°の傾きをもって立ち上がる。床面は地山からの露出礫も比較的少なく、平坦である。貼床・硬化面は検出していない。

【柱穴・ピット】床面上南壁寄りにピットを1基検出した。Pit1は径20cm、深さ11cmで、柱痕は認められなかった。

【堆積土】暗褐色土の単層として認識された。長軸20cmまでの礫、炭化粒を比較的多く含み、人為堆積と考えられる。

【出土遺物】土器は、Ⅲ（廃棄層）11からの混入と思われるものを除くと円筒上層c・下層d2式が多く出土している。

【小結】SI5041（円筒上層c～d式期）以降、Ⅲ（廃棄層）11（円筒上層c～d式期）とする重複関係から、縄文時代中期前葉～中葉の円筒上層c～d式期と考えられる。

SI5010(図106)

【位置・確認】ⅧE・F-84・85グリッド内で検出した。壁の立ち上りを盛土遺構の先行トレンチ壁面で、平面プランを第Ⅲ層精査中に確認した。また、堆積土や床面との層位関係が不明なため別遺構として登録したが、SN5007・5008は本住居に伴う石囲炉、SP5082・5086・5088・5089・5142・8041・8071～8077は本住居に伴う柱穴であった可能性がある。

【重複】SI5009・Ⅲ（廃棄層）11より新しく、SI5012・5026より古い。SP5082・5086・5088・5089・5142・8041・8071～8077との新旧関係は不明である。SI5034、SK5019との重複関係も不明であるが、土器の出土傾向から本遺構が新しいと考えられる。

【形状・規模】壁の残存が南東壁の一部であるため、平面形・規模は不明である。検出面からの深さは42cmである。

【壁・床面】南壁はSI5041及び黒褐色の第Ⅲ層を掘り込んで構築され、床面から60～70°の角度で立ち上がる。南側の床面は、第Ⅳ・Ⅴ層上面に比較的平坦に形成される。また北側は第Ⅲ層暗褐色土中に形成されたと思われるが、部分的な確認に留まる。北側、南側ともに貼床や硬化面は確認していない。

【柱穴・ピット】先行トレンチ壁面(図106A-A')で、第1層下面から掘り込まれたピットを確認した。Pit1は開口部径81cm、床面からの深さ80cmで、柱痕は検出していない。

【堆積土】暗褐色土主体で3層に分層した。礫と炭化粒の混入が多い上層と焼土粒が目立つ下層に大きく分け、ともに人為的堆積と考えられる。

【出土遺物】土器は、円筒下層d2～大木10式併行までの出土が多い。SN5007南側で確認された床面上では、比較的多くの大木10式併行の土器が出土している。2-図80-1は床面から出土した大木10式併行の壺形土器である。頸部橋状把手・胴部のS字区画文・波頭文が4単位で配置され、底面に網状痕が認められる。

【小結】重複関係及び床面出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI 5011 (図107)

【位置・確認】ⅧD-87グリッドに位置する。Ⅲ(廃棄層)1の精査後、暗褐色土の円形落ち込みとして確認した。

【重複】SI 5019・5029・5051、Ⅲ(廃棄層)3～5より新しく、SI 5008、Ⅲ(廃棄層)1より古い。

【形状・規模】南東側の壁が失われているが、長軸3.6mの円形と思われる。検出面から床面までの深さは31cmである。

【壁・床面】壁はSI 5019・5029・5051、Ⅲ(廃棄層)3～5を掘り込み、床面から48～65°の傾きで外傾する。床面には長軸80cmまでの地山礫が残存するが、総じて平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出していない。

【堆積土】3層に分層した。黒褐色土主体で、下位では炭化粒の混入が目立つ。

【出土遺物】土器は、円筒上層e式の各型式の破片が出土した。西壁際からは剥片が集中して出土している。

【結】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層e式期と考えられる。

SI 5012 (図106)

【位置・確認】ⅧF-85に位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁の立ち上がりを確認した。

【重複】SI 5010・5017・5026より新しい。SI 5024、SP 5081との新旧は不明である。

【形状・規模】南側の壁。床面のみの検出であり、平面形・規模は不明である。残存壁長は2.4mで、検出面から床面までの深さは24cmである。

【壁・床面】南壁はSI 5026堆積土と床面、第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、床面から境界が曖昧なまま挿やかに立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に比較的平坦に形成される。貼床・硬化面は検出していない。

【堆積土】暗褐色土主体で、礫・炭化粒の混入比率の差に基づいて3層に分層した。第2層は上下の層と礫・炭化物の混入比率が逆転しており、遺物の包含量も多いことから人為的堆積と考えられる。

【出土遺物】土器は円筒上層a～d式、とりわけ円筒上層c式が多く出土した。

【結】重複関係から、時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期以降と考えられる。

SI 5014 (図110)

【位置・確認】ⅧD-88・89グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に確認した。

【重複】SI 5015・5021・5036、SK 5008と重複し、SI 5015・5036、SK 5008より新しく、SK 5021より古い。

【形状・規模】北西壁は失われているが、平面規模4.3×2.8mの楕円形と思われる。検出面から床面までの深さは33cmである。

【壁・床面】壁は外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

【柱穴・ビット】本遺構に伴うと考えられるビットを3基検出した。

【炉】床面中央やや南西側で土器埋設炉を検出した。径30cmの掘方に深鉢が正立で埋設されている。炉の検出面からは長軸約20cmの自然礫が土器を閉塞するように出土した。明確な火床面は確認できなかったことから炉ではない可能性も考えられる。

【堆積土】3層に分層した。暗褐色土を主体とする。

【出土遺物】土器は、堆積土から円筒下層d2・円筒上層a～榎林式、堆積土下層・床面直上からは円筒上層e式が多く出土した。床面直上からは端部彫刻型石棒(2-図152-4)が出土した。

【小結】重複関係及び出土遺物から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層e式期と考えられる。

SI5015(図110)

【位置・確認】ⅧC・D-88・89グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に確認した。

【重複】SI5014、SK5011と重複し、古い。

【形状・規模】北西壁が一部失われているが、残存規模3.8×3.5mの楕円形を呈していたと思われる。検出面から床面までの深さは32cmである。

【壁・床面】壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。

【柱穴・ピット】本遺構に伴うと考えられるピットを2基検出した。

【堆積土】2層に分層した。暗褐色土を主体とする。

【出土遺物】土器は、円筒上層b～榎林式の各型式にわたって出土したが、円筒上層e式の出土量が比較的多い。

【小結】重複関係及び出土遺物から、時期は円筒上層e～榎林式期と考えられる。

SI5016(図107～109)

【位置・確認】ⅧF・G-80～82グリッドに位置する。第Ⅲ層の黒褐色土を精査中に新段階の石囲炉を、第Ⅳ・Ⅴ層上面で旧段階の堅穴の落ち込みと貼床、新段階を構成するピット群を確認した。また、堆積土・床面との層位関係が不明なため別遺構として登録したが、SP5248・5294・9088・9462・9463・9466・9474は本住居の新段階に伴う柱穴であった可能性がある。以下、新段階をSI5016(新)、旧段階をSI5016(旧)として記述する。

SI5016(新)

【重複】SK5060より新しくSP9073より古い。Pit7・10・22・50・56・58・82・100・121・122はSI5016(旧)のピットとも重複し、本住居のピットが全て新しい。また本住居の構成ピット間でも重複があり、旧一新で表記すると、Pit92→91、Pit102→100、Pit106→105、Pit120→119の新旧関係が認められた。

【形状・規模】壁を全て失っているため平面形状は不明であるが、構成ピットの分布形状・範囲から長軸7mを超える楕円形であった可能性がある。

【壁・床面】床面は第Ⅲ層の黒褐色土中に形成されたと思われるが、構築面・硬化面・貼床ともに未検出である。

【柱穴・ピット】Pit7・10・22・30・50・53・56・58・80・82・87・89～92・96・98・100・102・105・106・111・119～122、SP5248・5294・9088・9462・9463・9466・9474の33基のピットが本住居に属するものと考えられる。うちPit87・89～92・98・100・105・106・119～121、SP5248・5294・9088・9462・9463・9466・9474は壁柱穴を構成したと考えられる。主柱に相当する配置構成は確認できなかった。

【炉】北西側に石囲炉を1基確認した。掘方は火床面からの深さ15～28cmで、長軸15～37cmまでの扁平礫をコの字に配置している。火床面は東寄りに形成される。

【出土遺物】土器は、堆積土全体から円筒上層d・e式が少量出土したが、ビット、貼床、炉等かは大木10式併行のみが出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI5016(旧)

【重複】SK5060より新しい。Pit18・19・38・47・55・68・70・102・104はSI5016(新)を構成するビットとも重複し、本住居のビットが全て古い。また本住居の構成ビット間でも重複がある。旧一新で表記すると、Pit11→115、Pit29→34、Pit54・86→69、Pit64→79、Pit78→25・26の新旧関係が認められた。

【形状・規模】壁の残存長5.3mで、北東側に直線的な縁辺をもつ楕円形と見られる。検出面から床面までの深さは22cmである。

【壁・床面】壁は、黒褐色土の第Ⅲ層を64°前後まで外傾させて掘り込まれる。竪穴の底面は第Ⅴ層の砂礫層上面に形成され、直上に黄褐色シルトからなる貼床を検出した。貼床縁辺は壁から40cm前後離れており、壁柱穴列を避けて分布する。貼床上・掘方底面ともに硬化面は検出していない。

【柱穴・ビット】Pit1→3・9・11→13・17→21・24→29・37→39・42・45→49・51・52・54・55・60→64・66→70・78・79・81・84・86・88・94・95・101・104・107・108・110・112・114・115の57基のビットが本住居に属するものと考えられる。うち、方形配置をとるのはPit1・51・60・112の4基、Pit12・27・54・108の4基、Pit10または111・28・49・55または56の4基で、各段階の主柱穴を構成した可能性が考えられる。壁柱穴列はPit42・45・48・62・64・78・84・104・114と、その外周にPit2・13・17・18・24・26・47・61・63・68・70・79・81・82・88・102・110・113が巡る。Pit42・48など、内周のビットには貼床に切られるものが含まれている。

【炉】床面中央からやや南東寄りに、石囲炉を1基確認した。平面規模108×93cm、貼床からの深さ20cmの楕円形の掘方で、壁面に長軸6～34cmの円礫・扁平礫が楕円形に配置される。火床面は微弱ながら底面に形成されている。

【その他の施設】石囲炉の東側隣接地では床面に大型の石(S-1～5)が設置されている。いずれも稜下端を床面に埋め、居住時はその大半が床面から露出していたものと見られ、何らかの施設(配石)と判断した。S-1・2は扁平礫の長軸を東西に向け、10cm程度の狭い間隔で併行させて並べている。S-3～5は40～50cm程度の大型礫で、S-3は石囲炉北東隅に接するように長軸を南北に、またS-4・5はS-3に接し、石囲炉北辺と併行するように設置している。

【堆積土】3層に分層した。黒褐色土主体で、各構成ビットや炉内も同様の堆積である。

【出土遺物】土器は堆積土全体では円筒上層d・e式が少量出土したが、ビット・貼床・炉等からは大木10式併行が出土した。

【小結】ビットの配置から2～3回の拡張が想定される竪穴住居跡である。石囲炉東側の「二」の字の配石は③SI1やSI38に類例を見ることができる。構成ビットの重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI5017(図111・112)

【位置・確認】ⅧF-85・86グリッドに位置する。SI5018の精査後、南側の壁面において床面を確認した。

【重複】SI5012・5018・5049・5055と重複し、SI5012・5018・5055より古い。SI5012・5049との新旧関係は不明である。

【形状・規模】他遺構との重複により、南壁しか残存していないため平面形は不明である。検出面から床面までの深さは45cmである。

【壁・床面】壁は外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

【堆積土】南側で暗褐色土の壁際堆積を確認した。

【出土遺物】堆積土内から円筒下層d2式の破片が出土した。

【小結】本遺構に明確に伴う炉やその他の施設は検出していないが、周囲の遺構との関係から住居跡とした。時期は他遺構との重複関係から、縄文時代前期末葉から中期中葉の円筒上層d式期の何れかと考えられる。

SI5018(図111・112)

【位置・確認】ⅧF-G-85・86グリッドを中心に位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

【重複】SI5017・5049・5067、SP5031・5038・5068・5279・8065・8072と重複し、SP5031・5038・5068・5279より古く、SI5017・5049・5067、SP8065・8072より新しい。

【形状・規模】平面形は5.1×5.0mの不整形円で、検出面から床面までの深さは42cmである。

【壁・床面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

【柱穴・ビット】本遺構に伴うと考えられるビットを5基検出した。

【炉】床面中央やや北東側から石囲炉を検出した。9個の自然礫を77×61cmの長方形に配置している。炉関連の土層は5層に分層した。うち第1層は炉内の堆積土で、第5層は本遺構以前のSI5049の堆積土である。炉内には粘質の強い褐色土が充填され、そこに厚さ5cmの火床面が形成されている。

【堆積土】5層に分層した。暗褐色土を主体とする。

【出土遺物】土器は、第3層から円筒上層a～d式、大木10式併行の破片が出土した。床面、ビット、貼床内の円筒下層d2式はSI5049に、第3層の大木10式併行はSI5010に伴う土器を誤認して取り上げた可能性がある。

【小結】重複関係から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期以降と考えられる。

SI5019(図113)

【位置・確認】ⅧD-E-86・87グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁の立ち上がりを確認し、精査中に平面プランを確認した。

【重複】SI5037・5040・5054より新しく、SI5011・5020及びⅢ(廃棄層)1～5より古い。

【形状・規模】南壁は検出していないが、東西軸4.2mの楕円形と考えられる。検出面から床面までの深さは46cmである。

【壁・床面】壁はSI5037・5040の堆積土及び第Ⅲ層暗褐色土～第Ⅳ・Ⅴ層上面を掘り込み、60°前後の角度で外傾する。床面は、第Ⅳ・Ⅴ層中にやや起伏をもって形成される。硬化面や貼床は検出していない。

【**堆積土**】3層に分層した。上位に暗褐色土、下位に褐色土が堆積し、ともに炭化粒の混入が目立つ。
【**出土遺物**】土器は円筒下層d2～円筒上層a・c～eの各型式が出土し、中でも円筒上層e式は各層で多く認められた。
【**小結**】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層e式期と考えられる。

SI 5020 (図113)

【**位置・確認**】ⅧE-86グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁の立ち上がりを、盛土遺構精査中に平面プランを確認した。
【**重複**】SI 5019・5040・5054、SK 5019・5027、Ⅲ(廃棄層)4・5より新しく、SP5032、Ⅲ(廃棄層)1・2より古い。
【**形状・規模**】平面は3.3×2.7mの楕円形である。検出面から床面までの深さは70cmである。
【**壁・床面**】壁はSI 5019・5040・5054、SK 5019・5027及びⅢ(廃棄層)4・5を掘り込み、76°前後の角度で外傾する。床面は、第Ⅳ層中の褐色混雑シルト層上面に平坦に形成される。硬化面・貼床は検出していない。
【**堆積土**】11層に分層した。褐色土主体で、第2層以下の各層で礫と土器片の混入が多い。
【**出土遺物**】土器は堆積土中から円筒下層d2～円筒上層e式の破片が出土した。
【**小結**】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層e式期と考えられる。

SI 5021 (図114)

【**位置・確認**】ⅧD・E-88・89グリッドに位置する。SI 5028南西側壁面において壁の立ち上がりを、Ⅲ(廃棄層)11の精査中に焼土投棄層の落ち込みを確認した。
【**重複**】SI 5036・5052・5050より新しく、SI 5004より古い。
【**形状・規模**】他遺構との重複により北東壁が失われているが、円形に近い平面形と見られ、検出面から床面までの深さは51cmである。
【**壁・床面**】壁はSI 5052・5050堆積土及び第Ⅲ層暗褐色土～第Ⅳ・Ⅴ層上面を掘り込み、60°前後の角度で外傾する。床面は壁際を中心に長軸60cmまでの地山礫が残存するが、総じて平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出していない。
【**堆積土**】4層に分層した。第2層は焼土粒・ブロックを多量に混入し、人為堆積と考えられる。
【**出土遺物**】土器は第1・2層などの堆積土上層で円筒上層c～榎林式、堆積土下層では円筒上層e～榎林式の破片が出土した。
【**小結**】重複関係及び堆積土下層出土土器から、時期は円筒上層e～榎林式期と考えられる。

SI 5024 (図115)

【**位置・確認**】ⅧF-86グリッドに位置する。土層観察用ベルト壁面において、焼土と壁の立ち上がりを確認した。
【**重複**】SI 5055と重複し、本遺構が新しい。
【**形状・規模**】土層観察用ベルト内での検出のため、平面形・規模等は不明である。

【堆積土】単層として認識した。

【壁・床面】壁はベルト部分のみの確認であるが、緩やかに外傾しながら立ち上がる。確認できた床面はほぼ平坦である。

【炉】地床炉を検出した。残存長124cmの不整形を呈するが、ベルト部分のみの確認であるため詳細は不明である。

【出土遺物】土器は出土しなかった。

【小結】詳細な時期は不明であるが、他遺構との重複関係からSI5055(円筒上層d式期)以降と考えられる。

SI5026(図106)

【位置・確認】ⅧE-85グリッドに位置する。

【重複】SI5010より新しく、SI5012より古い。

【形状・規模】壁の大半を失っており、平面形・規模は不明である。壁の残存長は2.6m、検出面から床面までの深さは10cmである。

【壁・床面】壁はSI5010堆積土及び第Ⅲ層の暗褐色土を掘り込み、床面からは緩やかに立ち上がる。床面は第Ⅳ層中の褐色混雑シルト層上面に比較的平坦に形成される。硬化面や貼床は検出していない。

【堆積土】2層に分層した。第1・2層ともに焼土粒がやや自立ち、礫の混入が少ない。

【出土遺物】土器は円筒下層d2・円筒上層a・c・榎林式・大木10式併行の破片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI5028(図114)

【位置・確認】ⅧE-87グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁の立ち上がりや、同遺構の精査中に平面プランを確認した。

【重複】SI5042・5051、SP5087より新しく、Ⅲ(廃棄層)4・5より古い。

【形状・規模】平面規模3.9×3.0mの楕円形で、検出面から床面までの深さは41cmである。

【壁・床面】壁はSI5052・5050の堆積土及び第Ⅲ層暗褐色土～第Ⅳ・Ⅴ層上面を掘り込み、緩やかな角度で外傾する。床面は壁際を中心に長軸60cm程度の地山礫が残存するが、総じて平坦に形成される。貼床は検出していないが、地山礫の抜き取り痕と考えられる回みの堆積土上面で、一部硬化面が認められた。

【柱穴・ピット】北壁に接してピットを1基確認した。Pit1は長軸56cm、深さ14cmで、柱痕は検出していない。

【堆積土】7層に分層した。第1a～1d層は本遺構を覆って堅穴壁外に堆積範囲が及ぶ。土層構造の類似からも盛土遺構の堆積土と考えられる。住居に伴う堅穴堆積土は第2～4層で、上層の盛土遺構に比べ炭化物が多く、混入礫が少ない。

【出土遺物】土器は円筒下層d2～上層e式の型式幅で出土し、堆積土では円筒上層e式、床面直上では円筒上層d式が主体となる。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は円筒上層d～e式期と考えられる。

SI 5029 (図114)

【位置・確認】Ⅷ D-88グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁の立ち上がりを、Ⅲ(廃棄層)1の精査後に暗褐色土の平面プランを確認した。

【重複】SI5011、Ⅲ(廃棄層)1より古い。

【形状・規模】北東壁や壁周溝の大半を失っており、平面形状および規模は不明である。検出面から床面までの深さは17cmである。

【壁・床面】壁は北東側のみ残存が認められた。第Ⅲ層をほぼ垂直に掘り込み、幅24cm、深さ14cmの壁周溝に連続する。床は第Ⅳ・Ⅴ層上面に比較的平坦に形成される。硬化面や貼床は検出していない。

【柱穴・ピット】ピットは1基確認した。Pit1は長軸50cm、深さ12cmで、柱痕は検出していない。

【堆積土】暗褐色土の単層として認識された。Pit1直上の堆積土には土器片の集中が認められる。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2・円筒上層c・e式の型式幅で縄文土器片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層c～e式期と考えられる。

SI 5030 (図116)

【位置・確認】Ⅷ D-85・86グリッドに位置する。SI5006を精査後、東側壁面において壁の立ち上がりを確認した。

【重複】SI5006・5007・5031より古い。

【形状・規模】壁の大半を失っており、平面形・規模等は不明である。検出面から床面までの深さは53cmである。

【壁・床面】壁は第Ⅲ層の暗褐色土を掘り込み、床面からは80°前後の角度で立ち上がる。床は残存範囲内では比較的平坦である。

【堆積土】3層に分層した。黒褐色土主体で、比較的多くの炭化粒が混入する。

【出土遺物】土器は、堆積土から円筒上層d・e式の破片が出土したが、e式は混入の可能性がある。

【小結】重複関係から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 5031 (図116)

【位置・確認】Ⅷ C-85・86グリッドに位置する。SI5006を精査後、東側壁面において壁の立ち上がりを確認した。

【重複】SI5030より新しく、SI5005～5007より古い。

【形状・規模】壁の大半を失っており、平面形および規模は不明である。検出面から床面までの深さは22cmである。

【壁・床面】壁はSI5030の堆積土を掘り込み、60°前後の角度で立ち上がる。床は残存範囲内では比較的平坦である。

【堆積土】4層に分層した。暗褐色土主体で、第2層では特に焼土粒の混入が目立つ。

【出土遺物】堆積土から、円筒下層d2・円筒上層c～e式の土器片が出土した。

【小結】重複関係から、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI5034 (図117)

【位置・確認】ⅧD～F・83・84グリッドに位置する。第Ⅲ層の暗褐色土を精査中に、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】SI5053、SP5055・5056・5104～5106より新しく、SK5014より古い。

【形状・規模】平面規模6.0×4.6mの楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは55cmである。

【壁・床面】壁は第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、床面からは70°前後の角度で立ち上がる。北側を除く壁の直下には、幅11～52cm、深さ8～34cmの壁周溝が巡る。北西壁・東壁直下では、壁周溝が二重に確認されている。東壁では重複があり外側が新しい。竪穴の床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に比較的平坦に構築される。貼床は礫混入の少ない暗褐色土で、厚さ8cm以内でほぼ全面に施される。貼床上の硬化面は、炉の周囲から東側壁周溝までの範囲でのみ確認した。

【柱穴・ピット】壁周溝内を中心に16基確認した。Pit1・2・4～9・11～13・16は壁周溝と重複し、Pit14とともに壁柱穴を構成する。柱痕はPit1・2・6で検出している。他施設との新旧関係では、壁周溝より新しく、貼床より古い。ピット間での重複では、Pit1・5・6・8がそれぞれの重複するピットより新しい。

【炉】床面中央で石囲炉を1基確認した。掘方は長軸125cm、深さ10cmで、明瞭な壁の立ち上がりを持たない皿状の窪みとなっている。炉石は長軸10～30cmの扁平礫を立て並べ、D字型に配置する。東辺は直線的である。南側は二列に配されるが、明瞭な切り合い関係は把握できない。火床面は外側の炉石まで連続している。火床面は被熱が進行しており、明るく発色する。

【堆積土】3層に分層した。第2層の黒色土は床面まで垂れ込むレンズ状堆積である。第2層には土器片の他、炭化木片、骨片(未測定)も認められた。

【出土遺物】土器は円筒下層d2～榎林式主体で、Pit5・9からは最花式と思われる破片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期後葉の榎林～最花式期と考えられる。

SI5035 (図117)

【位置・確認】ⅧF・88・89グリッドに位置する。第Ⅲ層の黒褐色土を精査中、貼床と連続する焼土面、石囲炉を確認した。

【重複】SI5043・5047・5064より新しい。

【形状・規模】壁のほとんどを失っており、平面規模および形状は不明である。

【壁・床面】土層観察用ベルトで確認された壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。床はSI5064の堆積土上を掘り込んで形成され、にぶい黄褐色シルト主体の貼床が炉の周囲とその南側の2カ所に施される。貼床の間には発色の明るい現地性の焼土が形成される。

【炉】石囲炉を1基確認した。炉石は南西部が失われているが、長軸15～20cmの扁平礫を、南北にやや長い長方形(やや長軸が張る樽形)に配置したものと考えられる。炉内に火床面は見られないが、南側の隣接地に被熱面を確認した。規模は内寸で長軸60cmである。

【堆積土】床面直上に黒褐色の単層を確認した。比較的多くの炭化粒が混入される。

【出土遺物】円筒下層d2・榎林・大木10式併行の土器片が出土した。

【小結】重複状況及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI 5036 (図110)

【位置・確認】ⅧD-88・89グリッドに位置する。SI 5014を精査後に確認した。

【重複】SI 5014・SK 5021・5008と重複し、本遺構が古い。

【形状・規模】平面規模2.5×2.4mの不整形円で、検出面から床面までの深さは33cmである。

【壁・床面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面はⅣ・Ⅴ層から礫が多く露出するものの、総じて平坦である。

【堆積土】3層に分層した。第3層は壁際堆積土で、第2層は中央部が床面に接するレンズ状堆積を呈している。

【出土遺物】図示しなかったが、第1層から縄文土器の小片5点が出土した。

【小結】重複関係から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層e式期以前のものと考えられる。

SI 5037 (図113)

【位置・確認】ⅧD-86グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁の立ち上がりを、Ⅲ(廃棄層)5の精査後に暗褐色土の落ち込みを確認した。

【重複】SI 5040より新しく、SI 5011・5019、Ⅲ(廃棄層)5より古い。

【形状・規模】壁の大半を失っており、平面規模・形状は不明である。検出面から床面までの深さは19cmである。

【壁・床面】残存する南西壁は、床からほぼ垂直に立ち上がる。床面には長軸84cmまでの地山礫が残存するが、他は比較的平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出していない。

【堆積土】2層に分層した。暗褐色土主体で、礫の混入が比較的少ない。

【出土遺物】確認面で円筒上層c・d式、堆積土中から円筒上層c式の土器片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI 5038 (図118～120)

【位置・確認】ⅧB～D-83・84グリッドに位置する。第Ⅲ層黒色土中で西壁の立ち上がりを確認し、Ⅳ・Ⅴ層上面で壁周溝と床面、床面を切るビットを検出した。SN 5001とその東側の焼土や貼床群及び後述するSI 5073bを構成する柱穴群は本住居に伴う可能性があるものの、確証は得られなかった。

【重複】SK 5065、SP 5301・5365・9431及びSN 5001周囲の貼床より新しく、SN 5001構築土より古い。SI 5068・5073各期の柱穴群との新旧関係は不明である。

【形状・規模】南西部以外の壁・壁周溝を失っているため平面規模・形状は不明であるが、壁周溝の規模・形状から大型の住居であった可能性が高い。検出面から床面までの深さは32cmである。

【壁・床面】南東部に残存する壁は壁高26cmで、床面から60°の角度で第Ⅲ～Ⅳ・Ⅴ層上面を掘り込んでいる。壁周溝は竅穴東側で確認した。弧状の残存長8.7m、幅31～51cm、深さ17～40cmで、壁周溝内のビットを6基(Pit 1～6)検出している。平面長18～54cmの壁柱穴列が確認されている。

【柱穴・ビット】壁周溝の西側の4基を本遺構のビットとして調査した。いずれも柱痕は確認していない。

【炉】重複状況及び位置関係から、SN 5001が本住居の炉として伴っていた可能性がある。

【**堆積土**】南東壁際では4層に分層した。暗褐色土主体で、下位に焼土粒・ブロック、炭化粒、第IV層由来と思われる黄褐色砂質シルトブロックの混入が多く、人為堆積の様相を呈している。

【**出土遺物**】壁周溝、堆積土及びPit5から円筒下層d2～最花式の各型式の破片が出土した。

【**小結**】重複関係及びピット内出土土器から、最花～大木10式併行期と考えられる。

SI5039 (図120・121)

【**位置・確認**】ⅧF-89・90グリッドを中心に位置する。第III層を精査中に石囲炉を確認した。

【**重複**】SI5044・5050・5063、SP5201、盛土遺構の構成単位であるⅢ（廃棄層）13と重複し、本遺構が新しい。

【**形状・規模**】北西側壁が失われているが、残存長3.8×2.3mの円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。検出面から床面までの深さは29cmである。

【**壁・床面**】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

【**炉**】竪穴中央で石囲炉を1基検出した。長さ10～25cmの扁平礫を立て並べ、42×27cmの南北に長い長方形に配置している。炉関連土は5層に分層した。全て掘方の堆積土で、被熱範囲は確認していない。

【**堆積土**】4層に分層した。暗褐色土を主体とする。第4層は貼床構築土である。

【**出土遺物**】堆積土から榎林～最花式の土器片が出土した。

【**小結**】重複関係、堆積土の状況及び出土遺物から、時期は大木10式併行期以降のものと考えられる。

SI5040 (図113)

【**位置・確認**】ⅧD-86グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で床の掘削面を、同遺構の精査中に平面プランを確認した。

【**重複**】SI5041、Ⅲ（廃棄層）9より新しく、SI5019・5020・5037、SK5019、Ⅲ（廃棄層）1・6～8より古い。

【**形状・規模**】壁の大半を失っており、平面形・規模等は不明である。壁の残存長は3.7m、検出面からの深さは34cmである。

【**壁・床面**】残存する西壁はSI5041の堆積土を掘り込み、床面から70°前後の角度で立ち上がる。床面には地山の大型礫が残存するが、比較的平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出していない。

【**堆積土**】2層に分層した。暗褐色土主体で、第2層上面では粒状の炭化物が多く混入する。

【**出土遺物**】堆積土第1・2層から円筒上層e・d式の土器破片が出土した。

【**小結**】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期に属するものと思われる。

SI5041 (図116)

【**位置・確認**】ⅧD-85・86グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁の立ち上がり、同遺構の精査中に平面プランを確認した。

【**重複**】SI5006・5007・5009・5040、Ⅲ（廃棄層）1・6～9・11・12より古い。

【**形状・規模**】壁の大半を失っており、平面形・規模等は不明である。検出面から床面までの深さは25cmである。

【**壁・床面**】残存する西壁はSI5041の堆積土を掘り込み、床面から70°前後の角度で立ち上がる。床

面には地山の大型礫が残存するが、比較的平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出していない。

【堆積土】3層に分層された。上位に礫を多く混入する黒褐色土、床面直上に第Ⅳ・Ⅴ層由来の粒子を多く混入する暗褐色土が堆積し、ともに人為的堆積と考えられる。

【出土遺物】堆積土から円筒上層b・c式の土器片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期前～中葉の円筒上層c～d式期と考えられる。

SI5042(図121)

【位置・確認】ⅧE・F-87グリッドに位置する。

【重複】SI5054より新しく、SI5028、SP5048・5049・5087、盛土遺構の構成土と見られるSI5028第1a～1d層より古い。

【形状・規模】平面規模4.3×3.3mで、北側と東側に隅をもつ楕円形を呈していたと考えられる。検出面から床面までの深さは31cmである。

【壁・床面】第Ⅲ層を掘り込み、床面下の角度は、北～東壁では垂直、他で70°前後で立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に平坦に形成される。貼床は検出してないが、地山礫の抜き取り痕と考えられる窪みの堆積土上面では、一部硬化面が認められた。

【堆積土】8層に分層した。第5層は焼土投棄層で、盛土遺構の構成単位のような人為堆積と考えられる。図121B-B'においては各層からサンプル採取を行い、土壌分析を実施した。基本層採取の比較試料に比して、第5・6層ではリン酸含量が高く、炭化種子等混入物の構成が盛土遺構構成層に近似する結果が出ている。

【出土遺物】土器は堆積土第1～6b層から円筒下層d2・円筒上層c・d式の破片が出土し、第4層では円筒上層d式が主体的となる。

【小結】土壌分析の結果、堆積土下層は盛土遺構構成層と近似する結果が出ており、廃絶後に住居内廃棄が行われたと考えられる(第4章第5節参照)。重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI5043(図122)

【位置・確認】ⅧG・H-89・90グリッドに位置する。SI5047堆積土を精査中に、石囲炉と床面を確認した。

【重複】SI1103・5047・5048、SP5063より新しい。

【形状・規模】平面規模4.4×3.8mの楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは60cmである。

【壁・床面】壁はSI1103・5047・5048の堆積土を掘り込み、床面からは65°前後で立ち上がる。床面には地山の大型礫が多く残存するが、第Ⅳ・Ⅴ層中に平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出してない。南東側では長軸98cm 幅35cm、深さ16cmの壁間溝と見られる溝を検出した。

【柱穴・ビット】ビットは21基検出した。うちPit4・5・7・8・10・15で亀甲形の主柱と配置を構成したと考えられる。

【炉】竪穴北西部で石囲炉を1基確認した。20～40cm程度の扁平礫、円礫を主要な石材とし、方形の石

囲部に八字形の前庭部が接続する「只」の字形配置の複式炉である。規模は長軸170cm、最大幅120cmで、長軸は北西方向に向く。石囲部は内寸で56×41cm、内部の掘方底面から第6層上面まで焼土が形成される。前庭部内には、砂礫ブロックを多く混入した土層が堆積し、上面に若干の硬化が認められる。火床面上の堆積土は3層に分層した。黒褐色土主体で、炭化物と焼土粒の混入は少ない。

【堆積土】5層に分層した。黒褐色土主体で第1・2層は第3・4層と比べ、礫の混入が際立って多い。

【出土遺物】土器は、堆積土全体から円筒下層d2、円筒上層c式～大木10式併行が、また炉及びPit5からは最花～大木10式併行の型式幅で出土した。このほか、堆積土中位や掘方内で大木10式併行の個体土器が出土している。

【小結】重複関係及び構築時期を示す層位(炉・ビット並びに掘方)出土の土器から、時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI5044(図120・121)

【位置・確認】ⅧF-89・90グリッドを中心に位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面において、壁の立ち上りを、またⅢ(廃棄層)13の精査後に平面プランを確認した。

【重複】SI5039、Ⅲ(廃棄層)13より古く、SI1104より新しい。

【形状・規模】平面規模3.3×3.0mの不整形円で、検出面から床面までの深さは57cmである。

【壁・床面】壁は外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

【炉】検出してない。

【堆積土】4層に分層した。褐色土を主体とする。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2・円筒上層c・d式の土器が出土した。2-図87-10は堆積土から出土した円筒上層d式の深鉢である。

【小結】重複関係、堆積土の状況及び出土遺物から、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期のものと考えられる。

SI5045(図124)

【位置・確認】ⅧF・G-88・89グリッドに位置する。先行トレンチ壁面において壁の立ち上りを、Ⅲ(廃棄層)13-2層精査後に平面プランを確認した。

【重複】SI5047・5050・5064、SK5022、SP5057より新しく、SI5046、Ⅲ(廃棄層)13-2層より古い。

【形状・規模】北壁及び北西壁が未検出であるが、平面規模5.8×3.9mの楕円形であったと推測される。検出面から床面までの深さは55cmである。

【壁・床面】壁はSI5047・5050・5064、SK5022、SP5057の堆積土を掘り込み、床面から55°前後の角度で立ち上がる。床面はⅣ・Ⅴ層中に比較的なだらかに構築されるが、全体では北側に向かって約3°上がる傾斜をもつ。

【柱穴・ビット】床面上で27基のビットを確認した。配置に規格性が認められず、支柱等の配置構成は不明である。なおPit5・10・12は本遺構に伴わない可能性も考えられる。

【堆積土】11層に分層した。第7～9層は壁際堆積土、第4～6・10・11層は床面上の堆積層で貼床の可能性もあるが、硬化面は伴わない。堆積土の大半を占める第2層は遺物、炭化物、焼土粒、礫等の混入

物が多い暗褐色土で、人為堆積の可能性がある。

【出土遺物】土器はPit5・12から大木10式併行、その他Pitと堆積土全体からは円筒下層d1～大木10式併行の破片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土及びピット内出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI5046 (図128)

【位置・確認】VII F・G-88グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁面の立ち上がりや、またSI5047の精査中に床面を確認した。

【重複】SI5045・5047より新しい。

【形状・規模】北壁他、壁の多くを失っており平面形状や規模は不明である。検出面から床面までの深さは17cmである。

【壁・床面】壁はSI5045・5047堆積土を掘り込み、床面からは40°前後の角度で立ち上がる。床面はSI5045・5047の堆積土上位に、若干の起伏はあるがなだらかに形成される。

【炉】中央部で石囲炉を1基確認した。炉石には長軸11～62cmの円礫や扁平礫を用い「只」の字形に配列される複式炉で、規模は南北130cm×東西130cmで、石囲部は内寸で長軸70cm×短軸55cmである。不明瞭だが、掘方を伴う。焼土は石囲部の南寄りにわずかに形成される。

【堆積土】暗褐色土の単層として認識した。比較的礫の混入が少ない中、長軸70cmを超える礫が散見され、人為堆積の可能性が考えられる。

【出土遺物】土器は、掘方から円筒上層a～榎林式、堆積土全体から大木10式併行の破片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期以降と考えられる。

SI5047 (図125～128)

【位置・確認】VII F～I-87～90グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面において壁の立ち上がりや、トレンチ底面において壁周溝を確認した。配置から、重複する別住居のピットとしたSI5048Pit2・3・4・5・6・7・8・10、SK5020～5022・5024・5025・5029・5030・5031・5034・5048、SP5045・5066・5072・5075・5077・5097・5107・9494は本住居各段階の主柱又は壁柱穴を構成した可能性がある。

【重複】SI5063・5064・5069・5071より新しく、SI1103・5043・5045・5046・5048より古い。

【形状・規模】長軸側の北東壁を失っているが、推定長16.0×7.0mの長楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは67cmである。長軸方向は北から150°東へ向いている。

【壁・床面】SI5045・5063・5064・5069・5071堆積土及び第Ⅲ層を第Ⅳ・Ⅴ層上面まで掘り込み、下部はほぼ垂直で、上部は55°前後の角度で立ち上がる。第Ⅰ期の床面は第Ⅳ・Ⅴ層上面に平坦に形成され、硬化が認められる。第Ⅱ期では、4・6～9層とした第Ⅳ層粒と第Ⅴ層由来と思われる小礫からなる貼床が構築される。第Ⅲ期の床面については、本住居に配置に伴うと考えられる柱穴との層位関係から検出面より上に想定され、遺構検出段階で既に失われていた可能性も考えられる。

壁周溝は北側の壁際(Pit51-Pit62間)と南側(Pit2001-SK5034間)のほか、堅穴内部(Pit136～

Pit 52)の3箇所を確認している。壁周溝上にピットが等間隔に配置される構造をもつ。それぞれの壁周溝の規模は、北側の壁際は長さ240cm、幅40cm、深さ約25cmで、南側の壁際は長さ1340cm、幅20～80cm、深さ35cm、堅穴内部は長さ40cm、幅20cmである。

【柱穴・ピット】ピットは床面で169基を検出した。壁際のほか、堅穴内部の壁周溝の存在、ピットの位置関係や重複状況から、本住居は2～3段階の建て替えが指摘できる。

最終段階(Ⅲ期)はPit 114・2001、SK 5020～5022・5024・5025・5029～5031・5034・5048、SP 9494の13基が主柱穴を構成すると考えられる。うち、SK 5029・5030・5031・5034では柱痕を検出している。Ⅲ期では、SK 5023・5033・5041・5043・5049によって北西方向への拡張が行われた可能性も指摘できる。棟持ち柱としてPit 1又はPit 28・3・163、SI 5048 Pit 5・6を想定している。

構築初期段階(Ⅰ期)はPit 21・24・26・37・38・52・56・58・101・108・120・129・131・133・135・136・141・142・144・148・149・155・165・167・1001・1002、SI 5048 Pit 3・4・7で壁柱穴列を、Pit 4・14・116・1003・SP 5097・SI 5048 Pit 2で主柱穴を構成していたと推測される。なおⅠ期とⅢ期の間には、Pit 10・50・51・54・55・61・109又はSP 5057、Pit 59・130・137・156・157・158・161、SP 5045又はSP 5072・5066又はSI 5048 Pit 8、SP 5075等で壁柱穴を構成する段階(Ⅱ期)が存在した可能性がある。棟持ち柱としてPit 2・162、SI 5048 Pit 10、SP 5107又はPit 140を想定した。

【炉】本遺構に帰属する炉として調査したものは床床炉1基である。炉は主軸線上の堅穴西寄り、SP 5107の直上に位置する。39×30cmの楕円形範囲で被熱し、中央には攪乱を受けている。Ⅰ期のピットの直上、Ⅲ期の棟持ち柱としたピットに切られる状況からⅡ期の炉と考えた。また他遺構として調査したが、主軸線より北側の堅穴西寄りに位置した、Ⅱ期の壁周溝上のSN 5004は、Ⅲ期の炉となる可能性がある。なお堅穴内のSN 5012と本遺構の関係は不明である。

【堆積土】10層に分層した。Ⅰ期の床面は第Ⅳ・Ⅴ層上面で、第5～9層はⅡ期の貼床構築土で、同層上面を床面とする。また水平堆積に近い第4層も人為的に整えられた可能性があり、同層上面も床面であった可能性が高い。Ⅲ期の床面は検出面より上位に想定されたが、暗褐色土の第1層も人為堆積で、貼床構築土の可能性が高く、図127A-A'のPit 35・47はこの段階のピットと見られる。

【出土遺物】土器は円筒下層d2式から榎林式の各型式が出土し、貼床構築土、炉、壁周溝、各ピットからは榎林式までの、また堅穴堆積土からは大木10式併行までの型式が認められる。

【小結】推定長軸16mを超える大型住居で、斜面捨て場に形成されるSI 4040(榎林式期)と並び、本遺跡では最大級の堅穴住居である。少なくとも2回の建て替えが認められ、最終段階の柱配置は壁周溝上に大型の柱穴が並び、SI 4040やSI 1057(既報告第528集)等、同時期(いずれも榎林式期)の柱穴配置とも一致する。重複関係及び貼床内出土土器から、構築時期は縄文時代中期後葉の榎林式期で、大木10式併行期にかけて埋没したものと考えられる。

SI 5048 (図122・123)

【位置・確認】VⅧH・I-89・90グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面において壁の立ち上がりや、またトレンチ底面において壁周溝を確認した。なお、本遺構のPit 2～7・10についてはSI 5047に属する可能性もある。

【重複】SI 5047より新しく、SI 5043より古い。

【**形状・規模**】壁の大半を失っており、平面形・規模等は不明である。検出面から床面までの深さは51cmである。

【**壁・床面**】北壁はSI5047の堆積土をほぼ垂直に掘り込み、第Ⅳ・Ⅴ層中に比較的平坦な床面を形成する。

【**柱穴・ピット**】床面上から13基のピットを確認した。

【**炉**】床面上で配石を伴う焼土を確認し、SN5011として調査した。配石は南北、東西のL字状立て並べた扁平礫3個と、周囲に散在したその他の円礫4～5個からなり、後者は判然としないが、前者は石囲炉の炉石と見られる。焼土は西辺の炉石を挟んだ両側で確認され、規模は東側が60×51cm、西側が51×28cmである。

【**堆積土**】北壁側で10層に分層した。暗褐色土、黒褐色土、褐色土の互層を成しており、人為堆積の可能性がある。

【**出土遺物**】土器は円筒下層d2・円筒上層e・d・榎林・大木10式併行の各型式が出土し、床面では円筒上層e式、Pit5では榎林式、Pit6では大木10式併行の出土が目立つ。

【**小結**】重複関係及びピット出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI5049 (図111・112)

【**位置・確認**】ⅧF・G-85グリッドを中心に位置する。SI5018精査後、第Ⅳ・Ⅴ層上面で確認した。

【**重複**】SI5017・5018、SP5031・5083・5279と重複し、新旧関係の不明なSI5017を除き、本遺構が古い。

【**形状・規模**】平面規模4.2×3.3mの不整な楕円形で、検出面から床面までの深さは28cmである。

【**壁・床面**】第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、床からは緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中にほぼ平坦に構築される。貼床及び硬化面は検出していない。

【**柱穴・ピット**】本遺構に伴うと考えられるピットを6基検出した。いずれも柱痕は検出していない。

【**堆積土**】5層に分層した。第4・5層は第Ⅳ層由来と考えられる褐色粘質シルトを多く混入する。

【**出土遺物**】貼床の直上・直下及び堆積土から縄文時代前期末葉の土器が出土した。床面直上出土の2-図89-1は半裁竹管内面側を用いた網目状・矢羽根状・縦縞の半隆起文が全面に施される朝顔器形の深鉢で、北陸の朝日下層式の影響が認められる。

【**小結**】出土遺物から、時期は縄文時代前期末葉の円筒下層d2式期と考えられる。

SI5050 (図129)

【**位置・確認**】ⅧE・F-88・89グリッドに位置する。盛土遺構の先行トレンチ壁面で壁の立ち上がりや、Ⅲ(廃棄層)13の直下で褐色土の楕円形プランを確認した。

【**重複**】SI5004・5021・5039・5045、Ⅲ(廃棄層)13より古い。

【**形状・規模**】北側、南東側の壁を重複によって失っているが、平面規模6.8×4.6mの楕円形と考えられる。検出面から床面までの深さは49cmである。

【**壁・床面**】壁は第Ⅲ～Ⅴ層を緩やかに掘り込み、第Ⅳ・Ⅴ層中に若干の起伏を持つ床面が形成される。貼床及び硬化面は検出していない。

【**堆積土**】10層に分層した。第1・5層は第Ⅳ・Ⅴ層起源の土塊・破砕礫、第7層は焼土塊の投棄層から

構成され、人為堆積として盛土遺構の一部を成していた可能性がある。図129B-B'で堆積土壌のサンプルを採取し、土壌の理化学分析を実施した結果、基本層採取の比較試料に比してリン酸含量が高く、炭化種子等混入物の構成が盛土遺構成層に近似する結果が出ている(第4章第5節)。

【**出土遺物**】土器は第2層を中心に円筒上層d・e式、第4層から円筒上層d式の個体土器・破片が出土した。2-図89-6・2-図89-8は前期末葉から中期初頭の異系統土器で、東北南部の大名様式の影響が認められる。

【**小結**】土壌分析の結果、盛土遺構成層と同様に廃棄層の特徴が指摘されており、廃絶後に住居内廃棄が行われたと考えられる(第4章第5節参照)。重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI5051(図114)

【**位置・確認**】ⅧD・E-87・88グリッドに位置する。盛土遺構精査中に、SI5028の第1a層直下で方形のプランの一部を確認した。

【**重複**】SI5011・5028より古い。SI5029との新旧関係は不明である。

【**形状・規模**】重複により壁の北半を失っているが、一辺3.2m程の方形を呈していたと考えられる。検出面から床面の深さは15cmである。

【**壁・床面**】壁は第Ⅳ・Ⅴ層を垂直に掘り込み、同層中に平坦な床面が形成される。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【**堆積土**】褐色土の単層である。

【**出土遺物**】土器は、堆積土から円筒上層c・d式の個体と破片が出土した。

【**小結**】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d～e式期と考えられる。

SI5052(図114)

【**位置・確認**】ⅧE-88グリッドに位置する。SI5021・5029壁面において壁の立ち上りを確認した。

【**重複**】SI5021より古い。

【**形状・規模**】重複により壁の大半を失っており、平面形・規模等は不明である。検出面から床面までの深さは21cmである。

【**壁・床面**】壁は緩やかに外傾し、床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に若干の起伏をもつ。貼床及び硬化面は検出していない。

【**堆積土**】3層に分層した。褐色土と暗褐色土の水平堆積に近い互層である。

【**出土遺物**】堆積土から円筒上層e式を含む土器片8点が出土した。

【**小結**】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層e式期以前と考えられる。

SI5053(図129)

【**位置・確認**】ⅧE・F-83グリッドに位置する。SI5034壁面において床面と壁の立ち上りを、第Ⅲ層

の精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

【重複】SI5034、SR5007、SP5100・5104～5106・5141より古い。

【形状・規模】重複により西側の壁を失っているが、径約4.6mの不整形円形と考えられる。検出面から床面までの深さは32cmである。

【壁・床面】壁は第Ⅲ層下位の暗褐色土を掘り込み、床から緩やかな角度で立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に形成される。中央が浅く窪む二段構造となっており、壁際がテラス状となる。貼床及び硬化面は検出していない。

【堆積土】3層に分層した。褐色土主体で、第2層には特に大礫の混入が目立つ。

【出土遺物】土器は、第2層からは円筒下層d2式までの、確認面と第1層から円筒上層c式、大木10式併行の破片が出土した。第1層の破片は、直上の第Ⅲ層からの混入と思われる。

【小結】重複関係及び出土遺物から、縄文時代前期末葉の円筒下層d2式期と考えられる。

SI5054 (図115)

【位置・確認】ⅧE・F-86・87グリッドに位置する。盛土遺構を精査中、第Ⅲ層において暗褐色土の平面プランを確認した。

【重複】SI5019・5020・5042・5055と重複し、SI5055より新しく、SI5019・5020・5042より古い。

【形状・規模】他遺構との重複により平面形は不明であるが、円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。検出面から床面までの深さは25cmである。

【壁・床面】壁は西半のみ残存し、SI5055の堆積土及び第Ⅲ層を掘り込み、床面からは緩やかに立ち上がる。床面はSI5055の堆積土及び第Ⅳ・Ⅴ層中に、ほぼ平坦に形成される。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【堆積土】暗褐色土の単層として認識された。層中には礫や炭化物が含まれる。

【出土遺物】土器は、堆積土から円筒下層d2式、円筒上層d式の破片が出土した。

【小結】重複関係及び出土土器から時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI5055 (図115)

【位置・確認】ⅧF-86グリッドに位置する。盛土遺構を精査中、第Ⅲ層において暗褐色土の平面プランを確認した。

【重複】SI5017・5024・5042・5054・5062・5067、SP5037・5050と重複し、SI5024・5042・5054、SP5037・5050より古く、SI5017・5062・5067より新しい。

【形状・規模】他遺構との重複により平面形は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。残存長3.6m、検出面から床面までの深さは22cmである。

【壁・床面】壁は西側のみ残存し、SI5017・5062の堆積土及び第Ⅲ～Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、床からは75°前後の角度で緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中にほぼ平坦に構築される。貼床及び硬化面は検出していない。

【柱穴・ビット】本遺構に伴うと考えられるビットを5基検出した。いずれも柱痕は検出していない。

【堆積土】2層に分層された。暗褐色土を主体とし、層中には礫や炭化物が含まれる。

【出土遺物】土器は、確認面、堆積土、床面直上から円筒下層d2～上層c式、榎林式が出土した。榎林式は、本住居と重複するSI5062出土破片と同一個体が含まれており、取り上げの際に混入したものと考えられる。

【小結】重複関係及び出土土器から時期は、縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI5056 (図130～132)

【位置・確認】ⅧC～E-82・83グリッドに位置する。土層観察用断面において床面を、第Ⅲ層精査中に壁周溝と石囲炉を検出した。これをSI5056として精査中、下部に別住居が存在することが判明したためSI5072として分離・登録・精査を行っている。配置と層位関係からSP5122・5228・5299・5300・5355・5366・8057・9136・9188・9273・9430・9489・9490はSI5056・5072の何れかに属する可能性があり、本項でも取り扱うこととした。

【重複】SI5072、SP9061・9137・9189・9491・9189・9433より新しく、SP5147・5203・5357・9136・9434より古い。

【形状・規模】残存する壁柱穴と思われるピットと壁周溝の配置から、直径5～6m前後の楕円形を呈していたと考えられる。検出面から床面までの深さは16cmである。

【壁・床面】壁は全て失われているため詳細不明である。床面はSI5072の堆積土及び第Ⅲ層中に比較的平坦に形成される。硬化面は確認していないが、SI5072の炉の直上には、第Ⅳ・Ⅴ層からなる貼床を確認した。壁周溝は南東部に検出しており、規模は幅20～35cm、深さ10～20cmである。

【柱穴・ピット】本遺構名で登録したピットは4基(Pit3・12・17・19)だが、このほかSP5122・5300・5355・5366・9136・9188・9273・9430とで壁柱穴を構成していたと考えられる。

【炉】南側の床面上で石囲炉を1基確認した。浅く窪めた掘方が伴い、長軸30～40cm程度の扁平礫や角礫を東側で弧状に、西側では不規則に配置する。焼土は掘方底面と第1層上面の上下2面に形成される。下面の焼土は、西側に散在する礫とともに旧段階の炉を構成していたと考えられる。

【堆積土】5層に分層した。黒褐色主体の土層で、各層で炭化粒の混入が目立つ。

【出土遺物】土器は、炉内、壁周溝、堆積土から円筒上層a・c、榎林～大木10式併行の破片が出土し、特に大木10式併行の出土が目立つ。

【小結】重複関係及び炉や壁周溝の出土土器から、時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI5057 (図133)

【位置・確認】ⅧF・G-83・84グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層が東西の帯状に落ち込む範囲に形成された漸移層中で確認された。

【重複】SK5044、SP5085・5286より新しく、SI5017、SK5046より古い。

【形状・規模】北側から西側除く大半の壁を失っており、平面形状・規模は不明である。検出面から床面までの深さは20cmである。

【壁・床面】壁は第Ⅳ・Ⅴ層漸移層を掘り込み、床面から70°前後の角度で立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に比較的平坦に構築されるが、全体では南東方向に下がっている。貼床及び硬化面は検出して

いない。

【柱穴・ビット】本遺構に属するビットは1基である。いずれも柱痕は検出できなかった。床面範囲に分布する他のビットも、本遺構に伴う可能性がある。

【堆積土】4層に分層した。第2～4層は壁際の堆積土である。堆積土の主体を占める第1層は、第IV層中の褐色粘質シルトを多く混入する。

【出土遺物】堆積土から、円筒下層d1・d2式の土器破片が出土し、これ以降の土器は含まない。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代前期末葉の円筒下層d2式期と考えられる。

SI 5058 (図110)

【位置・確認】ⅧC-89グリッドに位置する。第IV・V層上面において暗褐色土の落ち込みを確認した。

【重複】SK5053・5054より古い。

【形状・規模】南東壁のみの残存であり、平面形状・規模は不明である。検出面から床面までの深さは16cmである。

【壁・床面】南壁は第IV・V層をほぼ垂直に掘り込み、同層上面に比較的平坦な床面が形成される。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【堆積土】2層に分層された。暗褐色土主体で、礫等の混入が少なく均質な土層である。

【出土遺物】堆積土から縄文時代中期後葉と思われる破片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、縄文時代中期後葉の何れかの時期と考えられる。

SI 5059 (図133)

【位置・確認】ⅧD-81グリッドに位置する。第IV・V層上面において暗褐色土の落ち込みを確認した。

【重複】SP5230・5232より古い。

【形状・規模】平面規模3.1×3.1mで、各辺がやや直線気味となる方形状となる。床面までの深さは12cmである。

【壁・床面】壁は第IV・V層を緩やかに掘り込み、同層中に平坦な床面が形成される。貼床は確認していないが、炉の周囲30cmでは微弱な硬化面が認められた。

【柱穴・ビット】壁中及び壁寄りから10基のビットが確認された。柱痕は検出していない。主柱構成は不明であるが、北隅・西隅壁のPit3・7と、南東側壁のPit1、SP5230とで台形配置の主柱を構成する可能性が高い。

【炉】床面中央部から地床炉を1基検出した。北側をSP5232との重複により失うが、被熱面は残存長で50cmの楕円形である。

【堆積土】暗褐色土の単層として認識した。礫・炭化物の混入は比較的多量だが、掘り込み層である第IV層土の粒・ブロックの混入はわずかである。

【出土遺物】堆積土から円筒上層c式及び縄文時代中期後葉以降と思われる土器破片が出土した。

【小結】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期後葉以降のいずれかの時期と考えられる。

SI5062 (図115)

【位置・確認】ⅧF・G-86・87グリッドを中心に位置する。盛土遺構精査後、第Ⅲ層を精査中に平面プランを確認した。

【重複】SI5055・5067・5069と重複し、SI5055より古く、SI5067・5069より新しい。

【形状・規模】南西側は他遺構との重複により明確でないが、3.3×2.5mの楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは31cmである。

【壁・床面】残存部はSI5067・5069の堆積土及び第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、床からは外傾しながら立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に構築され、ほぼ平坦である。貼床及び硬化面は検出していない。

【柱穴・ピット】本遺構に伴うと考えられるピットを4基検出した。柱痕は検出していない。

【堆積土】2層に分層した。暗褐色土を主体とし、層中には礫や炭化物が含まれる。

【出土遺物】Pit3から円筒上層b・d式と考えられる破片が出土した。

【小結】Pit3出土土器及び他遺構との重複関係から、時期は縄文時代中期中葉の円筒上層d式期と考えられる。

SI5063 (図134)

【位置・確認】ⅧE-89・90グリッドを中心に位置する。第Ⅲ層を精査中に、焼土とそれに伴うと考えられる立ち上がりの一部を確認した。

【重複】SI5039と重複し、本遺構が古い。

【形状・規模】南壁の一部のみの残存であるため平面形は不明である。検出面から床面までの深さは25cmである。

【壁・床面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層上面に構築され、ほぼ平坦である。貼床及び硬化面は検出していない。

【炉】地床炉を1基検出した。38×27cmの浅い皿状の窪みに、厚さ6cmの土が堆積しここが焼土化している。

【堆積土】南壁際の一部で残存する。黒褐色土を主体とする。

【出土遺物】図示しなかったが、堆積土から円筒下層d2式の土器破片が出土した。

【小結】堆積土出土土器から、時期は縄文時代前期末葉の円筒下層d2式期のものと考えられる。

SI5064 (図124)

【位置・確認】ⅧF・G-89グリッドに位置する。

【重複】SI1103・5045・5047より古い。

【形状・規模】壁の大半を失っており、平面形・規模等は不明である。検出面から床面までの深さは17cmである。

【壁・床面】壁は第Ⅲ層をほぼ垂直に掘り込み、第Ⅳ・Ⅴ層中に比較的平坦な床面が構築される。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【柱穴・ピット】床面上でピットを1基確認した。Pit1は残存長36cm、床面からの深さ14cmである。

【堆積土】2層に分層した。暗褐色土主体で、第2層から床面にかけては、長14～32cmの礫が多く混入

する。

【出土遺物】図示しなかったが、堆積土から円筒上層a・c式の土器破片が出土した。

【小結】SI5047(榎林式期)以前とする重複関係並び円筒上層c式期までの堆積土出土土器から、縄文時代中期前葉の円筒上層c式期以前には埋没していたものと見られる。

SI5065(図134)

【位置・確認】ⅧD・E-89・90グリッドを中心に位置する。調査区境界の壁面において壁の立ち上がり、第Ⅲ層を精査中に黒褐色土の円形プランを確認した。

【重複】なし。

【形状・規模】東側の一部が失われているものの、2.9×2.5m程度の円形を呈する。検出面から床面までの深さは29cmである。

【壁・床面】壁は第Ⅲ～Ⅴ層を掘り込み、床からは緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に構築され、平坦である。貼床及び硬化面は検出されなかった。

【堆積土】3層に分層した。黒褐色土を主体とする。

【出土遺物】土器は、堆積土から円筒上層e～榎林式の破片が出土した。

【小結】出土遺物から、時期は縄文時代中期後葉の榎林式期以前と考えられる。

SI5067(図115)

【位置・確認】ⅧG-86グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面で確認した。

【重複】SI5018・5055・5062・5069、SK5013、SP5038と重複し、SI5018・5055・5062、SK5013、SP5038より古く、SI5069より新しい。

【形状・規模】他遺構との重複により北東側のみの残存であるため平面形は不明であるが、円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。規模は残存長4.1m、検出面から床面までの深さ22cmである。

【壁・床面】残存する壁は外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

【柱穴・ビット】本遺構に伴うと考えられるビットを6基検出した。

【その他の施設】北側床面からテラス状の段差を検出した。テラス部分は平坦ではなく、堅穴中央に向けて緩やかに下がっている。

【堆積土】6層に分層した。褐色土及び暗褐色土を主体とする。

【出土遺物】土器は、床面、床面直上から円筒下層d1・d2式、堆積土上層からは円筒上層c～d式の破片が出土した。

【小結】他遺構との重複及び床面・床面直上の出土遺物から、時期は円筒上層c式期と考えられる。

SI5068a～c(図118～120)

【位置・確認】ⅧC～D-82・83グリッドに位置する。第Ⅲ層～第Ⅳ・Ⅴ層上面で壁周溝、円形・楕円形柱穴列を構成すると考えられるビット群と、その範囲内に分布する貼床及び焼土範囲を検出した。それぞれの精査終了後に配置構成及び重複関係を検討し、SI5038、5068a～c、5073a・bの3軒6段階の住居として抽出している。なお図118には本住居群の関連遺構名を、また図120には遺構群の深さを示した。

【重複】SI5068aを構成するビットはSP8002・9491より新しく、SP5226・9125・9200、SN5010焼土、SI5068bを構成するSP9195より古い。SI5068bを構成するビットはSI5056・5072・5068aを構成するSP9191・9196より新しく、SI5068cを構成するSP5136より古い。SI5068cを構成するビットは、SP5131・9210・9487と、SI5068bを構成する9212・9213より新しく、SI5072炉及び壁周溝、SP5129より古い。竈穴住居跡の新旧関係としては、SI5068a→同b→同c(いずれも時期は榎林～最花式)と変遷し、SI5038よりも新しく、SI5073よりも古い。

【形状・規模】規模はSI5068aが4.1×3.8m、SI5068bが5.5×5.3m、SI5068cが6.7×6.3mで、平面形はいずれも円形を基調とする。時期とともに大型化する拡張であったと見られる。

【壁・床面】壁・床面ともに本住居に確実に伴うものは検出していない。

【柱穴・ビット】三重の円形柱穴列を構成し、内側から順にSI5068a、SI5068b、SI5068cとした。

SI5068aは、SI5056のPit1と、SP5059・5061・5121・5126・5227・8058・9190・9196・9197・9215・9221の12基のビットによって構成されると考えられる。SP9471・9473・9476・9477については石囲炉の抜き取り痕である可能性も考えられたため、SI5068aの構成ビットから除外している。

SI5068bはPit1・2及びSP5132・5144・5147・5360・9054・9137・9191・9195・9212・9213・9480・9487の14基によって、またSI5068cはPit1及びSP5020・5128・5129・5133・5136・5357～5359・5361・9051・9198・9433の13基によって壁柱穴が構成されたと考えられる。柱痕が確認されたのはSP9198・9433の2基のみである。

【炉】重複及び配置関係から、SN5007がSI5068a～SI5068cの何れかに、SN5010がSI5068bまたはSI5068cに伴う石囲炉である可能性がある。また範囲内の焼土範囲の中で、SN5007東の焼土範囲はSI5068cの地床炉の可能性もある。

【出土遺物】SI5068aに属するSP5126から円筒上層c及び最花式、SI5068bに属するSP9195・9487から大木10式併行、SI5068cに属するSP5020から榎林、SP5128から最花式、SP5136から大木10式併行の思われる土器片が出土した。

【小結】竈穴が伴っていたかは不明であるが、SI5068a→同b→同cと変遷し、拡張する円形住居の壁柱穴列であったと考えられる。重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期後葉～末葉の最花式から大木10式併行期と思われる。

SI5069(図115)

【位置・確認】ⅧG-87グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面で確認した。

【重複】SI5047・5062・5067と重複し、本遺構が古い。

【形状・規模】他遺構との重複によって壁の大半を失っており、平面形は不明である。検出面から床面までの深さは21cmである。

【壁・床面】残存する壁は第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込んでおり、床からはほぼ垂直に立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に凹凸少なく構築されるが、北側に向かってわずかに下がっている。

【柱穴・ビット】本遺構に伴うと考えられるビットを2基検出した。

【その他の施設】北側から壁周溝を検出した。残存長1.6m、幅22cm、床面からの深さ7cmである。

【堆積土】4層に分層した。暗褐色土を主体とする。第4層は壁周溝の堆積土である。

【**出土遺物**】Pit2及び堆積土から円筒下層d2式、円筒上層b・c式の土器片が出土した。

【**小結**】Pit2出土遺物及び重複関係から、時期は縄文時代中期前～中葉の円筒上層c又はd式期と考えられる。

SI5071(図134)

【**位置・確認**】ⅧI・J-90グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中、暗褐色土の落ち込みを確認した。

【**重複**】SI5047、SP9238より古い。

【**形状・規模**】壁の多くを失っており、平面形および規模は不明である。検出面から床面までの深さは20cmである。

【**壁・床面**】壁は第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、床面からは75°前後の角度で立ち上がる。床面は第Ⅳ・Ⅴ層中に構築され、若干凹凸が目立つ。貼床及び硬化面は検出していない。

【**柱穴・ビット**】ビットは5基検出した。いずれも柱痕は確認していない。

【**堆積土**】3層に分層した。暗褐色土主体の土層で、礫・遺物の混入が少ない。

【**出土遺物**】土器は、堆積土から円筒上層e・d式、朝日下層式と思われる破片、円筒上層e～覆林式と考えられる破片が出土した。

【**小結**】重複関係及び堆積土出土土器から、時期は縄文時代中期中葉～後葉の円筒上層e～覆林式期と考えられる。

SI5072(図130～132)

【**位置・確認**】ⅧD-82グリッドに位置する。SI5056として精査中、下部に別住居が存在することが判明したためSI5072として分離・登録・精査を行っている。配置と層位関係からSP5122・5228・5299・5300・5355・5366・8057・9136・9188・9273・9430・9489・9490はSI5056・5072の何れかに属する可能性があり、本項で取り扱うこととした。

【**重複**】SI5068bPit2・5068cPit1・5073aPit2、SP5273・5274・9433・9434・9480より新しく、SI5056・5059、SP5147・5357・9434より古い。

【**形状・規模**】東側の壁と壁周溝を失っているため不明であるが、長軸5.2mの東西にやや長い長円形と見られる。検出面から床面までの深さは13cmである。

【**壁・床面**】壁は第Ⅲ～Ⅴ層を緩やかに掘り込み、第Ⅳ・Ⅴ層上面に比較的平坦な床面が形成される。壁周溝は北と東側で断続的となるが、幅12～52cm、深さ5～25cmでほぼ全周する。貼床及び硬化面は検出していない。

【**柱穴・ビット**】ビットは10基検出した。うちPit4・6～9・22と、SP5228・8057の8基で壁柱穴が構成される。

【**炉**】中央部で大型の石囲炉を1基確認した。20～40cm程度の角礫・扁平礫10個程度を、北東部と南西部にL字形に対向させている。全体としては南北方向にやや長い長方形と見られ、推定規模は140cm×120cmである。焼土は掘方底面の東寄りに形成される。図示しなかったが、掘方は全体を一段低く掘削し、炉石設置部のみやや深く掘り込む。

【**その他の施設**】西側の壁周溝より外側に位置するSP5299・9489・9490の連結するビット列は、本遺

構に関わる施設の可能性がある。

【**堆積土**】3層に分層された。暗褐色主体の土層である。

【**出土遺物**】土器は炉、壁周溝、Pit6～8、床面直上の堆積土から円筒上層a・c・d、榎林式の破片が出土し、特に榎林式の出土が目立つ。

【**小結**】重複関係及び炉、壁周溝、ピット出土土器から、時期は榎林式期以降と考えられる。

SI5073a・b(図118～120)

【**位置・確認**】ⅧC・D-82～84グリッドに位置する。第Ⅲ層黒色土中～第Ⅳ・Ⅴ層上面で検出したピットを精査したところ、環状柱穴群であることが判明した。最初に柱穴配置を把握、記録した柱穴群をSI5073a、後にSI5068等から分離された柱穴群をSI5073bとしている。

【**重複**】SI5073aはSI5034・5072、SK5052、SP5056・5364より新しく、SI5073bPit1、SN5001、SP5146より古い。SI5073bはSI5072炉、SI5073aPit1、SP5145・5468より新しく、SN5001より古い。

【**形状・規模**】平面規模は、SI5073aで9.5×8.6m、SI5073bで9.0×7.8mである。ともに小判形に近い楕円形を呈し、軸方向も近似する。

【**壁・床面**】壁・床面ともに本住居に確実に伴うものは検出していない。

【**柱穴・ピット**】SI5068cの外周に位置する二重の楕円形の柱穴列で、北側をSI5073a、南側をSI5073bとした。SI5073aはPit1～4、SK5014、SP5055・5111・5145・5266・5363・5366・9024・9224の13基の壁柱穴で構成されたと考えられ、各ピットの規模は長軸30～112cm、深さ39～82cmである。SI5073bは壁周溝とPit1～4、SP5146・5351・9046・9186・9187・9408・9437・9458の12基の壁柱穴で構成されたと考えられ、各ピットの規模は長軸7～71cm、深さ10～79cmで、全体的にSI5073aより小規模の柱穴によって構成されている。北東側の壁周溝は幅24～36cm、深さ17cmである。柱痕はSI5073aのPit1・3、SP9224で確認されている。

【**炉**】SN5010は、SI5068a・bまたは本住居a・bのいずれかに伴っていた可能性がある。

【**出土遺物**】SI5073aとしての出土遺物は、Pit1・2から大木10式併行、SK5014から最花式、SP5266から榎林式が出土した。またSI5073bとしては、Pit3から大木10式併行、SP9187から最花式と思われる土器片が出土した。

【**小結**】SI5073a→同bと変遷する楕円形の壁柱穴列と考えられるが、配置構成の変化が単純な拡張結果を示さないため、連続的に使用された住居であるかは不明である。時期は重複関係及び出土土器から、ともに縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI5501(図135・136)

【**位置と確認**】遺跡範囲の中央、ⅧN-86グリッドに位置し、石棺墓A群の東側隣接地にあたる。表土を除去し、縄文時代の遺物包含層(図135C-C'第1層)をわずかに下げた段階で石囲炉を検出したため、石棺墓群に隣接する住居を想定しながら慎重に精査したが、遺構の輪郭は明瞭に捉えられなかった。図中の点線は図135A-A'第2層及び第5層の分布からの推定であるが、本遺構の炉跡を直接覆う暗褐色土(A-A'第1層・C-C'第1層)が途切れること無く広く分布することから、堅穴を掘り込まないタイプの住居の可能性もある。同層の出土遺物と、周辺のピット出土遺物の時期差がないことから、周辺の

ビットは本遺構に関連する可能性が高い。

【重複】北側でSI 5502と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。

【形状・規模】遺構の輪郭が捉えられず、形状・規模ともに不明である。

【壁・床面】壁は検出できなかった。また床面も貼床等はなく明瞭でなかった。

【柱穴・ビット】炉の周囲に多数のビットが分布する。柱痕の有無や深さなどからSP 5912・5917・5969・12071に柱穴の可能性を考えたが、正確なところは不明である。

【炉】石囲炉を1基検出した。西辺には45cmの大型の長円礫を用いるが、主体となるのは15～20cmのやや小振りの石である。平面形は不整な方形と見られ、残存部での内寸は南北方向で40cmである。

【堆積土】A-A'で5層、C-C'で2層が本遺構関連土層である。A-A'及びC-C'第1層は直接炉を覆う住居廃絶後の堆積土で、縄文時代後期初頭期の遺物を含んでいる。A-A'第2・5層は床面下の掘方埋土ないしは、廃絶後の初期堆積土のいずれかで、第3・4層はSP 5912関連土で、特に第3層は柱痕である。また、C-C'第2層は炉内堆積土である。

【出土遺物】床下・Pit1他堆積土から、牛ヶ沢～蛭沢式期の土器片が出土した。

【小結】石棺墓A群に隣接する住居跡で、出土遺物から時期は、縄文時代後期前葉(蛭沢式期)と見られ、石棺墓群の造墓期に並行するか直後段階に相当する。石囲炉と周囲のビットからなる住居と見られるが、詳細は不明である。途切れること無く北側に延びる第1層の分布状況から、掘り込みの無い平地住居の可能性も考えられる。

SI 5502 (図135・136)

【位置と確認】遺跡範囲の中央、Ⅷ0-86グリッドを中心に位置し、石棺墓A群の東側に隣接する。縄文時代の遺物包含層(図135C-C'第1層)を下げた段階で地床炉(炉1～4)や石囲炉(炉5)を検出したため、石棺墓群に隣接する住居を想定しながら慎重に精査した。明確な壁(掘り込み)は確認できなかったものの、点線の範囲で半円状の暗褐色土や黒褐色土が分布するのを確認し、これを住居の輪郭と判断した。

【重複】南側でSI 5501と重複し、本遺構の方が古い。このほか多数のビットが分布し、図135B-B'などの断面観察部では遺構関連土(B-B'第3・4層相当の土層)より新しいビット(SP 5987)も、古いビット(SP 5989)も存在するが、調査時に平面的な新旧関係はほとんど捉えることができず、大半は同土層除去後に確認、調査している。

【形状・規模】東側は住居の輪郭を捉えられたが、西側の輪郭は捉えられなかったため、形状は不明である。規模は石囲炉(炉5)を通る位置で南北約4.4mである。

【壁・床面】壁の輪郭は炉の検出後の範囲であり、壁はほとんど立ち上がらないか、後世失われたかのいずれかである。床は黒褐色土ないしは暗褐色土(B-B'第3・4層)を貼って床面としている。硬化面は見られない。

【柱穴・ビット】住居の輪郭内に多数のビットが存在する。大半は住居との帰属関係を捉えられなかったが、ビット出土遺物の多くが、上位の遺物包含層と同時期であることから、住居関連のビットと推測される。

【炉】地床炉を4基(炉1～4)、石囲炉を1基(炉5)検出した。炉1～4は地床炉、炉5は石囲炉である。炉

3と炉5は掘方を伴う。炉1・3・5は隣接し、新旧関係は炉5が古く、炉1と炉3がこれより新しい。炉1と炉3の新旧関係は不明である。炉1～4までの地床炉の規模は、炉1が直径30cm、炉2が直径15cm、炉3が直径30cm、炉4が直径20cmの範囲で焼けている。炉2と炉4の規模は極めて小さい。炉5は住居の中央付近に位置する石囲炉で、炉1・炉3の西側に隣接する。15～30cm程度の礫8個を粗雑な方形に配する。S-5は扁平な礫で、掘方深くに突き刺すように設置している。規模は内寸で15cmと小規模である。炉内は被熱している。

【堆積土】B-B' 第3・4層、C-C' 第3層が本遺構の堆積土である。炉との標高差から見ればいずれも床面下の掘方埋土と見られる。

【出土遺物】床面・炉3他堆積土から、大木10式並行～蛭沢式期の土器片のほか、住居東側で土偶頭部が1点(2-図145-1)出土した。

【小結】住居西側には石棺墓A群(8号墓)が隣接するが、直接的な重複関係はなく層位的な新旧関係は不明である。出土土器による時期は縄文時代後期前葉の蛭沢式と考えられ、SI5501とは同一型式内で重複する。石棺墓A群の造墓期と並行かそれ直後の住居と思われる。

SI5503(図137)

【位置と確認】遺跡範囲の中央、Ⅷ0-88グリッドを中心に位置し、石棺墓A群と石棺墓B群の中間に位置する。先行して調査した東側は住居の輪郭を捉えられず、貼床範囲しか明らかにならなかった。

【重複】SP5930・5931・12050と重複し、SP5930・12050よりも古く、SP5931よりも新しい。

【形状・規模】東側は遺構の輪郭を捉えられず形状は不明だが、貼床範囲から推せば南北方向にやや長い長円形と見られる。

【壁・床面】壁は西半が残存し、全体的に外傾して立ち上がる。検出面からの深さは43cmである。

【柱穴・ピット】竪穴西側でピットを1基検出した。炉1と重複し一部壊している。

【炉】なし。

【堆積土】堆積土は7層確認した。第6・7層は貼床ないしは掘方埋土で、第1～5層が堅穴堆積土である。掘方埋土より堅穴堆積土の黒みが強く、いずれの層も小礫を多量に含んでいる。

【出土遺物】炉1及び掘方から大木10式並行、他堆積土から大木10式並行～蛭沢式期の土器片が出土した。

【小結】石棺墓A群と石棺墓B群の中間に位置する竪穴住居跡である。構築時期を示す掘方出土遺物には後期初頭期の遺物が入らないため、構築時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられ、以降の時期にかけて竪穴が埋没したもの見られる。石棺墓群の造墓時期と並行する。

SI5504(図137)

【位置と確認】遺跡範囲の中央、ⅧN-87グリッドを中心に位置する。

【重複】SK5588、SP12082・12083・12085と重複し、SK5588よりも新しく、その他のピットよりも古い。

【形状・規模】長軸約2.5m程度の不整形円で、検出面から床面までの深さは50cmである。

【壁・床面】壁は全体的に外傾して立ち上がる。床は基本層第IV層を直接床面としている。

【柱穴・ピット】竪穴西側でピットを1基検出した。

【炉】なし。

【堆積土】堆積土は2層に分層した。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2、上層e、榎林、大木10式併行、牛ヶ沢式の各型式の破片が出土した。2-図92-18は壺の胴部片で、蛭沢式の可能性も考えられる。このほか堅穴北寄りの堆積土中層から砥石が1点(2-図138-4)出土した。

【小結】石棺墓A群の東側に隣接する堅穴住居跡で、時期は出土遺物より縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期又は後期前葉の蛭沢式期と見られ、石棺墓群の造墓時期と並行する。

SI5505 (図137)

【位置と確認】遺跡範囲の中央北寄り、VIII R-87グリッドに位置する。重複する多数の土坑、ピットを調査後、地山ではない円形の褐色土範囲を検出し、規模や形状から住居として登録し調査した。

【重複】多数の土坑、ピットと重複し、いずれの遺構よりも古い。

【形状・規模】直径2.4m程度の楕円形である。検出面からの深さは45cmである。

【壁・床面】壁は全体的に外傾して立ち上がる。床面は基本層第V層を直接床面としており、凹凸が見られる。

【炉】なし。

【柱穴・ピット】なし。

【堆積土】堆積土は2層に分層した。ともに堅穴堆積土で第2層は壁際堆積土である。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2、大木10式併行、牛ヶ沢、蛭沢式の各型式の破片が出土した。

【小結】住居として調査したが、炉やピット、平坦な床面もなく住居以外の可能性もある。時期は出土土器から、縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期又は後期前葉の蛭沢式期と考えられる。

SI5506 (図137)

【位置と確認】遺跡範囲の中央北寄り、VIII S-87グリッドを中心に位置し、第4501号配石の東側に隣接する。重複する多数の土坑、ピットを調査後、地山ではない円形の褐色土範囲を検出し、規模や形状から住居として登録し調査した。

【重複】多数の土坑、ピットと重複し、いずれの遺構よりも古い。

【形状・規模】4.2×3.3mの楕円形で。検出面からの深さは45cmである。

【壁・床面】壁は全体的に外傾して立ち上がる。床面は基本層第V層を直接床面としており、凹凸が見られる。

【炉】なし。

【柱穴・ピット】なし。

【堆積土】堆積土は2層に分層した。いずれも堅穴堆積土で、第2層の上位には多量の礫を含む。

【出土遺物】堆積土全体から円筒下層d2・上層e・牛ヶ沢・蛭沢式の破片が出土した。

【小結】住居として調査したが、炉やピットなどの施設は存在せず、住居以外の可能性もある。後期初頭～前葉の遺物は混入と見られ、重複関係から大木10式併行期以前と考えられる。

SI 5507 (図138)

【位置と確認】遺跡範囲の中央、ⅧP-86グリッドに位置し、石棺墓A群とB群の中間にあたる。石囲炉の発見を契機として周辺精査を続けたが、貼床を検出したのみで竪穴壁や柱穴等は検出できなかった。

【重複】西側でSI 5507と接する。層位的に直接新旧関係を捉えることはできなかったが、床面標高は本遺構の方が高く、同住居堆積土上のSN5505とは同一面である。本遺構に確実に伴う遺物は無かったが、炉周囲では縄文時代後期初頭期の遺物が散見され、本遺構の方が新しい可能性が高い。

【形状・規模】竪穴の輪郭は捉えられず形状及び規模は不明である。貼床の規模は南北3.6×東西3.0mである。

【壁・床面】前述の通り壁は検出していない。床は暗褐色土を貼って床面としている。

【炉】貼床範囲の東側で石囲炉を検出した。10～20cm程度の比較的小型の礫15個を用い、方形と円形の中間的な形状に配置する。炉の掘方は無く、貼床とともに設置されたものと見られる。炉内は一段下がっており、被熱は見られない。

【堆積土】図138A-A' 第2層は石囲炉の下層に位置する貼床である。第1層は本住居の石囲炉とSN5505を直接覆う暗褐色土で、観察した範囲では途切れる様子がない。

【出土遺物】土器は出土しなかった。

【小結】本遺構に確実に伴う土器はないが、周囲では縄文時代中期末葉から後期初頭期の遺物が多く出土しており、時期はこの頃の可能性が高い。

SI 5508 (図138)

【位置と確認】遺跡範囲の中央、ⅧP-86グリッドに位置する。北側に開く弧状の暗褐色土の落ち込みを確認し、図138A-A' 土層断面においてその掘り込みも確認したが、これより北側で輪郭を捉えることができなかった。炉は検出しておらずSN5505としたものは本住居堆積土上面にて検出された単独の炉跡である。

【重複】東側でSI 5507と重複するほか、多数の土坑、ピットと重複する。SI 5507とは接する程度の重複でしかなく、新旧関係は捉えられなかった。周辺の土坑やピットも本遺構の床面付近で検出したものであり、本遺構の堆積土を確実に掘り込んでいるものは確認できなかった。

また前述のとおりSN5505は本遺構の検出面付近の炉跡で、本遺構よりも新しい。

【形状・規模】北側のほとんどの輪郭が捉えられなかったため、形状および規模は不明であるが、A-A' 断面での東西規模は約4.0mである。検出面からの深さは約40cmである。

【壁・床面】壁は外傾して立ち上がる。床は概ね平坦で基本層第IV層を直接床面としている。

【柱穴・ピット】住居範囲内や隣接地で10基程度のピットが分布する。本住居に伴うかは不明だが、堆積土を掘り込んだ確実に新しいピットはない。

【堆積土】竪穴堆積土を2層に分層した。第4層は壁際堆積土である。A-A' ではSP5744の堆積土との違いが見られず、分層線を引いていない。周囲のピット群の堆積土も、本遺構の堆積土に類似した土層である。

【出土遺物】土器は出土しなかった。

【小結】本遺構に確実に伴う出土土器は無いが、SN5505(縄文時代後期初頭)よりも古く、ピット群(出

土土器の最新時期は縄文時代中期末葉から後期初頭)と同時かこれ以降とする重複関係から、本遺構の時期は、縄文時代中期末葉から後期初頭に収まるものと思われ、石棺墓群の造墓時期と並行する。

SI 10001 (図139・140)

【位置・確認】遺跡範囲の南西、ⅧF・74・75グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面で石囲炉と弧状の落ち込みを確認した。

【重複】SI10007・10008と重複する。SI10008より新しく、SI10007との関係は不明である。

【形状・規模】北半が失われているため平面形は不明である。規模も不明であるが、残存長2.6mで、深さは30cmである。

【壁・床面】壁は南側一部のみの確認で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。床はほぼ平坦で褐色土を貼って床面としている。

【柱穴・ビット】竪穴床面でビットを4基検出した。SP番号を付したが、精査の結果本遺構に伴うと考えられた。柱痕は確認しておらず、柱穴配置も不明である。

【炉】石囲炉(炉1)と地床炉(炉2)を検出した。炉1は扁平礫7個を方形に配置するが、南西部が失われている。明確な火床面は検出していない。

【堆積土】4層に分層した。第4層は貼床で、第1～3層は竪穴堆積土である。自然堆積の可能性が高い。

【出土遺物】堆積土から円筒下層d2・上層a・榎林・大木10式併行の破片が出土した。

【小結】重複関係及び出土土器から、時期は縄文時代中期後葉～末葉期と考えられる。

SI 10002 (図139・140)

【位置・確認】遺跡範囲の南西、ⅧE・F-73・74グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】SI10003・10006、SK10017と重複し、本遺構が古い。

【形状・規模】貼床のみのため、平面形及び規模は不明であるが、貼床範囲は北西から南東方向に約6m延びている。

【壁・床面】明確な壁面は確認できなかった。床面はほぼ平坦で、褐色土を貼って床面としている。

【柱穴・ビット】竪穴床面でビットを10基検出した。SP番号を付したが精査の結果、本遺構に伴うものと考えられた。柱痕はなく、柱穴配置は不明である。SP10162は炉1とSP10147は炉2を掘り込んでいる。

【炉】貼床範囲の北側で土器埋設炉(炉1)と地床炉(炉2)を各1基検出した。炉1は土器を正位に埋設した土器埋設炉で、西側でSP10162と重複し本遺構が新しい。堆積土は4層に分層し、第1・2層は炉体内堆積土で、第4層は掘方である。炉内に火床面は確認できなかったが、炉の周囲は顕著に被熱している(第3層)。炉2は炉1西側に隣接した地床炉である。50×40cmの不整形範囲で被熱している。火床面の厚さは7cmである。

【堆積土】図139D-D'および図139E-E'で5層に分層した。第4・5層は貼床、第1～3層は竪穴堆積土である。

【出土遺物】貼床、炉、床面直上から円筒上層c式を下限、堆積土全体からは円筒上層d式を下限とする破片が出土した。

【**小結**】時期は貼床、炉、床面直上出土土器から、縄文時代中期前葉～中葉の円筒上層c～d式期と考えられる。

SI 10003 (図139・140)

【**位置・確認**】遺跡範囲の南西、ⅧF-73・74グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【**重複**】SI10002・10007・10008、SK10017と重複し、SI10002・10008より新しく、SI10007、SK10017より古い。

【**形状・規模**】平面形は3.7×2.8mの南北にやや長い楕円形で、検出面からの深さは25cmである。

【**壁・床面**】壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で、褐色土や暗褐色土を貼って床面としている。

【**柱穴・ピット**】竪穴床面で本遺構に伴うと考えられるピットを13基検出した。柱痕は確認できず、柱穴配置も不明である。

【**炉**】床面ほぼ中央から石囲炉を検出した。15～35cm程度の長円礫7個を方形に配置する。規模は内寸で30×30cmである。炉内はSP10768によって壊されているが、顕著な被熱面を検出している。

【**その他の施設**】竪穴南側の壁際から特殊施設を1基検出した。第Ⅳ層起源と考えられるシルト土を半円形の土手状に盛り上げた周堤と内部のピット状落ち込みからなる。

【**堆積土**】堆積土は図139H-H'・図139K-K'で10層に分層した。第1～5層は竪穴堆積土で、第6層以下は掘方埋土である。第2層は炭化物を主体とする。層中には土器、石器及び板状礫を多量に含み、埋没過程で人為的に廃棄されたものと考えられる。

【**出土遺物**】円筒上層b～d、榎林、大木10式併行の出土が認められた。炉では円筒上層b式、床面直上では榎林～最花式が下限となる。

【**小結**】時期は重複関係及び床面直上出土土器から、縄文時代中期後葉の榎林～最花式期と考えられる。

SI 10004 (図141)

【**位置・確認**】遺跡範囲の西側、ⅧK-68グリッドに位置する。褐色ないしは暗褐色土の楕円形の落ち込みを検出した。

【**重複**】南西部でSI10016と重複し、本遺構の方が古い。

【**形状・規模**】北側から西側にかけて明確に確認できなかったため、形状及び規模は不明である。残存部での規模は南北約7.3mである。

【**壁・床面**】壁は東側しか残存せず、高さは30cm程度である。床は全体的に北西へ向かって下っており、平坦ではない。床を敷設することなく基本層Ⅳ・Ⅴ層を直接床面としている。

【**柱穴・ピット**】竪穴内でSP番号を付したピットを23基検出したが、本遺構との帰属は不明である。なおSP11013は第2層下で検出している。

【**炉**】検出していない。

【**堆積土**】図141A-A'で8層に分層したうち、第3層(SP11013)を除く第1～6層が本遺構の堆積土である。

【**出土遺物**】円筒下層d2～大木10式併行の各型式の破片が出土した。また堆積土1層中より石皿の破片(2-図139-1a)が出土しており、捨て場ⅧW-67グリッド出土(直線距離約50m)の破片と接合関係が

ある。

【小結】第1層出土の有脚の石皿は、捨て場出土破片と長距離での接合関係がある。出土遺物の多くが大木10式併行期で、時期はこの頃と見られる。

SI 10006 (図139・140)

【位置・確認】遺跡範囲の南西、ⅧD・E-74・75グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した

【重複】重複はないが、北側は攪乱により壊されている。

【形状・規模】平面形および規模は4.7m×4.2mの楕円形で、検出面からの深さは44cmである。

【壁・床面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。床は全体に黄褐色土を貼って床面としている。南東部の壁際には一部壁周溝が見られる。

【柱穴・ビット】本遺構に伴うと考えられるビットを10基検出した。また、床面ほぼ中央からは土坑状の浅い窪みを検出した。平面形は不整形で、規模は150×130cm、深さは20cmである。東側の壁際からは壁周溝と考えられる溝跡を検出した。

【炉】検出していない。

【その他の施設】竪穴西側で特殊施設を1基検出した。弧状の周堤と隣接する浅い皿状の掘り込みからなる。

【堆積土】図140N-N'とO-O'で8層(第1～7層と第10層)に分層した。第10層は貼床(掘方埋土)で、これより上の第1～7層の竪穴堆積土は、主に暗褐色土で自然堆積の可能性が高い。

【出土遺物】円筒下層d2～榎林式、大木10式併行の破片が出土した。Pit4・10、壁周溝、壁際堆積土では榎林式が下限となる。

【小結】ビットや壁周溝出土土器から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 10007 (図141)

【位置・確認】遺跡範囲の南西、ⅧF-74グリッドに位置する。第Ⅳ・Ⅴ層上面で石囲炉を検出した。

【重複】SI10001・10003・10008と重複する。SI10003・10008より新しく、SI10001とは不明である。

【形状・規模】東壁の一部のみが残存しているため、平面形及び規模は不明である。

【壁・床面】壁は東側の一部のみ確認した。確認した壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面はおおむね平坦である。

【柱穴・ビット】検出していない。

【炉】石囲炉を1基検出した。10～30cmの円・長円礫7個を長方形に配置する。炉の内部からは火床面を検出した。火床面の厚さは6cmである。

【その他の施設】石囲炉の北側の床面で、2個の自然礫を「ハ」字状に配置した配石を確認した。西側の礫は立てられている。

【堆積土】床面付近で竪穴住居の確認に至ったため、堆積土は確認できなかった。

【出土遺物】炉・Pit他堆積土から円筒下層d2、上層c・e、榎林式の土器片が出土した。Pit4・5、堆積土7～9層では榎林式が下限となるが、床面直上では大木10式併行が出土している。

【小結】石囲炉に近接して屋内配石を伴う。時期は床面直上出土土器から、大木10式併行期と考えられる。

SI 10008 (図139・140)

【位置・確認】遺跡範囲の南西、ⅧF・G-84グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に暗褐色土の落ち込みを検出した。

【重複】SI 10003・10007、SK 10010と重複し、本遺構が古い。また多数のビットが堆積土を掘り込んでいる。

【形状・規模】他遺構との重複により南半が失われているため平面形は不明である。規模も同様の理由で不明であるが、残存長は3.8mである。

【壁・床面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦で、褐色土を全面に貼って床面としている。

【柱穴・ビット】竪穴床面で検出した本遺構に伴うと考えられるビットを9基検出した。柱痕はなく、柱穴配置も不明である。

【炉】竪穴中央で石囲炉を検出した。長さ10～25cmの自然礫を8個用いて長方形に配置している。規模は長軸52cm、短軸30cmである。炉内からは火床面が検出された。火床面の厚さは6cmである。炉石に被熱痕は確認されなかった。

【その他の施設】石囲炉の東側に隣接して、長軸35cm程度の柱状礫を立てた施設を検出した。礫は掘方底面に据えられている。

【堆積土】3層に分層した。第3層は貼床で第1・2層は竪穴堆積土である。

【出土遺物】貼床・炉・床面直上・Pit1・3・4・9・10他堆積土から、最花式を下限とする土器片が出土した。

【小結】時期は重複関係及び貼床出土土器から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる。

SI 10009 (図142・143)

【位置・確認】ⅧC・D-75・76グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。湯ノ沢川を望む段丘の縁に位置する。南西側は段丘の崩落により失われ、壁及び床面の一部を捉えることができなかった。

【重複】SP10608よりも古く、SI 10010よりも新しい。

【形状・規模】南西側を捉えられなかったが、残存規模は3.4×2.5m、深さ41cmで、形状は楕円形と考えられる。

【壁・床面】壁は南西側を欠く。残存する床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。床面中央には、貼床が施される。

【柱穴・ビット】ビットは1基検出した。

【炉】床面中央部で石囲炉を1基検出した。東辺でSP10608と重複し、古い。SP10608の深度が浅く、この底面で石囲炉の一边を確認することができた。炉は扁平礫を長方形に配置し、規模は69×66cm、掘方の規模は73×56cmである。炉石内部では全面で焼土が形成され、厚さは9cmである。炉の周囲には貼床が施されているが、炉との新旧は明確にできなかった。

【**堆積土**】貼床を含め、土層は8層に分層した。

【**出土遺物**】土器は、床面・炉・Pit1・5〜7他堆積土から円筒下層d2〜大木10式併行の各時期が出土している。

【**小結**】出土遺物及び住居形態から時期は縄文時代中期末葉の大木10式併行期と考えられる。

SI 10010 (図142・143)

【**位置・確認**】ⅧD-75グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。湯ノ沢川を望む段丘の縁に位置する。南西側は段丘の崩落により失われ、壁及び床面の一部を捉えることができなかった。

【**重複**】SI10009よりも古く、SP11141とは新旧不明である。

【**形状・規模**】南西側を捉えられず、東側を重複で欠く。残存規模は3.4×2.5m、深さ41cmで、形状は不明である。

【**壁・床面**】残存する床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。

【**柱穴・ビット**】検出していない。

【**炉**】検出していない。

【**堆積土**】堆積土は2層に分層した。

【**出土遺物**】堆積土から榎林式の口縁部片が出土した。

【**小結**】重複関係及び床面下からの出土土器から、時期は縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 10011 (図142・143)

【**位置・確認**】ⅧE-76グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。北半を掘乱で失う。

【**重複**】SP11144よりも新しく、SP10423・10484とは新旧不明である。

【**形状・規模**】北半を欠く。残存規模は長軸3.6m、深さ41cmで、形状は不明である。

【**壁・床面**】残存する床は壁際が高く、中央に向かって傾斜している。

【**柱穴・ビット**】検出していない。

【**炉**】検出していない。

【**堆積土**】土層は2層に分層した。

【**出土遺物**】床面、床面及び堆積土から、円筒下層d2式と榎林式の個体を含む破片が出土した。

【**小結**】重複関係及び床面出土土器から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 10013 (図144)

【**位置・確認**】遺跡範囲の南西、ⅧY-79グリッドに位置する。段丘斜面部となる西側は失われている。壁は検出しておらず平面形は不明だが、柱穴配置より破線部の堅穴輪郭を推定した。

【**重複**】他遺構との重複はない。

【**形状・規模**】平面形は柱穴配置から破線部のように推定した。推定規模は直径3.4m程度の円形と見られる。

【**壁・床面**】壁は検出していない。床面は全体的には基本層第Ⅵ層の岩盤を直接床面し、堅穴中央付近には部分的に暗褐色土を貼っている。

- 【柱穴・ビット】炉の北側に弧状に分布するビット群が見られ、壁際のビットと推測される。
- 【炉】西側の斜面落ち際に石囲炉を検出した。西側の一部は斜面部にかかっており、後世に失われたか、礫の抜き取りのため礫は4個が残存するのみである。礫は主に30cm前後の扁平礫を用い、残存部からの推定では方形に配置したものと見られる。南東部を除く扁平礫3個はいずれも割れている。
- 【堆積土】図144B-B'で2層に分層した。第1層は石囲炉掘方で、第2層は床面とした岩盤の凹部を充填する貼床(掘方埋土)である。
- 【出土遺物】炉から牛ヶ沢式、Pit3・4・7・8・13他堆積土から大木10式併行と牛ヶ沢式が出土した。
- 【小結】時期は炉内出土土器から、縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式期と考えられる。

SI 10016 (図141)

- 【位置・確認】遺跡範囲の西側、ⅧJ-68グリッドを中心に位置する。炉などの施設は検出しておらず、削平されたものと見られ、床全面の土層は貼床(掘方埋土)と見られる。竪穴範囲のビット群はこの土層を掘り込んでおり貼床よりは新しく、本遺構との帰属は不明なためSP番号を付して調査している。
- 【重複】北東でSI10004と重複し、本遺構の方が新しい。
- 【形状・規模】南側でしか壁が残存せず形状および規模は不明だが、貼床残存状況から南北は5.4m程度であったと推測される。
- 【壁・床面】全面に褐色土ないしは暗褐色土を貼って床面としている。
- 【柱穴・ビット】竪穴内で大小のビットを17基検出しているが、いずれも掘方埋土を掘り込んでおり、これ以降のビットと見られる。
- 【炉】検出していない。
- 【堆積土】図141B-B'で3層に分層するがいずれも貼床(掘方埋土)と見られる。
- 【出土遺物】堆積土から円筒下層d2・上層c～e、最花、大木10式併行の破片が出土した。
- 【小結】出土遺物の最新時期は大木10式併行期であり、時期はこの頃と見られる。

SI 10017 (図142・143)

- 【位置・確認】ⅧB・C-76・77グリッドに位置している。第Ⅲ層中で検出した。湯ノ沢川を望む段丘の縁に位置する。南西側は段丘の崩落により失われ、壁及び床面の一部を捉えることができなかった。
- 【重複】SP10500、SP10580と重複し、古い。
- 【形状・規模】南西側を捉えられなかったが、残存規模は5.0×3.9m、深さ53cmで、形状は楕円形と考えられる。
- 【壁・床面】壁は南西側を欠く。残存する床は概ね平坦に作出され、壁は急角度で立ち上がる。床面では、炉の北東側に帯状の貼床が施される。また、Pit3の西側で長さ約130cmの壁周溝を確認した。床面からの深さは、最大で約8cmであった。
- 【柱穴・ビット】ビットは5基検出した。
- 【炉】床面中央部で石囲炉を1基検出した。炉は扁平礫を楕円形に配置し、規模は105×76cm、掘方の規模は110×70cmである。炉石内部では全面で被熱の痕跡を確認できたが、断面では明確な焼土の形

成を確認できなかった。炉の北東側には貼床が施されているが、炉の堀方はこの貼床を切っている。

【堆積土】土層は9層に分層した。

【出土遺物】第7・8層から榎林式古段階、その上層から榎林式新段階の破片が出土したほか、Pit3の東側の床面から磨製石斧(2-図139-6)が出土している。

【小結】時期は重複関係及び第7・8層出土土器から、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる。

SI 10018 (図144)

【位置・確認】遺跡範囲の南西部、ⅧA-79グリッドに位置する。

【重複】竪穴住居の重複はないが、SP12327～12329と重複し、本遺構よりも古い。

【形状・規模】壁は南側しか残存しないが、貼床範囲から推せば、概ね直径3.0m前後の円形住居と見られる。検出面からの深さは約20cmである。

【壁・床面】床は全体に暗褐色土を貼って床面としている。

【柱穴・ビット】ビットは10基検出したが、柱穴配置は不明である。壁際に分布が偏っており、壁際の柱穴列の可能性もある。

【炉】竪穴東寄りで石囲炉を1基検出した。30cm前後の扁平礫が3個、東西に残存するのみで、平面形および正確な規模は不明であるが、東西の礫間の距離は約50cmである。炉内は顕著に被熱する。

【堆積土】図144A-A'・B-B'で1層、C-C'では3層に分層した。第1層は被熱面、第2層は石囲炉堀方、第3層は貼床(掘方埋土)である。

【出土遺物】床面下、貼床、石囲炉他堆積土から、大木10式併行を下限とする土器片が出土した。

【小結】第3層出土遺物の最新時期が大木10式併行期であることから、時期はこれ以降と見られる。

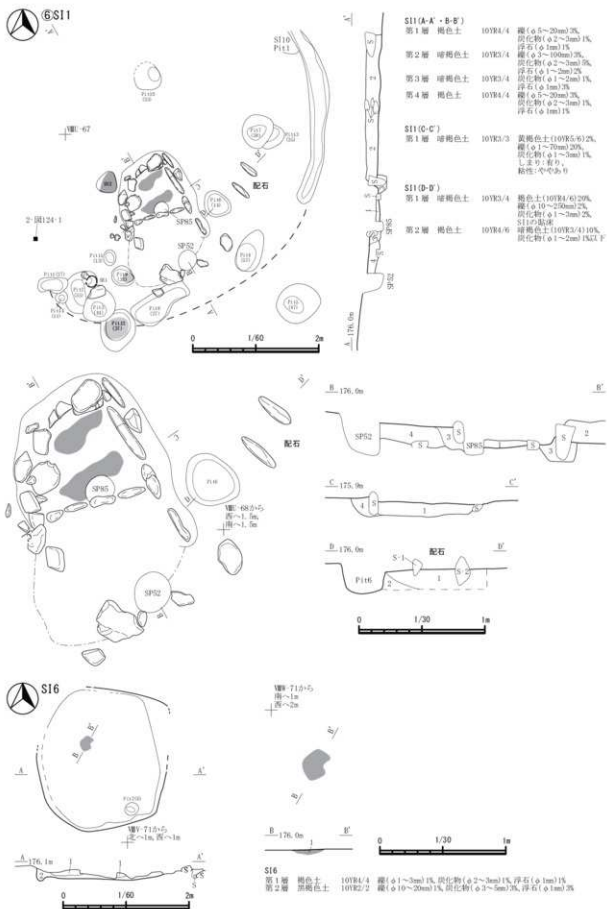


図22 竪穴住居跡1(⑥S11・S16)

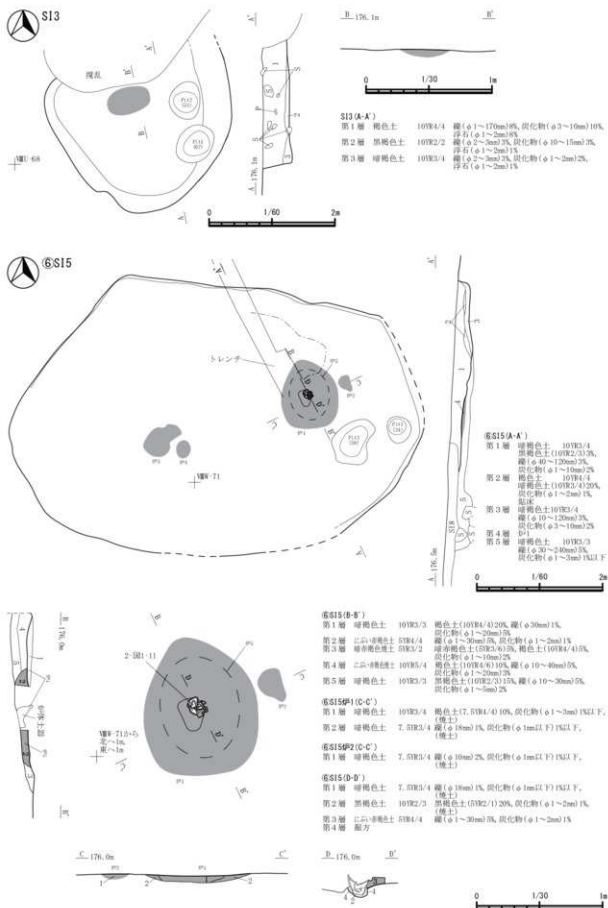


図23 竪穴住居跡2(S13・S15)

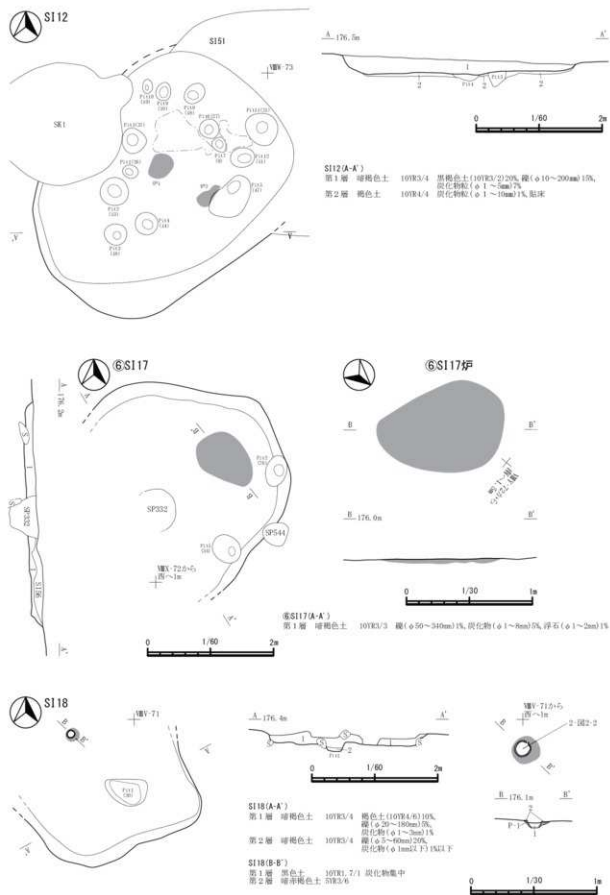


図25 竪穴住居跡4(S112・⑥17・S118)

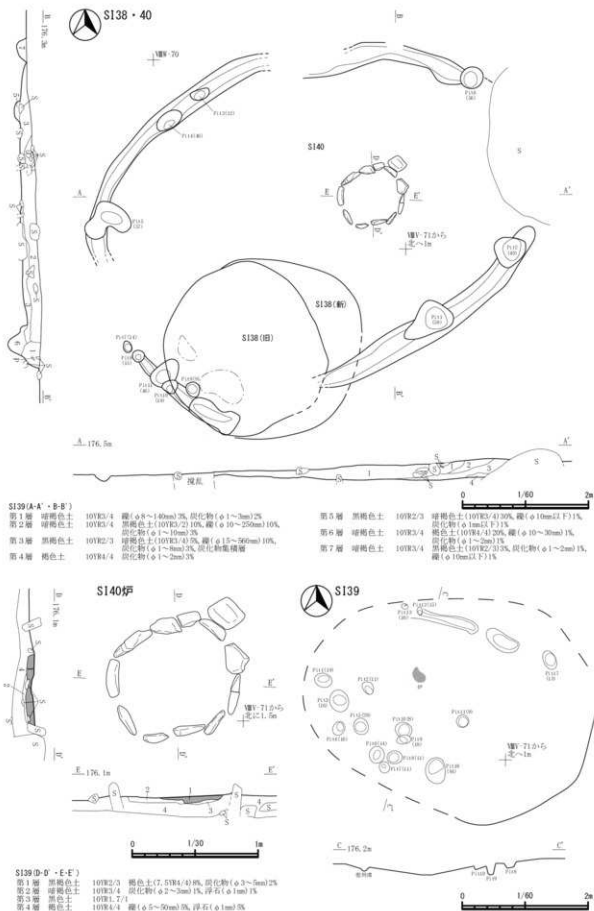


図26 竪穴住居跡5 (S138~40)

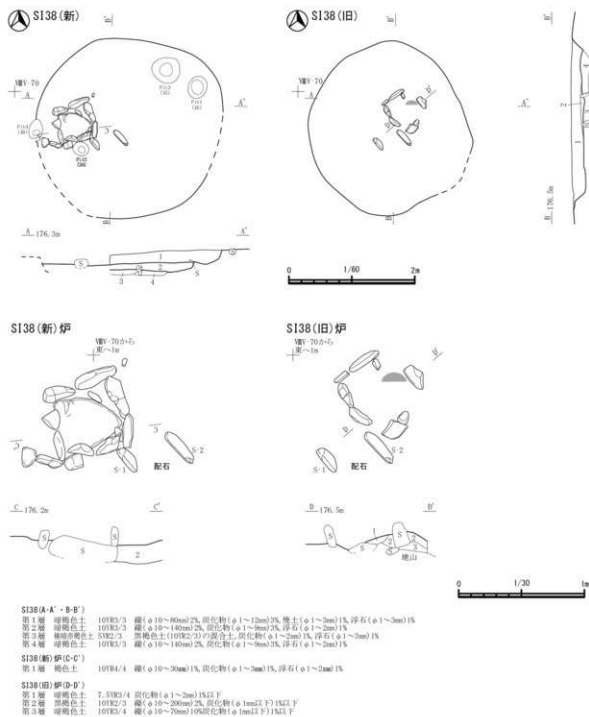


図27 竈穴住居跡6(S138)

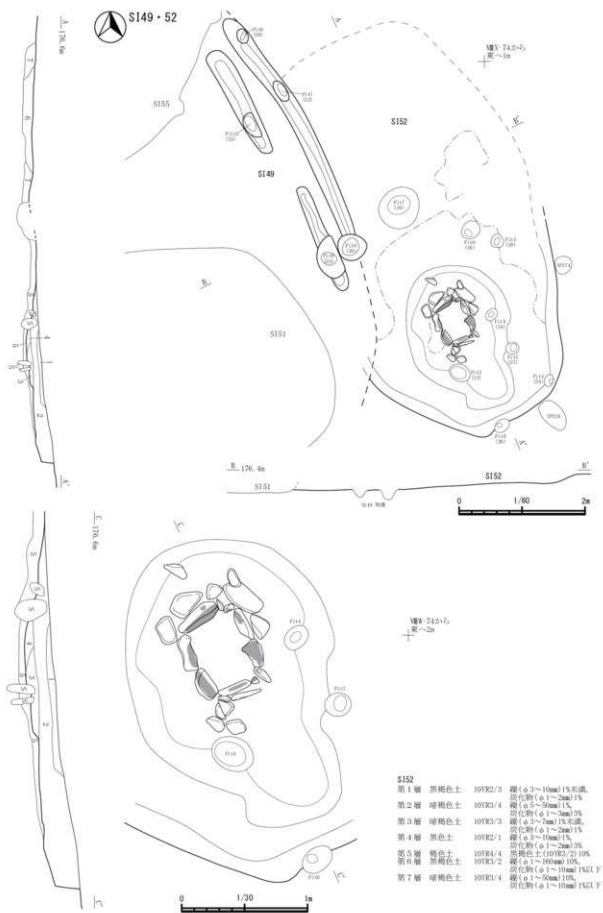


図28 竪穴住居跡7(S149・52)

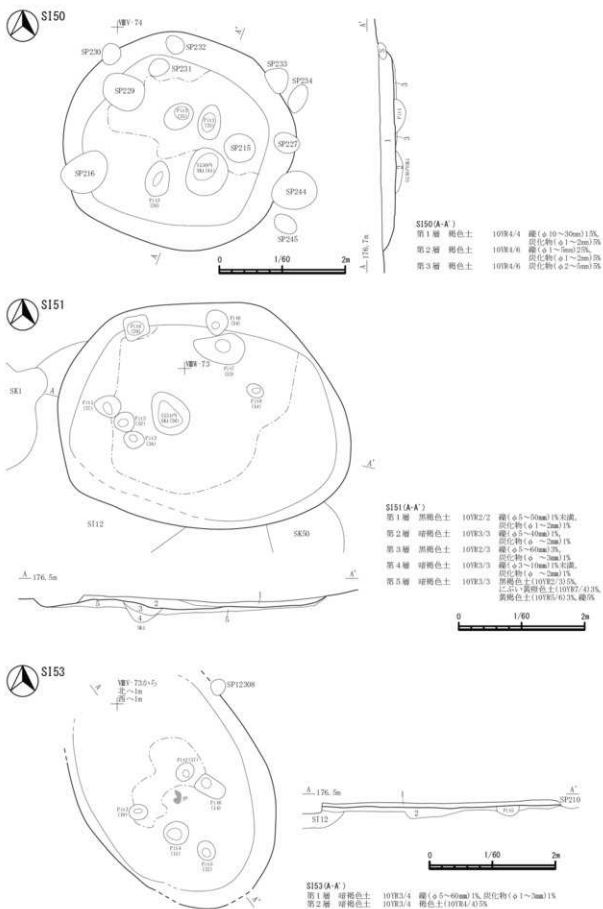
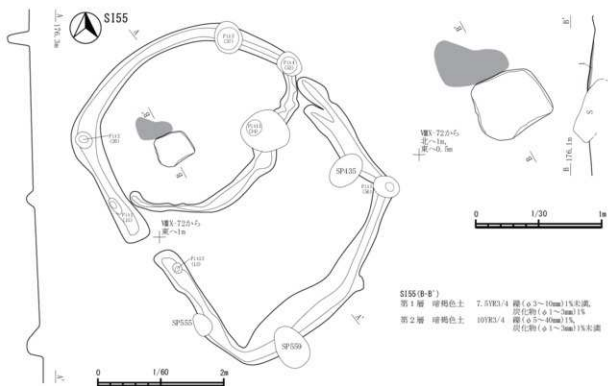
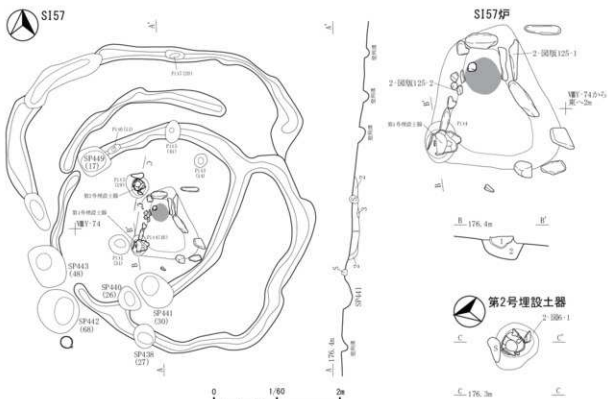


図29 竪穴住居跡8(S150・51・53)



S155 (B-B')
 第1層 埋褐色土 7.5YR3/4 砂 (φ3~10mm) 1%未満、炭化物 (φ1~3mm) 1%
 第2層 埋褐色土 10YR3/4 砂 (φ0.5~10mm) 1%、炭化物 (φ1~3mm) 1%未満



S157 (A-A')
 第1層 埋褐色土 10YR3/3 砂 (φ0.5~15mm) 1%未満、炭化物 (φ1~3mm) 1%
 第2層 埋褐色土 10YR3/4 砂 (φ0.5~20mm) 1%未満、炭化物 (φ1~3mm) 1%未満
 第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物 (φ~3mm) 1%未満、焼土粒1%
S157 埋跡土器 (B-B')
 第1層 埋褐色土 10YR2/3 砂 (φ0.5~20mm) 1%、炭化物 (φ1~3mm) 2%
 第2層 埋褐色土 10YR3/3 砂 (φ0.3~15mm) 1%未満、炭化物 (φ~2mm) 1%
S157 Pit 12 埋跡土器 (C-C')
 第1層 埋褐色土 10YR2/2 埋褐色土 (10YR3/4) 20%、炭化物 (φ1~2mm) 10%
 第2層 埋褐色土 10YR3/4 砂 (φ0.3~10mm) 1%未満、炭化物 (φ1~2mm) 1%

図30 竪穴住居跡9 (S155・57)

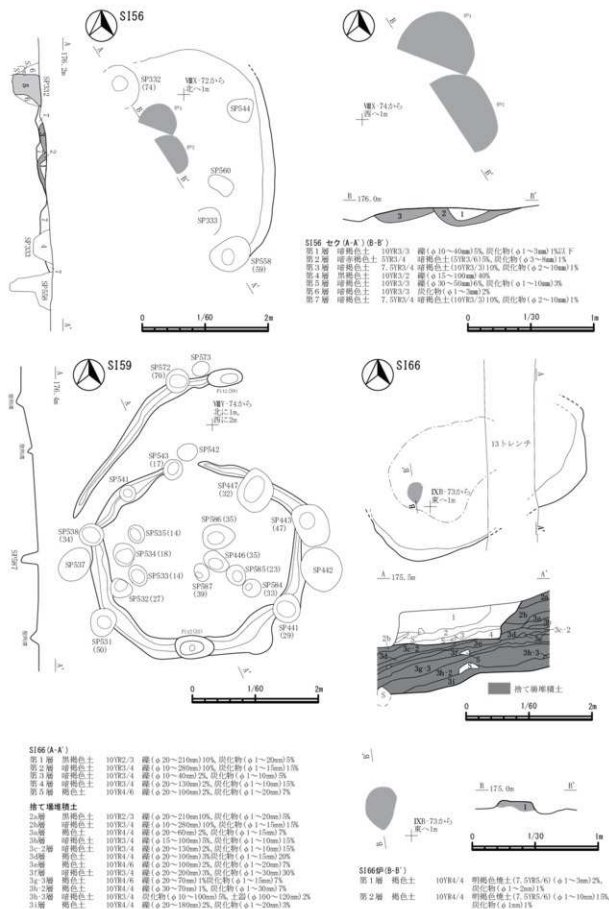


図31 竪穴住居跡10(S156・59・66)

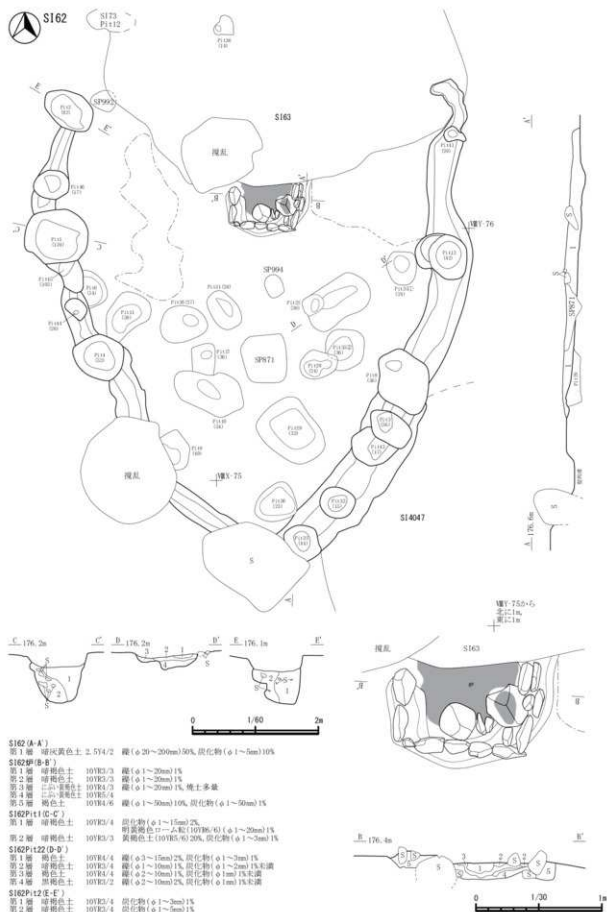


図32 竪穴住居跡11(S162)

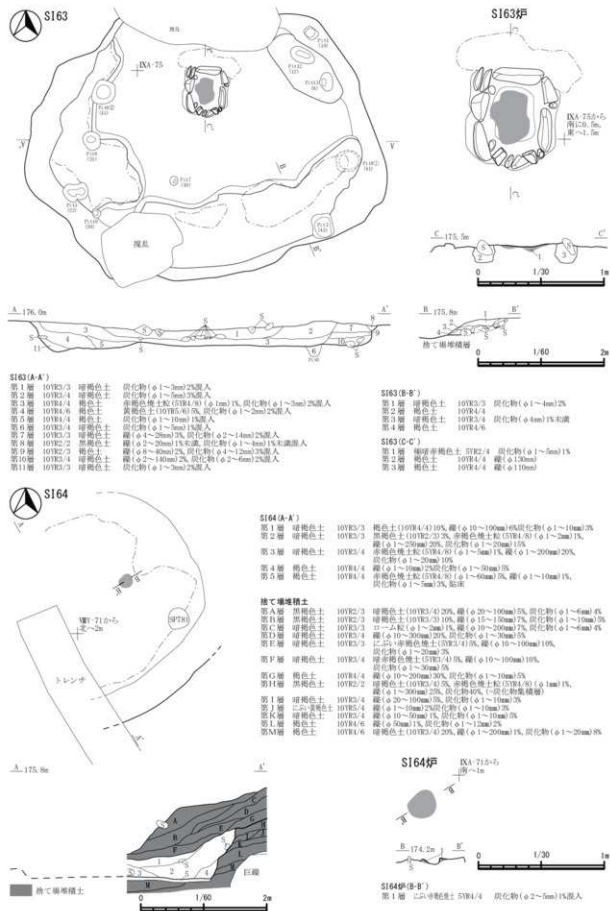


図33 竪穴住居跡12(S163・64)

▲ S165・67・71・77

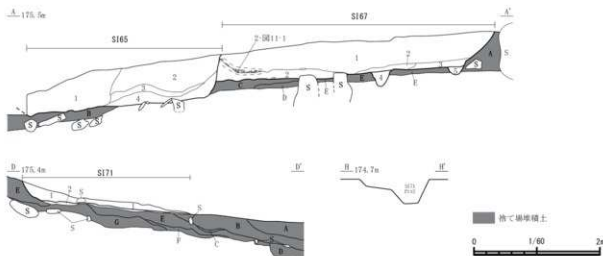
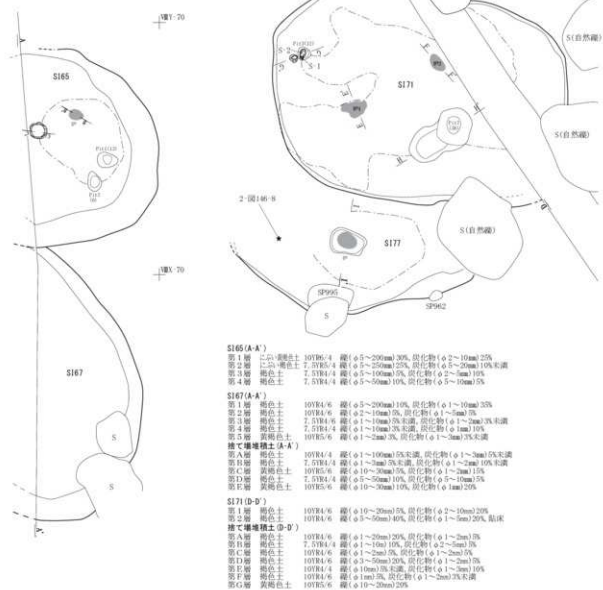


図34 竪穴住居跡13(S165・67・71・77)

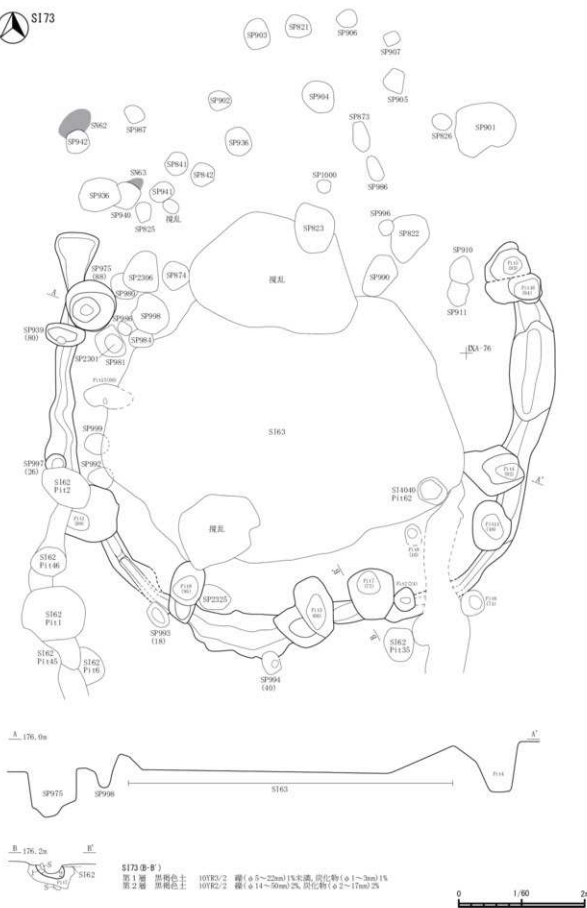
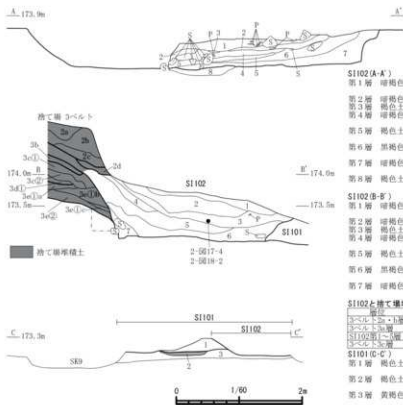
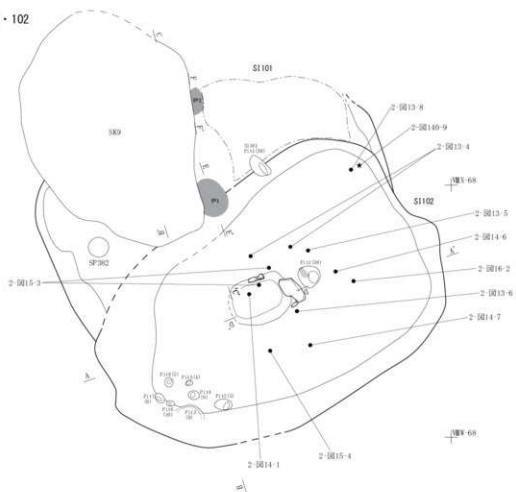


図36 竪穴住居跡15(S173)



S1101・102



- S1102(A-A')**
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ30~80mm)2%,炭化物(φ5~10mm)8%,浮石(φ1mm)2%
 - 第2層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ2~3mm)2%,浮石(φ1mm)5%
 - 第3層 褐色土 7.5YR4/4 炭化物(φ1~3mm)2%
 - 第4層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ30~80mm)5%,炭化物(φ3~5mm)2%,浮石(φ1mm)1%
 - 第5層 褐色土 10YR4/6 礫(φ30~50mm)2%,炭化物(φ3~4mm)2%,浮石(φ1mm)1%
 - 第6層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ30~90mm)2%,炭化物(φ3~5mm)5%,浮石(φ1~2mm)2%
 - 第7層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6)5%,礫(φ60mm)1%
 - 第8層 褐色土 10YR4/6 炭化物(φ1~4mm)1%,浮石(φ1~2mm)1%,礫(φ30~50mm)1%,炭化物(φ1~2mm)1%,浮石(φ1mm以下)1%以下
- S1102(B-B')**
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ30~80mm)2%,炭化物(φ5~10mm)8%,浮石(φ1mm)2%
 - 第2層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ2~3mm)2%,浮石(φ1mm)2%
 - 第3層 褐色土 7.5YR4/4 炭化物(φ1~3mm)2%
 - 第4層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ30~90mm)5%,炭化物(φ3~5mm)2%,浮石(φ1mm)1%
 - 第5層 褐色土 10YR4/6 礫(φ30~50mm)2%,炭化物(φ3~4mm)2%,浮石(φ1mm)1%
 - 第6層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ30~90mm)2%,炭化物(φ3~5mm)5%,浮石(φ1~2mm)2%
 - 第7層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6)5%,礫(φ60mm)1%,炭化物(φ1~4mm)1%,浮石(φ1~2mm)1%
- S1102と捨て藁厚積土の対応関係**
- | 捨て藁厚積土 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|----------|---------|---------|----------|---------|---------|---------|---------|
| S1102(1) | 10YR3/3 | 10YR3/4 | 7.5YR4/4 | 10YR3/4 | 10YR4/6 | 10YR2/3 | 10YR3/4 |
| S1102(2) | 10YR3/3 | 10YR3/4 | 7.5YR4/4 | 10YR3/4 | 10YR4/6 | 10YR2/3 | 10YR3/4 |
| S1102(3) | 10YR3/3 | 10YR3/4 | 7.5YR4/4 | 10YR3/4 | 10YR4/6 | 10YR2/3 | 10YR3/4 |
- S1101(C-C')**
- 第1層 褐色土 10YR4/4 礫(φ3~10mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%未満,砂質土
 - 第2層 褐色土 10YR4/6 炭化物(φ1~2mm)1%
 - 第3層 暗褐色土 10YR5/6 褐色土(7.5YR4/4)粘土含む,礫(φ5~50mm)1%,炭化物(φ1~2mm)1%

図37 竪穴住居跡16(S1101・102)

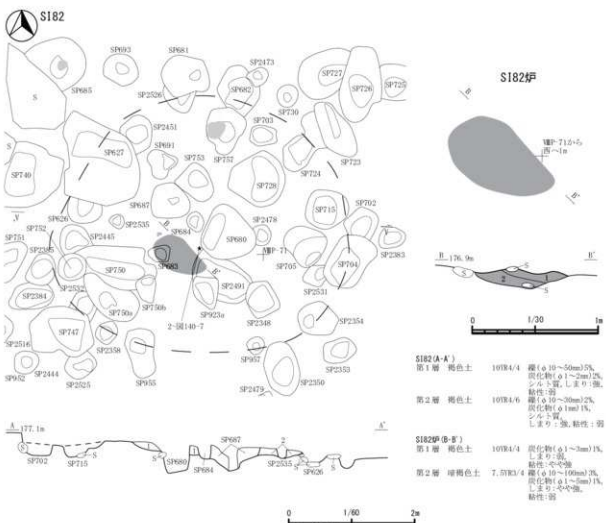
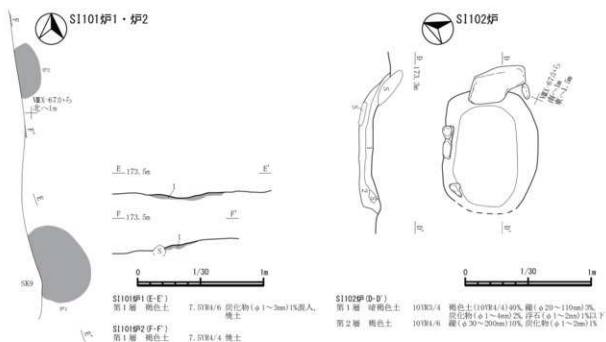


図38 竪穴住居跡17(SI82・101・102)

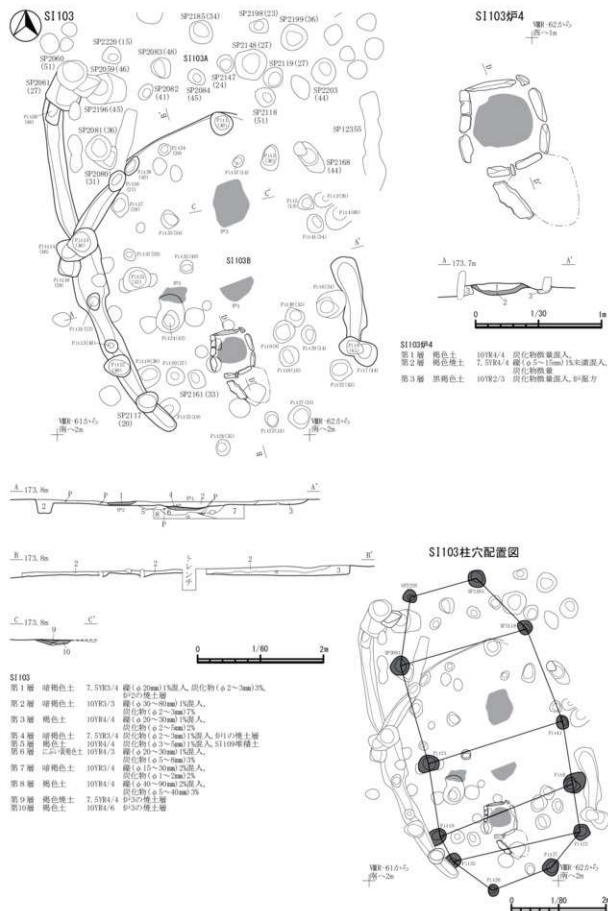


図39 竪穴住居跡18(SI103)

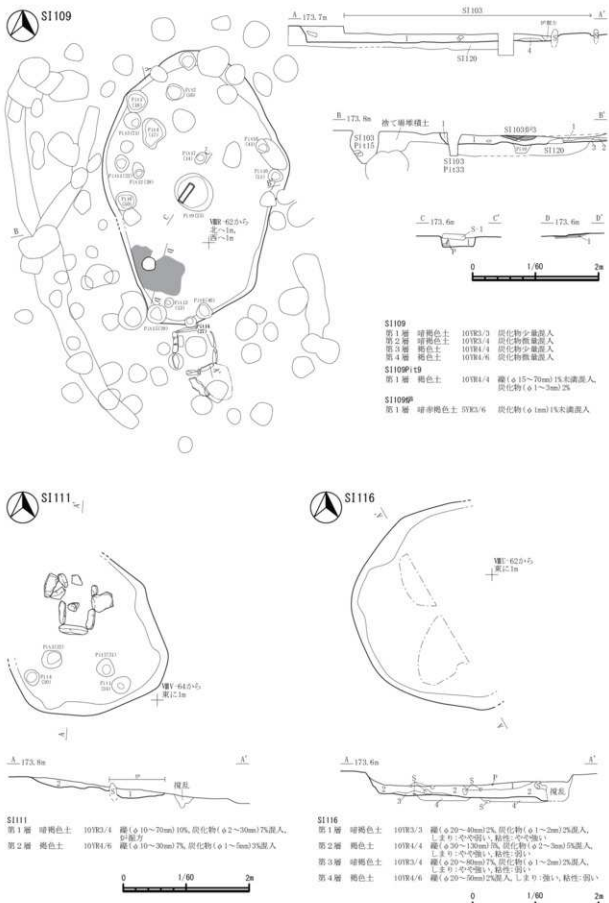


図40 竪穴住居跡19(S1109・111・116)

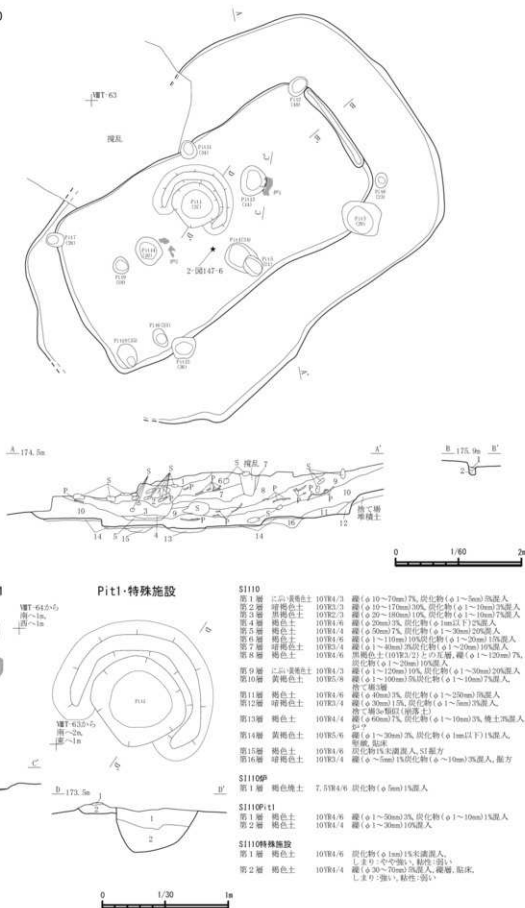
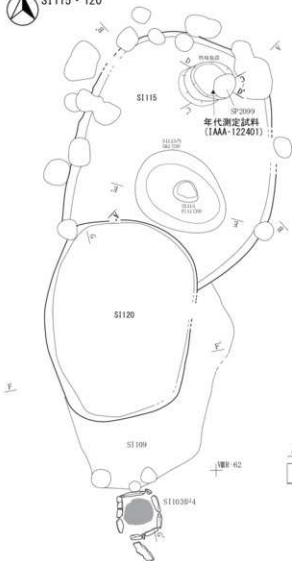
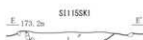


図41 竪穴住居跡20(S1110)


 S1115・120


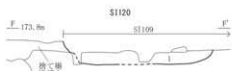
S1115 (A-A'・E-E')

- 第1層 埋褐色土 101R3/4 礫(φ40~130mm)7%,炭化物(φ5~10mm)7%混入
 第2層 褐色土 101R4/4 礫(φ50~60mm)3%,炭化物(φ2~3mm)3%混入
 第3層 埋褐色土 101R3/3 炭化物(φ1~3mm)1%混入
 第4層 埋褐色土 101R2/3 炭化物(φ1~3mm)0%混入
 第5層 褐色土 101R4/4 礫(φ20~90mm)3%混入,胎土層



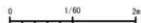
S1115SK1 (E-E')

- 第1層 褐色土 101R4/4 礫(φ30~40mm)1%,炭化物(φ3~5mm)3%混入

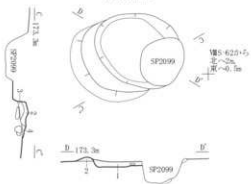


S1120 (F-F'・G-G')

- 第1層 褐色土 101R4/4 礫(φ10~40mm)3%,炭化物(φ1~10mm)0%混入



S1115特殊施設



S1115特殊施設(C-C'・D-D')

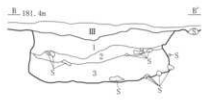
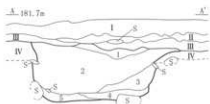
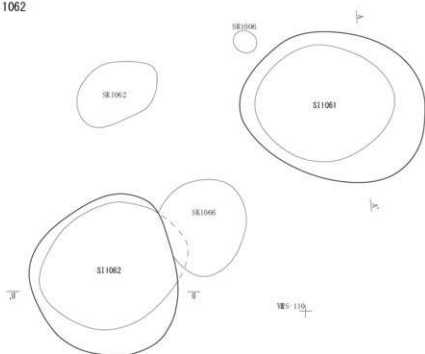
- 第1層 埋褐色土 101R3/3 礫(φ30~40mm)1%,炭化物(φ3~5mm)多量混入
 第2層 埋褐色土 101R5/4 炭化物(φ1mm以下)1%混入,周壁部
 第3層 褐色土 101R1/6 炭化物(φ1mm以下)1%混入,周壁部
 第4層 埋褐色土 101R5/6 礫(φ25mm)7%,炭化物(φ1mm以下)1%混入,周壁部



図42 竪穴住居跡21(S1115・120)



S11061・1062



S11061	第1層	褐色土	10YR4/6	礫(φ20mm~80mm)15以下、炭化物(φ1mm~2mm)1%混入
	第2層	褐色土	10YR4/4	礫(φ5mm~40mm)1%,炭化物(φ1mm~2mm)2%混入
	第3層	黄褐色土	10YR5/6	礫(φ5mm~70mm)1%,炭化物(φ1mm~2mm)1%混入
	第4層	褐色土	10YR4/4	礫(φ10mm~150mm)1%,炭化物(φ1mm~2mm)1%混入、非常にしまっている
第5層	褐色土	10YR4/6	礫(φ10mm~60mm)15以下、炭化物(φ1mm~2mm)1%以下混入、非常にしまっている	
S11062	第1層	黄褐色土	10YR4/4	褐色土(10YR4/1)15%,礫(φ10~50mm)3%,炭化物5%
	第2層	褐色土	10YR4/4	礫(φ10~150mm)20%,炭化物5%
	第3層	こげ黄褐色土	10YR4/3	褐色土(10YR4/1)5%,礫(φ10~170mm)7%,炭化物1%,炭礫土層

図43 竪穴住居跡22(S11061・1062)

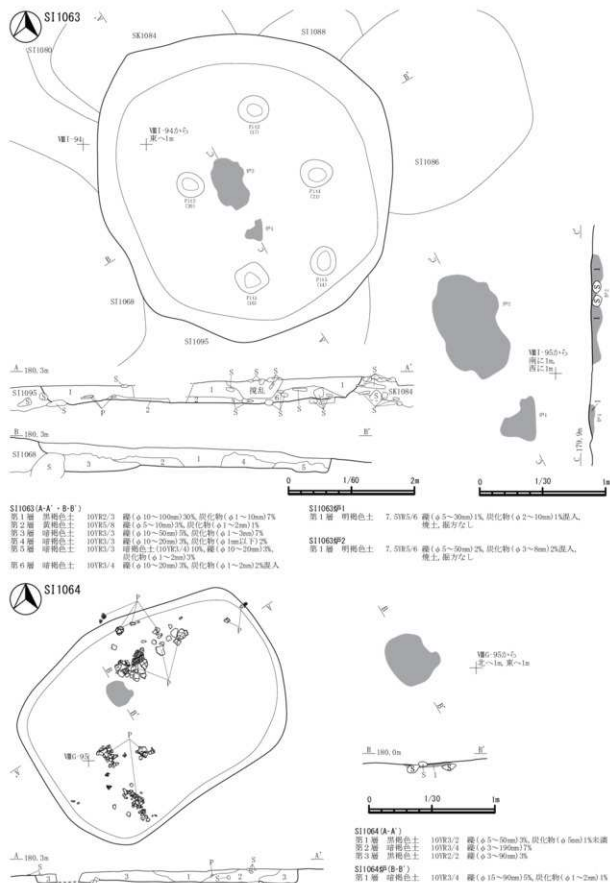


図44 竪穴住居跡23(SI1063・1064)

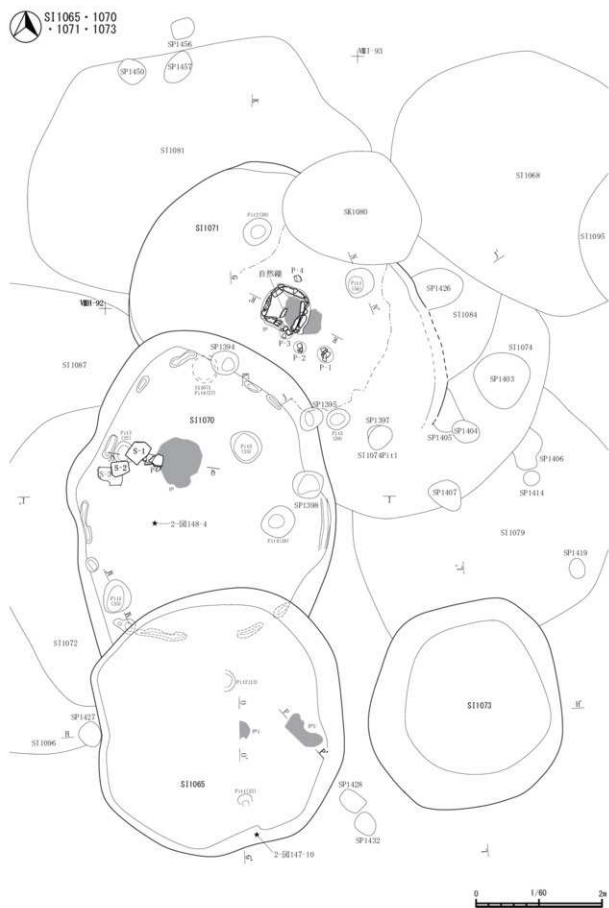


図45 竪穴住居跡24(SI1065・1070・1071・1073)

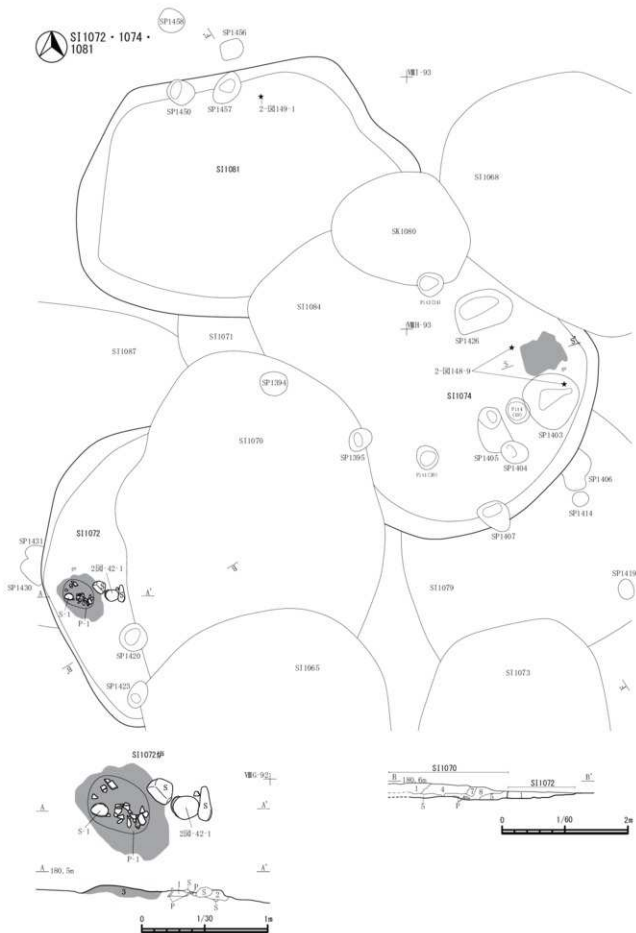


図46 竪穴住居跡25 (SI1072・1074・1081)

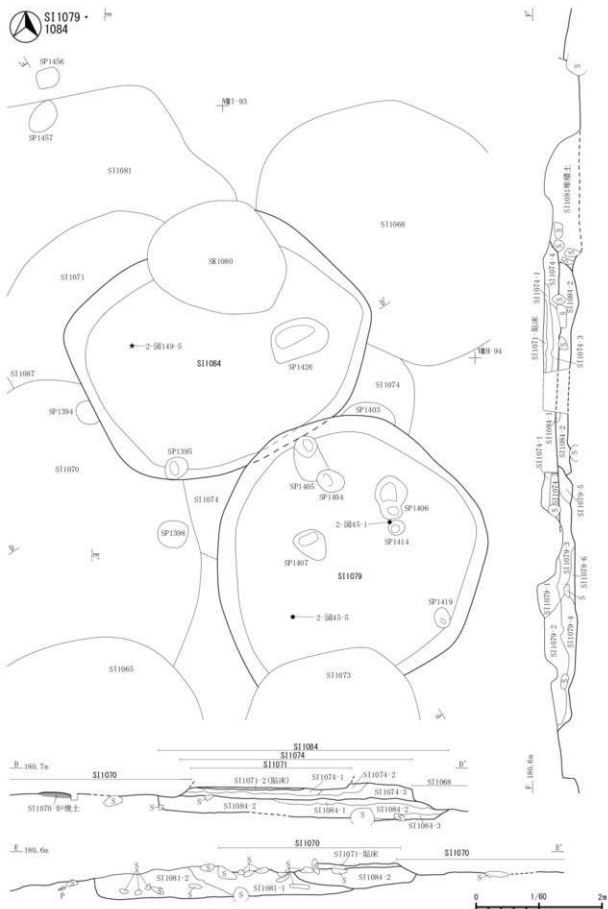


図47 竪穴住居跡26(SI1065・1070~1074・1079・1081・1084)

SI1065	
第1層 珪砂色土	10YR3/3 黒褐色土(10YR2/3)2%, 礫(φ10~110mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%混入
第2層 珪砂色土	10YR3/4 礫(φ15~90mm)2%, 炭化物(φ1~6mm)2%混入
第3層 黒褐色土	10YR2/2 礫(φ5~65mm)7%, 炭化物(φ1~20mm)5%, 混入
第4層 褐色土	10YR4/4 礫(φ1~40mm)1%以下, 炭化物(φ1mm)1%
SI1065P1	
第1層 珪砂色焼土	7.5YR3/4 明褐色焼土(7.5YR5/8)(φ1~2mm)1%, 礫(φ10~20mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)2%, 粘性:やや弱, しまり:弱
SI1065P2	
第1層 褐色焼土	7.5YR4/6 礫(φ10~70mm)7%, 炭化物(φ1~2mm)3%, 粘性:弱, しまり:弱
SI1070	
第1層 黒褐色土	10YR2/2 珪砂色土(10YR3/3)2%, 礫(φ5~140mm)5%, 炭化物(φ2~20mm)2%混入
第2層 珪砂色土	10YR3/3 珪砂色土(10YR3/4)の混合土, 礫(φ5~140mm)2%, 炭化物(φ1~15mm)1%混入
第3層 黒褐色土	10YR2/4 黒褐色土(10YR2/3)の混合土, 礫(φ10~510mm)7%, 炭化物(φ1~15mm)1%混入
第4層 珪砂色土	10YR3/3 珪砂色土(10YR3/4)1%, 礫(φ3~20mm)2%, 炭化物(φ1~15mm)1%混入, しまり:あり
第5層 珪砂色土	10YR2/3 珪砂色土(10YR3/3)2%, 炭化物(φ1~5mm)2%, 礫(φ5~40mm)1%混入
第6層 珪砂色土	10YR2/4 礫(φ1~6mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%以下
第7層 黒褐色土	10YR2/2 礫(φ40mm)10%, 炭化物(φ1~2mm)1%混入
第8層 珪砂色土	10YR3/4 礫(φ2~50mm)7%, 炭化物(φ1~4mm)1%未満
SI1070P	
第1層 褐色土	10YR4/6 赤褐色焼土(5YR4/6)10%, 褐色色浮石(10YR6/1)(φ1~3mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1%, 土器(φ20mm)2個含む
SI1070P11	
第1層 黒褐色土	10YR2/2 礫(φ2~5mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)2%, 柱根, 粘性:弱, しまり:弱
第2層 珪砂色土	10YR3/4 礫(φ5~15mm)5%, 炭化物(φ1~3mm)1%, 粘性:やや弱, しまり:弱
SI1071	
第1層 珪砂色土	10YR3/3 礫(φ10~300mm)7%, 炭化物(φ1~2mm)1%, 粘性:弱, しまり:弱
第2層 珪砂色土	10YR3/3 黄褐色ローム(10YR5/3)(φ1~30mm)20%, 礫(φ~15mm)1%以下, 炭化物(φ1~4mm)2%, 粘性:弱, しまり:やや強
SI1071P	
第1層 珪砂色焼土	10YR3/3
第2層 褐色土	10YR4/4 黄褐色ローム粘(10YR7/3)(φ1~10mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1%, 土面わずかに被覆
第3層 珪砂色土	10YR2/4 礫(φ40~110mm)2%, 礫層浮石土
第4層 二色黄褐色土	10YR4/3 礫(φ10mm)1%, 礫層浮石土
第5層 珪砂色土	10YR3/3 赤褐色焼土(5YR4/6)(φ1mm)1%, 旧段跡の砂の穴深さか
第6層 褐色土	10YR4/6 黄褐色土(10YR5/6)
SI1071P11	
第1層 珪砂色土	10YR3/3 礫(φ3~20mm)5%, 炭化物(φ1~3mm)2%, 粘性:やや強, しまり:やや弱
SI1072	
第1層 黒褐色土	10YR2/2 礫(φ2~80mm)10%, 炭化物(φ1~10mm)1%
SI1072P	
第1層 珪砂色土	10YR3/4 SI1072に印されているSI1067の堆積土か?
第2層 黒褐色土	10YR2/3 黒褐色土(10YR2/2)SI1072に印されているSI1067の堆積土か?
第3層 二色黄褐色土	10YR4/3 珪砂色土(10YR2/3)10%, 炭化物(φ1~2mm)1%
SI1073	
第1層 黒褐色土	10YR2/2 礫(φ10~120mm)11%, 炭化物(φ1~2mm)1%混入, しまり:弱い, 粘性:弱い
第2層 珪砂色土	10YR3/3 黒褐色土(10YR2/2)の混合土, 炭化物(φ1~10mm)10%, 礫(φ~30mm)1%以下混入, しまり:強い, 粘性:弱い
第3層 黒褐色土	10YR2/2 礫(φ10~120mm)7%, 炭化物(φ1~2mm)2%混入, しまり:弱い, 粘性:弱い, 木の葉多し
第4層 珪砂色土	10YR2/2 黒褐色土(10YR2/3)20%, 礫(φ10~20mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)2%混入, しまり:やや強, 粘性:弱い
第5層 珪砂色土	10YR2/3 明赤褐色焼土(5YR5/3)(φ1~3mm)10%, 炭化物(φ1~30mm)2%, 礫(φ5~130mm)1%混入, しまり:強い, 粘性:強
第6層 黒褐色土	10YR2/2 珪砂色土(10YR3/3)2%, 明赤褐色焼土(5YR5/3)(φ1~2mm)2%, 礫(φ5~50mm)1%混入, しまり:弱い, 粘性:弱い
第7層 珪砂色土	10YR3/3 礫(φ5~50mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)1%混入, しまり:弱い, 粘性:弱い
SI1074	
第1層 珪砂色土	10YR3/4 黄褐色ローム(10YR5/3)(φ1~2mm)1%, 礫(φ10~60mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)2%, 粘性:弱, しまり:やや強
第2層 珪砂色土	10YR3/4 礫(φ5~60mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)2%, 他多, 粘性:弱, しまり:弱
第3層 珪砂色土	10YR3/4 黄褐色土(10YR2/3)2%, 礫(φ5~90mm)5%, 炭化物(φ1~6mm)5%, 粘性:弱, しまり:やや有
第4層 黒褐色土	10YR2/2 褐色土(10YR4/3)3%, 褐色土(10YR4/4)(φ1~10mm)3%, 礫(φ10~17mm)3%, 炭化物(φ1~30mm)3%
SI1079	
第1層 黒褐色土	10YR2/2 褐色焼土(7.5YR5/8)(φ1~2mm)1%, 礫(φ5~60mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%
第2層 珪砂色土	10YR3/4 礫(φ10~25mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)3%
第3層 黒褐色土	10YR2/3 赤褐色土(7.5YR5/8)(φ1~5mm)5%, 礫(φ10~50mm)1%以下, 炭化物(φ1~5mm)3%
第4層 黒褐色土	10YR2/2 礫(φ5~140mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)2%
第5層 珪砂色土	10YR2/2 珪砂色土(10YR3/3), 礫(φ10~110mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%, 黒褐色土と珪砂色土の混合土
第6層 珪砂色土	10YR3/4 礫(φ10~20mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1%
SI1081	
第1層 褐色土	10YR4/6 礫(φ20~150mm)20%, 炭化物(φ1~3mm)3%, 粘性:やや弱, しまり:やや強
第2層 褐色土	10YR4/4 礫(φ20~100mm)11%, 炭化物(φ1~5mm)3%, 粘性:やや弱, しまり:やや強
SI1084	
第1層 黒褐色土	10YR2/2 珪砂色土(10YR3/3)(φ1~10mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%以下
第2層 黒褐色土	10YR2/2 珪砂色土(10YR3/3)5%, 礫(φ10~130mm)1%, 炭化物(φ1~6mm)3%
第3層 珪砂色土	10YR3/3 礫(φ15~160mm)3%, 炭化物(φ1~3mm)3%

図49 堅穴住居跡28(SI1065・1070~1074・1079・1081・1084)

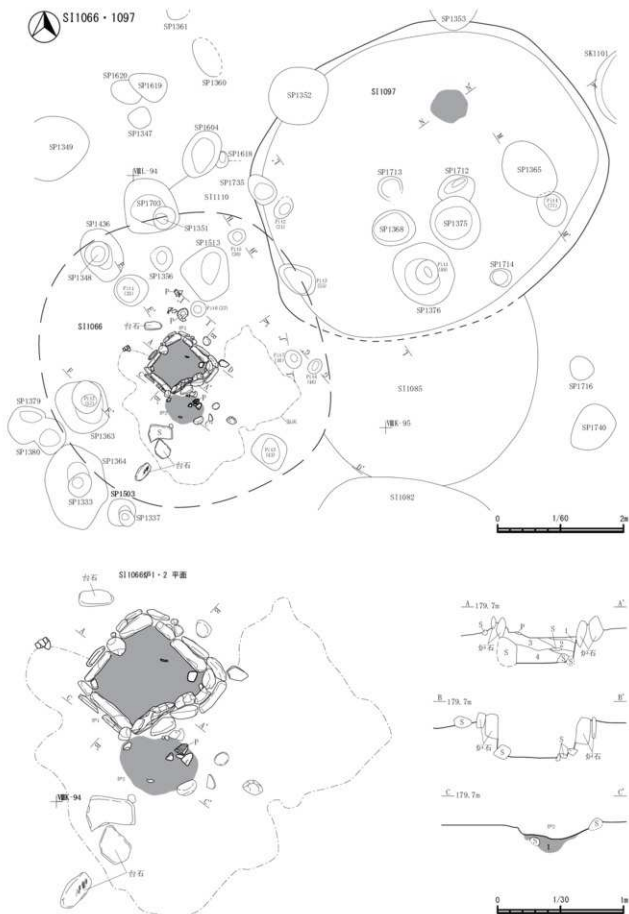
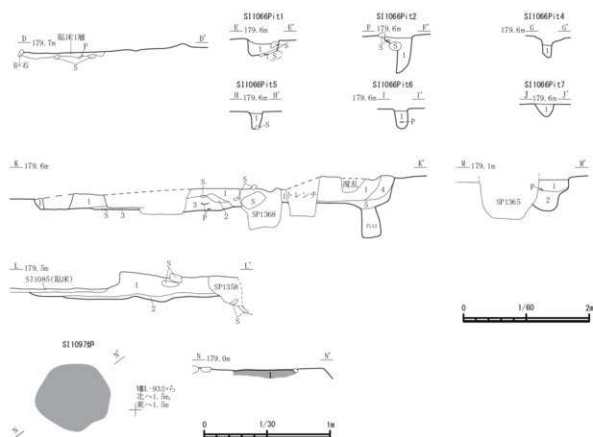


図50 竖穴住居跡29(S11066・1097)



- S11066** 埴縄色土 10YR3/4 礫(φ10~30㎝)3%,炭化物(φ1~3㎝)2%,粘性:やや弱,しまり:やや強
- S11066P**
 第1層 埴色土 10YR1/6 礫(φ10~20㎝)1%以下,粘性:やや弱,しまり:やや強
 第2層 明褐色土 7.5YR5/8 褐色土(10YR4/4),礫(φ10~30㎝)1%以下,炭化物(φ3㎝以下)1%以下,粘性:やや弱,しまり:やや強
 第3層 褐色土 10YR4/4 上二土(高埋土)(10YR4/4),礫(φ10~100㎝)3%,炭化物(φ5㎝以下)1%,粘性:やや弱,しまり:強
 第4層 埴縄色土(10YR3/4),礫(φ10~100㎝)10%,粘性:やや強,しまり:やや強
- S11066P11**
 第1層 埴縄色土 10YR3/4 礫(φ10~40㎝)10%,炭化物(φ1~3㎝)2%混入,しまり:やや強い,粘性:弱い
- S11066P12**
 第1層 埴縄色土 10YR3/3 礫(φ10~50㎝)2%混入,しまり:やや弱い,粘性:やや弱い,茶色のブロックあり
- S11066P14**
 第1層 埴縄色土 10YR3/3 礫(φ5~10㎝)2%,炭化物(φ2~3㎝)2%混入,しまり:やや弱い,粘性:やや弱い
- S11066P15**
 第1層 茶褐色土 10YR2/3 礫(φ10~30㎝)3%,炭化物(φ1~3㎝)2%混入,しまり:やや弱い,粘性:やや弱い
- S11066P16**
 第1層 埴縄色土 10YR3/3 礫(φ5~15㎝)3%,炭化物(φ1~2㎝)2%混入,しまり:やや弱い,粘性:やや弱い
- S11066P17**
 第1層 埴縄色土 10YR3/3 礫(φ10~80㎝)3%,炭化物(φ3~10㎝)1%,粘性:やや弱,しまり:やや強
- S11097(K-K')**
 第1層 埴縄色土 10YR2/3 炭化物(φ1~10㎝)3%,粘性:無し,しまり:弱
 第2層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ1~2㎝)2%,粘性:やや弱,しまり:弱
 第3層 埴縄色土 10YR3/4 礫(φ10~30㎝)3%,炭化物(φ1~10㎝)3%,粘性:やや弱,しまり:やや強
 第4層 茶褐色土 10YR2/3 炭化物(φ1~5㎝)1%,粘性:やや弱,しまり:やや弱
 第5層 埴縄色土 10YR3/3 炭化物(φ1~3㎝)1%,粘性:弱,しまり:弱
- S11097(L-L')**
 第1層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~200㎝)3%,炭化物(φ1~3㎝)3%,粘性:やや強,しまり:やや強
 第2層 埴縄色土 10YR3/3 礫(φ10~200㎝)1%,炭化物(φ1~2㎝)1%,粘性:やや強,しまり:強
- S11097P**
 第1層 埴縄色土 10YR3/4 明赤褐色土(10YR5/8)(φ1~5㎝)3%,礫(φ10~200㎝)1%,炭化物(φ1~10㎝)1%,粘性:やや弱,しまり:弱
- S11097P13**
 第1層 埴縄色土 10YR3/3 炭化物(φ1~3㎝)1%,粘性:弱,しまり:やや弱
- S11097P14**
 第1層 埴縄色土 10YR3/4 炭化物(φ1~2㎝)1%,粘性:強,しまり:やや強
 第2層 褐色土 10YR4/4 炭褐色土(10YR5/6)(φ1~10㎝)3%,炭化物(φ1~3㎝)2%,粘性:強,しまり:弱
- SP1368**
 第1層 埴縄色土 10YR3/3 礫(φ10~35㎝)20%,炭化物(φ1~5㎝)2%,粘性:弱,しまり:強
 第2層 褐色土 10YR4/6 埴縄色土(10YR3/4)1%,炭化物(φ1~3㎝)2%,粘性:やや強,しまり:弱
 第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ1~2㎝)1%,粘性:強,しまり:やや強

図51 竪穴住居跡30(S11066・1097)

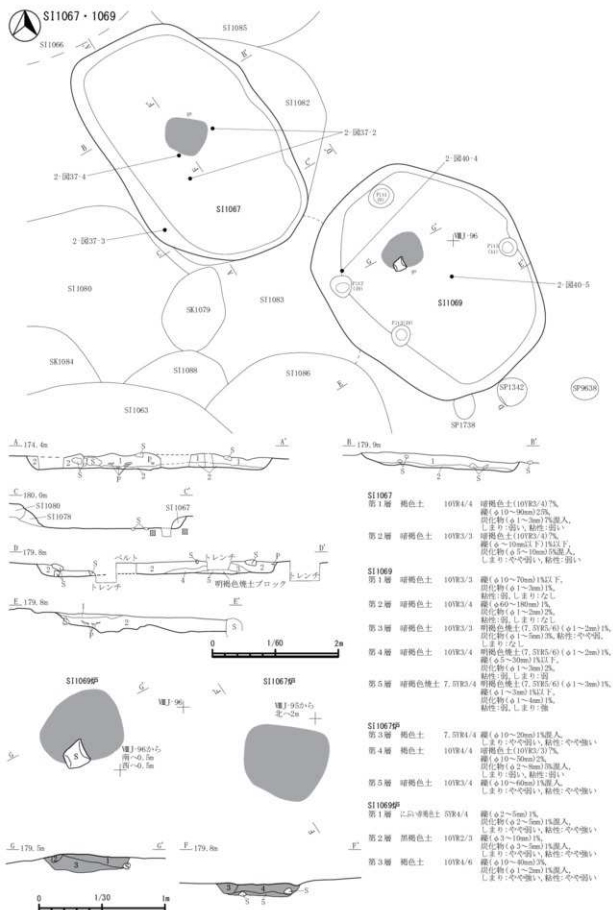


図52 竪穴住居跡31(S11067・1069)

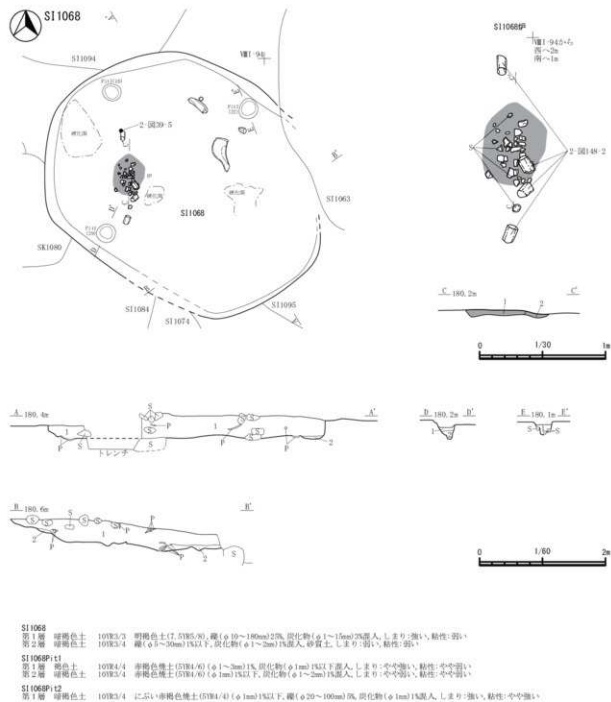


図53 竪穴住居跡32(S11068)

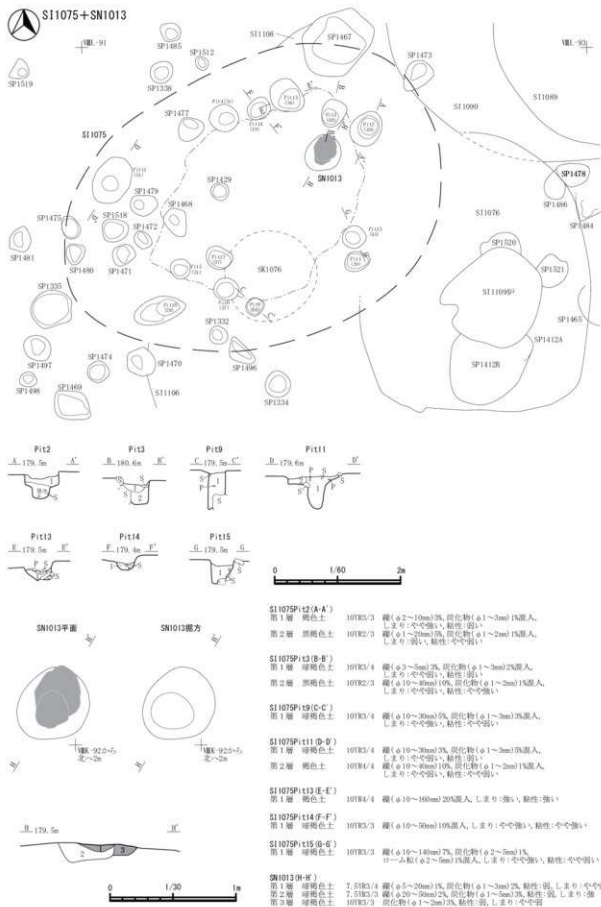


図54 竪穴住居跡33(SI1075+SN1013)

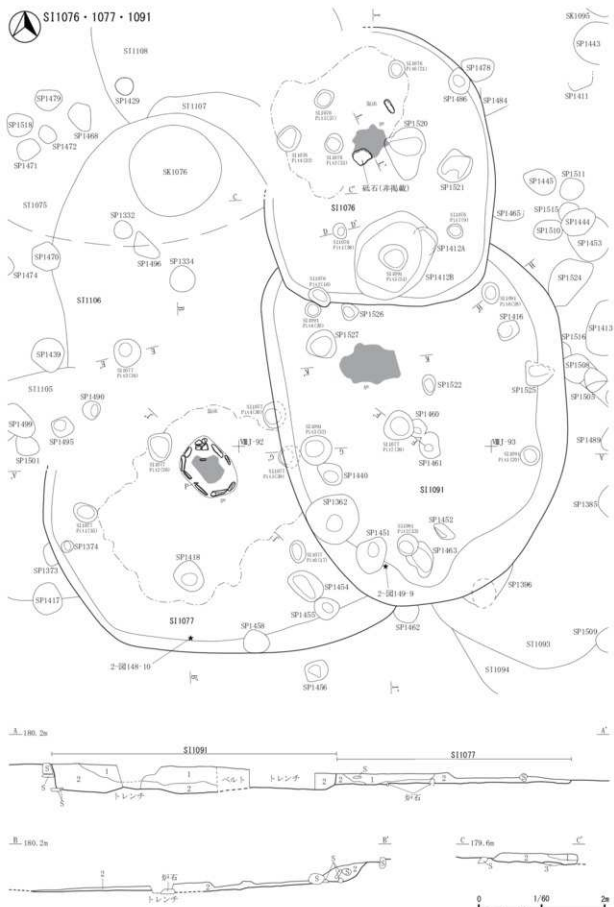


図55 竪穴住居跡34 (S11076・1077・1091)

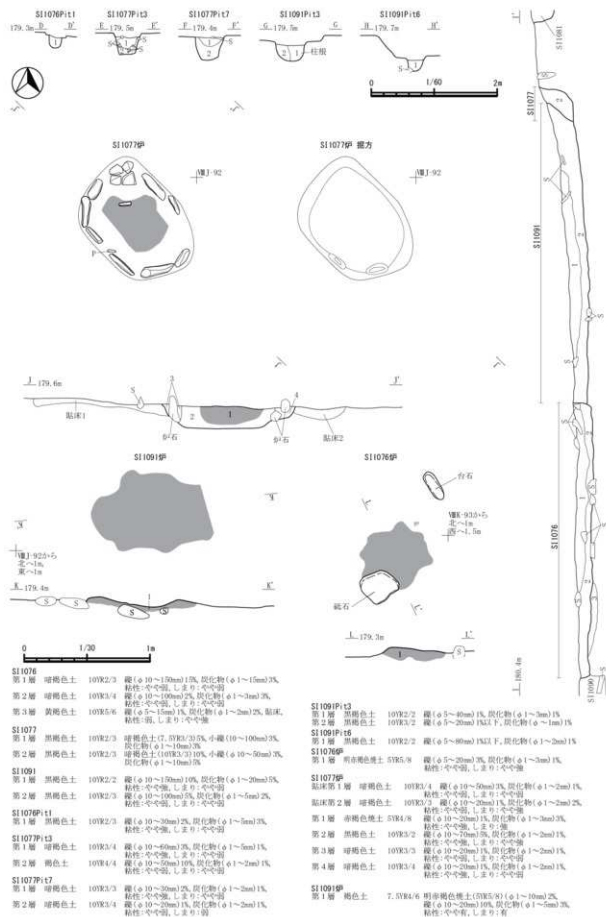
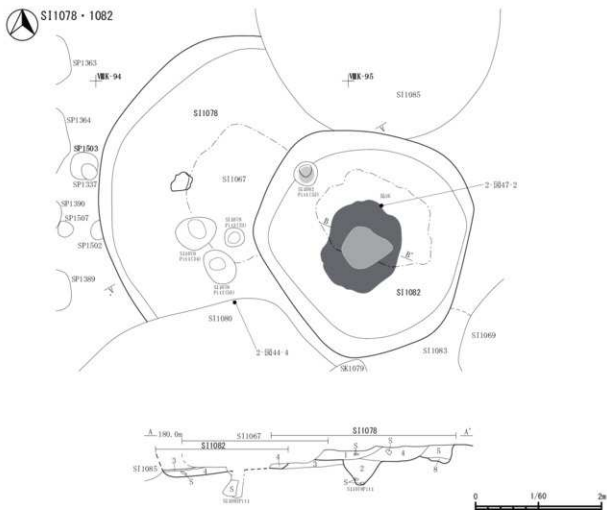
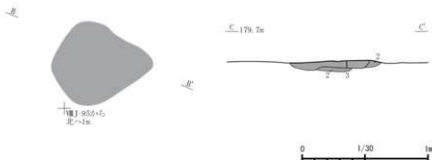


図56 竈穴住居跡35(SI1076・1077・1091)



S11082P



S11078			
第1層 褐色土	10YR4/4	礫($\phi 5\sim 10\text{mm}$)2%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%, 粘性:弱, しまり:中~強	
第2層 暗褐色土	10YR3/4	礫($\phi 5\sim 10\text{mm}$)3%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)2%, 粘性:中~強, しまり:中~強	
第3層 褐色土	10YR3/6	礫($\phi 5\sim 10\text{mm}$)3%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%, 粘性:中~強, しまり:中~強	
第4層 暗褐色土	10YR3/4	礫($\phi 5\sim 10\text{mm}$)3%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)2%, 粘性:中~強, しまり:中~強	
第5層 黄褐色土	10YR5/6	礫($\phi 10\sim 15\text{mm}$)2%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)2%, 粘性:中~強, しまり:中~強	
第6層 黄褐色土	10YR5/8	礫($\phi 10\sim 100\text{mm}$)10%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%, 粘性:中~強, しまり:強	
S11082			
第3層 褐色土	10YR4/4	礫($\phi 10\sim 20\text{mm}$)3%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%, 粘性:中~強, しまり:中~強	
第4層 暗褐色土	10YR3/3	礫($\phi 10\sim 20\text{mm}$)3%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)3%, 粘性:中~強, しまり:中~強	
S11082P			
第1層 暗褐色土	10YR3/4	赤褐色土(S10Y4/6)($\phi 1\sim 40\text{mm}$)3%, 炭化物($\phi 1\text{mm}$)2%, 粘性:弱, しまり:中~強	
第2層 褐色土	10YR4/4	炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)3%, 粘性:弱, しまり:中~強	
第3層 黄褐色土	10YR5/6	褐色土(S10Y4/4)3%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%, 粘性:強, しまり:強	

図57 竪穴住居跡36(S11078・1082)

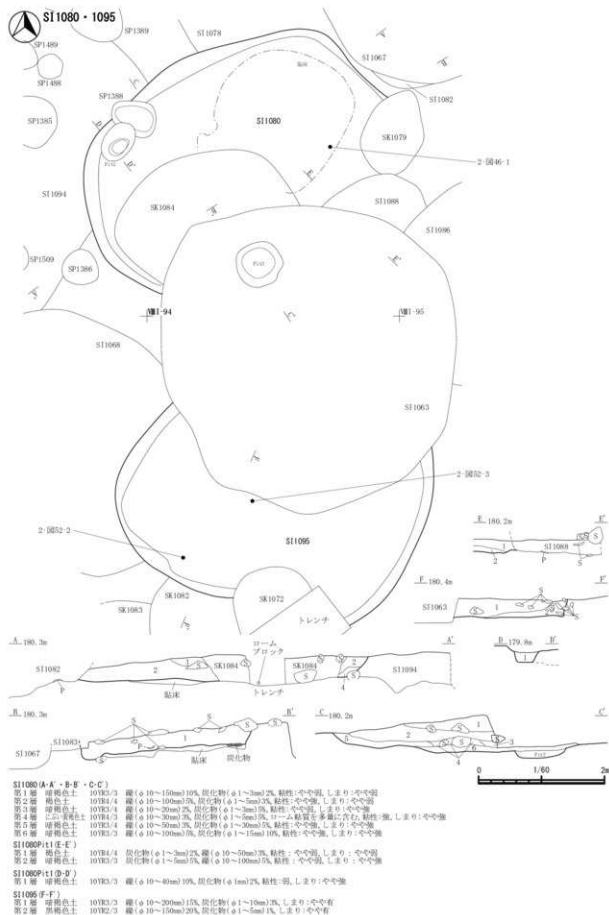


図58 竪穴住居跡37(S11080・1095)

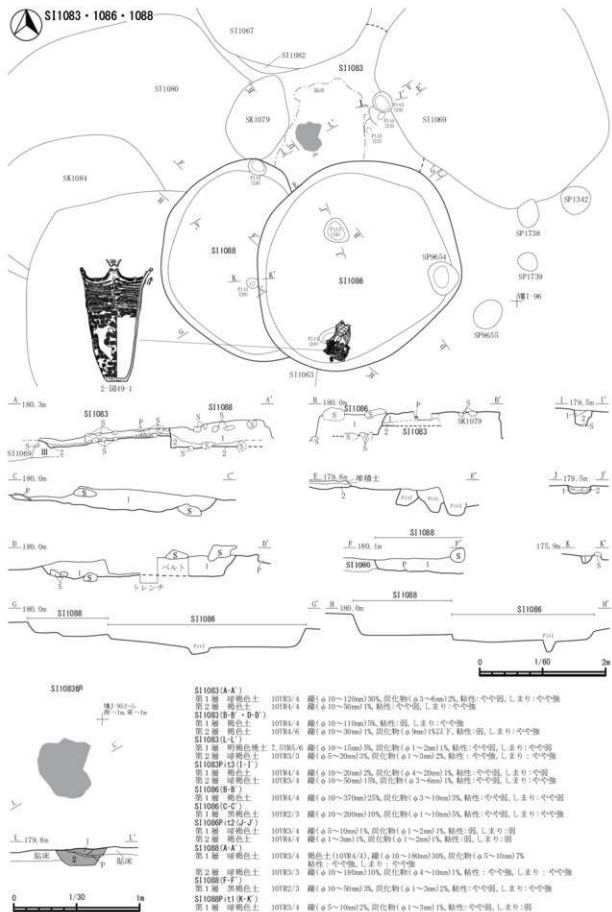


図59 竪穴住居跡38(SI1083・1086・1088)

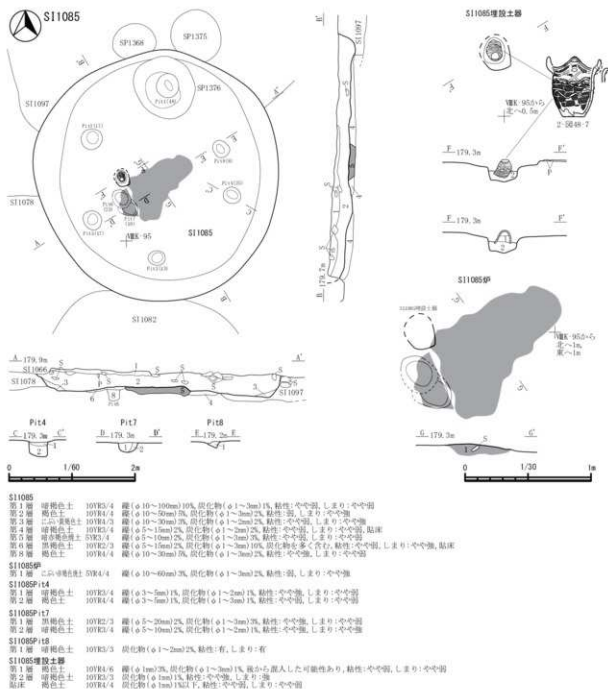


図60 竅穴住居跡39(S11085)

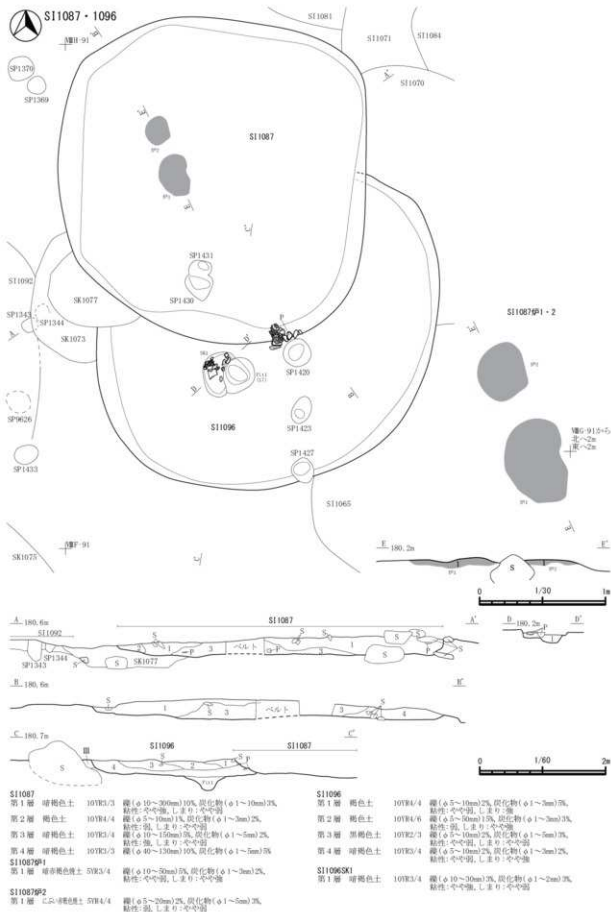


図61 竪穴住居跡40(S11087・1096)

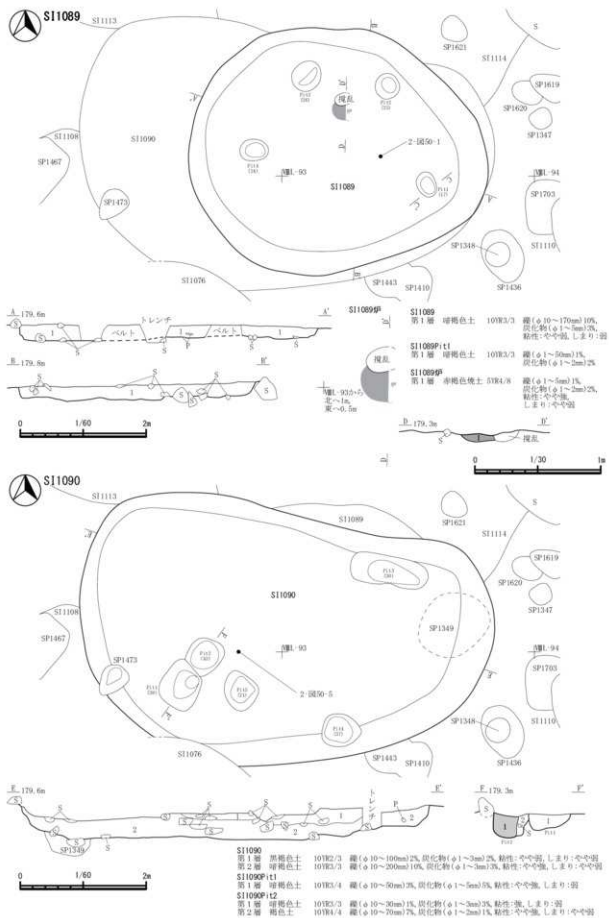


図62 竪穴住居跡41(SI1089・1090)

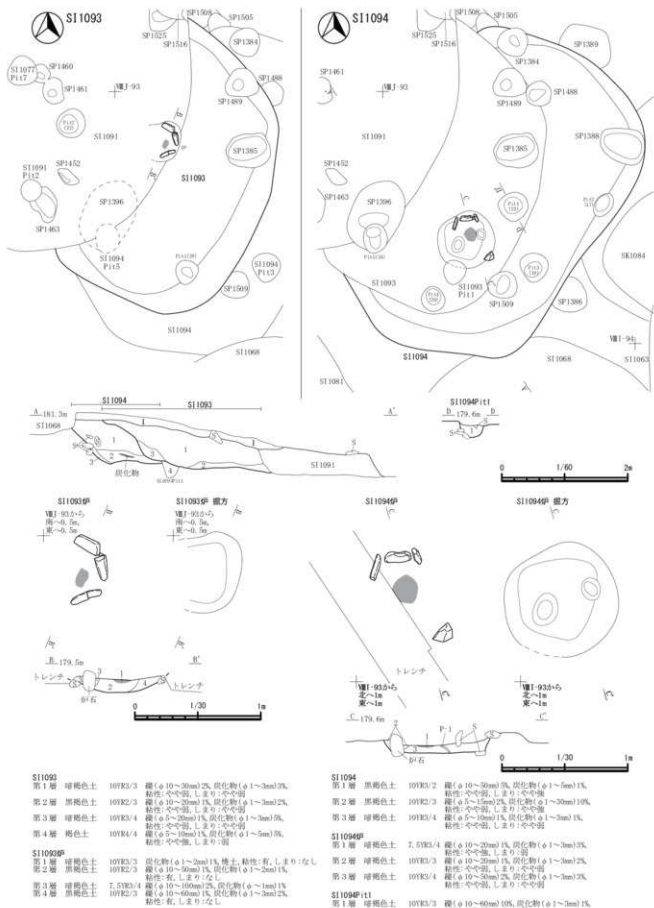
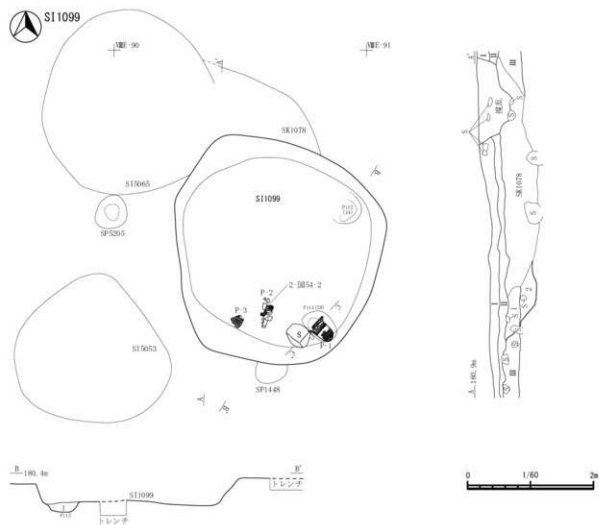


図64 竅穴住居跡43(SI1093・1094)



S11099
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~140mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)2%, 粘性:有, L, 土0:強
 第2層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~80mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%, 粘性:有, L, 土0:中

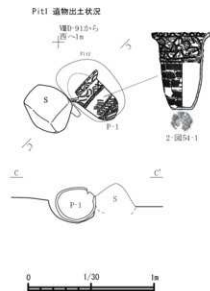


図65 竪穴住居跡44(S11099)

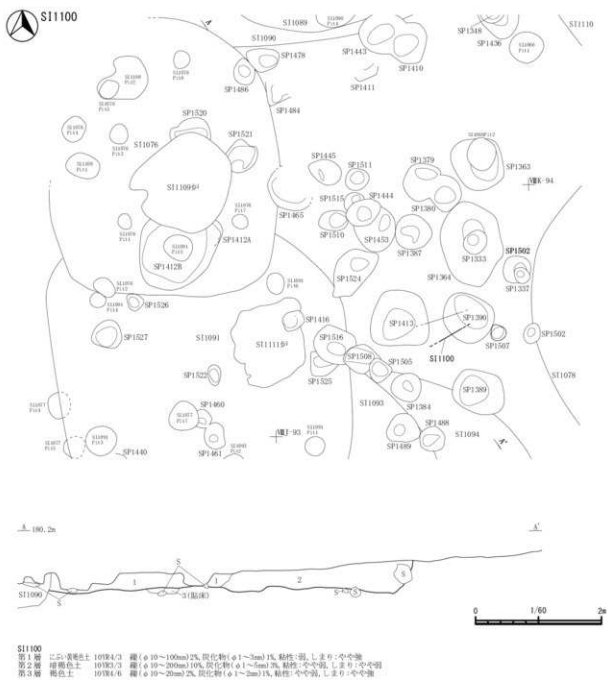
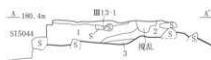
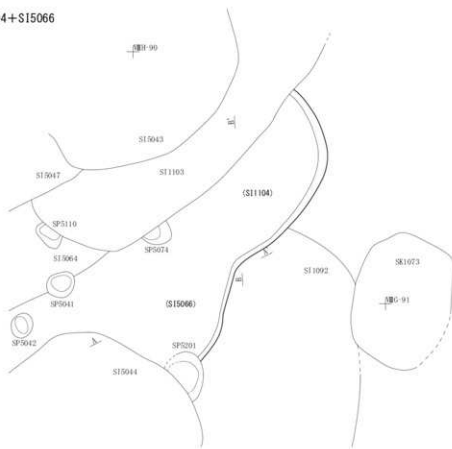


図66 竪穴住居跡45 (S1100)

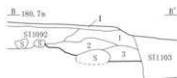


SI1104+SI5066



SI5066(A-A)

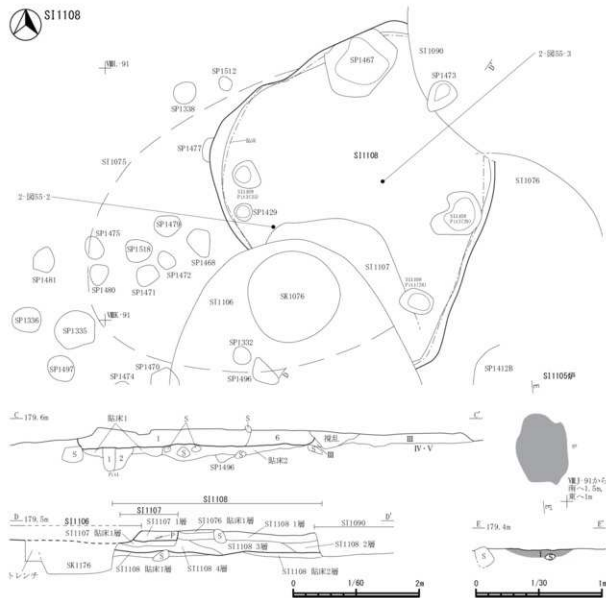
第1層 褐色土 10TR4/4 礫(φ3~17mm)30%,炭化物(φ1~17mm)7%
 第2層 黄褐色土 10TR3/4 礫(φ1~7mm)2%
 第3層 褐色土 10TR4/6 礫(φ2~55mm)1%,住居としたが包含層の可能性有



SI1104(B-B)

第1層 褐色土 10TR3/2 礫(φ10~50mm)1%,炭化物(φ1~2mm)1%,粘性:なし,しまり:強
 第2層 黄褐色土 10TR3/4 礫(φ10~60mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%,粘性:なし,しまり:強
 第3層 褐色土 10TR4/4 礫(φ10~30mm)1%,炭化物(φ1~2mm)2%

図7 竪穴住居跡46(SI1104+SI5066)



SI1105

第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~30mm)2%,炭化物(φ1~2mm)3%,粘性:強,しまり:弱
第2層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ20~100mm)20%,炭化物(φ1~10mm)5%,粘性:強,しまり:弱
第3層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ10~80mm)10%,炭化物(φ1~2mm)2%,粘性:強,しまり:弱
第4層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~50mm)1%,炭化物(φ1~20mm)2%,粘性:強,しまり:弱
第5層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ20~50mm)2%,炭化物(φ1~5mm)3%,粘性:強,しまり:強
第6層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ10~30mm)2%,炭化物(φ3mm)1%,粘性:強,しまり:弱
第7層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ25~200mm)20%,炭化物(φ1~2mm)2%,粘性:弱,しまり:弱
藍床	黄褐色土	10YR5/6	礫(φ10~60mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%,粘性:弱,しまり:弱

SI1105P

第1層	暗褐色土	7.5YR3/4	礫(φ10~80mm)2%,炭化物(φ1~2mm)2%
-----	------	----------	-----------------------------

SI1106

第1層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~100mm)2%,炭化物(φ1~3mm)2%,粘性:中~弱,しまり:中~強
第2層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~50mm)1%,炭化物(φ1~2mm)1%,粘性:中~弱,しまり:中~強
第3層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~30mm)1%,炭化物(φ1~3mm)1%,粘性:中~弱,しまり:中~強
第4層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~30mm)1%,炭化物(φ1~3mm)1%,粘性:中~弱,しまり:中~強
第5層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~30mm)2%,炭化物(φ1~2mm)1%,粘性:中~弱,しまり:中~強
第6層	暗褐色土	10YR3/3	暗褐色土(10YR3/4)10%,礫(φ10~80mm)1%,炭化物(φ1~5mm)2%,粘性:中~弱,しまり:中~強
第7層	褐色土	10YR4/6	礫(φ10~20mm)1%,炭化物(φ1~10mm)1%,粘性:中~弱,しまり:強
藍床1層	褐色土	10YR4/4	礫(φ10~200mm)1%,炭化物(φ1~2mm)1%,粘性:中~弱,しまり:弱
藍床第2層	暗褐色土	10YR3/4	赤褐色土(C.5YR4/8)1%,礫(φ10~200mm)10%,炭化物(φ1~2mm)2%,粘性:強,しまり:強

SI1107

第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~30mm)2%,炭化物(φ1~5mm)1%,粘性:中~弱,しまり:中~強
藍床	褐色土	10YR4/6	礫(φ10~20mm)1%,炭化物(φ1~3mm)1%,粘性:中~弱,しまり:中~強

SI1108

第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~100mm)2%,炭化物(φ1~3mm)2%,粘性:中~弱,しまり:中~強
第2層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~30mm)1%,炭化物(φ1~3mm)1%,粘性:中~弱,しまり:中~強
第3層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ10~50mm)2%,炭化物(φ1~5mm)3%,粘性:中~弱,しまり:中~強
第4層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~30mm)3%,炭化物(φ1~5mm)2%,粘性:中~弱,しまり:中~強
藍床第1層	暗褐色土	10YR4/4	礫(φ10~50mm)3%,炭化物(φ1~3mm)1%,粘性:中~弱,しまり:中~強
藍床第2層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~30mm)3%,炭化物(φ1~2mm)1%,粘性:中~弱,しまり:弱

図69 竅穴住居跡48(SI1105~1108)

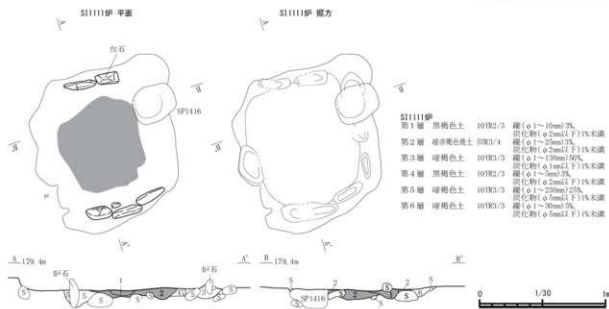
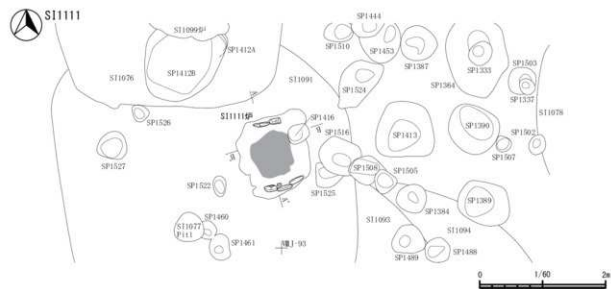
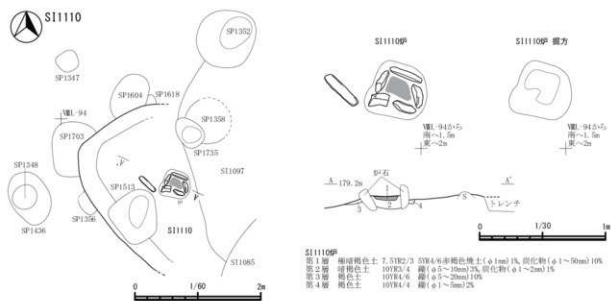


図71 竪穴住居跡50(SI1110・1111)

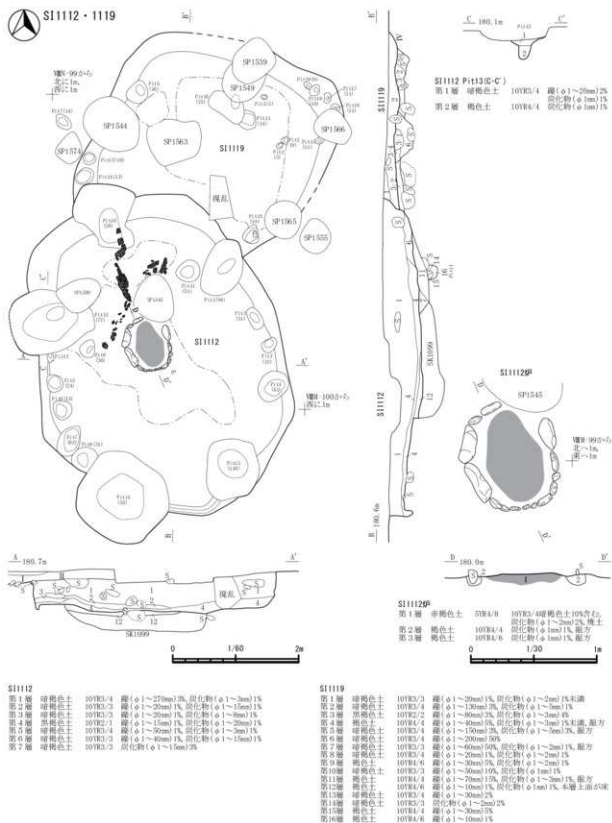


図72 竖穴住居跡51(S1112・1119)

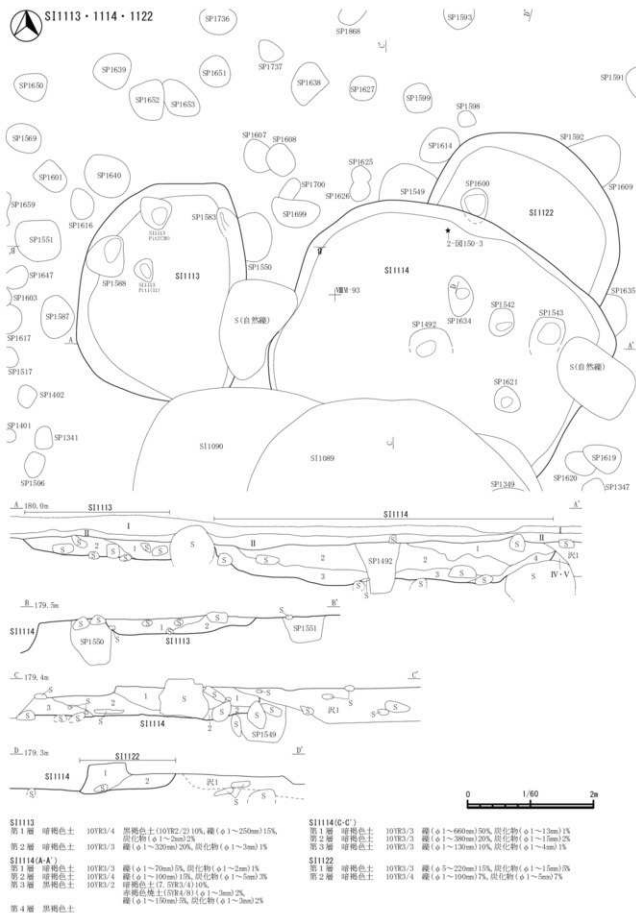


図73 竪穴住居跡52(SI1113・1114・1122)

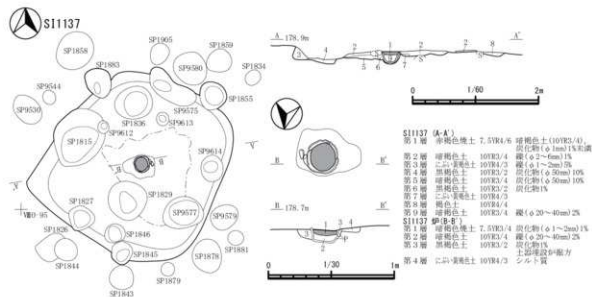
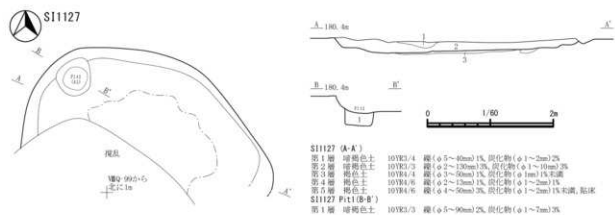
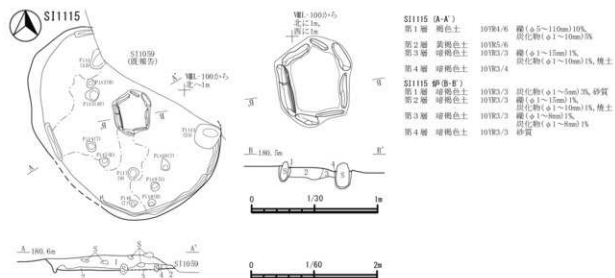
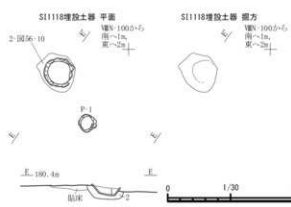
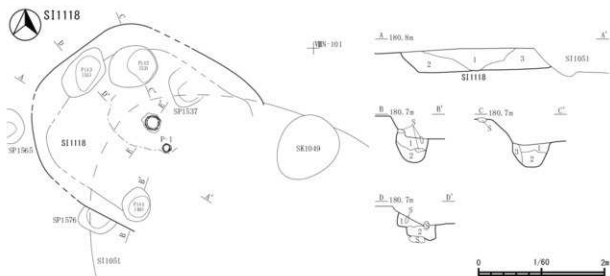
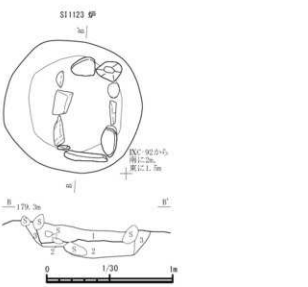
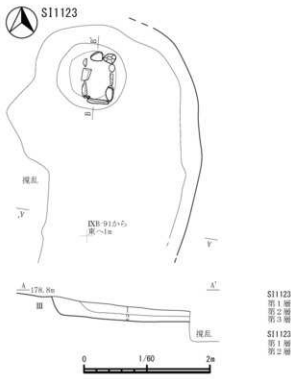


図74 竪穴住居跡53(S11115・1127・1137)



- SI1118**
- 第1層 暗褐色土 10YK3/3 礫(φ1~4cm)1%,炭化物(φ1~6cm)1%
 - 第2層 暗褐色土 10YK3/4 礫(φ1~8cm)1%,炭化物(φ1~5cm)1%
 - 第3層 暗褐色土 10YK3/3 礫(φ1~45cm)1%,炭化物(φ1~5cm)1%
- SI1118P1**
- 第1層 暗褐色土 10YK3/4 礫(φ1~100cm)2%,炭化物(φ1~3cm)1%
 - 第2層 暗褐色土 10YK3/4 礫(φ1~170cm)2%,炭化物(φ1~3cm)1%未満
- SI1118P12**
- 第1層 暗褐色土 10YK3/4 礫(φ1~40cm)1%,炭化物(φ1~5cm)1%未満
 - 第2層 暗褐色土 10YK3/4 礫(φ1~15cm)1%,炭化物(φ1~5cm)1%未満
 - 第3層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~40cm)2%,炭化物(φ1~2cm)1%未満
- SI1118P13**
- 第1層 暗褐色土 10YK3/3 礫(φ1~110cm)2%,炭化物(φ1~8cm)1%,住居層積土
 - 第2層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~10cm)1%,炭化物(φ1~2cm)1%
- SI1118埋設土層**
- 第1層 暗褐色土 10YK3/4 炭化物(φ1cm)1%
 - 第2層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YK3/4)10%含む,礫(φ1~20cm)2%
 - 底層 黄褐色土 10YR5/6



- SI1123(A-A')**
- 第1層 赤褐色土 10YR2/3 土礫(φ20~50cm)2%混入
 - 第2層 赤褐色土 10YR2/3 赤褐色土(2.5YR4/R)φ1~2cm)1%混入,塊状礫(φ5~10cm)10%
 - 第3層 暗褐色土 10YK3/4 塊礫(φ5~10cm)10%混入
- SI1123(B-B')**
- 第1層 赤褐色土 10YR2/3 赤褐色土(2.5YR4/R)φ1~2cm)1%混入,塊状礫(φ1~5cm)2%混入
 - 第2層 暗褐色土 10YK3/3 炭化物(φ1~2cm)1%混入,砂質

図76 竪穴住居跡55(SI1118・1123)

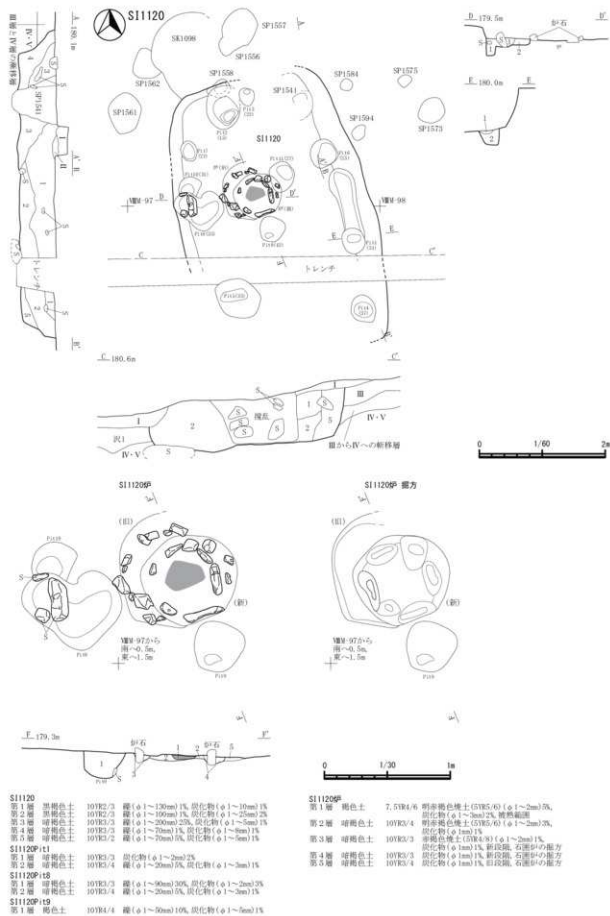
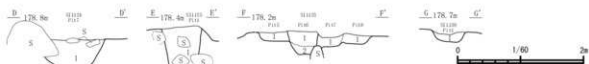


図77 竅穴住居跡56(SI1120)

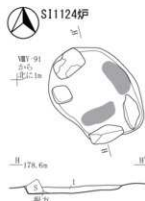


S1124P(17D-F)
第1層 埴師色土
S1125P(11F-F)
第1層 埴師色土
S1125P(15F-F)
第1層 褐色土
S1125P(16F-F)
第1層 埴師色土
第2層 褐色土

7.5R3/4 炭化物(φ1~2cm)1R,
コーム土混入。
7.5R3/4 炭化物(φ1~2cm)2R,砂礫(φ1~2cm)1R混入。
7.5R3/4 砂礫(φ1~2cm)2R,小ロームブロック混入。
7.5R3/3 炭化物(φ1~2cm)2R,小礫(φ10mm)1R
7.5R3/4 小礫(φ10mm)2R,黄褐色土混入。

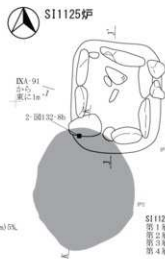
S1125P(17F-F)
第1層 埴師色土
S1125P(18F-F)
第1層 褐色土
S1125P(19F-F)
第1層 埴師色土

7.5R3/3 砂礫(φ1~2cm)2R,炭化物(φ1~2cm)1R
7.5R3/6 炭化物(φ1~2cm)2R
10R3/3 炭化物(φ1~2cm)1R混入



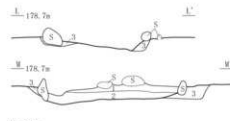
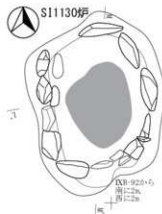
S1124P
第1層 埴師色土
第2層 褐色土

7.5R3/4 炭化物(φ1~2cm)5R,
コーム土混入。



S1125P(19F-F)
第1層 埴師色土
第2層 埴師色土
第3層 埴師色土
第4層 埴師色土

10R3/4 中礫(φ10~20mm)2R混入。
10R3/3 炭化物(φ1~2cm)1R混入,中礫(φ10~20mm)2R混入。
10R3/3 小礫(φ1~10mm)1R混入。
5R4/4 炭化物(φ1~2cm)5R,堆土全面に混入。



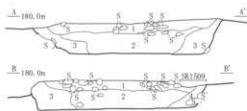
S1130P
第1層 褐色土
第2層 褐色土
第3層 砂礫層

7.5R4/3 炭化物(φ1~2cm)2R,
堆土混入(φ1~2cm)1R混入
7.5R3/6 炭化物(φ1~2cm)1R,
堆土混入(φ1~2cm)2R混入



S1133P(砂礫層)
第1層 褐色土
第2層 埴師色土

7.5R3/4 炭化物(φ1~3cm)2R,
礫(φ10~50mm)1R,
砂礫(φ1~2cm)1R



S1150I(A-A)(B-B)
第1層 埴師色土
第2層 埴師色土
第3層 褐色土
第4層 埴師色土

10R3/4 褐色土(10R14/3)15%,褐色土(10R14/3)10%,
礫(φ10~140mm)10%,炭化物(φ1~10mm)2R,
褐色土(10R14/6)20%,礫(φ10~130mm)10%,
炭化物(φ1~10mm)2R
10R4/6 埴師色土(10R3/4)20%,礫(φ10~80mm)10%,
炭化物(φ1~10mm)1R
褐色土(10R14/4)10%,礫(φ10~50mm)5%,
炭化物(φ10~50mm)1R以下

図79 竈穴住居跡58(S1124・1125・1130・1133・1501)

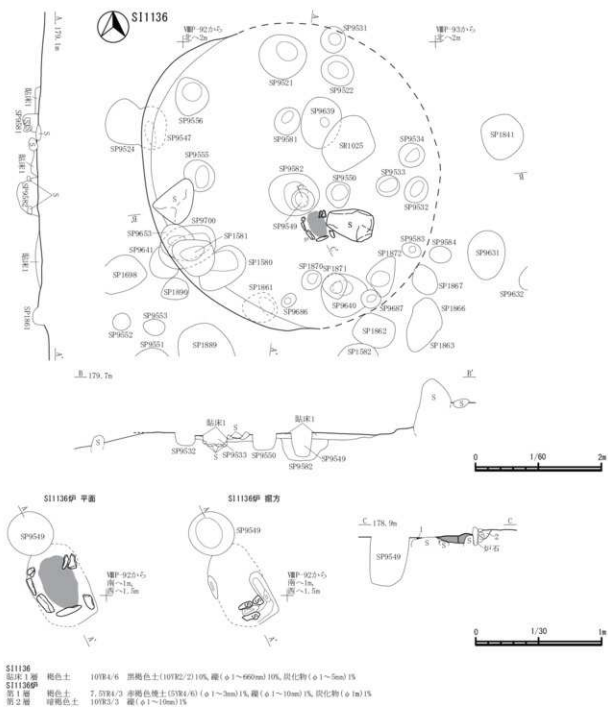


図81 竪穴住居跡60(S11136)

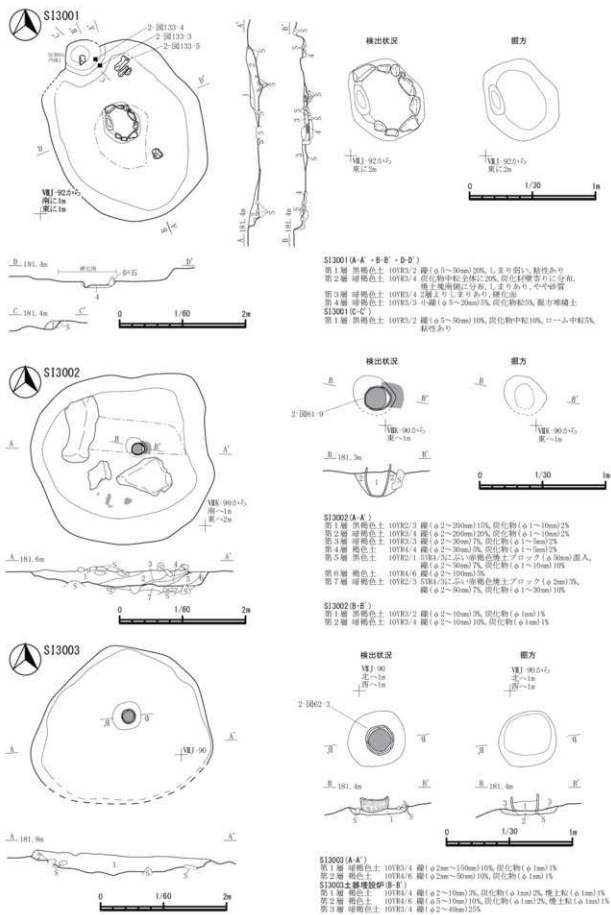


図82 竪穴住居跡61 (S13001~3003)

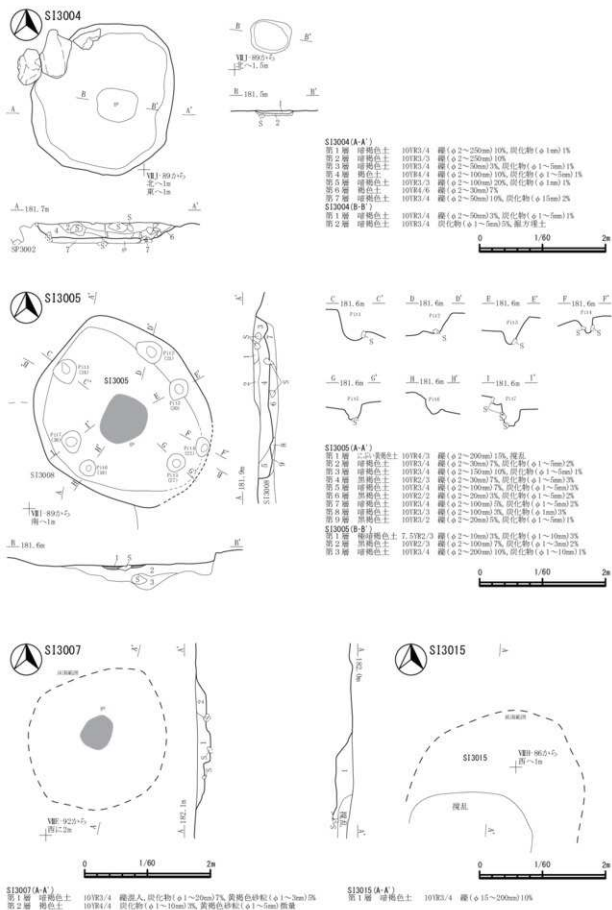


図83 竪穴住居跡62(S13004・3005・3007・3015)

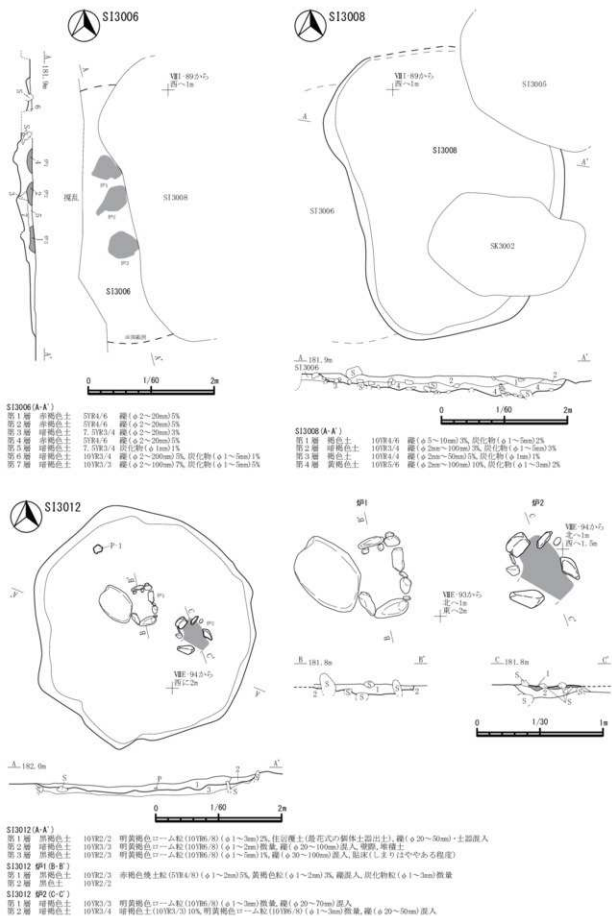
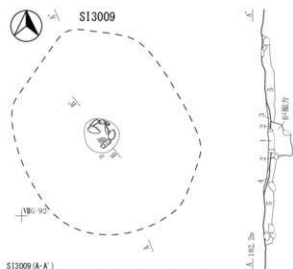
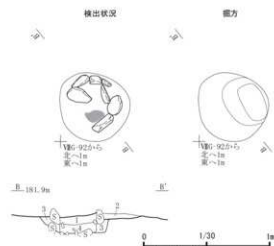


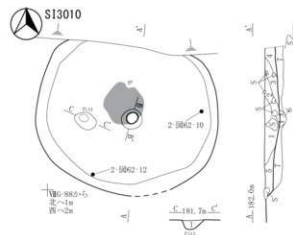
図84 竪穴住居跡63(S13006・3008・3012)



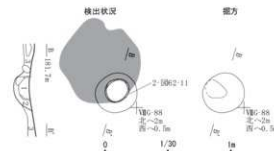
- S13009(A-A)**
- | | |
|----------|------------------------------------|
| 第1層 暗褐色土 | 10YR2/3 礫(φ2~10mm)2%,炭化物(φ1mm)1% |
| 第2層 暗褐色土 | 10YR2/2 礫(φ2~10mm)7%,炭化物(φ1mm)1% |
| 第3層 暗褐色土 | 10YR3/3 礫(φ2~20mm)2%,炭化物(φ1~5mm)1% |
| 第4層 暗褐色土 | 10YR3/4 礫(φ1~40mm)2%,炭化物(φ1mm)1% |
| 第5層 褐色土 | 10YR4/4 礫(φ1~40mm)7%,炭化物(φ1mm)1% |



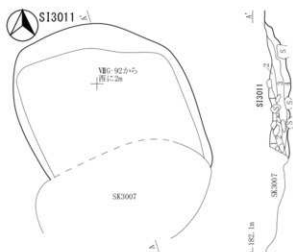
- S13009(B-B)**
- | | |
|----------|--|
| 第1層 暗褐色土 | 10YR2/3 礫(φ2~15mm)2%,土粒子類なし |
| 第2層 暗褐色土 | 10YR3/4 土粒子類なし |
| 第3層 暗褐色土 | 10YR2/3 明黄褐色土→△礫(φ1~3mm)少量,炭化物(φ20~40mm)3% |
| 第4層 暗褐色土 | 10YR2/3 礫(φ20~150mm)7%,土粒子類なし |



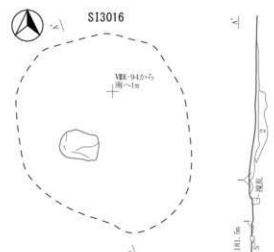
- S13010(A-A)**
- | | |
|----------|----------------------------------|
| 第1層 暗褐色土 | 10YR3/4 礫(φ2~20mm)7%,炭化物(φ1mm)1% |
|----------|----------------------------------|



- S13010(A-A)**
- | | |
|----------|----------------------------------|
| 第1層 暗褐色土 | 10YR3/3 礫(φ2~10mm)7%,炭化物(φ1mm)1% |
| 第2層 暗褐色土 | 10YR3/2 礫(φ2~10mm)2%,炭化物(φ5mm)1% |
| 第3層 暗褐色土 | 10YR3/4 礫(φ2~10mm)5%,炭化物(φ1mm)1% |
| 第4層 暗褐色土 | 10YR4/4 礫(φ2~10mm)5%,炭化物(φ1mm)1% |
| 第5層 暗褐色土 | 10YR4/4 礫(φ2~20mm)7%,炭化物(φ1mm)1% |
| 第6層 褐色土 | 土芯埋没部 |
| 第7層 暗褐色土 | 10YR3/4 礫(φ1~30mm)5%,炭化物(φ5mm)1% |
- S13010(B-B)**
- | | |
|----------|-----------------------------------|
| 第1層 暗褐色土 | 10YR3/3 礫(φ2~20mm)5%,炭化物(φ13mm)2% |
| 第2層 暗褐色土 | 10YR4/4 礫(φ1~20mm)7%,炭化物(φ6mm)1% |
| 第3層 暗褐色土 | 10YR3/4 礫(φ1~20mm)5%,炭化物(φ5mm)1% |



- S13011(A-A)**
- | | |
|----------|---|
| 第1層 暗褐色土 | 10YR2/3 明黄褐色土→△礫(10YR6/8)(φ1~3mm)少量,礫(φ20~100mm),炭化物(φ5~20mm)少量 |
| 第2層 暗褐色土 | 10YR3/4 明黄褐色土→△礫(10YR6/8)(φ1~3mm)1%,礫(φ20~100mm),炭化物(φ3~5mm)少量 |
| 第3層 暗褐色土 | 10YR3/3 明黄褐色土→△礫(10YR6/8)(φ1~5mm)2%,礫(φ20~150mm),炭化物(φ1~5mm)少量 |
| 第4層 暗褐色土 | 10YR3/4 褐色砂質土(10YR4/6)5%,礫(φ20~100mm),明黄褐色土→△礫(10YR6/8)(φ1~5mm)2% |



- S13016(A-A)**
- | | |
|----------|---|
| 第1層 暗褐色土 | 10YR2/3 礫(φ2~50mm)2%,炭化物(φ1~10mm)0%,土芯埋没部 |
| 第2層 暗褐色土 | 10YR3/4 礫(φ2~20mm)2%,炭化物(φ1~10mm)1%,南方埋没部 |

図85 竪穴住居跡64(S13009~3011・3016)

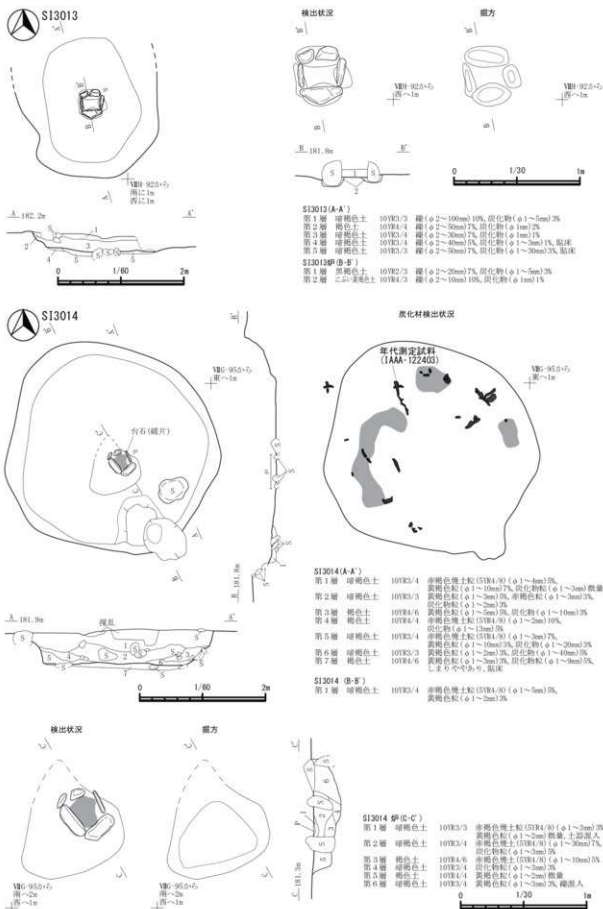


図86 竪穴住居跡65(S13013・3014)

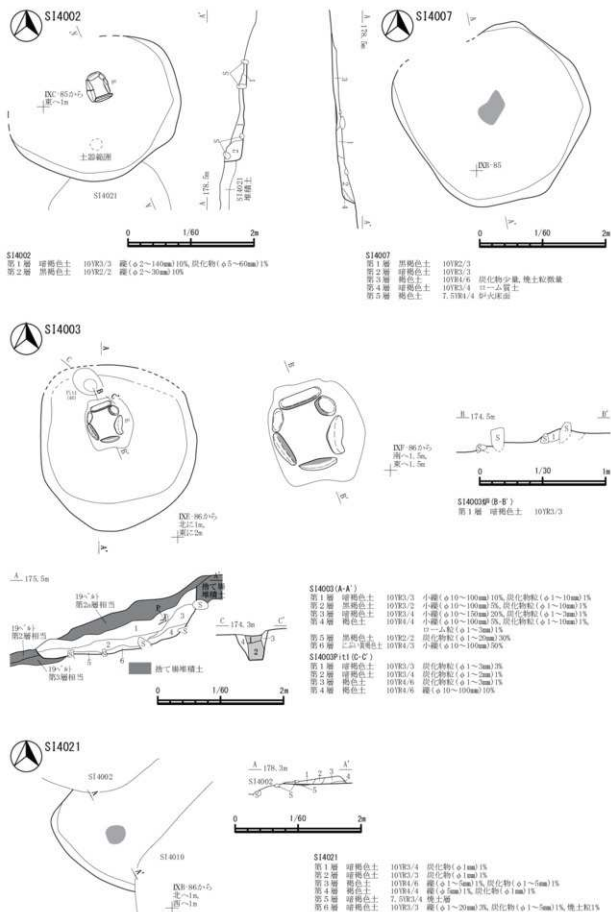
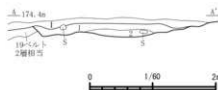
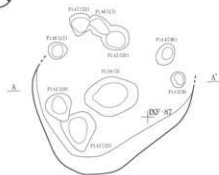


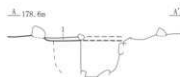
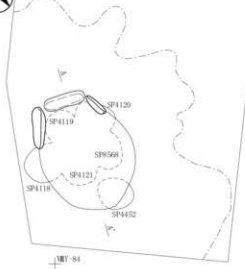
図87 竪穴住居跡66(S14002・0003・0007・4021)

S14004



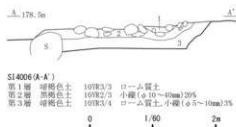
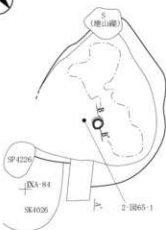
S14004
 第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ10~50mm)10%, 炭化物粒(φ1~1mm)2%
 第2層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ10~70mm)1%, 炭化物粒(φ1~5mm)1%

S14005



S14005P
 第1層 灰黄褐色土 10YR4/2 ロームブロック20%, 礫(φ1~30mm)1%,
 炭化物粒(φ1mm)1%

S14006



S14006(A-A')
 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム質土
 第2層 黒褐色土 10YR2/3 小礫(φ10~40mm)20%
 第3層 暗褐色土 10YR3/4 ローム質土, 小礫(φ5~10mm)3%



S14006P(B-B')
 第1層 褐色土 7.5YR4/4 炭化物(少量)
 第2層 褐色土 10YR4/6 (少量)
 第3層 褐色土 10YR2/1
 第4層 暗褐色土 10YR3/3

図88 竪穴住居跡67(S14004~4006)

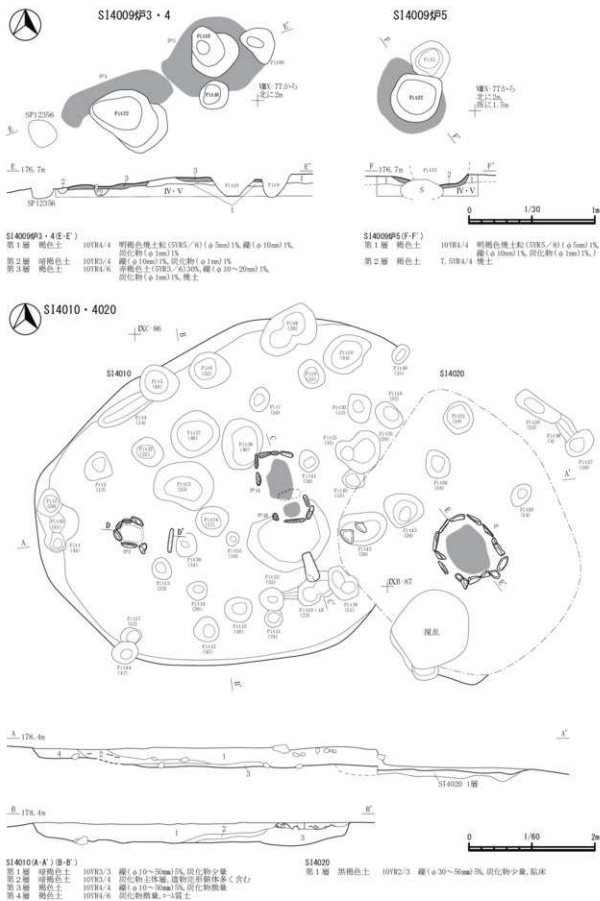


図90 竪穴住居跡69 (S14009・4010・4020)

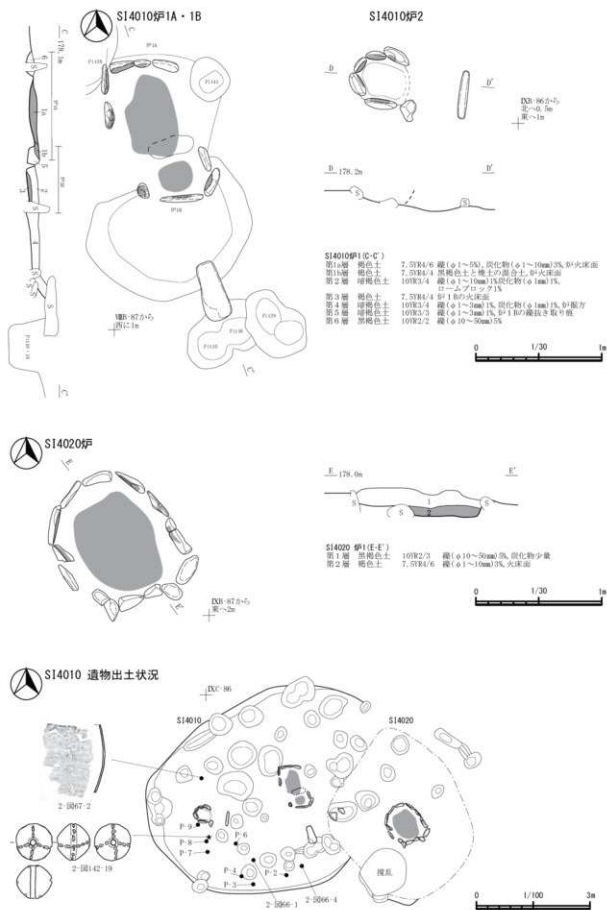


図91 竪穴住居跡70(S14010・4020)

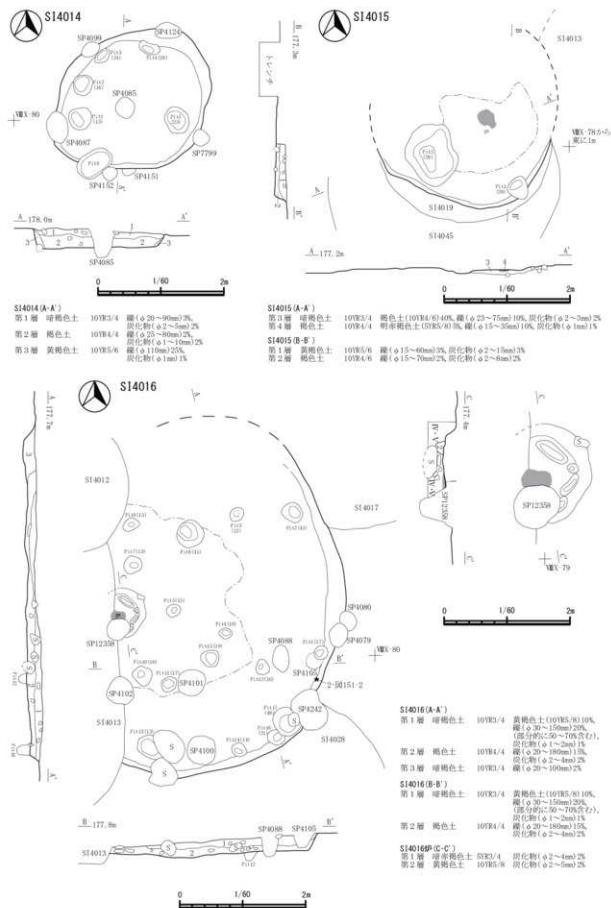


図93 竪穴住居跡72 (S14014~4016)

S14018

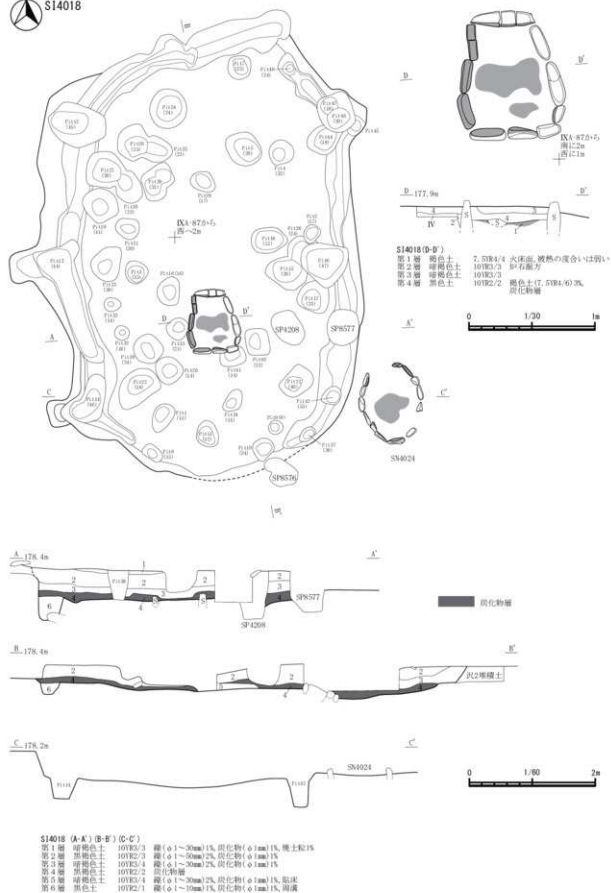


図95 竪穴住居跡74 (S14018)

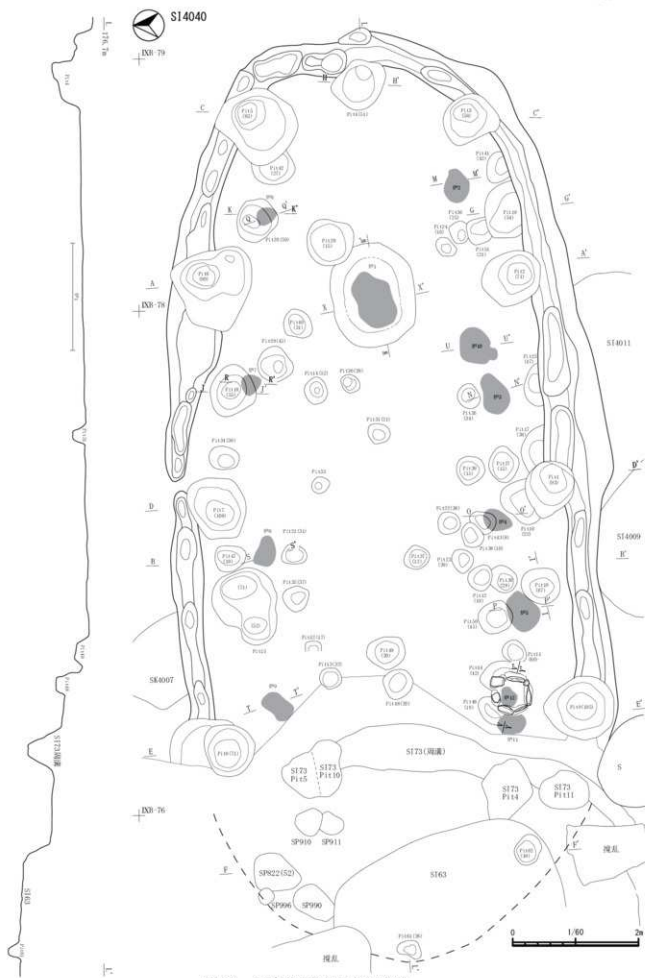


図96 竪穴住居跡75 (S14040)

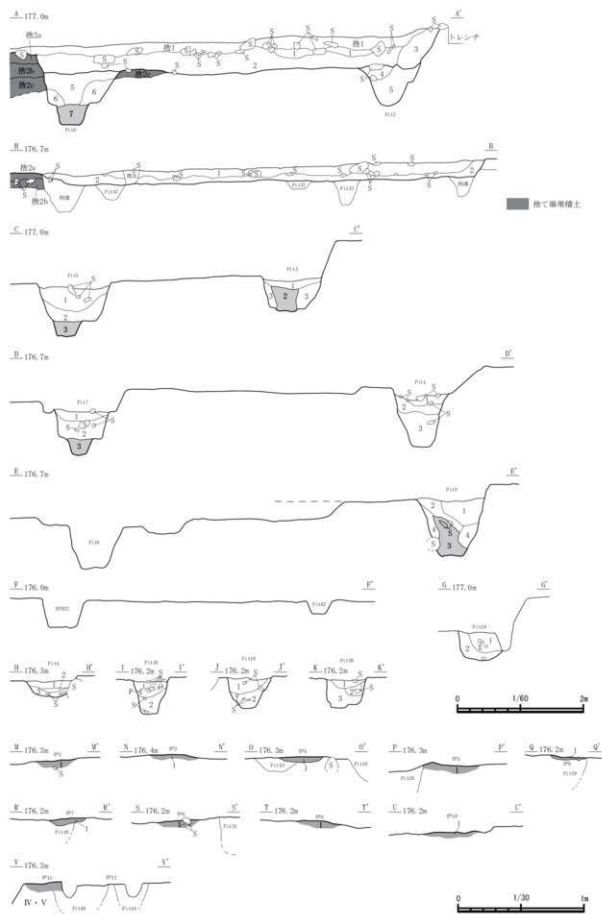


図97 竪穴住居跡76 (S14040)

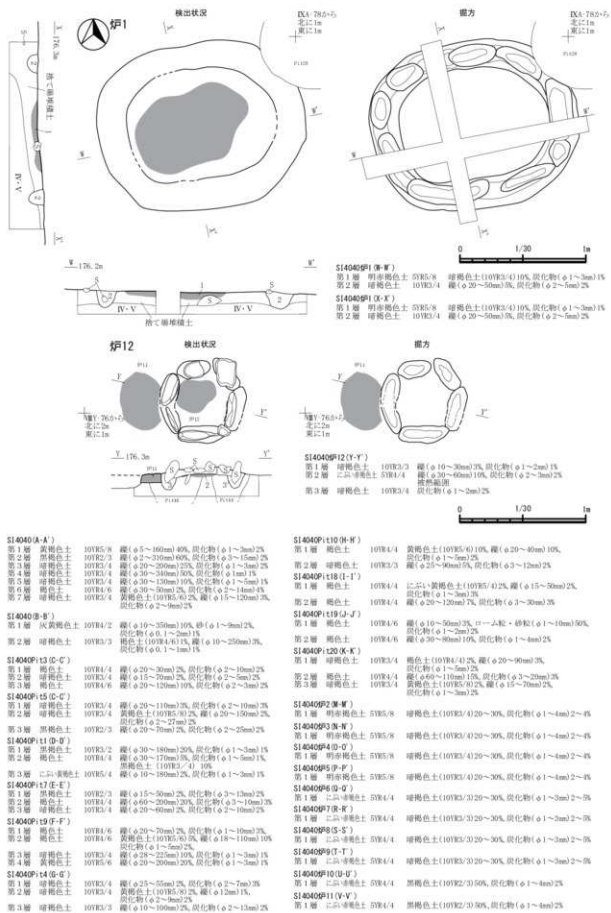


図98 竅穴住居跡77 (S14040)

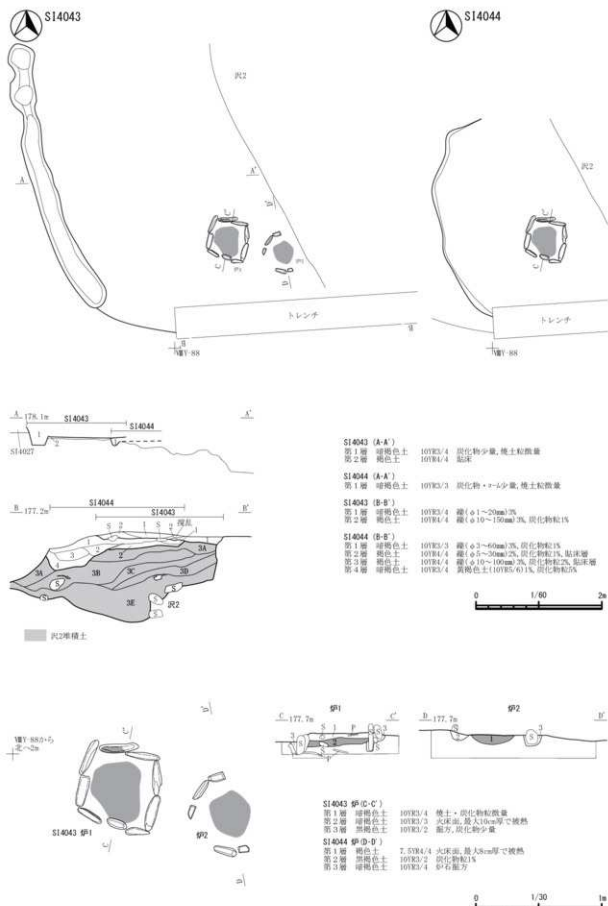
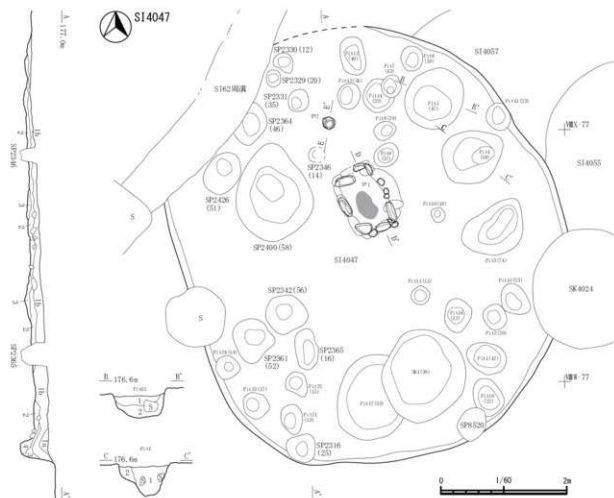


図99 竖穴住居跡78 (S14043・4044)



- S14047 (A-A)**
- | | | |
|-----------|---------|-------------------------------|
| 第1a層 暗褐色土 | 10YR3/2 | 礫(φ10~50mm)2%,炭化物(φ1~2mm)2% |
| 第1b層 暗褐色土 | 10YR3/4 | 礫(φ10~60mm)10%,炭化物(φ1~3mm)2% |
| 第2層 褐色土 | 10YR4/6 | 礫(φ10~20mm)3%,炭化物(φ1~5mm)2% |
| 第3層 暗褐色土 | 10YR2/3 | 礫(φ20~50mm)16%,炭化物(φ1~2mm)2% |
| 第4層 褐色土 | 10YR4/6 | 礫(φ50~150mm)10%,炭化物(φ2~4mm)2% |

炉1

横切状況

縦方



縦Y: 76.5-7
溝口2m
溝底0.5m



縦Y: 76.5-7
溝口2m
溝底0.5m

S14047P15 (B-B')

- | | | |
|------------------|---------|--------------------------------|
| 第1層 暗褐色土 | 10YR3/4 | 礫(φ10~40mm)4%,炭化物(φ1~3mm)2% |
| 第2層 褐色土 | 10YR4/4 | 礫(φ10~250mm)20%,炭化物(φ1~2mm)2% |
| S14047P14 (C-C') | | |
| 第1層 暗褐色土 | 10YR3/3 | 礫(φ10~140mm)10%,炭化物(φ1~25mm)3% |
| 第2層 黄褐色土 | 10YR5/6 | 炭化物(φ1~4mm)2% |

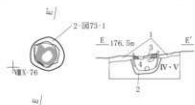


B: 176.6m

S14047炉(D-D')

- | | | |
|----------|----------|--|
| 第1層 暗褐色土 | 10YR3/4 | 礫(φ20~150mm)20%,炭化物(φ3~6mm)5%,堆土(φ3~6mm)3% |
| 第2層 黑褐色土 | 10YR2/3 | 炭化物(φ2~5mm)3% |
| 第3層 灰褐色土 | 7.5YR4/2 | 礫(φ20~40mm)3%,炭化物(φ1mm)2%,被焼磁器 |
| 第4層 黑褐色土 | 10YR3/1 | 暗褐色土(10YR3/3)10%,炭化物(φ1mm)1% |
| 第5層 暗褐色土 | 10YR3/4 | 礫(φ15~20mm)1%,炭化物(φ1~2mm)1% |

炉2



縦Y: 76

S14047埋没土器(E-E')

- | | | |
|----------|----------|--|
| 第1層 褐色土 | 10YR2/6 | 暗褐色土(10YR3/4)40%,炭化物(φ2~7mm)2% |
| 第2層 褐色土 | 10YR3/6 | 炭化物(φ1mm)1% |
| 第3層 暗褐色土 | 7.5YR5/8 | 褐色土(10YR4/6)20%,礫(φ20~40mm)10%,炭化物(φ1~1mm)2% |
| 第4層 褐色土 | 10YR4/6 | 礫(φ30~60mm)10%,炭化物(φ1mm)1% |

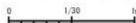


図100 竪穴住居跡79(S14047)

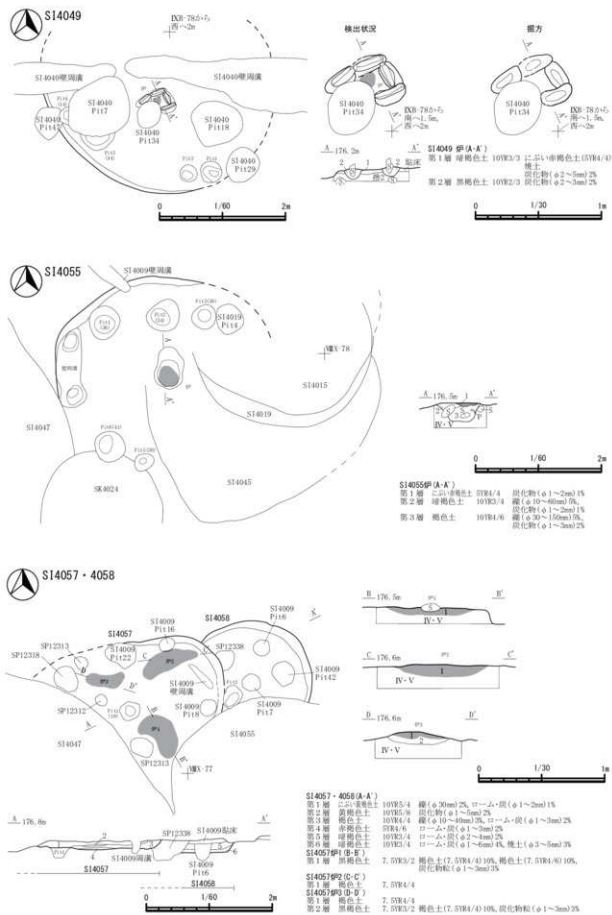
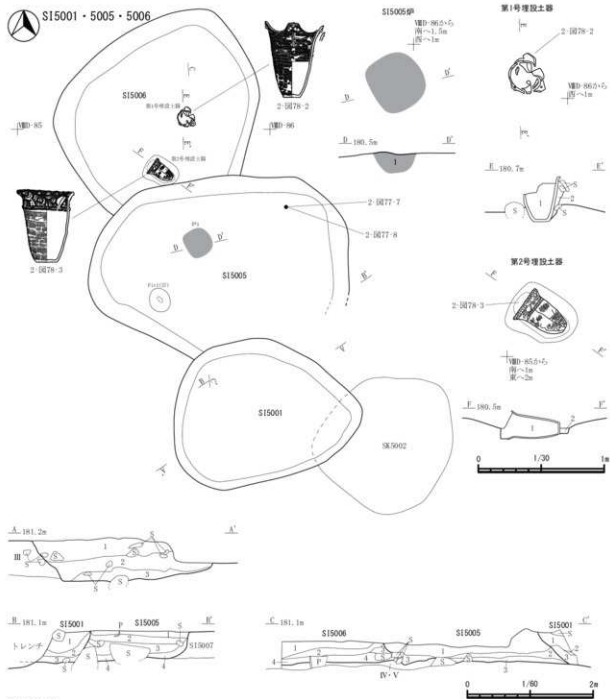


図101 竪穴住居跡80 (S14049・4055・4057・4058)



S15001 (A-A)

第1層	黒褐色土	10YR2/2	礫(φ30~200mm)3%,炭化物(φ3~7mm)2%,肌
第2層	黒褐色土	10YR2/3	礫(φ15~30mm)3%,炭化物(φ2~5mm)1%
第3層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~110mm)2%

S15005 (B-B)

第1層	黒色土	10YR2/1	礫(φ8~100mm)3%,炭化物(φ4~5mm)1%
第2層	黒褐色土	10YR2/2	礫(φ3~90mm)7%,炭化物(φ1~4mm)3%
第3層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ5~160mm)3%,炭化物(φ1~2mm)2%
第4層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ20~610mm)3%,炭化物(φ1~2mm)1%

S15006 (C-C)

第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~120mm)15%,炭化物(φ15mm以下)10%
第2層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ20~100mm)40%,炭化物(φ10mm以下)3%,機土ブロック混入
第3層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ20~80mm)10%,炭化物(φ5mm以下)3%
第4層	黒褐色土	10YR2/3	礫(φ20~100mm)40%,炭化物(φ10mm以下)3%

S15005P (D-D)

第1層	黄褐色土	10YR5/8	礫(φ10~60mm)3%,炭化物1%,機土粒2%
-----	------	---------	---------------------------

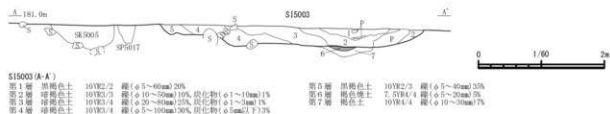
S15006P (E-E)

第1層	褐色土	10YR4/4	炭化物(φ10mm以下)3%
第2層	二色黄褐色土	10YR5/4	礫(φ30~100mm)2%,肌付

S15004埋設 (F-F)

第1層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ10~30mm)3%,炭化物(φ1~2mm)1%
第2層	暗褐色土	10YR3/4	

図102 竪穴住居跡81(S15001・5005・5006)



土器・埋設土器出土状況

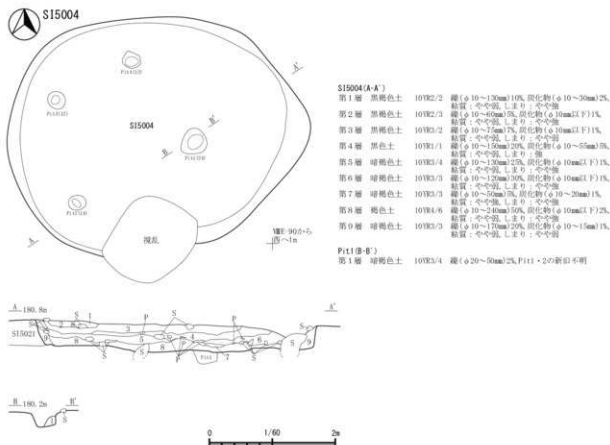
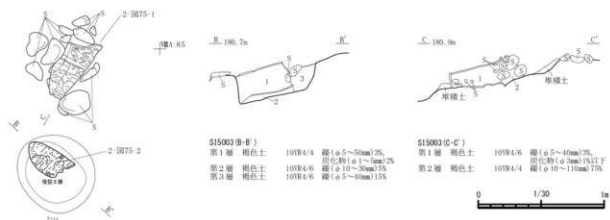
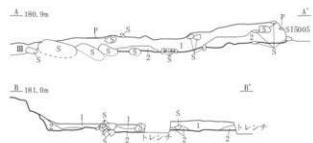
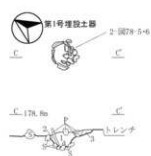


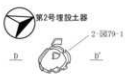
図104 竪穴住居跡83(S15003・5004)



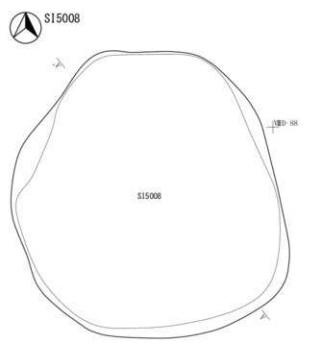
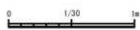
S15007(A-A' - B-B')
 第1層 褐色土 10YR3/4 礫(φ20~160mm)2%, 炭化物(φ1~20mm)2%
 第2層 二色黄褐色土 10YR4/3 礫(φ20~110mm)3%, 炭化物(φ1~20mm)2%



S15007第1号埋設土器
 第1層 褐色土 10YR4/6 礫(φ10~40mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)2%
 第2層 褐色土 10YR4/4 薄緑土 礫(φ20mm)1%, 炭化物(φ10mm以下)1%
 第3層 二色黄褐色土 10YR4/3 礫(φ10mm以下)1%



S15007第2号埋設土器
 第1層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~50mm)20%, 炭化物(φ1~5mm)1%
 第2層 褐色土 10YR4/6 礫(φ1~10mm)10%



S15008
 第1層 褐色土 10YR4/4 礫(φ50~500mm)20%, 炭化物(φ10mm以下)2%



図105 竪穴住居跡84(S15007・5008)

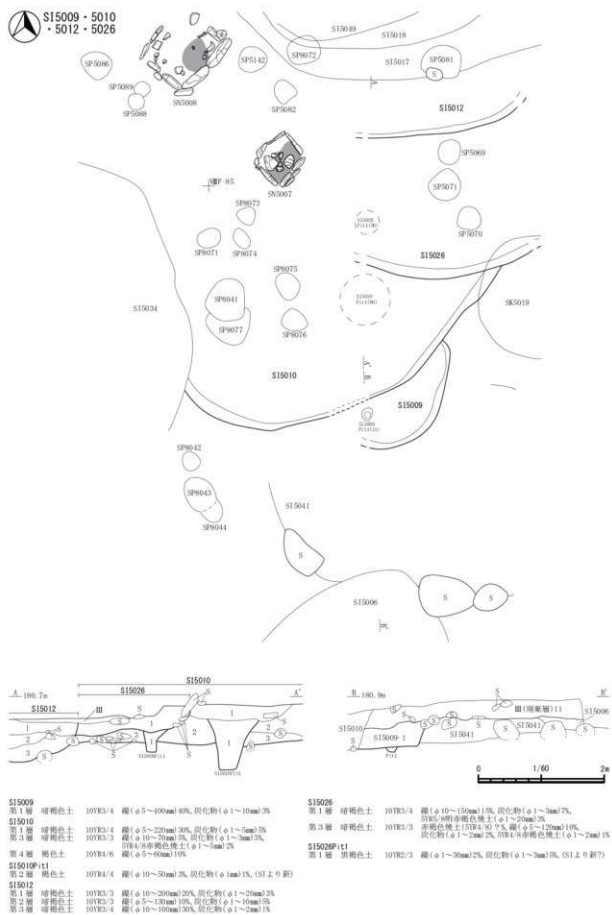


図106 竪穴住居跡85(S15009・5010・5012・5026)

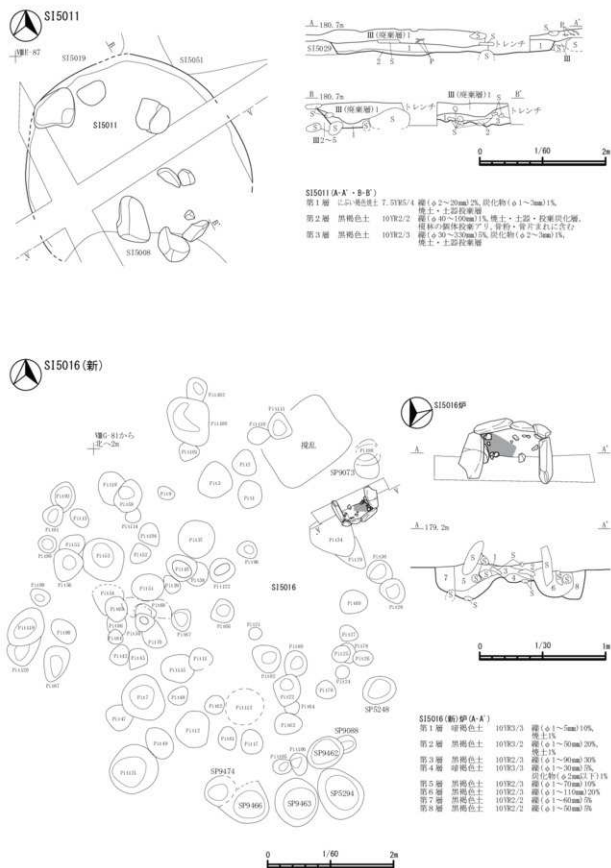
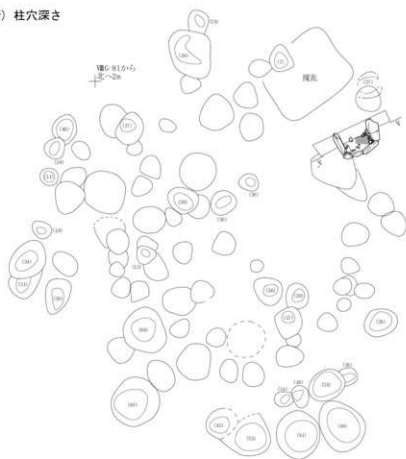


図107 竈穴住居跡86(S15011・5016)



S15016(新) 柱穴深さ



S15016(旧) 柱穴深さ

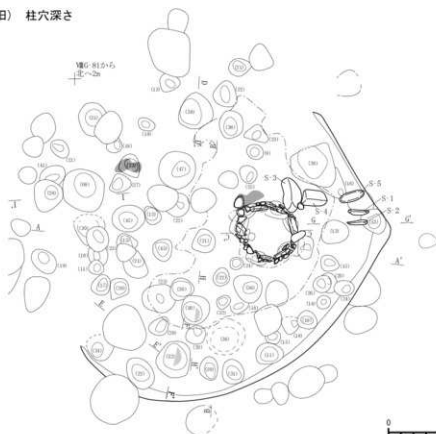


図108 竪穴住居跡87(S15016関連ピット)

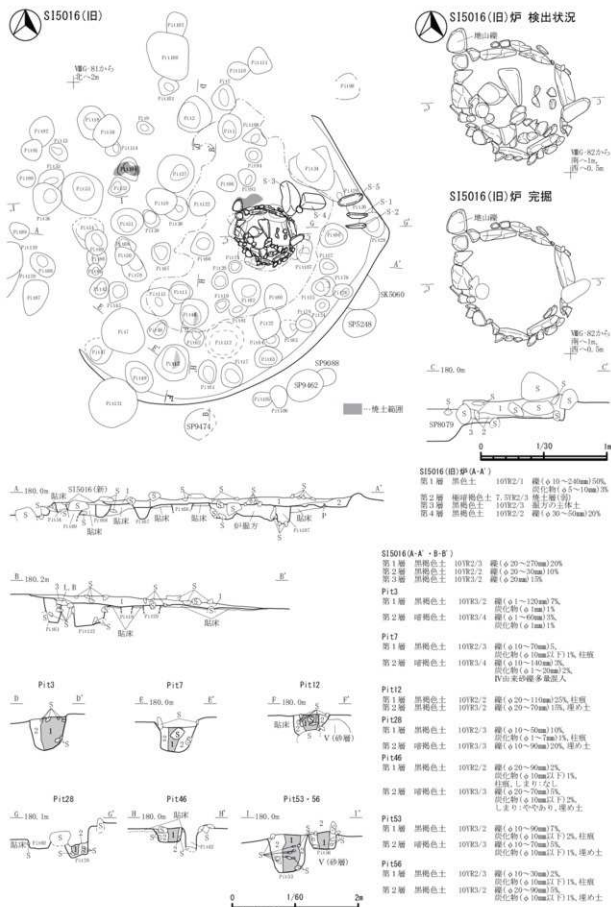
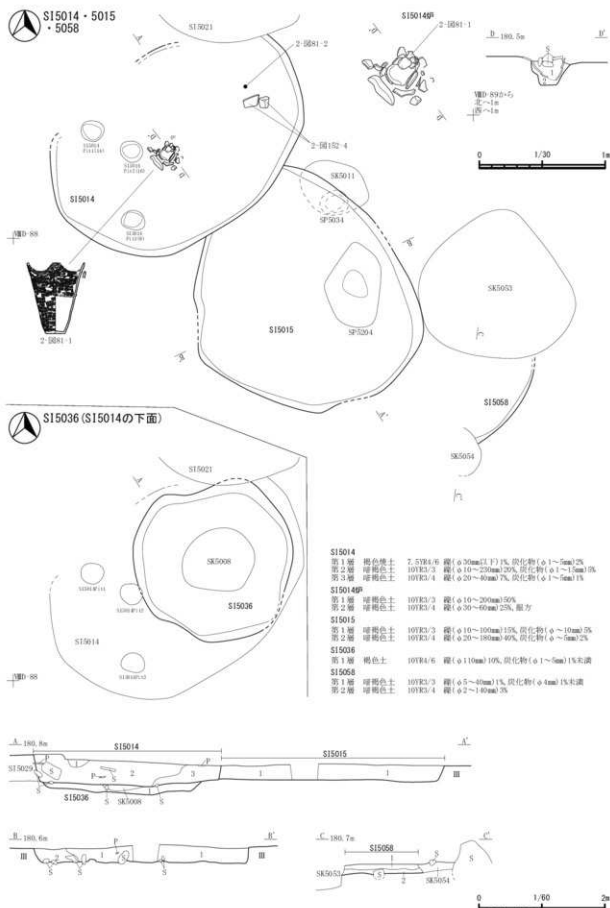
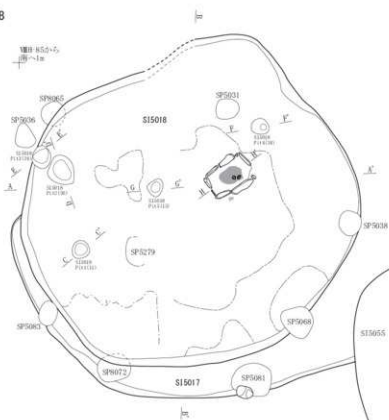


図109 竪穴住居跡88(S15016)



S15017・5018



S15049

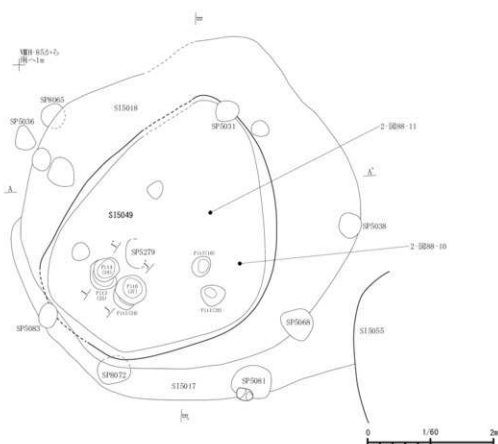
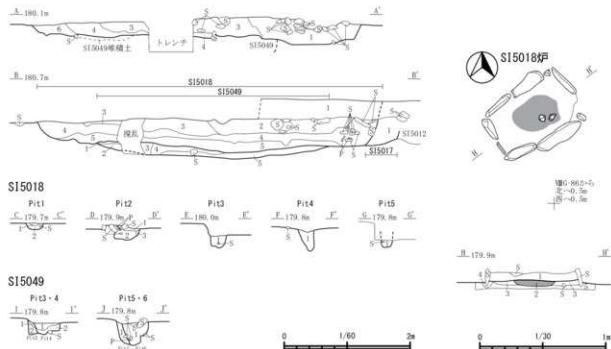


図111 竪穴住居跡90 (S15017・5018・5049)



SI5017
第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~100mm)30%,炭化物(φ1~2cm)1%

SI5018
第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~200mm)20%,炭化物(φ1~20mm)2%
第2層 暗褐色土 10YR3/4 明赤褐色土(5YR5/8)(φ1~2cm)1%,
礫(φ1~10mm)1%,炭化物(φ1~15mm)2%

第3層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~120mm)1%,炭化物(φ1~20mm)2%
第4層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ5~200mm)40%,炭化物(φ1~10mm)4%
第5層 褐色土 10YR4/6 礫(φ10~50mm)1%,炭化物(φ1~5mm)2%

SI5018P11
第1層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物(φ10mm以下)2%
第2層 褐色土 10YR4/6 礫(φ30mm)1%,炭化物(φ10mm以下)1%

SI5018P12
第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ70mm)1%,炭化物(φ10~25mm)2%
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~140mm)2%,炭化物(φ5~10mm)2%
第3層 褐色土 10YR4/6 粘土

SI5018P13
第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ20~20mm)2%,炭化物(φ5~20mm)2%

SI5018P14
第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ5~20mm)1%,炭化物(φ1~20mm)1%

SI5018P15
第1層 褐色土 10YR4/6 礫(φ5~50mm)1%,炭化物(φ2~25mm)1%

SI5018P
第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~60mm)15%,炭化物粒(φ1~5mm)5%
第2層 二色黄褐色土 10YR4/4 礫(φ1~5mm)1%,炭化物粒(φ1~2mm)1%
第3層 褐色土 10YR4/6 礫(φ1~35mm)1%,炭化物粒(φ1~5mm)1%
第4層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~30mm)30%,炭化物粒(φ1~6mm)1%,
粘土
第5層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~35mm)1%,炭化物(φ1~12mm)1%,
SI5049堆積土

SI5049
第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~20mm)7%
第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~80mm)2%,炭化物(φ10mm以下)1%
第3層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~20mm)1%,炭化物(φ1~20mm)7%
第4層 褐色土 10YR4/6 礫(φ10~20mm)1%,炭化物(φ1~10mm)2%
第5層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~20mm)2%,炭化物(φ1~2cm)1%

SI5049P13
第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ10mm以下)1%
第2層 褐色土 10YR4/4 礫(φ20mm)1%,炭化物(φ10mm以下)1%

SI5049P14
第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~20mm)2%,炭化物(φ10mm以下)1%
第2層 二色黄褐色土 10YR4/3 礫(φ20~80mm)2%,炭化物(φ10mm以下)1%

SI5049P15
第1層 二色黄褐色土 10YR4/3 礫(φ20~80mm)1%,炭化物(φ10mm以下)1%

SI5049P16
第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~180mm)3%,炭化物(φ1~20mm)2%

図112 竪穴住居跡91(SI5017・5018・5049)

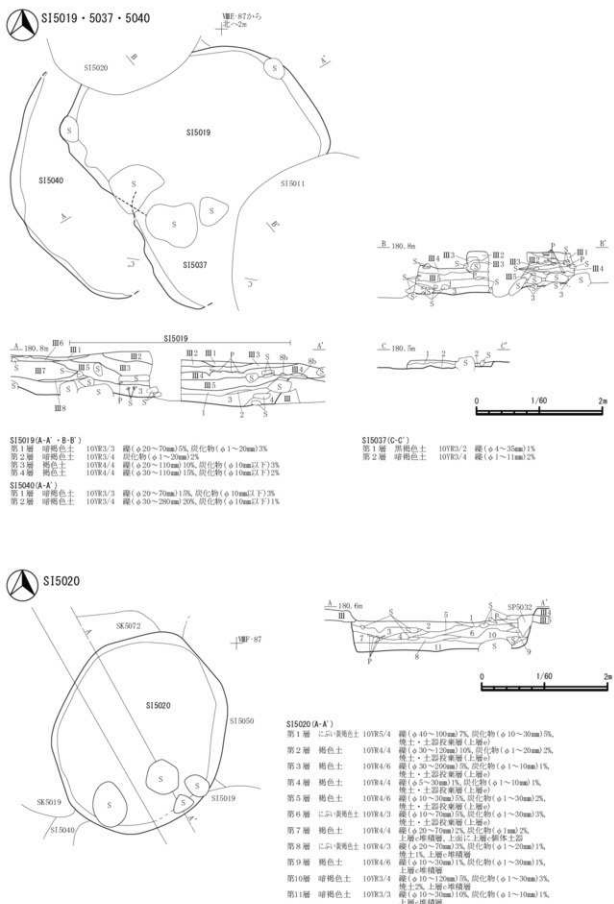


図113 竪穴住居跡92(S15019・5020・5037・5040)

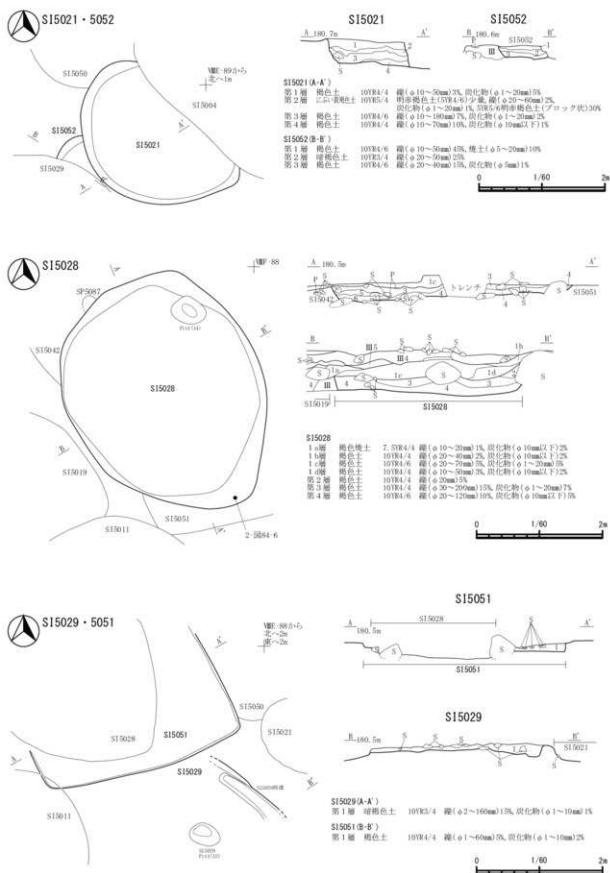
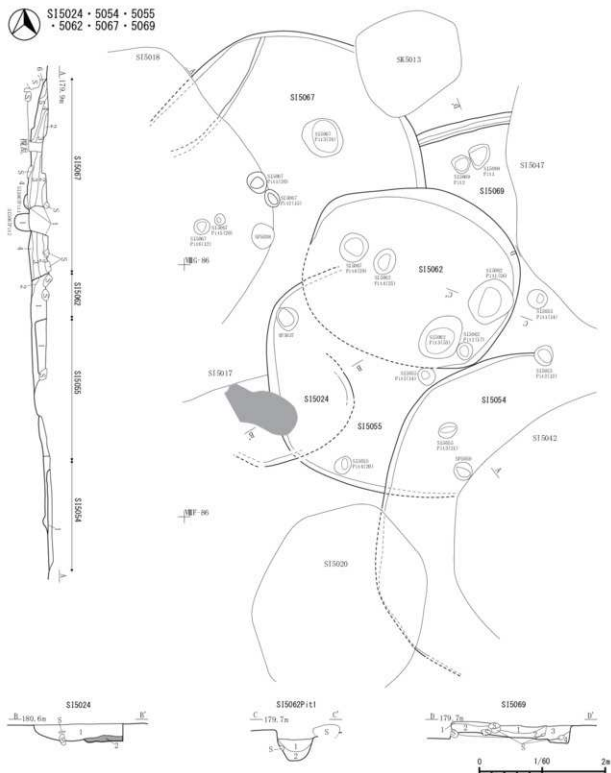


図114 竪穴住居跡93(S15021・5028・5029・5051・5052)




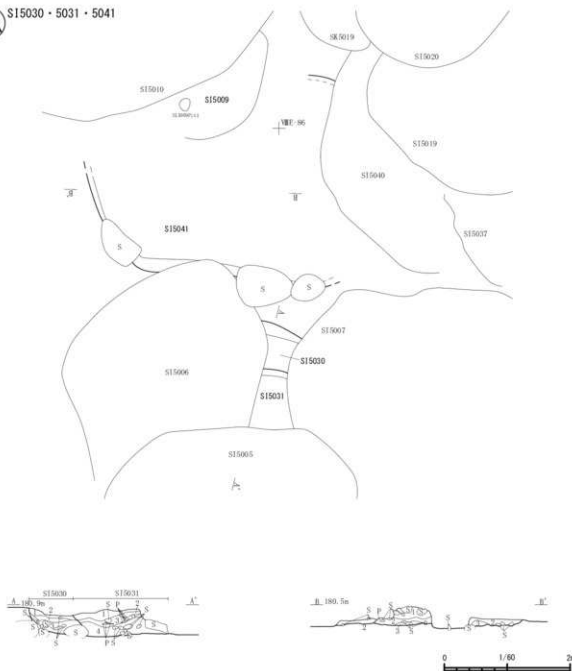
S15024・5054・5055
・5062・5067・5069



S15054	第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ2~30mm)7%,炭化物(φ1~10mm)1%
S15055	第1層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ2~30mm)3%,炭化物(φ1~4mm)1%
S15062	第1層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ5~220mm)3%,炭化物(φ2~20mm)2%
	第2層	黒褐色土	10YR2/3	礫(φ4~40mm)1%,炭化物(φ1~2mm)1%
S15067	第1層	褐色土	10YR4/6	礫(φ50~110mm)1%,炭化物(φ1~7mm)2%
	第2層	暗褐色土	10YR2/3	礫(φ6~50mm)5%,炭化物(φ1~21mm)3%
	第3層	褐色土	10YR4/4	礫(φ3~100mm)2%,炭化物(φ1~5mm)3%
	第4層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ4~220mm)1%,炭化物(φ2~15mm)3%
	第5層	褐色土	10YR4/6	礫(φ1~50mm)1%,炭化物(φ1~25mm)3%
	第6層	褐色土	10YR4/4	炭化物(φ1~2mm)1%未満

S15069	第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ2~300mm)3%,炭化物(φ1~16mm)7%
	第2層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ3~140mm)7%,炭化物(φ1~15mm)5%
	第3層	暗褐色土	10YR2/4	礫(φ10~40mm)5%,炭化物(φ1~20mm)5%
	第4層	褐色土	10YR4/6	礫(φ10~60mm)7%,炭化物(φ10mm以下)7.1%
S15062P/t1	第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ4~80mm)2%,炭化物(φ1~7mm)3%
	第2層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ2~190mm)3%,炭化物(φ1~3mm)1%
S15024	第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~110mm)7%,炭化物(φ1~30mm)2%
	第2層	褐色土	10YR4/6	礫(φ20~20mm)2%,炭化物(φ10mm以下)1%

図115 竪穴住居跡94(S15024・5054・5055・5062・5067・5069)

 S15030・5031・5041


S15000

- 第1層 黒褐色土 101R2/3 礫(φ20~10mm)10%,炭化物粒(φ1~30mm)5%
 第2層 赤褐色土 101R2/2 礫(φ30~100mm)10%,炭化物粒(φ5~10mm)2%
 第3層 赤褐色土 101R3/2 礫(φ40~120mm)25%,炭化物粒(φ5~10mm)1%

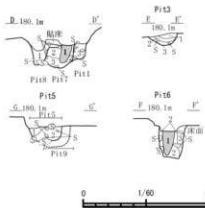
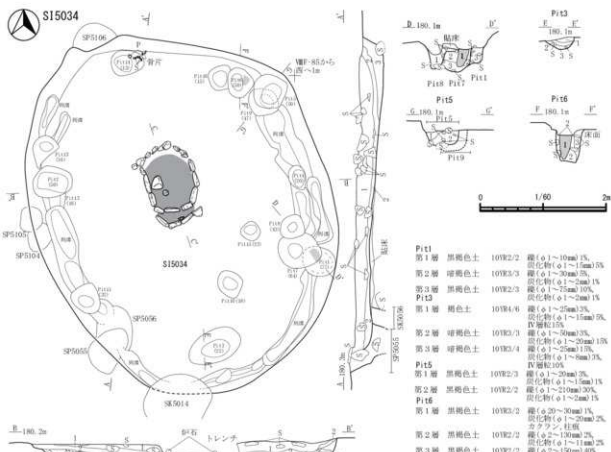
S15031

- 第1層 暗褐色土 101R3/3 礫(φ20~40mm)10%,炭化物粒(φ5~10mm)1%
 第2層 暗褐色土 101R3/4 礫(φ20~30mm)5%,焼土粒(φ1mm)5%,炭化物粒(φ1mm)1%
 第3層 赤褐色土 101R2/3 礫(φ50~100mm)20%,炭化物粒(φ1~5mm)1%
 第4層 褐色土 101R4/6 礫(φ20~90mm)25%

S15041

- 第1層 黒褐色土 101R2/2 礫(φ10~170mm)50%,炭化物(φ5~10mm)2%
 第2層 暗褐色土 101R3/4 礫(φ10~120mm)20%,炭化物(φ5~10mm)2%
 第3層 暗褐色土 101R3/4 IV層粒・塊40%,IV層

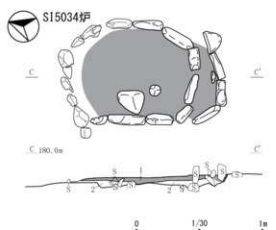
図116 竪穴住居跡95(S15030・5031・5041)



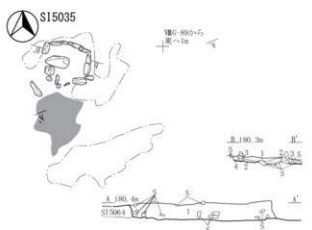
- Pit11**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ1~10mm)1%, 炭化物(φ1~15mm)5%
 - 第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~20mm)7%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 - 第3層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ1~75mm)10%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- Pit12**
- 第1層 褐色土 10YR4/6 礫(φ1~25mm)3%, 炭化物(φ1~15mm)5%, 炭化物10%
 - 第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~50mm)3%, 炭化物(φ1~20mm)13%
 - 第3層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~25mm)17%, 炭化物(φ1~6mm)3%, IV層粒10%
- Pit15**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ1~20mm)3%, 炭化物(φ1~15mm)1%
 - 第2層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ1~250mm)20%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- Pit16**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ20~30mm)1%, 炭化物(φ1~20mm)2%, コブク、柱頭
 - 第2層 暗褐色土 10YR2/2 礫(φ2~130mm)2%, 炭化物(φ1~11mm)2%
 - 第3層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ2~150mm)8%

- S15034(A-A')**
- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 礫(φ2~210mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)10%
 - 第2層 暗褐色土 10YR4/4 礫(φ2~140mm)7%, 炭化物90%
 - 第3層 褐色土 10YR4/4 礫(φ3~50mm)3%, 炭化物(φ1~15mm)7%
 - SK5056 暗褐色土 10YR3/2 礫(φ1~70mm)1%, 炭化物(φ1~12mm)3%
 - SK5055 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ5~160mm)2%, 炭化物(φ6~10mm)7%

- Pit12**
- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ3~90mm)3%, 炭化物(φ2~13mm)7%, 土まじり、柱頭
 - 第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ3~110mm)7%, 炭化物(φ1~7mm)8%
- Pit14**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ6~130mm)2%, 炭化物(φ3~10mm)3%, 土まじり



- S15034B(A-A')**
- 第1層 暗褐色土 5YR1/4 礫(φ30~80mm)10%, 炭化物(φ5~10mm)1%
 - 第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~60mm)20%, 炭化物(φ5~10mm)1%



- S15035(A-A')**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ20~140mm)20%, 炭化物(φ5~10mm)5%
- S15035(B-B')**
- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 礫(φ15~60mm)2%, 炭化物(φ2~10mm)1%
 - 第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ20~30mm)3%, 炭化物(φ2~10mm)1%
 - 第3層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ40~160mm)7%
 - 第4層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ50mm)7%
 - 第5層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ40~120mm)7%

図117 竈穴住居跡96(S15034・5035)

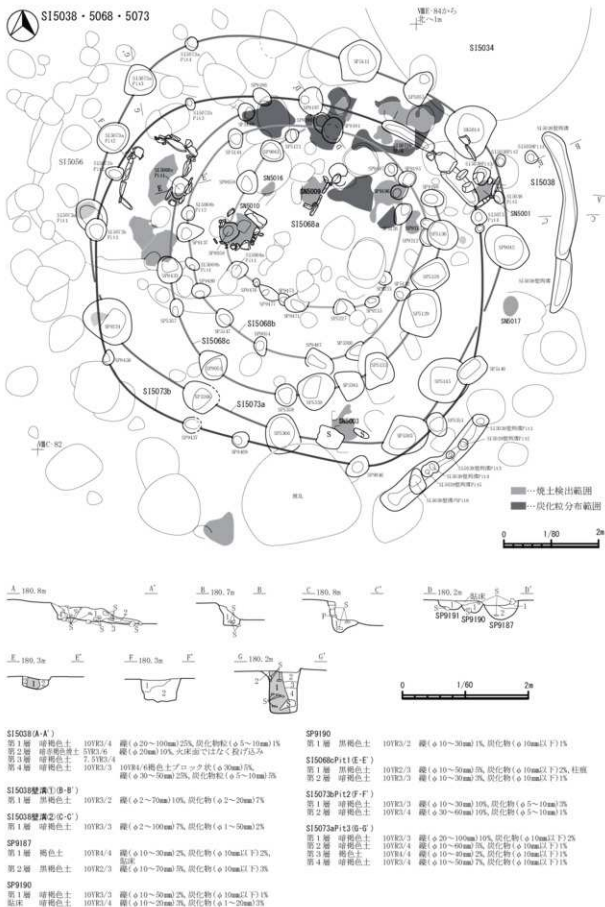
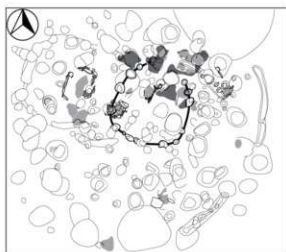
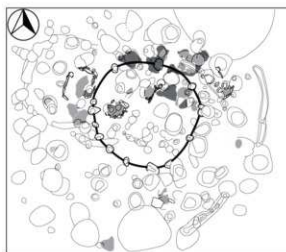


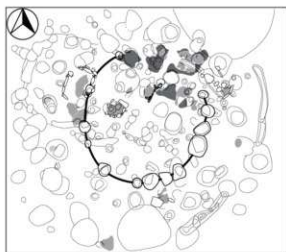
図118 竪穴住居跡97(S15038・5068・5073)



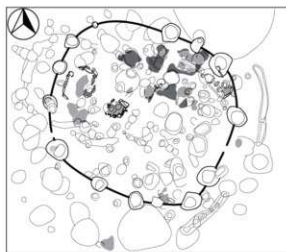
S15068a



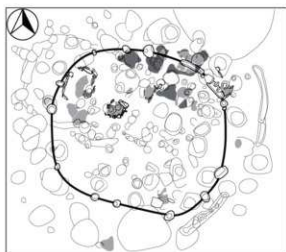
S15068b



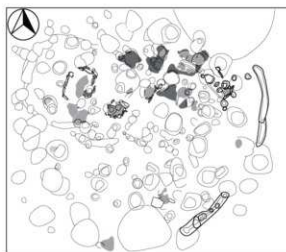
S15068c



S15073a



S15073b



S15038

図119 竪穴住居跡98(S15038・5068・5073各施設の構成図)

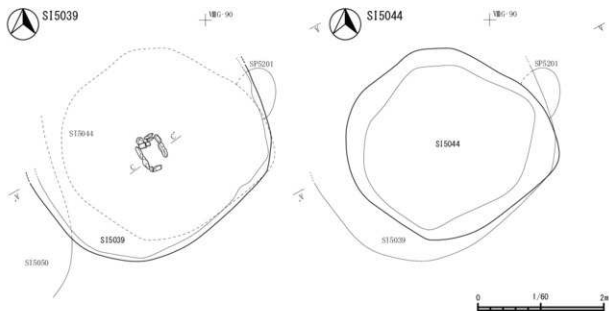
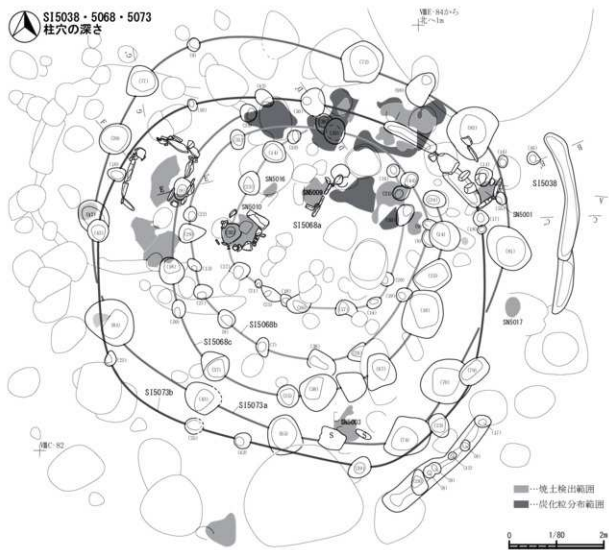


図120 竪穴住居跡99(S15038・5068・5073・5039・5044)

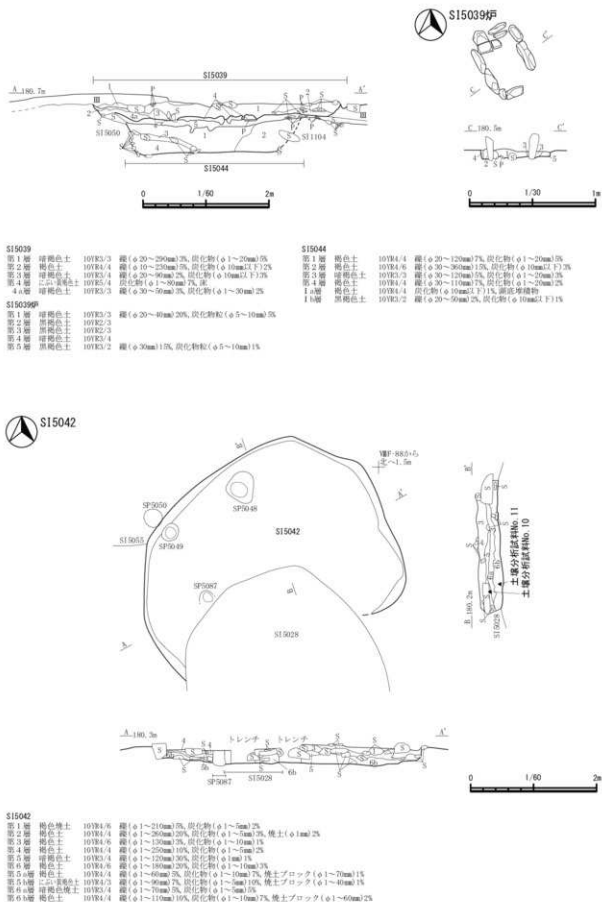


図121 竪穴住居跡100(S15039・5042・5044)

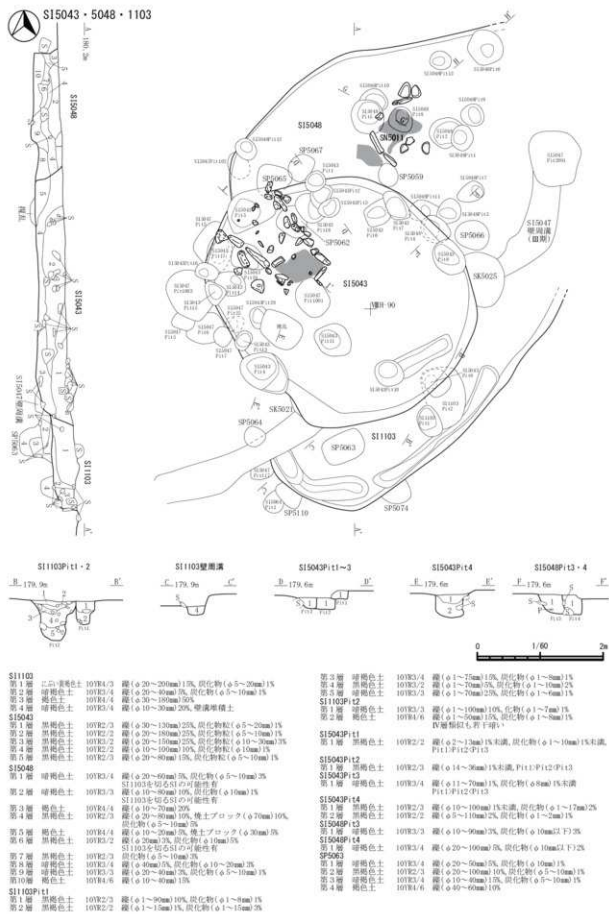

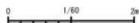
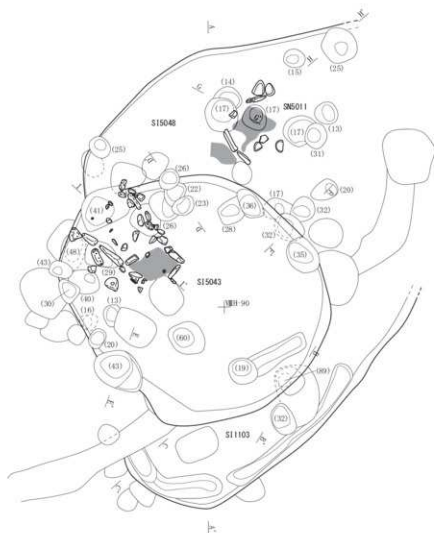


図122 竪穴住居跡101(S11103・5043・5048)


 S15043・5048・1103 柱穴の深さ



S15048P15

- 第1層 埴輪色土 10YR2/3 礫(φ1~25mm)1%, 炭化物(φ1~6mm)1%
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ1~50mm)10%, 炭化物(φ1~10mm)2%

S15048P16

- 第1層 埴輪色土 10YR3/3 炭化物(φ10mm以下)1%
 第2層 埴輪色土 10YR3/4 礫(φ10~30mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)1%
 第3層 埴輪色土 10YR3/3 礫(φ10~20mm)1%, 炭化物(φ1~20mm)1%

図123 竪穴住居跡102(S11103・5043・5048)

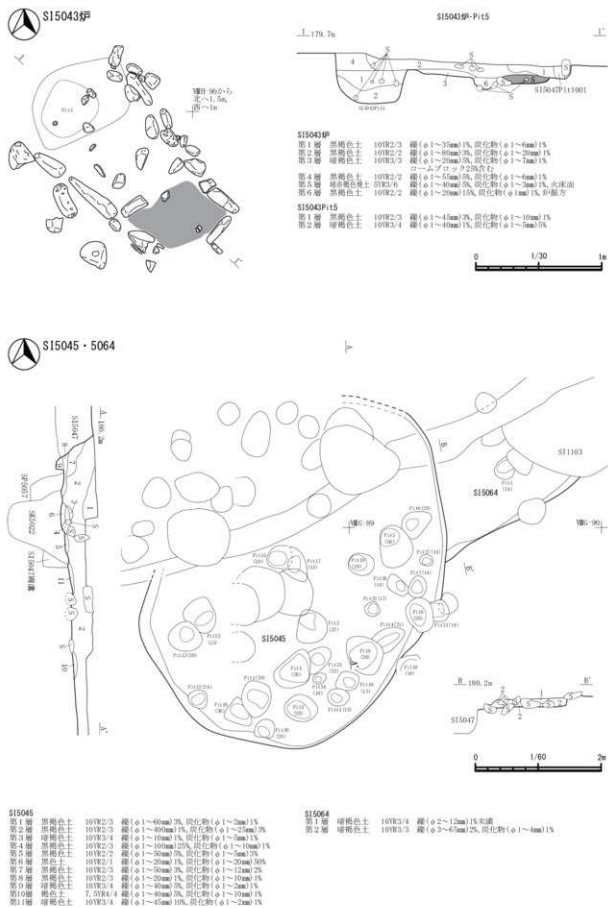


図124 竪穴住居跡103(S15043・5045・5064)

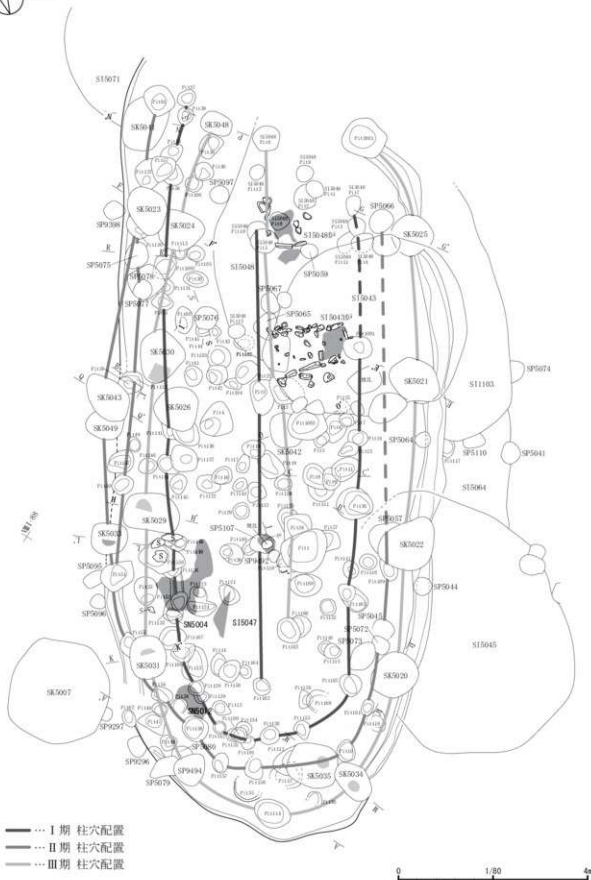


図125 竪穴住居跡104(S15047)

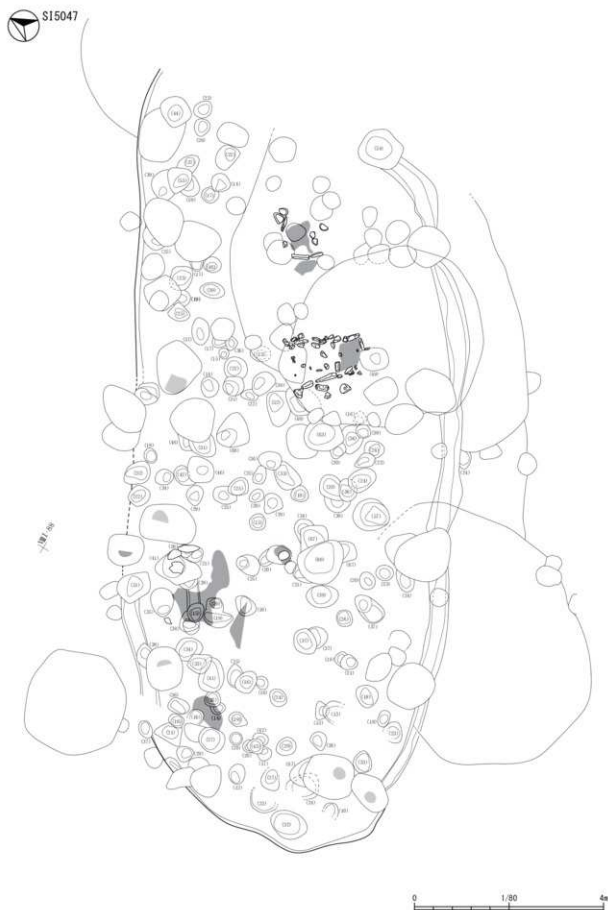
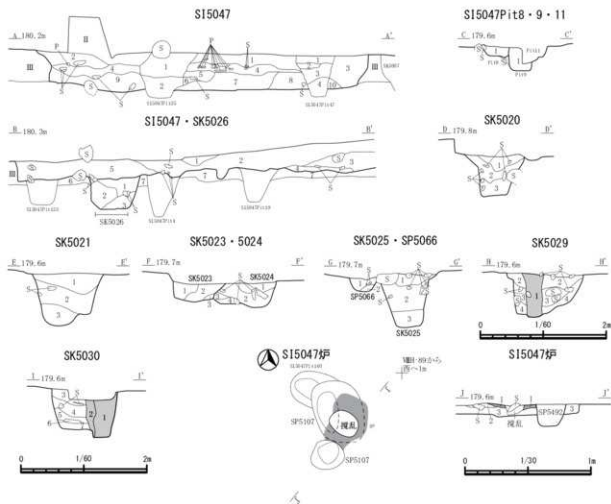


図126 竪穴住居跡105 (S15047)



S15047(A-A)			
第1層	黒褐色土	10YR2/2	礫(φ20~90mm)8%, 炭化物(φ1~20mm)3%
第2層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ20~100mm)5%, 炭化物(φ1~20mm)2%
第3層	黒褐色土	10YR3/1	礫(φ10~60mm)5%, 炭化物(φ1~20mm)2%
第4層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ30~140mm)5%, 炭化物(φ1~40mm)3%
第5層	褐色土	10YR4/6	礫(φ30~100mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)1%
第6層	褐色土	10YR4/4	
第7層	二色赤褐色土	10YR4/3	礫(φ20~50mm)3%, 炭化物(φ1~20mm)3%
第8層	褐色土	10YR4/4	礫(φ20~70mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)2%
第9層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~150mm)5%, 炭化物(φ1~20mm)5%
S15047P147			
第1層	黒褐色土	10YR2/2	礫(φ10~60mm)3%, 炭化物(φ1~20mm)1%
第2層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ20~40mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)1%, 植土50%
第3層	灰褐色土	10YR4/2	礫(φ10~50mm)3%, 炭化物(φ1~25mm)2%
第4層	二色赤褐色土	10YR4/3	礫(φ10~20mm)1%, 炭化物(φ10mm以下)3%
S15047P135			
第1層	黒褐色土	10YR2/2	礫(φ20~280mm)7%, 炭化物(φ10~20mm)7%
第2層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ20~200mm)3%, 炭化物(φ1~20mm)1%
第10層	褐色土	10YR4/4	炭化物(φ10mm以下)1%
S15047(B-B)			
第1層	黒褐色土	10YR2/3	礫(φ20~170mm)50%, 炭化物(φ5mm)1%
第2層	暗褐色土	10YR2/2	礫(φ10~100mm)50%, 炭化物(φ5~10mm)2%
第3層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~200mm)25%, 炭化物(φ5mm)5%
第4層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ20~90mm)20%, 炭化物(φ5~20mm)7%
第5層	褐色土	10YR4/6	河原砂礫土
SK526			
第1層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ1~30mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%
第2層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ1~70mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%
第3層	二色赤褐色土	10YR4/3	礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%
S15047P18			
第1層	黒褐色土	10YR2/3	礫(φ20~110mm)20%, 炭化物(φ5~10mm)5%
S15047P19			
第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ20~60mm)30%, 炭化物(φ5~20mm)1%
S15047P			
第1層	二色赤褐色土	10YR4/4	炭化物(φ10mm以下)1%
第2層	褐色土	10YR4/4	土層(1区, 中層方上, 炭化物(φ10mm以下)1%)
第3層	褐色土	10YR4/6	礫(φ10~40mm)1%, 炭化物(φ10mm以下)2%

SK520			
第1層	黒褐色土	10YR2/2	礫(φ30~80mm)20%, 炭化物(φ5~10mm)3%
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ロームアゴロコク礫
第3層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ20~200mm)20%, 炭化物(φ5~20mm)1%
第4層	暗褐色土	10YR3/3	ロームアゴロコク礫
第5層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ10~80mm)10%, 炭化物(φ5mm)1%
SK521			
第1層	黒褐色土	10YR2/2	礫(φ4~80mm)3%, 炭化物(φ1~10mm)7%
第2層	暗褐色土	10YR2/2	暗褐色土(10YR3/4)20%, 礫(φ4~150mm)3%
第3層	黒褐色土	10YR2/1	炭化物(φ1~20mm)7%
SK522			
第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ1~70mm)5%, 炭化物(φ1~10mm)1%
第2層	褐色土	10YR4/4	植土(φ1~5mm)1%
第3層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ1~20mm)5%, 炭化物(φ1~5mm)2%
第4層	二色赤褐色土	10YR4/3	炭化物(φ1~10mm)1%
植土	褐色土		植土(φ1mm)1%
SK524			
第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ1~170mm)5%, 炭化物(φ1~10mm)2%
第2層	暗褐色土	10YR3/3	植土(φ1mm)1%
第3層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ1~140mm)7%, 炭化物(φ1~5mm)2%
第4層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%
第5層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ1~50mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%
SK525			
第1層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ30~110mm)15%, 炭化物(φ5~10mm)3%
第2層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ20~80mm)1%, 炭化物(φ10~20mm)1%
第3層	暗褐色土	10YR2/2	礫(φ30mm)3%, 炭化物(φ5mm)1%
SP5066			
第1層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ30~100mm)10%, 炭化物(φ5~30mm)1%
第2層	暗褐色土	10YR2/3	礫(φ10~60mm)20%, 炭化物(φ5~10mm)1%
SK529			
第1層	暗褐色土	10YR2/3	礫(φ30~20mm)10%, 炭化物(φ5~10mm)3%, 植土
第2層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ20~30mm)13%, 炭化物(φ5~10mm)10%, 植土
第3層	暗褐色土	10YR2/2	礫(φ50~230mm)20%, 炭化物(φ5mm)1%, 植土
第4層	暗褐色土	10YR2/3	礫(φ10~20mm)10%, 植土
SK530			
第1層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10mm以下)7%, 炭化物(φ10mm以下)1%, 植土
第2層	暗褐色土	10YR2/3	礫(φ10~60mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)2%, 植土
第3層	暗褐色土	10YR3/4	礫(φ10~150mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)2%, 植土
第4層	暗褐色土	10YR3/3	礫(φ10~60mm)1%, 炭化物(φ10mm以下)2%, 植土
第5層	褐色土	10YR4/6	礫(φ10~20mm)1%, 炭化物(φ10mm以下)1%, 植土
第6層	褐色土	10YR4/6	礫(φ10~20mm)1%, 炭化物(φ10mm以下)1%, 植土
第7層	暗褐色土	10YR3/2	礫(φ10~20mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)1%, 植土

図127 竅穴住居跡106(S15047)

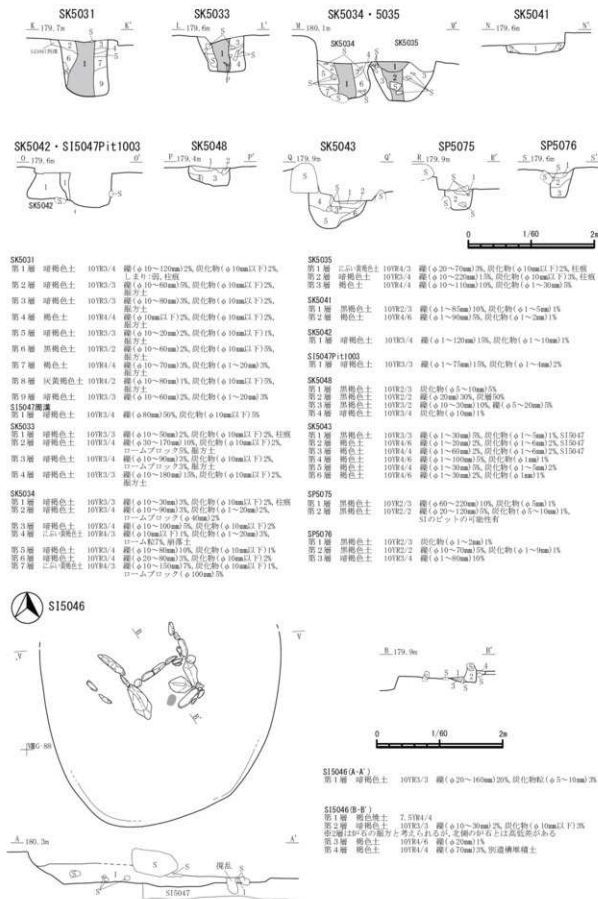
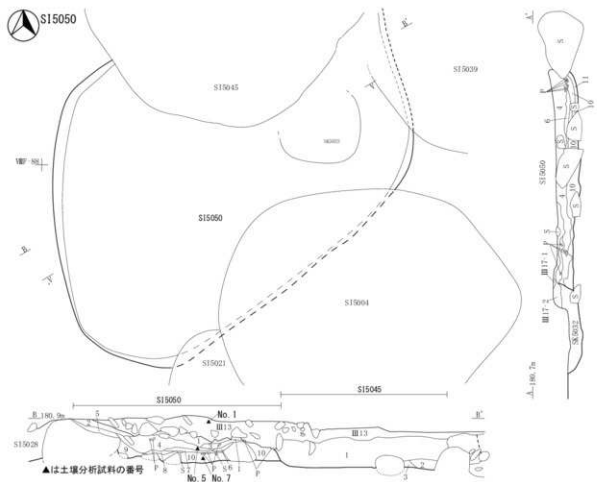
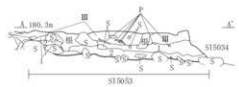
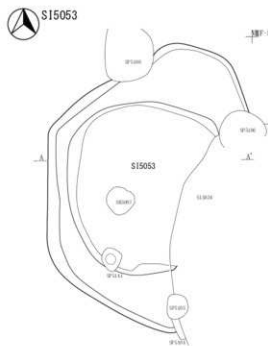


図128 竪穴住居跡107(SI5047・5046)



- ▲は土壌分析試料の番号
- | | | | |
|--------|--------|---------|--------------------------------|
| Ⅲ13-1層 | 暗褐色土 | 10TR3/4 | 縦(φ10~120mm)20%,炭化物(φ10mm以下)2% |
| Ⅲ13-2層 | 暗褐色土 | 10TR2/3 | 縦(φ10~160mm)50%,炭化物(φ10mm以下)5% |
| Ⅲ13-3層 | 暗褐色土 | 10TR3/4 | 縦(φ20~210mm)5%,炭化物(φ10mm以下)1% |
| Ⅱ1層 | 黄褐色粘板層 | 10TR5/6 | 縦(φ1~20mm)50%,炭化物(φ10mm以下)2% |
| Ⅱ2層 | 褐色土 | 10TR4/4 | 縦(φ10~60mm)5%,炭化物(φ10mm以下)2% |
| Ⅱ3層 | 褐色土 | 10TR4/4 | 縦(φ10~60mm)2%,炭化物(φ10mm以下)2% |
| Ⅱ4層 | 褐色土 | 10TR4/6 | 縦(φ10~220mm)5%,炭化物(φ10mm以下)2% |

- | | | | |
|------|---------|---------|--------------------------------------|
| 第5層 | 赤土・黄褐色土 | 10TR6/2 | 縦(φ10~80mm)2%,炭化物(φ10mm以下)2% |
| 第6層 | 暗褐色土 | 10TR2/4 | 縦(φ20~40mm)2%,炭化物(φ10mm以下)2% |
| 第7層 | 赤土・粘板層 | 5TR4/4 | 縦(φ10~30mm)2%,炭化物(φ1~30mm)5%,
粘土土 |
| 第8層 | 暗褐色土 | 10TR3/4 | 縦(φ10~50mm)2%,炭化物(φ10mm以下)2% |
| 第9層 | 暗褐色土 | 10TR2/3 | 縦(φ10~60mm)2%,炭化物(φ10mm以下)2% |
| 第10層 | 暗褐色土 | 10TR2/4 | 縦(φ20~100mm)2%,炭化物(φ10mm以下)2% |



- | | | | |
|--------|-----|---------|--------------------------------|
| S15053 | | | |
| 第1層 | 褐色土 | 10TR4/4 | 縦(φ10~60mm)15%,炭化物(φ5~30mm)2% |
| 第2層 | 褐色土 | 10TR4/6 | 縦(φ20~270mm)20%,炭化物(φ5~10mm)1% |

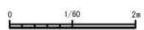


図129 竪穴住居跡108(S15050・5053)

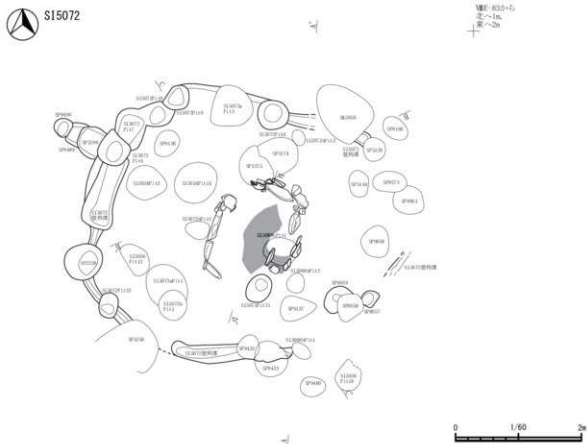
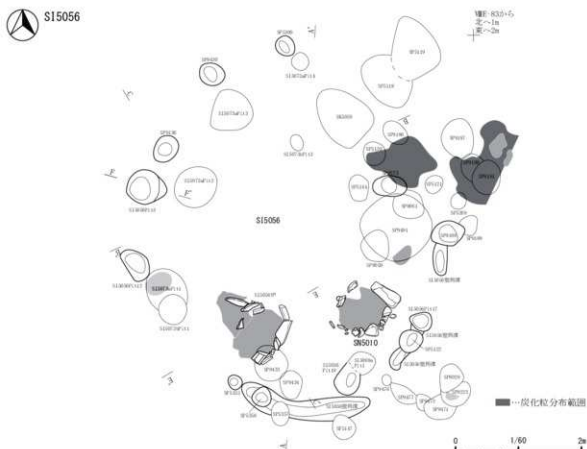
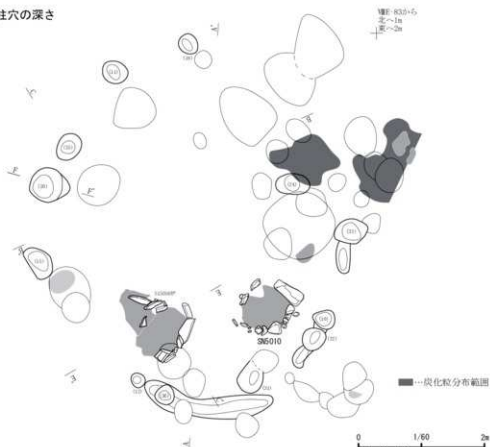


図130 竪穴住居跡109(S15056・5072)



S15056 柱穴の深さ



S15072 柱穴の深さ

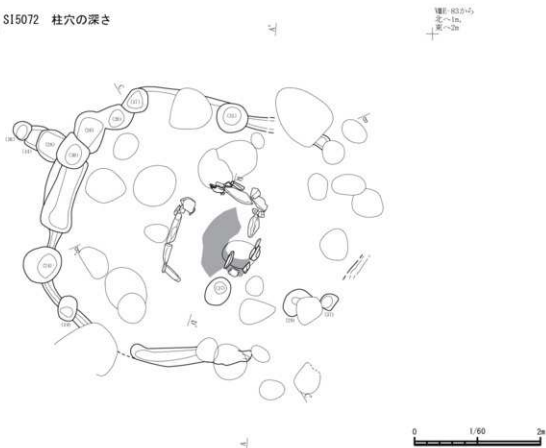


図131 竖穴住居跡110(S15056・5072)

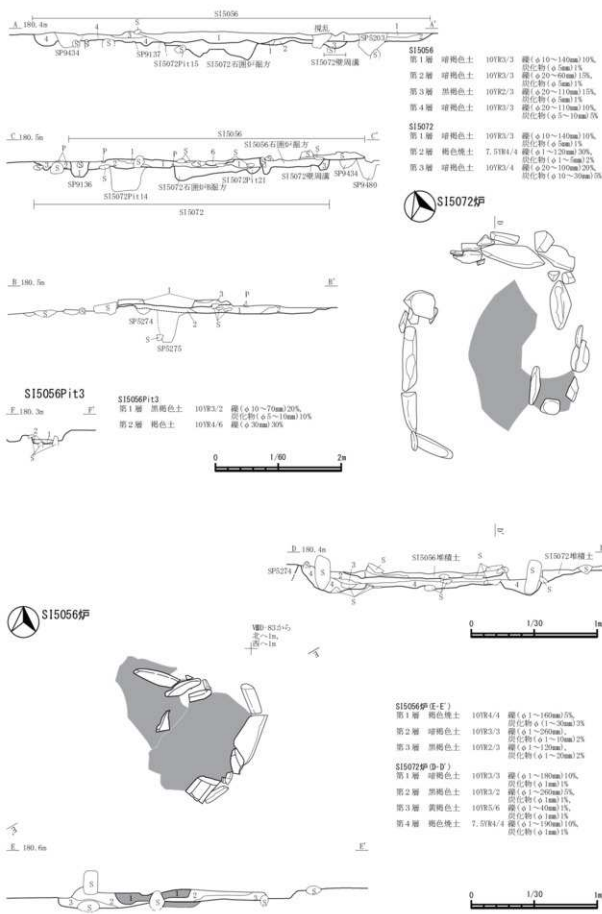
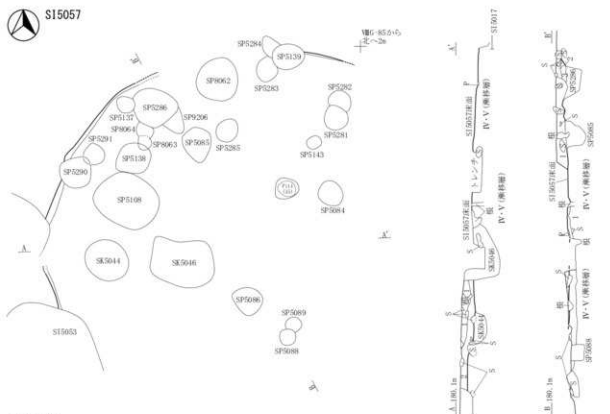
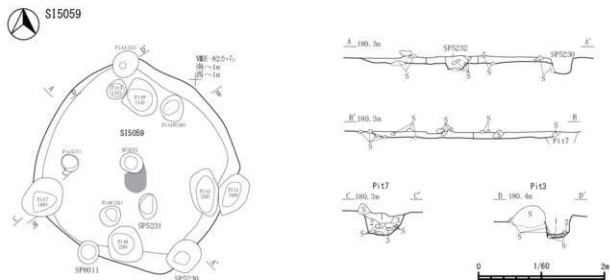


図132 竪穴住居跡111(SI5056・5072)



SI5057(A-A')
 第1層 埴縄色土 10YK3/4 雜(φ10~50mm)7%,炭化物(φ1~20mm)2%
 第2層 埴縄色土 10YK2/3 雜(φ10~40mm)3%,炭化物(φ1~20mm)2%

SI5057(B-B')
 第1層 褐色土 10YR4/4 雜(φ10~150mm)10%,炭化物(φ1~20mm)7%
 第2層 埴縄色土 10YK3/4 雜(φ20~40mm)3%,炭化物(φ10mm以下)2%
 第3層 埴縄色土 10YK2/2 雜(φ20~30mm)2%,炭化物(φ10mm以下)2%
 第4層 埴縄色土 10YK2/3 雜(φ10~20mm)1%,炭化物(φ10mm以下)1%



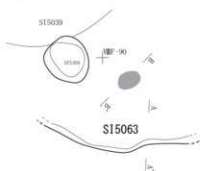
SI5059(A-A')
 第1層 埴縄色土 10YK3/4 雜(φ50~140mm)7%,炭化物(φ10mm以下)3%

SI5059Pit3
 第1層 埴縄色土 10YK3/4 雜(φ10~20mm)2%,炭化物(φ10mm以下)1%
 第2層 褐色土 10YR4/4 雜(φ10mm以下)1%,炭化物(φ10mm以下)1%,IV層由赤土粒(φ5~40)20%

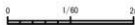
SI5059Pit7
 第1層 埴縄色土 10YK3/3 雜(φ10~50mm)2%,炭化物(φ10mm以下)2%
 第2層 褐色土 10YR4/4 雜(φ10~100mm)2%,炭化物(φ10mm以下)1%
 第3層 埴縄色土 10YK2/4 雜(φ10~60mm)10%,炭化物(φ10mm以下)3%,IV層由赤土粒(φ5~40)10%

図133 竪穴住居跡112(SI5057・5059)

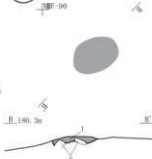
S15063



S15063 (A-A')
第1層 黒褐色土 10YR3/2 礫(φ2~60mm)2%,
炭化物(φ1~3mm)2%



S15063炉



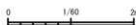
S15063炉(B-B')
第1層 暗褐色焼土 5YR3/4 礫(φ20~110mm)2%,
炭化物(φ1~3mm)1%



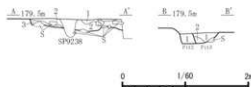
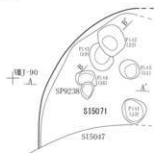
S15065



S15065
第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ120~310mm)1%, 炭化物(φ1~11mm)2%, 黄褐色口—△粒7%
第2層 暗褐色土 10YR2/2 礫(φ3~160mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)7%, 黄褐色口—△粒2%
第3層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~125mm)3%, 炭化物(φ1~3mm)2%



S15071



S15071
第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~20mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)2%
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~110mm)7%, 炭化物(φ10mm以下)2%
第3層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~30mm)1%, 炭化物(φ10mm以下)1%
SP9238
第1層 黒褐色土 10YR3/2 礫(φ10~85mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)2%
S15071P1t2 10YR3/4 礫(φ10~20mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)1%
S15071P1t3 10YR4/4 礫(φ10~50mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)2%
第1層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~50mm)2%, 炭化物(φ10mm以下)2%
第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10mm以下)1%, 炭化物(φ1~20mm)2%



図134 竪穴住居跡113(S15063・5065・5071)

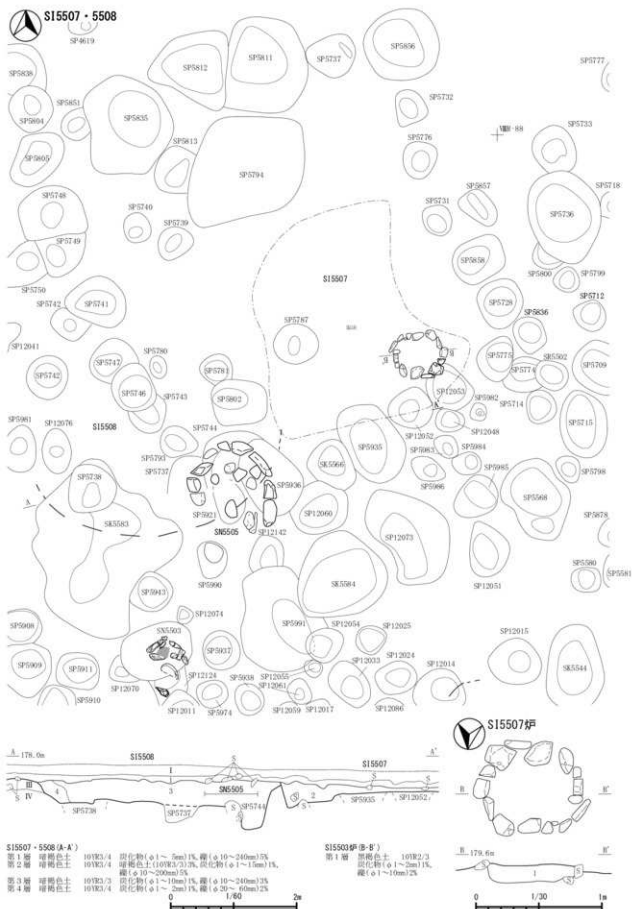


図138 竪穴住居跡117(S15507・5508)

- SI10011(A-A')
 第1層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~100mm)2%,炭化物(φ2~5mm)2%
 第2層 褐色土 10YR4/4 礫(φ10~100mm)5%,炭化物(φ1~2mm)1%
 SI10010(B-B')
 第1層 暗褐色土 10YR2/3 10%,礫(φ10~100mm)10%,炭化物(φ2~10mm)2%, π - π ム配(φ2~3mm)2%
 第2層 土上遺物土 10YR4/3 礫(φ5~20mm)5%,炭化物(φ1mm)1%
 SI10017(D-D')
 第1層 暗褐色土 10YR2/2 礫(φ5~100mm)5%,炭化物(φ1~1.5mm)1%
 第3層 暗褐色土 10YR2/2 礫(φ5~20mm)2%,炭化物(φ1~5mm)1%
 第7層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ5~20mm)2%,炭化物(φ1~10mm)2%
 第8層 褐色土 10YR4/6 礫(φ5~12mm)10%,炭化物(φ1~10mm)2%
 第9層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ3~20mm)15%,炭化物(φ1~10mm)2%
 第10層 褐色土 10YR4/6 礫(φ5~10mm)20%,炭化物(φ1~5mm)1%
 SI10009・10010・10017(E-E')
 SI10009(C-C'・E-E')
 第1層 黑褐色土 10YR2/2 礫(φ15~25mm)10%,炭化物(φ1~2mm)1%, π - π ム配(φ1mm)1%
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~20mm)5%,炭化物(φ1mm)2%, π - π ム配(φ1mm)1%
 第3層 暗褐色土 10YR3/4 黑褐色土(10YR2/2)10%,礫(φ10~80mm)10%,炭化物(φ1mm)1%
 第4層 黑褐色土 10YR2/2 礫(φ15~150mm)15%, π - π ム配(φ1mm)2%,炭化物(φ1mm)1%

- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ2mm)2%, π - π ム配(φ1mm)1%
 第7層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6)5%,礫(φ25~100mm)15%,炭化物(φ1~2mm)1%, π - π ム配(φ1mm)2%
 黏床 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土(10YR5/6)5%,礫(φ10~20mm)5%,炭化物(φ1mm)1%
 黏床2層 明黄褐色土 10YR6/6 褐色土(10YR4/1)10%,礫(φ10~50mm)5%,炭化物(φ1mm)1%
 第1層 褐色土 7.5YR4/4 赤褐色土(5YR5/6)φ(φ1~5mm)1%,礫(φ1~20mm)2%,炭化物(φ1mm)1%
 SI10010
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 黑褐色土(10YR2/2)10%,礫(φ10~100mm)10%,炭化物(φ2~1mm)3%, π - π ム配(φ2~3mm)2%
 第3層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~80mm)10%,炭化物(φ1mm)1%
 SI10017
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~190mm)25%,炭化物(φ2~3mm)1%, π - π ム配(1mm)1%
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ10~130mm)20%,炭化物(φ1~3mm)1%
 第3層 暗褐色土 10YR3/3 黑褐色土(10YR2/2)10%,礫(φ10~110mm),炭化物(φ1mm)1%
 第4層 褐色土 10YR4/6 礫(φ10~100mm)20%,炭化物(φ1mm)1%
 第6層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ10~100mm)10%,炭化物(φ1mm)1%

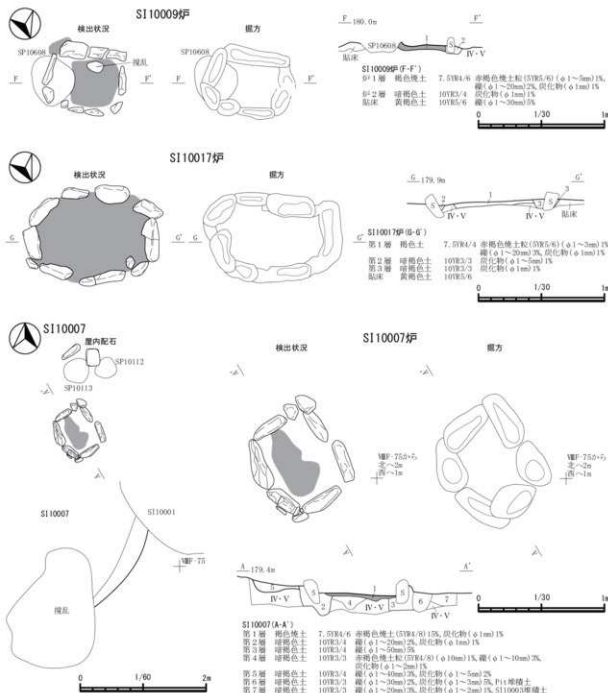


図143 竪穴住居跡122(SI10007・10009~10011・10017)

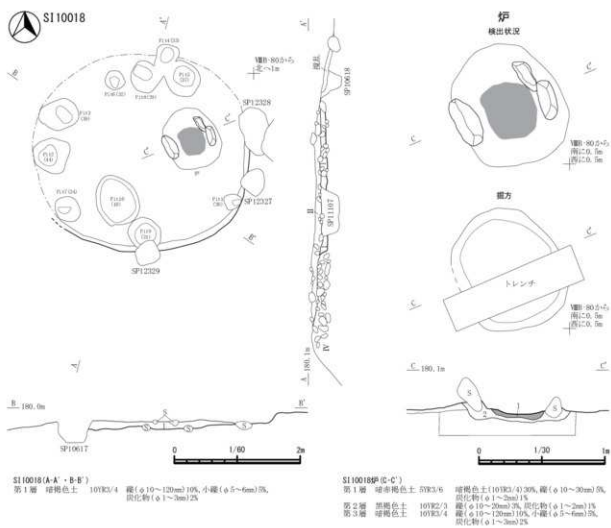
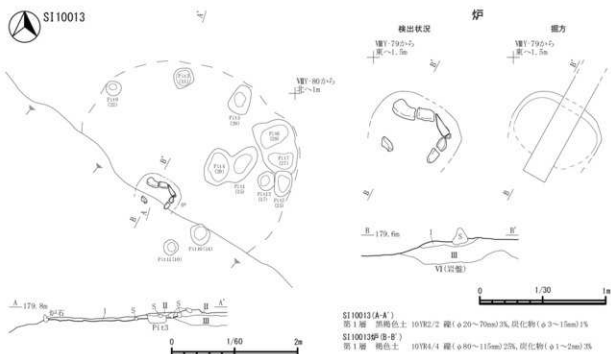


図144 竪穴住居跡123(SI10013・10018)

報告書抄録

ふりがな	みずがみかつこにいせきさん						
書名	水上(2)遺跡Ⅲ						
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告						
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第575集						
編著者名	秦光次郎、茅野嘉雄、荒谷伸郎、加藤隆則						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城市天田内152-15 TEL. 017-788-5701 FAX 017-788-5702						
発行機関	青森県教育委員会						
発行年月日	2017年3月24日						
ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系 (JGD2000)		調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
			北緯	東経			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経		
みずがみ いせき 水上(2)遺跡	あおもりけん 青森県 むつ市 中津軽郡 にしめやわら 西目屋村 おほあきすなご 大字砂子瀬 あびみずがみ 字水上	02343	343025	40°	140°	20120508～ 20121116	39,800m ² 記録保存 調査
				31′	13′	20130509～ 20131120	
				31′	13′	20140701～ 20141114	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
水上(2)遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 246 掘立柱建物跡 6 焼土遺構 112 土器埋設遺構 174 土坑 372 ビット 6705 石棺墓 25 配石遺構 60 盛土遺構 1 捨て場 1	縄文土器(早期中葉～後期末葉) 石器(石鏃、石槍、石器、石錐、二次加工剥片、微細刻線剥片、敲磨器類、打製石器類、石錘、台石、石皿、砥石、磨製石斧) 土製品(土偶、耳飾、土器片加工土製品) 石製品(石棒、石刀、石冠、垂飾品) 弥生土器(砂沢式)	斜面部に長さ120mの捨て場、土器出土量は13.8t(全出土量の半数)。同時期の土器埋設遺構が存在。 中期末葉～後期前葉の配石遺構を伴う石棺墓群。 北陸系・大木系の異系統土器、蛇紋岩製磨製石斧、大型脚付板状土偶、四脚土偶、擦切土器片、ヒスイ大珠、線刻垂飾品、線刻石冠		
要 約	<p>水上(2)遺跡は岩木川の最上流部の右岸、その支流の湯ノ沢川との合流点に位置する遺跡で、本書は主に平成24～26年度までの第6～8次調査の成果についてまとめたものである。発掘調査の結果、縄文時代前期末葉から後期前葉期までの遺構・遺物が多量に発見され、長期間にわたる大規模集落であることが明らかとなった。特に集落の前半期(縄文時代中期後葉頃まで)には、北側の斜面地に捨て場が形成され、多量の遺物が廃棄された。斜面縁辺部には多数の竪穴住居跡や土器埋設遺構も詳在する。</p> <p>竪穴住居跡はこの斜面縁辺部と遺跡南側の段丘平坦部と、東西にひろがる二列の帯状の集中分布域を形成し、長期にわたりこの居住域が守られる。縄文時代中期中葉以降には、それ以前の竪穴住居の窪地を埋め、広範囲の土盛りや遺物の廃棄を伴う盛土遺構が形成されるほか、中期後葉には10mを超える大型住居も出現する。</p> <p>集落の後半期(大木10式併行～蜜沢式期)には、南北の居住域に挟まれた遺跡中央部に、25基の石棺墓が三群にまとまって分布する。このうち遺存状況の極めて良好な群では、東西16m×南北18mの約300m²の範囲に15基の石棺墓が、多数の配石遺構を伴い、長軸方向を揃えて密集する。埋葬主体部の外側に広がる石棺墓間連土の重複状況から、石棺墓どうしの新旧関係が明らかになり、土器型式より狭い時期幅での構造・構築方法の変化や墓域の形成過程が捉えられた。</p> <p>出土遺物では、縄文時代前期末葉期には北陸系、中期後半期では東北部の大木系などの異系統土器のほか、北陸系と見られる蛇紋岩製の磨製石斧やヒスイ製の石製品も出土している。また黒曜石の産地推定分析では、北海道、秋田県、岩手県、山形県、長野県からの搬入状況も明らかにされた。</p>						

青森県埋蔵文化財調査報告書 第575集

水上(2)遺跡Ⅲ

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

【第1分冊 竪穴住居跡編】

発行年月日 2017年3月24日
発 行 青森県教育委員会
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印 刷 ワタナベサービス株式会社
〒030-0803 青森県青森市安方2丁目17-3
TEL 017-777-1388 FAX 017-735-5982
